

## 第II部

## 東アジア古代都城門の構造・機能とその展開

## はじめに

中原で発達した「都城制」は、国際色豊かな大帝国：唐の「冊封体制」（西嶋 2002）に代表される国際的な階層秩序（金子 2001）を背景として、東アジアの周辺国へ伝播した。皇帝を中心とする「中華」の支配体制・世界観を地上に現出させる「巨大な舞台装置」である都城は、各国の「王都」として採用されることにより、東アジア世界に広く展開し、その思想空間が各国において再生産された。しかし、展開の最盛期である唐代においても、長安城や洛陽城など中原地域の都城の存在形態が各国にそのまま「引き移された」わけではなく、その構造・機能が単純に模倣されたわけでもない。東アジアの各國が、それぞれの支配体制や世界観に合わせて中原都城の思想や概念を柔軟に「解体・再編成」し、当時の国際情勢と国家的な戦略に基づいて都城制を導入した点が重要である。すなわち、都城の平面外形など「見えやすい部分」を比較して国際的な影響関係を論じてきた従来の研究から一步進んで、思想空間である都城を現出させた「構造原理」を比較する視点こそが、都城制の展開の歴史的意義を考究する上で重要なと考える。

以上の視点に立ち、本論では唐代都城の宮城・皇城・外郭城という三重圓構造を結びつける要素、すなわち「門」に着目する。唐代都城の3つの思想・階層空間は、城壁によって隔離され、道路によって連接されるが、各空間を実際に連結する象徴的役目を果たすのが「中軸正門」である。都城の各空間の境界に位置し、各空間を連結すると同時に、都城全体を構造化する重要な施設である「都城門」に注目し、東アジア都城の構造原理を比較することが本論の目的である。具体的には、「都城門」の構造・機能が、漢～唐までの「中原都城」においてどのように発展したのか、また北方に展開した遼金元の「草原都城」においてどのように継承されたのか、さらに唐代において東アジア各國にどのように伝播したのか、を実際の発掘遺構の比較分析から明らかにする。その作業により、中国都城の発展と東アジアへの展開に関する歴史性を考究する。

## 1. 古代都城門の研究史と課題

## 1-1 思想空間としての唐代都城と「門遺構」研究の意義

「都城」は、城壁で囲まれた都市空間を指す用語である。中原地域において、殷周を遡る時代には既に出現しており、漢・魏晋南北朝を経て、唐代までに構造が定式化した。その後も、宋・元と発展し、明清北京城に至るまで中華の皇帝を中心とする思想空間として常に中国史の中心舞台となった。また、都城制は漢族の伝統的な世界観・宇宙観、あるいは都市設計概念に、北方遊牧民族や西域都市民の思想が流入し、歴代王朝による革新・変革によって明清期まで連続と発展した点に、大きな特徴がある。特に、広大な領域を支配し、シルクロードを通じたユーラシアの東西交流で国際色豊かな王朝を築いた唐（618-907）の時代に、東アジア・東南アジア・中央アジアに「都城制」が展開した点が知られている。

中国都城の発展に関しては、膨大な研究の蓄積があり、通時的・巨視的な整理も多く存在する（王仲殊 1982・劉庆柱 2000・俞伟超 1985・朱海仁 1998・楊寬 2016・劉庆柱主编 2016など）。特に魏晋南北朝～唐代における中軸線の発達（陳力 1998・愛宕 2001・王守春 2004・李自智 2004・積山 2007・今井 2011・徐龍国 2019など）は、皇帝権力と礼制建築（姜波 2003・劉瑞 2011）で行われる皇帝祭祀（小島 1989・金子 2006・渡辺 1996・2003・妹尾 1992・1998・2001・佐川 2016など）が結びついで生まれた大きな変革であり、唐代都城の重要な特徴である。近年の考古学的調査の進展によって、①中軸線の成立（図1）、②複数宮城制から單一宮城制への変化、③宮城前の官庁の集中配置（皇城空間の萌芽）、④太極殿・東西堂システムの完成（図2）（内田 2004・吉田 2002・渡辺 2009など）などの画期が、いずれも曹魏にある点が指摘されている（錢国祥 2016・2020・佐川 2017など）が、その後の北朝から南朝への影響（錢国祥 2010）や北魏における外郭城の整備（錢国祥 2019a）、北周による三朝制の採用（内田 2009・2010）など、魏晋南北朝を通じた都城の変容によって、唐代都城の原型が生成された点は確かである。

單一宮城制の成立によって太極殿と南郊礼制建築が結びつき、中軸線と左右シンメトリーな都城空間が成

立することで、①皇帝権力の中核である宮城、②行政機構の中心である皇城、③都市住民を管理する外郭城（里坊）という重層構造が誕生し、都城の中軸上で南北に連接することになる。城壁で隔離された3つの重層的な階層空間で構成される唐代都城においては、各階層空間は中軸道路と「正門」により相互に「連結」され、皇帝を中心とする支配体制を象徴的に地上に具現化する「思想空間」として、長安城・洛陽城が出現した（アーサー・F・ライト 1966、応地 2011、布野 2015など）。都城は皇帝を中心とする「宇宙」を表現する「巨大な舞台装置」であり、皇帝権力の隔離性を内外に示す儀礼的な思想空間である。中でも中軸線に位置する建造物が象徴的な機能を果たす点が注目出来る。即位儀礼や元会儀礼が行われる太極殿（含元殿）、皇城左右に配される宗廟と社稷（左祖右社）、冬至に昊天上帝を祀る南郊元圧・夏至に皇地祇を祀る北郊方丘などの礼制建築、これら中軸上の建造物群が、国家的儀礼や皇帝祭祀の主要な舞台空間として発達すると同時に、宮城正門（唐長安城：承天門、唐洛陽城：応天門）が儀礼空間として整備された。

以上、魏晋南北朝～唐代都城における主軸の発達によって、中軸建造物の相互連関性が高まり、各階層空間の境界に位置する門、特に中軸上の門＝正門が様々な儀礼舞台として整備されることになる。さらに、北周の「燕治外型三朝制」を継承し、「内中外型三朝制」（吉田 2002）を採用した唐代都城においては、国家的儀礼を行う「外朝大典」の空間として、宮城正門に闕が採用された点に特徴がある。闕門と主殿が融合した形態を持つ大明宮含元殿は、宮城正門の象徴的な機能が太極殿と融合した「完成形」といえる。以上の唐代都城完成までの発展を概観すると、重層構造を持つ唐代都城の中軸線を「構造化」しているのは、宮城・皇城・外郭城の境界に位置し、階層空間を「隔離」とすると同時に「連結」する機能を持つ正門と把握できる。このような視点に立てば、唐代都城における三重の城壁上に位置する中軸正門（外郭城正門・皇城正門・宮城正門）の関係性を整理することによって、都城の「構造原理」や「思想背景」を通時的・国際的に比較できるのではないか、という結論に到達する。

さて、都城研究における門の重要性は、古くは瀧川政次郎が羅城・羅城門を中心とした都城の国際的な比較分析をした際に指摘している（瀧川 1967）。近年では、日中の都城遺跡の発掘調査が進展する中で、日本都城門に関するシンポジウム（奈良文化財研究所 2010a）、中国都城門に関する特集『华夏考古』2018-6：

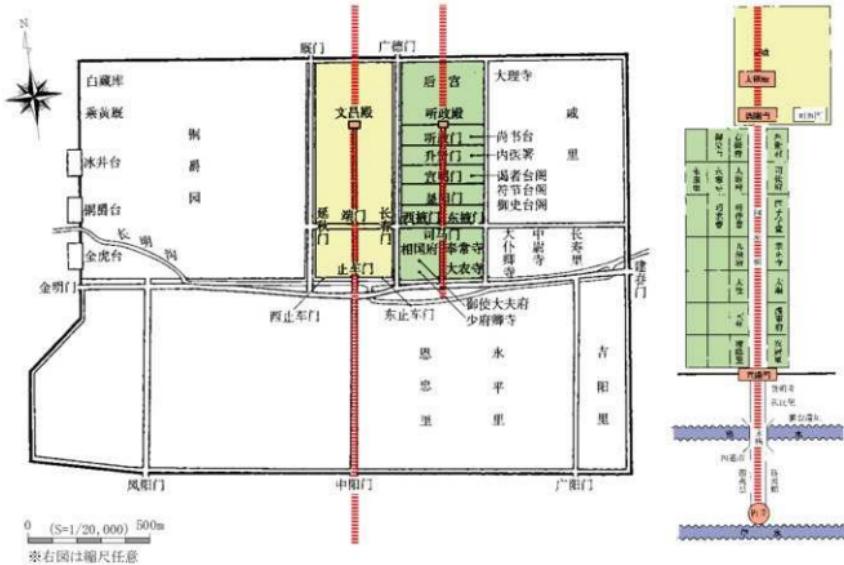


図1 魏晋南北朝期における都城の中軸線（左：曹魏鄴北城／右：北魏洛陽城）

刘振东 2018、钱国祥 2018、石自社 2018、龚国强 2018、汪盈・董新林 2018）などが注目を集めている。また、中国では門道数に注目した研究（徐龙国 2015）、発掘事例が豊富な隋唐都城門の分類研究（陈良伟 2002、李鑫・申建伟・吕劲松・李德方 2013、孙秉根・冯浩璋 2005）、あるいは闕門に焦点を当てた研究（刘庆柱 2005・韩建华 2005）など、発掘事例の増加に伴って活発な議論が行われている。しかし、これらの成果は、いずれも国内の通時的整理、時代を限った分類、個別都城門の構造や機能に注目したもので、東アジアの視点での比較研究という点においては、唐長安城明徳門と平城京羅城門を比較した井上和人の研究（井上 2010）や長岡宮「会昌門」の系譜を考究した金子裕之の研究（金子 2007・2014）など、非常に限られている。中国都城門の系統関係を整理した通時的分析を踏まえた上で、高句麗・渤海・日本などの東アジア各國都城門と比較する作業は、「都城制」の展開過程を考究する際の重要な視点だと考える。前稿（城倉 2013）では、以上の問題意識から日中古代都城の正門に注目して比較分析を行ったが、分析対象を正門に限ったため、体系的な整理には到達しなかった。そのため、本論では前稿の問題意識を踏襲した上で、漢～元代までの発掘された都城門遺構の悉皆的分析を踏まえて、高句麗・渤海・日本との比較を行う。

## 1-2 中国古代都城門の研究史

中国都城門は闕や瓮城などの附帯施設を含めると構造が複雑であり、儀礼空間としての正門の発達など様々な論点も存在する。以下、いくつかのトピックに分けて整理する。

### (1) 建築・文献史学のアプローチ

本論では、漢～元代都城の門遺構を分析対象とするが、2000年代以降に発掘された門遺構だけでもかなりの数になる。具体的な事例に関しては、3で提示するが、前漢長安城・漢魏洛陽城・北齊鄆城・隋唐洛陽城・隋唐長安城・唐揚州城、さらには高句麗・渤海など各都城レベルでの発掘成果が蓄積されている。北宋・遼・金・元の都城でも発掘事例が増えている。各都城門の発掘成果を踏まえた建築史学の立場からの復原（傅

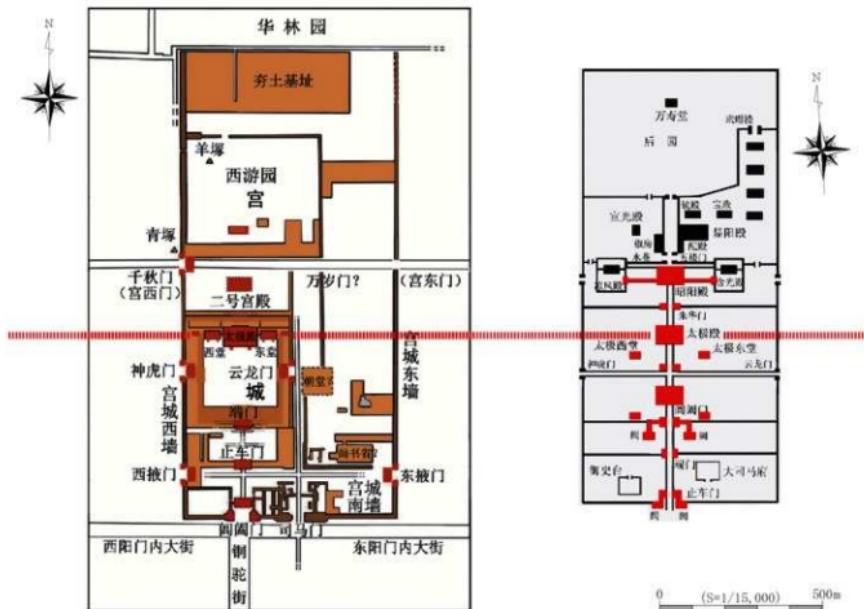


図2 太極殿・東西堂システム（左：北魏洛陽城の宮城／右：東魏北齊鄆南城の宮城）

袁年 1977・郭文孚 1996・张铁宁 1994・杨鸿勋 1996など)も盛んで、石窟壁画(萧默 1989)、墓葬壁画(王仁波 1973)、絵画資料(李合群 2008)の分析事例もある。さらに、史料に基づく門名の比定、門の用例(井上 2004a)や機能(王静 2009)、城門の管理制度(吉田 2011・肖爱玲・周霞 2012)の検討など文献史学からのアプローチも多い。特に唐代においては、都城内のそれぞれ等級の異なる城門が厳格な制度に基づいて管理されている点を、唐長安城の門籍制度・宵禁制度・開閉制度・補修制度から明らかにした肖らの研究は重要である(肖爱玲・周霞 2012)。また、後述する唐代宮城(太極宮・大明宮)の宮城正門前の門前広場を「三朝制」の外朝、すなわち国家的な儀礼空間として分析する視点も文献研究が中心となる。このように増加する都城門の発掘事例を踏まえた建築・文献史学のアプローチは、都城門研究の基礎となっている。

## (2) 発掘遺構の分類や系譜の検討

各都城門の発掘踏まえ、各都城における門形式の在り方の整理も行われている。漢長安城(王仲殊 2010・李遇春 2005・刘振东 2018)、北魏洛陽城(钱国祥 2003・2018)、隋唐洛陽城(石自社 2018)、隋唐長安城(李春林 2001・今井 2012a・董国强 2018)、渤海海上京城(孙秉根・冯浩璋 2005)、唐揚州城(汪勃 2015・2016)、北宋開封城(刘春迎 2017)、遼上京城(董新林 2014・汪盈・董新林 2018)、元大都・明清北京城(王灿炽 1984・張先得 2003)など各都城レベルでの整理は非常に重要である。また、これらの発掘成果を踏まえて、都城門の分類や系譜を追及する研究もある。徐龙国は、夏商周期～唐代までの都城門を門道数の観点から整理している。皇帝権力の象徴である「三門道」形式(中門道は皇帝専用の「馳道」、左右門道は「傍道」で「左入右出」が基本)が、漢代以降に定式化し、魏晋南北朝期に宮城正門が儀礼空間化したこと、唐長安城太極宮正門の承天門(罗瑾猷 2019)や唐洛陽城宮城正門の応天門(中国社会科学院考古研究所洛阳唐城工作队・洛阳市文物考古研究院 2019)のような有關三門道形式が誕生する点を論じた(徐龙国 2015)。隋唐期には中軸正門を頂点とする都城門の階層性が定式化しているが、隋唐長安城・洛陽城には構造的な差異(宿白 1978・馬得志 1982・傅熹年 1995・程义 2008・石自社 2009)も認められ、城門の在り方も異なる。12基の城門(定鼎門・永通門・右掖門・宣仁門・応天門・崇慶門・宣政門・重光北門・徳獻門・丹壁城南門・乾元門・洛陽老集門)が発掘されている隋唐洛陽城では、李鑫らが分類を試みている。すなわち、「1門3道」で多門道大型門のA型、「單門道」で小型門のB型に大別し、それぞれの型式に「門道内の礎石が間隔をもつて並び、路面は土で版築される」I式、「門道内の礎石が密接して並び、路面は埠で舗装される」II式を設定する。その上で、I式を隋末～唐前期、II式(北宋期の「石地覆」に続く過渡的な特徴をもつ)を唐後期～宋初に比定し、A型式の大型門が都城の中軸に存在する点を指摘する。さらに、唐長安城の外郭城正門：明徳門・大明宮正門：丹鳳門にみられる五門道、あるいは大明宮内の含謹門の二門道が唐洛陽城に存在しない点も指摘する(李鑫・申建伟・呂勁松・李德方 2013)。以上、徐龙国、李鑫らの整理は、門道数を基本としており、中軸正門には三門道形式が採用される点、宮城正門が儀礼空間化する点を指摘している。

一方で、隋唐長安城・洛陽城の門形式を闕などの附帯施設や建築様式と併せて総合的に分析したのが、陈良伟である。まず、都城門を「過梁式城門」(図3)(漢～唐)と「発券式城門」(北宋～明清)に二大別する。両者は五代～宋に併存するが、基本的には前者から後者へと変遷する。唐長安城・洛陽城の発掘された24基の都城門は「過梁式城門」で、墩台・闕の有無を中心として、以下の「四型八式」に分類した。

**【A型式】**有墩有闕城門。／A I式：東西両闕が、墩台東南・西南に突出する(応天門)。／A II式：東西両闕が、墩台の東西両側に位置する(定鼎門・明徳門)。／A III式：墩台と闕が融合した城門。1門道で墩台東西が「三出闕」形式となる(重玄門)。**【B型式】**有墩無闕城門。／B I式：地覆石(排叉柱を支える礎石)がそれぞれ隣接せず、門限石が地面より高く突出する(含光門)。／B II式：地覆石(礎石)がそれぞれ隣接し、門限石と路面が平らになる(宣仁門)。**【C型式】**無墩無闕城門。／C I式：門道左右に排叉柱を支える地覆石(礎石)が並ぶ(崇慶門)。／C II式：門道左右に地覆石(礎石)はなく、墻壁のみで構成される(銀漢門)。**【D型式】**廬殿式城門(低平な長方形基壇の上に、方形の礎石が並ぶ：内重門)。

以上の分類を踏まえた上で、隋唐都城門を「A I > A II > A III > B > D > C I > C II」の7等級に設定した。特に、A III型式の重玄門を評価し、墩台と闕の融合建築が北宋代の城門に大きな影響を与えた点も強調している(陈良伟 2002)。陈良伟が重視した唐長安城大明宮北門の重玄門(中国科学院考古研究所 1959)は、禁

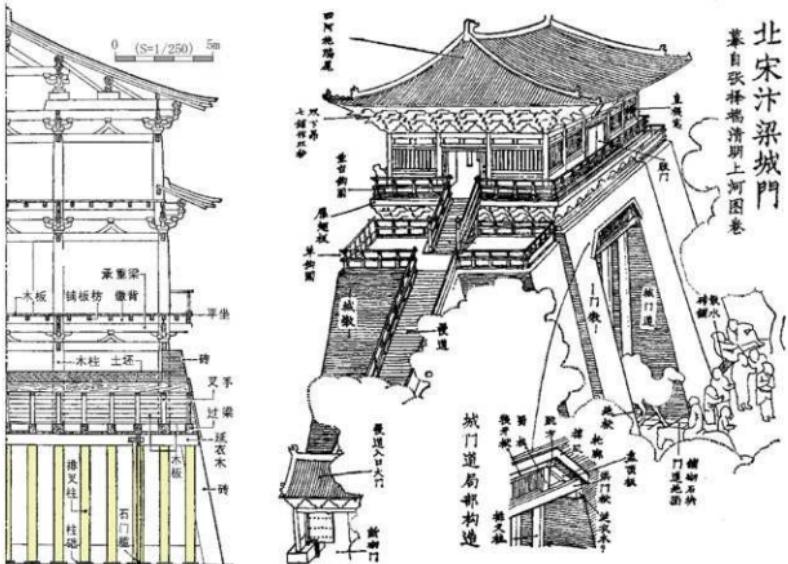


図3 鄭南城朱明門の過梁式門（左：郭文孚）と北宋『清明上河圖』に描かれた城門（右：傅熹年）

軍駐屯地とされる夾城を挟んで玄武門と対置する宮城防衛の要である(傅熹年 1977・楊鴻勳 2013)。そのため、重玄門と玄武門は一体的な城門として存在するが、玄武門の内側には小院を形成する内重門があり、李春林はこの空間を元代以降に流行する瓮城と同じ空間と指摘する(李春林 2001)。近年では、北宋期の揚州城(汪勃 2015)や北宋東京城順天門(李春迎 2004・河南省文物考古研究院 2019)などで瓮城門が発掘されており、明清都城(孟凡人 2013・2019)まで続く瓮城の系譜が、唐長安城大明宮の防御性を重視した北門建築群(重玄門・玄武門・内重門)にあると指摘される点は重要である。以上、論点が多岐に及んだが、陳良伟の隋唐都城門の分類研究は、都城内における城門の階層性を論じた最も体系的な分析といえる。

なお、漢～唐代都城門の主体形式である「過梁式城門」については、「清明上河図」などの絵画資料や発掘遺構から、唐熹年が門道左右の排叉柱下部の構造（門道基礎の構築技法）から以下のⅠ～Ⅲ型式を設定している（[傅喜年](#) 1977）。

【Ⅰ型式】礎石の上に木製地覆を設置し、その上に排叉柱を立てる。漢長安城諸門の型式。【Ⅱ型式】方形礎石の上に排叉柱を立てる。南北朝の影響を受けた高勾麗平壙城内城の牡丹峰門（朴灿奎 2015）に見られるが、唐長安城・洛陽城など隋唐期に一般的な型式。【Ⅲ型式】土襤石の上に地覆石を設置し、その上に排叉柱を立てる。「清明上河図」あるいは、「賞造法式」（梁思成 2001a）など北宋期以降に見られる型式。

以上の型式に加えて、近年の発掘成果を踏まえて、董新林が以下の類型を補足している（董新林 2014）。

【IV型式】門道左右の版築内に1列の土襀石（大きさや形は不均等）を置き、その上に木製地覆を設置して排叉柱を立てる。I型式に近く、渤海上京城の外郭南壁東門（中国社会科学院考古研究所 1997、孙秉根・冯浩璋 2005）などに類例がある。【V型式】地襀石の上に木製地覆を設置し、その上に排叉柱を立てる。遼祖陵・上京城（汪溢・董新林 2018）に類例がある。漢代のI型式、渤海のIV型式に見られる木製地覆の伝統上にある型式。

傅熹年は漢～唐代における中原都城門の変化を整理し、董新林は漢から派生した類型が高句麗・渤海を経由して遼に影響を与えた系譜関係を整理している点に特徴がある。以上、実際に発掘された都城門の考古学的な分類や系譜関係の追及は非常に重要な作業である。

### (3) 思想空間としてのアプローチ

1-1でまとめたように、中国都城は皇帝を中心とする支配構造や世界観を地上に可視化する思想的な空間として発達した点に大きな特徴がある。それゆえに、宮城構造や城門の配置・構造・機能などの分析に関しては、思想空間としてのアプローチが必要である。「周礼」考工記にある理想の王城に関する記載と実際の都城を比較する視点（孙炳娟・李书谦 2008、牛世山 2014、徐龙国・徐建委 2017など）が代表的で、このアプローチは日本都城の研究にも影響を与えていている（中村 1996・豊田 2007など）。特に、唐代都城の宮城構造の重要な思想背景となっているのが、北周が採用し、隋唐都城に沿用された「三朝制」の概念である。

近年、漢魏洛陽城の宮城中枢部の発掘調査（中国社会科学院考古研究所洛陽汉魏故城队 2015・2016、陈建军・余冰 2019）により、「太極殿・東西堂システム」の成立が曹魏明帝の太極殿造営を画期とする点、魏晋南北朝を通じて太極殿を中心とする東西構造と中軸線を中心とする南北構造が発展した点が明らかになった（钱国祥 2016など）。一方、隋唐長安城の宮城（太極宮・大明宮）構造は、北周が採用した三朝制の使用により、南北に接続する3つの儀礼空間で構成されたと考えられている（賀业矩 1996、陈涛・李相海 2008、刘思怡・杨希义 2009、杜文玉 2012a・b、杜文玉・赵水静 2013など）。周の宮室は、3つの朝廷（燕朝・治朝・外朝）と5つの門（路門・応門・雉門・庫門・皋門）で構成され、唐代には「燕治外型」を修正した「内外中型」三朝制が採用された（吉田 2002）。この三朝の機能については、賈鸿源が外朝（元日・冬至朝賀礼）、中朝（朔望朝と百官奏事议政的常朝）、内朝（随时与特殊时刻召对群臣）と端的にまとめている（贾鸿源 2017）。研究者によって三朝の各範囲について若干の違いがあるものの、唐長安城太極宮承天門前・大明宮含元殿（吴春・韩海梅・高木宪 2012、杨军凯 2012）前の空間が「外朝大典」の国家的儀礼空間として整備された点は共通認識といえる。なお、外朝空間の系譜については、漢長安城北東部に位置する北朝期の東西宮城遺跡（東宮は太子宮・西宮は皇后宮に比定される）、中でも西宮城の樓閣台遺跡（中国社会科学院考古研究所汉长安城工作队 2008）（路寝・路門の両説がある）に遡る可能性も指摘されている（内田 2009・2010）。

唐大明宮については、近年の発掘調査の成果を踏まえ、何岁利が丹鳳門～含元殿（外朝）、宣政門～宜政殿（中朝）、紫宸門～紫宸殿（内朝）と位置付けている（図4）（何岁利 2019）。この説によれば、いずれも宮壁によって3つの空間が隔絶されることになり、その空間の境界に存在する門と主殿が儀礼空間として存在したことになる。特に重要なのが、外朝大典の国家的儀礼空間として整備された丹鳳門～含元殿の区画で、前面に東朝堂・肺石、西朝堂・登聞鼓を配置し、龍尾道と東西兩闈（翔鸞闈・樓鳳闈）を有する含元殿（马得志 1961、郭又孚 1963、傅熹年 1973・1998、杨鸿勋 1989・1991・1997・2013、中国社会科学院考古研究所西安唐城工作队 1997・1998・2007、安家瑶 2005a・b）の「殿門融合建築」は東アジア各国の都城中枢部に大きな影響を与えた点が想定されている（王仲殊 1999）。この三朝制に基づくアプローチは、必然的に承天門（罗瑾欣 2019）や丹鳳門（中国社会科学院考古研究所西安唐城工作队 2006）の構造・機能、あるいは系譜に関する議論を深めることになった点も注目できる。

以上、魏晋南北朝～唐代都城における中軸線の発展、および三朝制の採用という思想的なアプローチは、中軸上に位置する正門・正殿の階層的・空間的「連鎖関係」を意識する分析視点の重要性を示している。また、本来的には隔離・交通・防御などの物理的機能を有する門が、中軸線・三朝制などの思想的な発展によって、権威や階層の表示機能を持つことになると同時に、中でも宮城正門が象徴的に儀礼空間化される過程は重要である。すなわち、曹魏洛陽城の宮城正門：闕門における殿堂式闕門の系譜は、隋唐長安城承天門、隋唐洛陽城応天門などの闕門へ統く系譜であると同時に、宮城正門と太極殿の空間が一体化して莊厳化されることによって含元殿が誕生する展開過程を追及する糸口になりうる（钱国祥 2003・2016）。

なお、唐長安城の宮城中枢部に採用された三朝制は、渤海・日本都城との比較分析の重要な視点ともなっている（刘晓东 1999、刘晓东・李陈奇 2006、豊田 2001、吉田 2002、金子 2007、山田 2007、今井 2012bなど）（図5）。また、唐と渤海・日本の門遺構の比較分析においても、中軸諸正門の検討が中心となっている点を確認しておく必要がある。孙秉根らは、渤海上京城の発掘された城門を1類（單門道）、2類（三門道、あるいは一般二門道）に分類し、唐長安城の城門との階層差を指摘した（孙秉根・冯浩璋 2005）。一方、筆者は日本都城の中軸正門に「門戸数一致の原則」が存在しない点、都城最大の門が徐々に南に移動する現象を

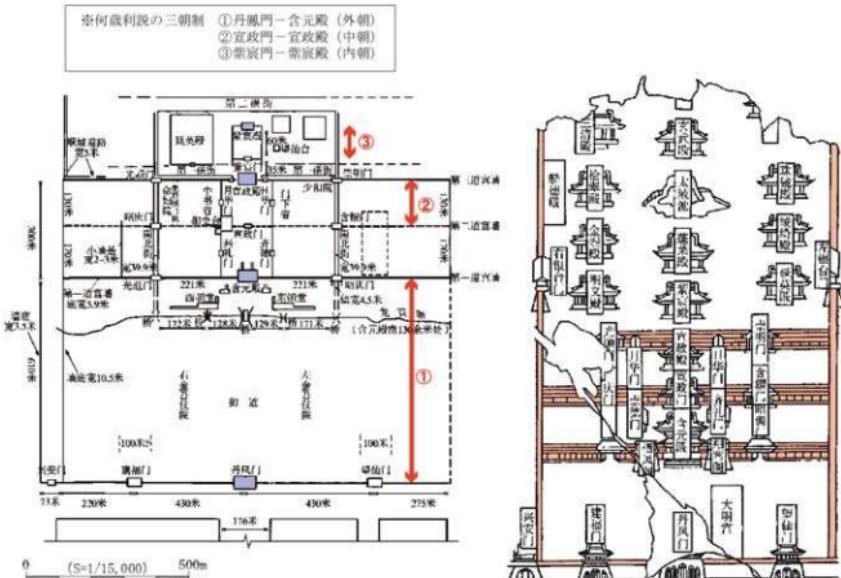


図4 唐長安城大明宮の調査成果（左）と北宋呂大防『長安圖碑』の大明宮（右）

整理し、隋唐都城における門型式が解体・再編成されて日本に導入された点を指摘した（城倉 2013）。以上、都城門における思想的なアプローチは、国際的な比較研究の分野でも非常に重要な視点である。

#### (4) 都城門の附帯施設—闕と瓮城

中国都城門では、闕と瓮城（図6・7）という附帯施設も重要な論点である。

闕は、門を莊嚴化する代表的な附帯施設で、陵墓・礼制建築・都城の諸門に採用される（蕭默 1989）。春秋戦国期には既に出現しており、秦漢の陵墓（秦始皇帝陵博物院 2014、韓釗・李庫・張雷・賈強 2004、趙海洲・張廣軍 2005、段清波 2006、焦南峰 2012、申茂盛・冯丹 2015、李玉洁 2016、吳悅娜・許政 2020）で定式化し、唐（陝西省考古研究所昭陵博物館 2006）・北宋（河南省文物考古研究所 1997）・西夏（宁夏文物考古研究所・銀川西夏陵区管理處 2007）など陵園の門形式として継続的に発展する。一方、都城では曲阜の魯国故城の南東門（山東省文物考古研究所 1982）が最も古い事例だが、前漢長安城の宣平門・清明門・霸城門（王仲殊 2010・劉振東 2018）、王莽社稷：14号遺跡南門（中国社会科学院考古研究所 2003）、漢魏洛陽城宮城正門の闕闥門（中国社会科学院考古研究所洛阳故城隊 2003）、北齊鄆南城内城正門の朱明門（中国社会科学院考古研究所・河北省文物研究所等考古工作隊 1996）、隋唐長安城太極宮正門の承天門（羅瑾猷 2019）、隋唐洛陽城宮城正門の応天門（韓建華 2016・徐小亮 2017・中国社会科学院考古研究所洛阳唐城工作队・洛阳市文物考古研究院 2019）、北宋開封城宮城正門の宣德門（李合群 2008）、元大都皇城正門の崇天門（王灿煥 1984・傅熹年 1993）、明中都・明清北京城宮城正門の午門（孟凡人 2013）など、礼制建築、あるいは宮城・皇城正門として連続と採用される。なお、隋唐期では隋仁寿宮の仁寿殿（中国社会科学院考古研究所 2008・馬得志 2005）や前述した含元殿で、「殿門融合建築」が認められ、元上都の宮城北壁にも「闕式建築」（陸思賢 1999、魏堅 2008、内蒙古师范大学・内蒙古文物考古研究所・内蒙古文物保护中心 2014）が存在する。文献史（渡辺 2000）、考古学、建築史学など多方面から闕の研究が蓄積されている状況である。

なお、発掘調査に基づく都城の門闕の分析に関しては、韓建華と劉柱庄の分類研究がある。韓建華は、都城の門闕の形式を平面形から単闕（北齊鄆城朱明門）、双闕（漢魏洛陽城闕闥門）、三出闕（隋唐長安城含元

今井晃樹の日中宮城比較(表)

宮城名		外朝	中朝	内朝
唐長安城・太極宮		承天門	太極殿	両儀殿
唐長安城・大明宮	丹鳳門	含元殿	宣政殿	紫宸殿
日本平城京 平城宮(前半期)	大赦・改元の發布 中央区朝堂院南門	冬至日朝賀・賜宴 第一次大極殿院 中央区朝堂院	朝參・朝政(五品以上) 第二次大極殿下層建物 東区朝堂院下層	皇帝の居住空間 内裏
渤海海州城・宮城	即位儀・元日朝賀 外國使節謁見・賜宴	天皇出御 朝堂で朝政・告朔・宣命	天皇の居住空間	第3・4号宮殿

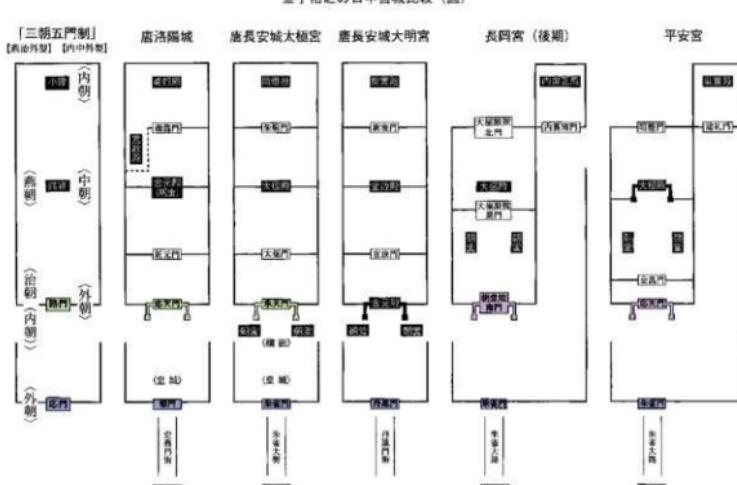
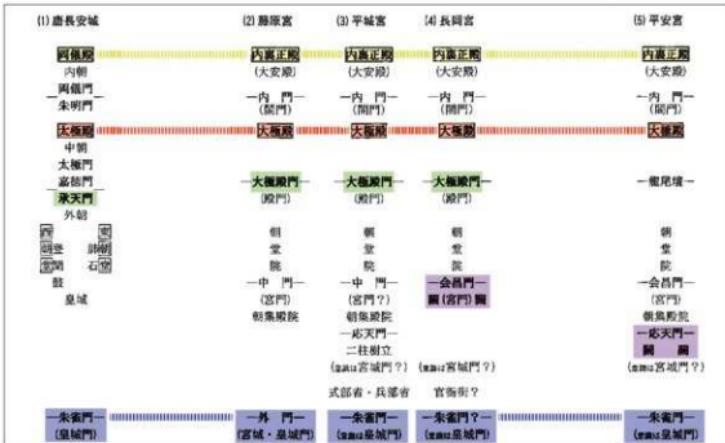
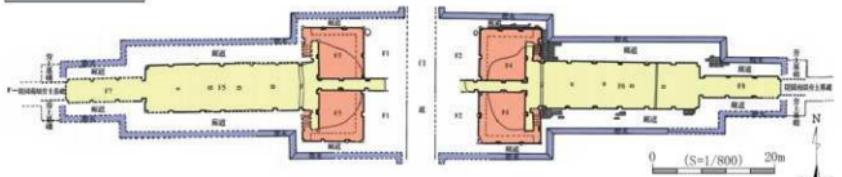
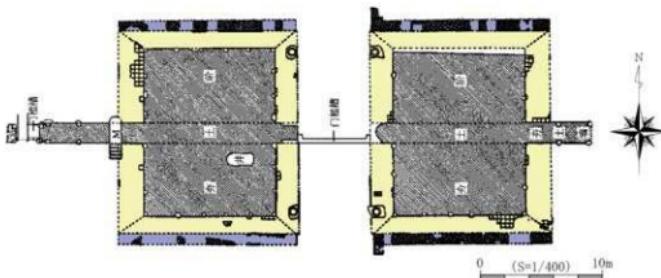


図5 唐代都城の三朝制に基づく日本都城宮城中枢部の解説

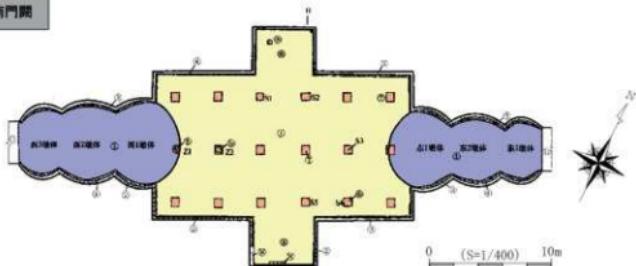
前漢隨陵・南門闕



前漢長安城礼制建筑14号遗跡（王莽社稷）・南門闕



西夏3号陵・陵城南門闕



北宋銅鑄にある汁梁宣德門

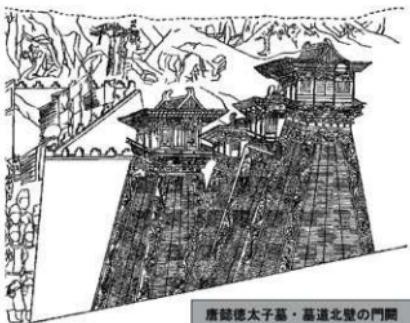


図6 発掘された陵園・礼制建築の門闕（上）と絵画資料に残る門闕（下）

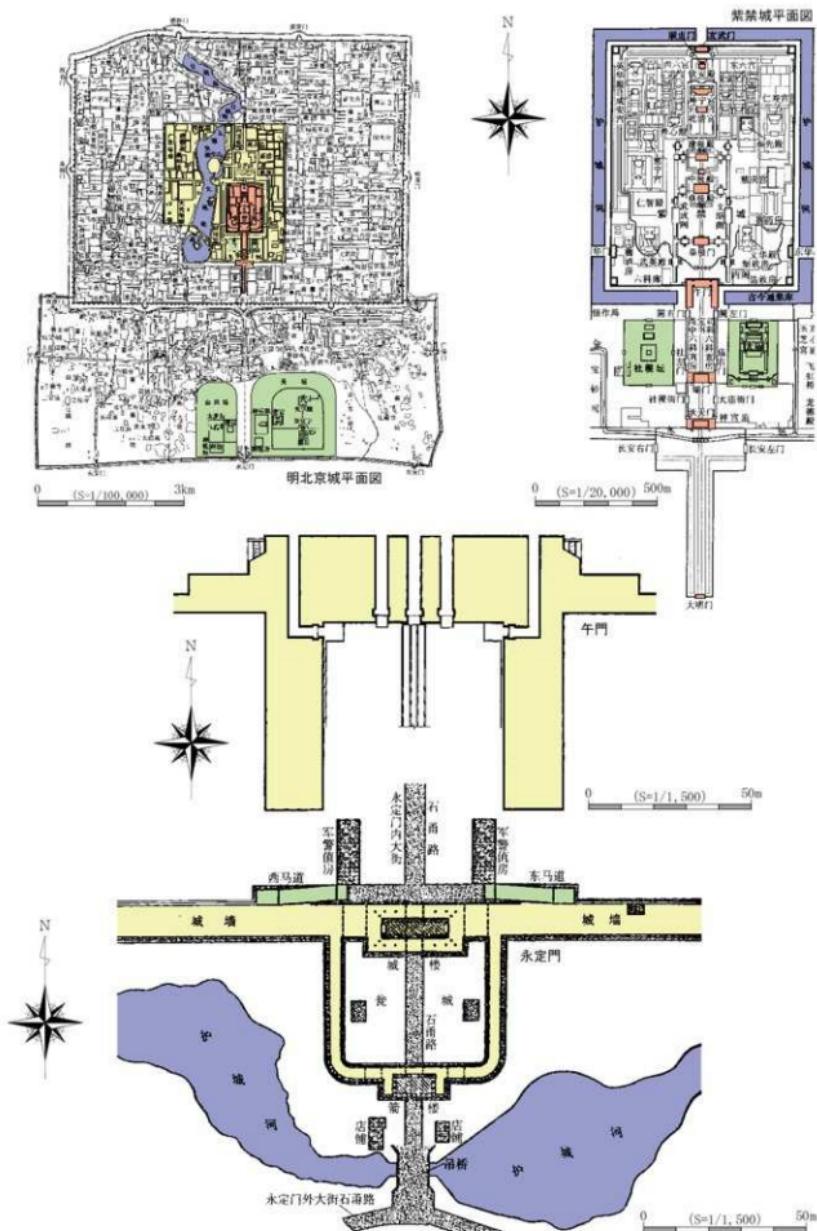


図7 明北京城における午門（宮城正門・門闕）と永定門（外城正門・瓮城）

殿・隋唐洛陽城応天門）に三分類した。その上で、闕の発展を1期（春秋戦国—闕出現期）、2期（秦漢～魏晋—闕誕生期）、3期（南北朝～隋唐宋元—闕発展・成熟期）、4期（明清—闕衰退期）に時期区分し、当初は防御の機能を持って出現した「城闕」が徐々に発展する中で等級を表象する存在へと変化した点を指摘した（[韓建华 2005](#)）。一方、刘庆柱は、闕の機能は「表示機能」と「身分表象」にある点、單闕（一般官吏が使用）、二出闕（高官貴人が使用）、三出闕（帝王のみ使用）の階層差がある点を指摘する。その上で、陵墓・礼制建築・都城の闕門を平面形から以下の3つに分類した。

**【A型】**門と闕が垂直に接続し、平面が回字形を呈する。魯国故城南門、漢長安城宣平門・霸城門、未央宮東門（[中国社会科学院考古研究所 1996a](#)）、漢魏洛陽城闕門、鄭南城朱明門、唐洛陽城応天門、隋仁寿宮仁寿殿、唐長安城大明宮含元殿、元上都闕式建築が該当する。**【B型】**闕は門外に置かれ、門と闕は接続しない。漢代画像石中の門闕、あるいは唐宋陵墓の陵園門闕などが該当する。**【C型】**門の両側に闕が置かれる。前漢景帝陽陵（[陕西省考古研究院 2011・楊武站 2011](#)）、前漢宣帝杜陵（[中国社会科学院考古研究所 1993](#)）、前漢長安城礼制建築（王莽社稷南門）などが該当する。

A型については、西周の周原雲塘建築（[周原考古队 2002](#)）、春秋秦雍城馬家庄1号建築（[陕西省雍城考古队 1985](#)）、戰国秦咸陽宮1号建築（[陕西省考古研究所 2004](#)）の宮殿・宗廟建築（[杜金鹏 2009](#)など）に見られる回字形の平面形との共通性を指摘する。また、B型闕については発掘による実例が確認されておらず、C型闕は前漢帝陵の陵園や礼制建築に見られるが、朝廷のA型闕に比べて階層が低い点を強調する（[刘庆柱 2005](#)）。以上の韓建华・刘庆柱の研究によって、都城の門闕は「権威・身分の表示」という象徴的な機能を持つとともに、都城門闕は陵園・礼制建築の門闕よりもランクが高く、特に宮城正門や「殿門融合建築」など国家的な儀礼空間として唐代に完成する点が明らかになっている。

闕と並んで重要な門の附帯施設として、瓮城がある。瓮城は城門部分の内外に設けられた防御施設だが、龍山～二里頭文化期とされる陝西省石峁遺跡などで、角楼や馬面などの防御施設とともに既に存在している（[孙周勇・邵晶 2016a・b](#)）。また商代都城（[董琦 1994](#)）、春秋戦国期都城（[韩品津・杨国庆 2004](#)）、他にも漢代の周縁地城（[郑元吉 2009](#)、[徐承炎・曹中月 2015](#)、[李双・徐磊・高兴超・古日扎 2017](#)）に見られるなど、普遍的な防御施設である。一方で、中原の都城門に採用されるのは北宋期（[汪勃 2015](#)、[王三营・葛奇峰 2016](#)、[刘春迎 2017](#)、[郑伟 2017](#)）以降であり、明清都城（[张先得 2003](#)など）にまで採用される。中原都城における瓮城の系譜については、前述したように唐長安城大明宮北門建築群（重玄門・夾城・玄武門・内重門）を遡源とする説（[陈良伟 2002](#)・[李春林 2001](#)）が注目できる。中原都城門の普遍的な附帯施設として瓮城が定着する過程を、発掘遺構の分析も含めて考究する必要がある。近年では、遼上京城（[董新林 2014](#)）、金上京城（[黑龙江省文物考古研究所 2019](#)）、金太子城（[河北省文物研究所・张家口市文物考古研究所・崇礼区文化广电和旅游局 2019](#)）、元上都（[魏坚 2008](#)）など草原都城の発掘調査によって、瓮城の事例も増加している。このような状況を踏まえれば、中原都城と草原都城（[诸葛净 2016](#)・[董新林 2019](#)）の対比的な分析（[城食 2017](#)）の重要性も高まりつつある点も理解できるだろう。

### 1－3 日本古代都城門の研究史

次に、日本都城門に関する研究動向を整理する。日本都城門は、都城の存在時間幅が中国よりも短いのに加えて、闕門が長岡宮朝堂院南門・平安宮応天門に限られ、瓮城も存在しないなど、中国都城門に比べて構造的多様性が乏しい。また、羅城門・朱雀門・朝堂院南門・大極殿院南門・大極殿など中軸上の構造物に関する連動した分析事例などもほとんどなく、都城門に集中した専門論文は少ない現状にある。都城門に限った類型化や構造・機能分析というよりは、都城・寺院・官衙・城柵などの門遺構を相互に比較する視点が中心で、文献史学・建築史学・考古学の大きく三分野で研究が蓄積されている状況である。特に、近年では、第13回古代官衙・集落研究会で都城・官衙門の集成や議論が行われている点が注目でき（[青木 2010](#)・[井上 2010](#)・[村田 2010](#)・[宮田 2010](#)・[清水 2010](#)・[坂井 2010](#)・[山下 2010](#)・[田中 2010](#)）、各分野の成果を総合化する研究の方向性を読み取ることができる。以下、文献史学・建築史学・考古学に分けて、研究史を整理する。

### (1) 文献史学の都城門研究

文献史学における都城門研究に関しては、山下信一郎が、①宮城十二門・門号氏族論、②門榜・門籍制度、③大極殿南門の朝廷儀礼、④都城門からの古代王権論、⑤官衙門の分析、の大きく5つの研究の方向性を指摘している（山下 2010）。ここでは、山下の分類毎に研究史を概観してみたい。

まず、宮城十二門の名称や門号氏族の位置付けに関しては、乙巳の変と門号氏族との関係を論じた井上薫の先駆的な研究（井上 1961）をはじめとして、山田英雄（山田 1987）、佐伯有清（佐伯 1963・1970）、直木孝次郎（直木 1964・1968）らが、大化前代からの氏族と門号との関係性を明らかにしてきた。これらの研究によって、大化前代から天皇の護衛・近侍、あるいは宮城の守護を職掌とした氏族が門号名となった点は定説化し、その後の藤原宮・平城宮などの発掘調査の進展によって実際の門遺構と出土木簡の比較（直木 1987など）が進んだ。特に、平城宮の門号に関しては、東張り出し部分に南面する門遺構が「小子門（小子部門）」（小澤 1994）と呼称された点が判明するなど、新たな発掘成果を踏まえた門号比定が行われている点に注目できる（渡辺 1995）。ただし、平城宮の門号に関しては異論もあり（西本 2008a・b）、今後の発掘調査に期待される部分も大きい（図8）（山下 2015）。一方、延暦10年に平城宮の諸門を移して造営された長岡宮の門号に関しては、今泉隆雄が『弘仁式』門号を比定し、平安宮遷宮時は『貞觀式』の氏族門号、弘仁9年（818）年以降は『延喜式』の唐風門号へ改号された点を整理している（今泉 1986）。

次に、門榜・門籍制度に関しては、今泉隆雄の研究がある。養老令官衛令1宮闈門条によると、都城門は内裏を囲繞する閣垣上の「閘門」（大宝令では「内門」、兵衛府の管轄）、内廷官衛・大極殿院を囲繞する宮垣上の「宮門」（大宝令では「中門」、衛門府・衛士府が管轄）、宮城垣上の「宮城門」（大宝令では「外門」、衛門府門部が管轄）に分けられ、それぞれ兵衛府、衛士、門部が管理した。これら宮城門・宮門の人の出入を管理する門籍制度、物資の搬出・搬入を管理する門榜制度は、今泉が出土木簡の分析からその実態を論じている（今泉 1998）。また、門籍・門榜制に関しては、市大樹が日唐の制度を比較し「天皇が王宮内の人・物を管理・把握する」日本都城の特質を指摘している（市 2020）。都城門の管理制度に関しては、宮門の開閉時間を論じた研究（斎藤 1992）、門の警備システムに関する研究（森 2000）なども蓄積されている。なお、都城門に関する制度面からのアプローチとしては、日唐令の比較から門の機能を分析した山下信一郎の研究が注目できる。山下は、官衙門（都城門）に関して、以下の3つの基本機能を指摘する（山下 2010）。

【1】区画施設により囲繞された内外の人・物の通路施設としての機能。【2】区画施設により遮蔽された内側空間の主体の政治権力を表示する象徴的機能。【3】門や前庭部で行われる様々な儀礼・祭祀空間としての機能。その上で、儀礼・祭祀空間としての第3の機能については、以下の4要素に細分した。

【1】門を舞台にした朝儀・饗宴儀礼としての空間。射礼、正月・大嘗や蕃客との饗宴、朱雀門の歌垣などが該当する。【2】外国使臣・蝦夷などの迎接空間。羅城門での新羅・唐使の迎接、朱雀門での元日朝賀に際しての騎兵・鼓吹の左右陳列などが該当する。【3】神祇・仏教・陰陽などの宗教祭祀としての空間。朱雀門での大祓、宮城門での土牛・土偶人を使った祓儀礼、祈雨儀礼などが該当する。【4】官人・百姓に対する公示の場としての空間。遺失物の榜示、禁制の榜示、公開処刑などが該当する。

以上、日本都城でも異なる階層空間の結節点である都城門が、通行や防衛といった本来の機能を越えて天皇権力を象徴する空間として莊厳化されるなど、中国都城門と共通する発展を遂げた点が理解できる。この点で注目されるのが、大極殿南門での朝廷儀礼、都城門の分析に基づく古代王権論である。

大極殿南門の重要性を最初に指摘したのは、直木孝次郎である。直木は、藤原宮・平城宮における大極殿南門は、大宝令の内門と中門の中間として、大きさは内門の1つであった点を指摘した。すなわち、「内裏が大極殿までおりだしてきて」朝堂との境に内門（閘門）にあたる門を作ったのが大極殿門であると整理し、平安宮では龍尾道にその地位を譲ると指摘した（直木 1975）。なお、直木は、大伴氏・物部氏などの軍事氏族が、正月元日に朱雀門に櫛・槍を樹てる「大櫛桿」、あるいは大嘗宮の南北の門に石上・榎井氏が神櫛戉を樹てる「神櫛桿」など門で行われる儀礼にも注目している（直木 2001）。直木の大極殿南門に関する議論を儀礼の分析から深めたのが橋本義則である。橋本は、奈良時代の朝堂院で行われた儀礼を天皇が出御する場を基準にして、「大極殿出御型」、「閘門出御型」に大きく二分類した。「大極殿出御型」は天皇が大極殿に出御し、大極

今泉隆雄・渡辺晃宏による宮城門号の整理（表）

門の位置	平安宮		長岡宮	平城宮	藤原宮
	弘仁9年以後 延喜式	弘仁9年以前 貞觀式			
南面東門	美福門	壬生門	壬生門	壬生門	
中門	朱雀門	大伴門	大伴門	大伴門（朱雀門）	
西門	皇廟門	若犬養門	若犬養門	若犬養門	
西面南門	談天門	玉子門	玉手門	玉手門	
中門	藻壁門	佐伯門	佐伯門	佐伯門	佐伯門
北門	殷富門	伊福部門	伊福部門	伊福部門	
北面西門	安瀬門	海犬養門	海犬養門	海犬養門	海犬養門
中門	偉鑒門	猪使門	猪使門	猪使門	猪使門
東門	達智門	多治比門	多治比門	多治比門	丹比（嫂王）門
東面北門	陽明門	山門	県犬養門	県犬養門（東面中央門） 建部門（東院・南面）	山部門
中門	待賢門	建部門	山門	建部門	建部門
南門	都芳門	的門	建部門	的門 「」+ 小子部門（東院・南面）	小子部門
その他					的門 五百木部門 縣犬養小宮門 (奈文研2009)

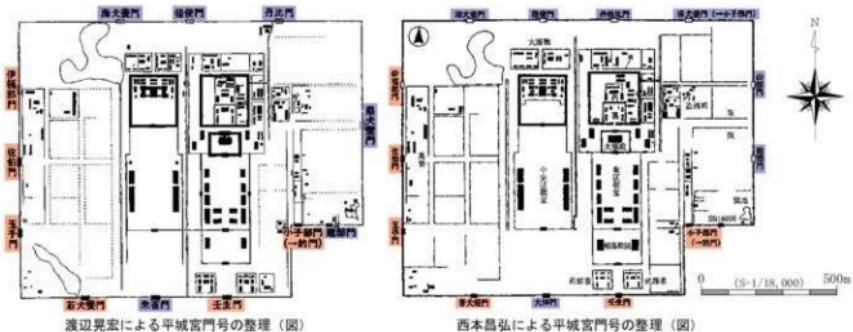


図8 日本書の門号諸説

殿門を挟んで朝廷に文武百官が列立する儀礼で、即位儀・元日朝賀・任官・叙位・改元宣詔・告朔などが該当する。「閑門出御型」は天皇が大極殿門に出御する儀礼で、正月七日十六日の節会・十七日の大射・十一月の豊明節会・外国使や「化外民」への賜饗・五月五日の騎射などが該当する。さらに、橋本は平安宮における儀礼も2つに類型化し、「朝堂院型」、「豊楽院型」を指摘した。「朝堂院型」の儀礼には、即位儀・元日朝賀・告朔・出雲国造の神賀詞の奏上・外国使の上表などが該当する。「豊楽院型」の儀礼には、元日節会・正月七日白馬節会・十六日踏歌節会・十七日大射・新嘗會・大嘗會などが該当する。以上の分類を踏まえた上で、平城宮「大極殿出御型」→平安宮「朝堂院出御型」、平城宮「閑門出御型」→平安宮「豊樂院出御型」の儀礼の系譜関係を指摘した。そして、「大極殿出御型・朝堂院型」は、臣下が天皇に特定の事柄を奏上し、天皇への忠誠・服属を示す儀礼であり、「閑門出御型・豊樂院型」は、節会を中心とした饗宴など天皇と臣下が共同飲食により一体化する儀礼と位置付けた。特に、天皇の空間である大極殿院と臣下の空間である朝堂院との境界に立つ結節点として、門内外の交渉の場となったのが大極殿南門と結論づけた。また、大極殿南門が平安宮で消失する理由として、長岡宮での内裏の朝堂院からの分離を挙げ、大極殿南門が持つ閑門内=内裏内部を防護する内裏最南端門の機能を失ったためと説明した（橋本1984・1986）。この橋本の分類に関しては、今泉が4つの類型に細別して、平城宮中央区・東区の場所を比定している（今泉1989・1993）。

【1】大極殿—朝廷型（即位儀・朝賀）中央区大極殿+朝廷。【2】大極殿—十二朝堂の朝廷型（告朔・選

叙などの宣言宣布) 東区下層正殿・大極殿+朝廷。【3】大極殿+十二朝堂型(朝政) 東区下層正殿・大極殿+十二朝堂。【4】閑門+四朝堂型(饗宴) 中央区閑門+四朝堂。

なお、饗宴の場としての中央区大極殿南門(天皇と臣下の空間の結節点)の役割は、奈良時代後半には東区大極殿南門+十二朝堂に移行したとも指摘されている(小澤 2012)。

橋本の大極殿南門に関する分析は、後の研究に大きな影響を与えたが、門によって隔絶・結合される宮城中枢部の構造変化から天皇制と律令国家の発展過程を論じたのが浅野充である。浅野は、宮衛令開閉門条で規定される大門(大極殿南門・朝堂院南門)によって、宮城中枢部が遮断・結合されている点に注目し、その構造が藤原宮で成立した点を指摘する。さらに、704年に帰国した粟田真人が持ち帰った情報によって、唐長安城大明宮含元殿の空間を模倣する必要が生じ、「中華を体現する場」として設計されたのが平城宮中央区だと強調する。平城宮中枢部の大極殿南門と東西樓の構造は、唐長安城大明宮含元殿の翔鶴閣・樓鳳閣を模倣した構造とし、朝堂院を含元殿前の広大な広場に対応すると考えた。その上で、大極殿南門の出現意義=大極殿が朝堂から隔絶されている意義を整理した。すなわち、天皇の場としての大極殿だけでなく、成員の場である朝堂を大門内に含むのは擬制的首長制構造を体現していると同時に、大極殿南門の設置によって大極殿を朝堂から隔絶し、超越的存在としての天皇を国家唯一の首長に擬したものと結論づけた(図9)(浅野 1990)。宮城中枢部の構造を、空間を階層的に隔絶しながらも相互に結合する機能を持つ「門」に着目して読み解く視点は、現在でも重要な論点である(石川 2010など)。以上の宮城内の門に関する分析に対して、羅城・羅城門に関しては、古く瀧川政次郎の先駆的研究がある。瀧川は、平城京・平安京の羅城門と唐長安城・洛陽城の城門を比較し、その構造や機能的な特色を整理した。その上で、平城京・平安京の羅城・羅城門は、唐の使節に対して日本が対等の国家であることを示すと同時に、新羅・渤海の使節に対しては日本天皇が皇帝と等しく、「小中華の天子であることを印象せしめるための道具立ての一つ」と指摘した(瀧川 1967)。

なお、地方官衙の門については、文献史料が非常に限られている。山城國愛宕郡家の門前で遣唐使派遣に伴って天神地祇の奉祀が行われた記事、同葛野郡家門前の櫛樹が松尾大神が憑依する靈樹だったという記事など、呪術・祭祀の場としての機能が看取できる(森 2003)ものの、都城門に比べて機能的な実態に関しては不明な部分が多い。後述する考古学的な発掘成果(山中 1994)に基づく分析の進展が期待される。

## (2) 建築史学の都城門研究

古代から近世までの門建築を総合的に扱った岡田英男は、門を二重の門(二重門・樓門・櫓門)、一重の門(五間三戸門・八脚門・薬医門・四脚門・棟門・上土門・唐門・高麗門・埋門・墀重門・長屋門)、および石造門(アーチ門・石牆門)と鳥居に分類した。また、古代の門に関しては、7世紀の寺院で梁行3間の門が見られるの

内裏外郭		
内裏内部		E
D	大極殿	
朝堂		
B		
A		
F		

浅野充1990			
左	該当門	平城宮	備考
F	中門・宮門	—	—
E	内門・閑門	内裏南門	—
D	閑門	大極殿南門	大門
C	中門・宮門	朝堂院南門	
B	外門・宮城門	朱雀門	皇城門
A	—	羅城門	—

今泉陸雄1998		
空間と門	大宝令	守衛
内裏	—	—
——閑垣・閑門——	内門	兵衛府
内廷官衙・大極殿院	—	—
——宮垣・宮門——	中門	兵衛府・衛士府
宮城	—	—
——宮城垣・宮城門——	外門	衛門府門部

直木孝次郎1970		
大宝令	養老令	守衛
内門	閑門	兵衛府
中門	宮門	衛門府・衛士府
外門	宮城門	衛門府門部

※左図は、浅野充の作成した概念図。  
※左図は、浅野1990表のアルファベットと対応する。  
※表は、直木1970・浅野1990・今泉1998の記載を基に作成。

図9 日本書紀の空間構造と門の関係性

に対して、奈良時代以降は梁行2間が基本である点を指摘した（岡田 1984）。一方、古代の門を建築史の立場から検討した井上充夫は、門の本来的な空間的意義を「人が通行するために垣根や堀に穿たれた突破口」としながら、質を異なる内外空間の結節点である場合、特殊な造形の契機が発展すると指摘し、具体的な事例として寺院の中門、都城の大極殿南門を挙げた（井上 1958）。特に、井上の視点は、前述した文献史学の大極殿南門の分析に大きな影響を与えた。

岡田・井上のような巨視的な枠組みで都城門を扱っている建築分野の研究は少なく、その後長い間、発掘調査成果に基づきながら、文献史料・絵画資料・現存建物との比較によって、個別の都城門を復原する研究が蓄積されてきた（奈良国立文化財研究所 1994a など）。しかし、近年、清水重教が都城門・官衙門の建築様式に関して、重要な論考を発表した。清水は、古代の門で現存するのは、法隆寺中門・法隆寺東大門・東大寺転害門に限られ、絵画資料も平安時代後期に限られる点を指摘し、発掘遺構の分析から既存概念にとらわれない復原を蓄積する重要性を強調する。その上で、古代の門に関する単層・重層の問題を議論する。まず、7世紀の寺院で確認されている梁行3間の重層門と考えられる事例は、平面形を正方形に近づけることで構造的安定性を確保していたのに対して、奈良時代になると梁行2間の重層門が一般的になる点を指摘する。また、寺院の重層門は金堂と関連付けられる可能性が高く、門における重層は何らかの象徴的な意味が必要である点を強調する。以上を踏まえて、平城宮朱雀門を再検討し、単層寄棟造の建物を想定した（清水 2010）。なお、清水は平城宮第一次大極殿南門に関しても、梁行2間単層案で復原されたものの、梁行3間重層案も完全には否定出来ないと指摘している（図10）（清水ほか 2004）。

ところで、『続日本紀』にみえる「重閨門」（吉川 2002 など）については、大極殿南門説、朝堂院南門説、朱雀門説の3説が存在するが、文献史料と発掘された遺構の検討から、小澤毅が大極殿南門説を提唱している。小澤は、天皇が出御するのは、天皇の空間の南端である大極殿南門までである点を指摘し、藤原宮の中心に大極殿南門が存在する象徴性を強調する。また、藤原宮・平城宮で発掘された門遺構を再検討し、重層の可能性がある門として藤原宮大極殿南門・平城京羅城門（7×2間）（図11）、藤原宮と平城宮の朱雀門他の宮城門・平城宮中央区大極殿南門・平城宮東区大極殿南門（5×2間）に限定する。そして、藤原宮・平城宮においては、大極殿南門を「重閨門」と呼んでいたと同時に、藤原宮・平城宮の朱雀門、および平城京羅城門も、その象徴的存在から重層であった可能性が高い点を指摘した（図12）（小澤 2012）。なお、古代寺院の中門と南大門の格式が平城遷都を契機として入れ替わる点は以前から認識されていたが、小澤は藤原宮大極殿南門が平城京羅城門（奈良国立文化財研究所 1972）に移築された点を指摘しており、日本都域中軸線の最大門が南下していく現象を考える上で重要な見解である。

率縮尺は、原図と同じ。

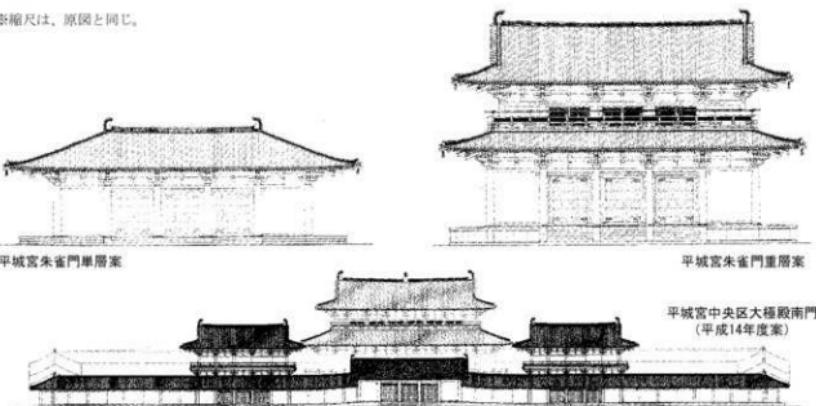


図10 平城宮朱雀門の復原案（上）と中央区大極殿院南門・東西楼閣の復原案（下）

単層・重層は、門の格式を表現する重要な要素だが、門単独ではなく楼閣などによって建造物が莊厳化される場合もある。古代都城の中心建物周辺の莊嚴空間を、建築史学の立場から整理したのが上野邦一である。上野は、前期難波宮内裏南門東西の八角殿（李 2014）、藤原宮大極殿院東西の大型礎石建物（「東樓」SB530：奈良文化財研究所 2003a）、平城宮東区大極殿院東西の建物（東 SB7700：奈良文化財研究所 1993）、平安宮大極殿前面左右の蒼龍榜・白虎榜、平安宮豐樂院豊楽殿東西の霽景樓・栖霞樓（角田監修 1994）など、内裏正殿・大極殿周辺の樓閣建物の重要性を指摘した。その中で、平城宮中央区大極殿院南門東西の樓閣（東樓 SB7802：奈良国立文化財研究所 1973・1982b、奈良文化財研究所 2011）（西樓 SB18500：奈良文化財研究所 2003b・清水ほか 2004・金子ほか 2003）、平城宮内裏南門東西の樓閣（東樓 SB7600：奈良国立文化財研究所 1991）にも言及し、高句麗平壤安鶴宮の南中門（桁行 7 間 × 梁行 2 間）東西の南西門（桁行 6 間 × 梁行 2 間）および南東門（桁行 7 間 × 梁行 2 間）（朴灿奎 2015）との共通性を指摘しながら、中心建物や中枢正門の左右に配置される樓閣建物が「中心を莊嚴化する」役割を担った点を指摘した（上野 2010）。

なお、都城門と条坊の関係性を論じた議論は少ないが、海野聰は平城京の大寺院（興福寺・元興寺・薬師寺・大安寺）の南大門と条坊の関係、および宮城門と条坊の関係を比較し、宮城門の象徴的な意義、特に朱雀門と朱雀大路の重要性を指摘している（海野 2019）。

### (3) 考古学の都城門研究

都城門・官衙門の考古学的研究に関しては、前述した奈良文化財研究所の報告・資料編でおよその研究史を網羅できる（奈良文化財研究所 2010a）。ここでは、①門に関する分類研究、②都城門の研究、③官衙門

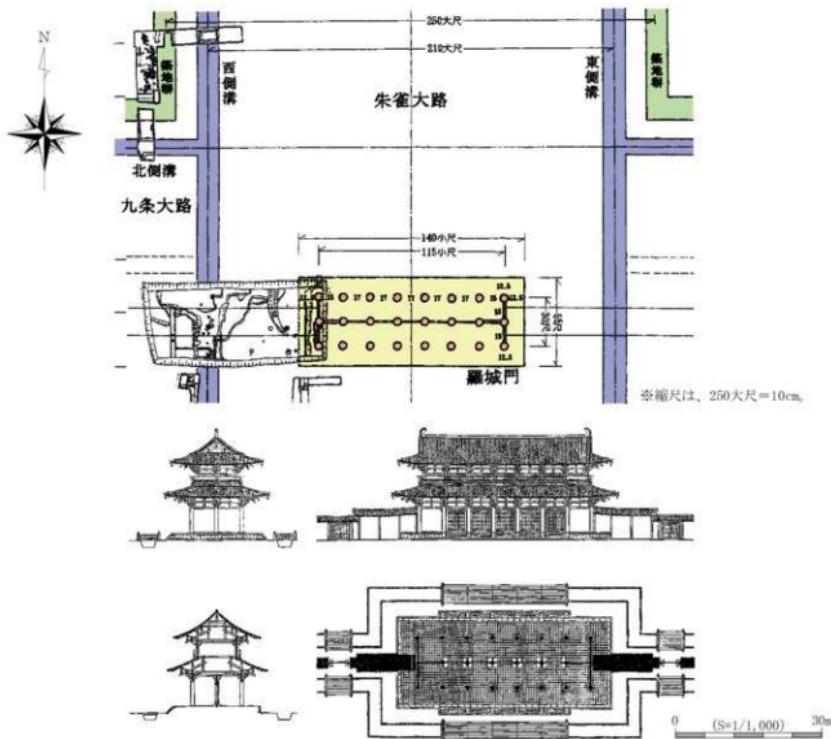
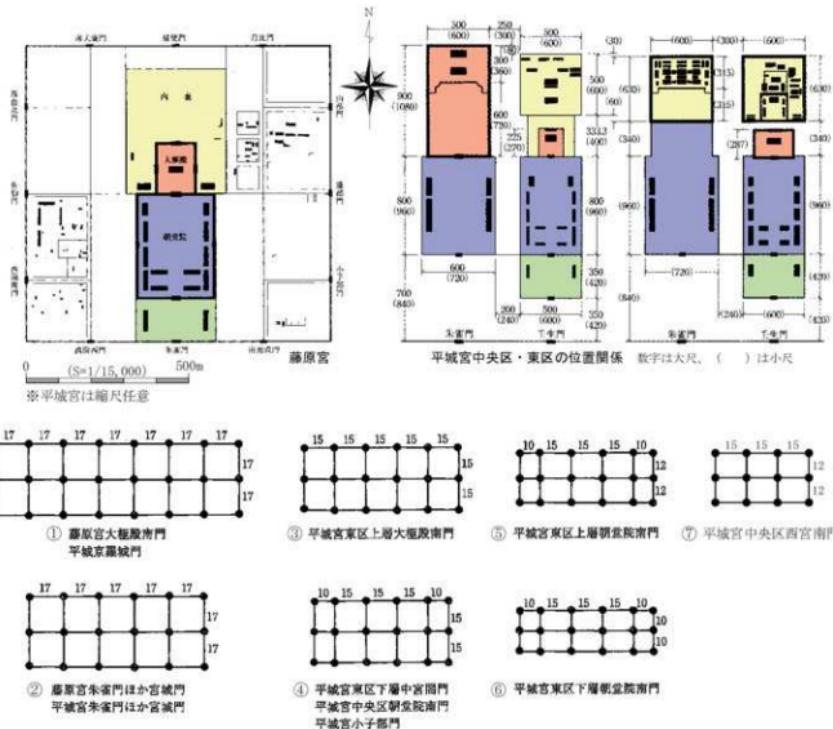


図 11 平城京羅城門の発掘成果（上）と平安京羅城門の復原案（下）



都城	門の種別	遺構番号	総長(尺)	桁行(柱間寸法)	梁行(柱間寸法)	基壇規模(m)
藤原宮	①大極殿南門	SB10700	119×34	7間(17尺×7)	2間(17尺×2)	40.1×16.4
	②朱雀門	SB500	85×34	5間(17尺×5)	2間(17尺×2)	—
平城宮	①藤原門	SB700	119×34	7間(17尺×7)	2間(17尺×2)	41.5×16.4
	②朱雀門	SB1800	85×34	5間(17尺×5)	2間(17尺×2)	(31.9×16.6)
平城宮	東区上層 ③大極殿南門	SB11300	75×38	5間(15尺×5)	2間(15尺×2)	26.1×13.8
	中央区 大極殿南門	SB7801	?	5間(?)	2間(?)	27.8×16.2
平城宮	東区下層 ④中宮門	SB11210	65×30	5間(10尺+15尺×3+10尺)	2間(15尺×2)	22.8×12.5
	中央区 ④朝堂院南門	SB9200	65×30	5間(10尺+15尺×3+10尺)	2間(15尺×2)	(26.0×16.0)
平城宮	④小子部門	SB5000	65×30	5間(10尺+15尺×3+10尺)	2間(15尺×2)	22.1×12.9
	東区上層 ⑤朝堂院南門	SB17000	65×24	5間(10尺+15尺×3+10尺)	2間(12尺×2)	22.3×10.7
平城宮	東区下層 ⑥朝堂院南門	SB16950	65×29	5間(10尺+15尺×3+10尺)	2間(10尺×2)	—
	中央区 ⑦西宮南門	SB7750A	45×24	3間(15尺×3)	2間(12尺×2)	20.0×12.7

図12 藤原宮・平城宮(京)の諸門(小澤毅の整理)

の研究に分けて、研究史を概観する。まず、都城門・官衙門の総合的分類研究は、山中敏史の整理がある。山中は、発掘遺構の柱配置から、門を以下の7種類に分類した。

【1】二本柱の門。2本の親柱を立てた、桁行1間の門。鳥居・冠木門・棟門・上土門・築地門など。【2】桁行1間・梁行1間の門。2本の親柱の背後に控柱を立てた門。薬医門など。【3】桁行1間・梁行2間の門。正面1間の親柱の前後に2本ずつの控柱を立てた門。四脚門。【4】桁行3間・梁行2間の門。桁行3間の親柱列の前後に4本ずつの控柱を立てた門。八脚門。中央間を扉口とする三間一戸が通常だが、三間三戸の稀な例もある。【5】桁行5間・梁行2間の門。桁行5間の親柱列の前後に6本ずつの控柱を立てた門。五間門。中央3間を扉口とする五間三戸が多いが、五間一戸の例もある。【6】桁行7・9間・梁行2間の門。前期難波宮内裏南門・平城京羅城門・平安宮朱雀門の七間門、平安京羅城門の九間門（図11）で、国家の権威を対外的に誇示する象徴的な門。【7】梁行3間の門。7世紀～8世紀初頭の寺院中門の古い形式。

以上の他、側柱建物状の構造を呈する門、親柱列の配置が不規則な門など、変則的な柱配置の門がある点も指摘している。また、門の格式は棟門→四脚門→八脚門→五・七・九間門と高くなる点を指摘し、『令集解』儀制令因服不入上にある「公門」にあたる宮城門で五間門、国守・郡守南門に八脚門が一般的だった点を整理した。さらに、門に付随する施設として、仗舎・南門前面両脇の殿舎・翼様・目隠し塀・土廻などの存在を注意している（山中2003）。山中の整理は、日本の都城門・官衙門の考古学的研究の基礎となっている。

都城門の研究に関しては、各都城の発掘調査成果を踏まえて考古学的位置付けが蓄積されている状況である。孝徳朝長柄豐碑宮に比定される前期難波宮では、宮城南門よりも巨大な内裏南門の七間門の存在が注目されてきた（長山1973・1995、李2004など）。一方、近江大津宮の内裏南門と推定される錦織遺跡SB001も七間門に復原されているが、「地中梁」の配置パターンから五間門を想定する説もあり（黒崎2001）、飛鳥淨御原宮に比定される飛鳥京跡III-B期の内郭南門、エビノコ郭西門も五間門に復原されている。藤原宮は最近の発掘調査で、宮城門一五間門、大極殿院門一七間門の格差があり、特に大極殿南門（闇門）がとび

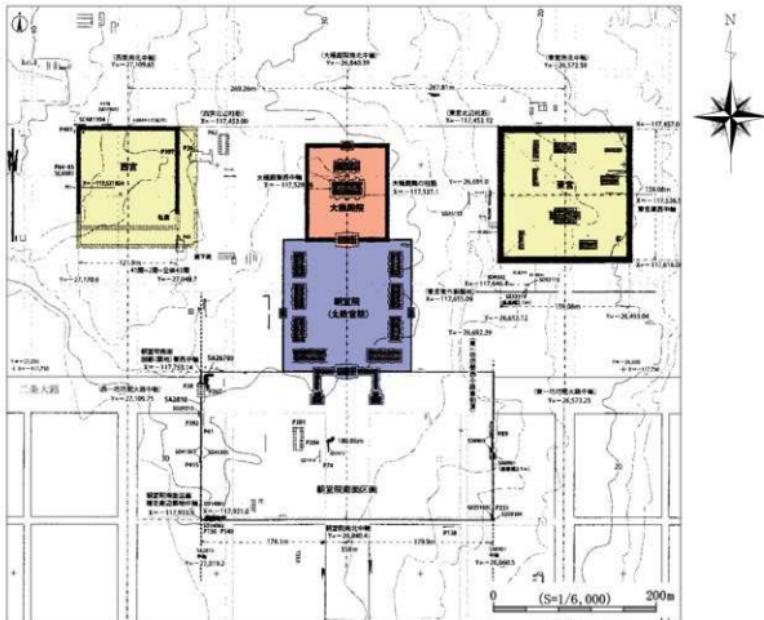


図13 長岡宮中枢部の復原

ぬけて規模が大きい点が指摘されている（青木 2010）。前期難波宮内裏南門・藤原宮大極殿南門（内裏外郭南門）など、内裏の南側に位置する門が最大だった7世紀に対して、平城京では羅城門が都城最大の門となる。平城京羅城門は、発掘調査の成果から平城宮朱雀門と同じ五間三戸門とされていたが（奈良国立文化財研究所 1972）、再検討した井上和人は七間五戸門を想定し、唐長安城明徳門の影響を指摘した（井上 1998a・b）。平城宮も藤原宮と同じく宮城門が基本的には同規模である点が指摘されており（井上 2010）、宮内の門に見られる規模や構造の格差も把握されるようになった（小澤 2012）。

近年の日本都城門の研究で特に注目される発掘成果は、長岡宮朝堂院南門で確認された「樓閣遺構」である（図13）（向日市埋蔵文化財センター 2006など）。金子裕之は、唐洛陽城応天門の三出闇にその源流を求め、平安宮朝堂院南門の応天門・栖鳳樓・翔鷺樓（図14）への系譜を指摘した。また、日唐の宮城構造を門に注目して比較し、唐代都城の宮城正門に見られる門闕の存在から、皇城と宮城が未分化な日本都城の宮城においては、朱雀門一皇城門・朝堂院・朝集院南門一宮城門と「意識」されていた点を指摘した（金子 2007・2014）。山田邦和もほぼ同様の視点での整理を行い、「樓閣附設建築」を、①樓閣附設殿舎（前期難波宮内裏南門左右の八角殿、平安宮大極殿蒼龍樓・白虎樓、平安宮豊楽院霽景樓・栖霞樓、平安京神泉苑乾臨閣）、②樓閣附設門（平城宮中央区大極殿南門、長岡宮朝堂院南門、平安宮朝堂院応天門栖鳳樓・翔鷺樓）に分けた。その上で、①の系譜を唐長安城大明宮含元殿、②の系譜を唐長安城太極宮承天門に求め、唐代都城における三朝制の外朝空間を桓武天皇が長岡宮や平安宮に採用したと指摘した（山田 2007）。なお、筆者は前稿で、日中古代都城の正門の規模と構造を比較し、日本都城では中軸線最大の門が徐々に南側に移動する点、中軸正門の門道数が一致していない点を指摘した上で、唐代都城の3つの門型式（明徳門型・承天門型・含元殿型）が本来の連環を解きほぐされ、日本都城の中軸線上で個別に具現化された点を指摘した（城倉 2013）。

最後に官衙門の研究について、整理しておく。坂井秀弥は、中山敏史の整理を踏まう上で、「公門」である国庁・郡府門は八脚門を基本とするが大宰府・多賀城・胆沢城などに五間門が見られること、二重構造を持つ東北の城柵は政庁よりも外郭門の格式・規模が上で、奈良時代の都城・寺院と連動する点を整理した（坂井 2010）。一方、田中広明は官衙門と邸宅門を比較し、官衙門では五間門・八脚門・四脚門の格差があり、都城の宅地・地方豪族の邸宅では四脚門（村田 2000）・棟門の格差がある点を指摘した（田中 2003・2005）。

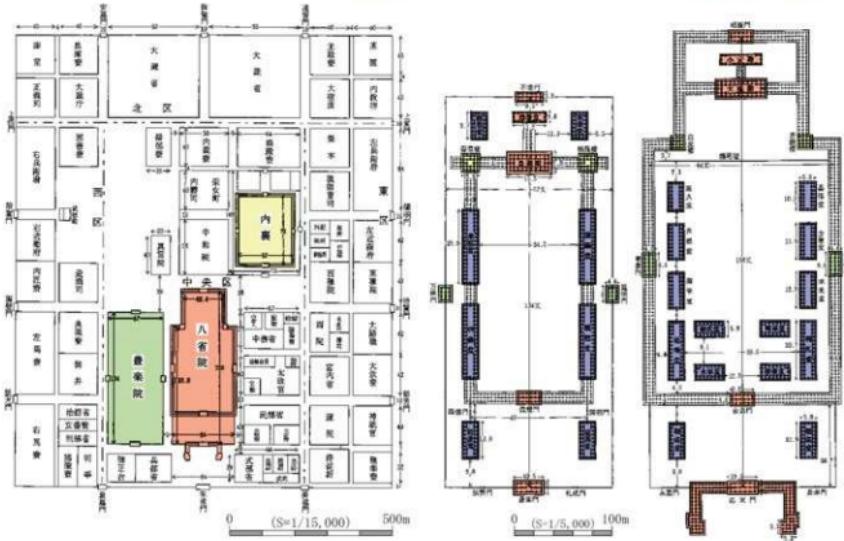


図14 平安宮（左）と豊楽院・朝堂院（右）の復原

2010)。なお、東北の城柵・官衙に関しては、村田晃一が整理している。村田は城柵の政庁・外郭・外周の二・三重構造を指摘した上で、政庁門は単層の八脚門が多く、南門に前門・前殿・翼楼・目隠し塀・仗舎・土庵などの附属施設(図15)が伴うように格式が高い点を指摘した。さらに、外郭門・外周門も八脚門を基本とするが櫓門・楼門など二重門が多く、胆沢城外郭南門の五間門などは蝦夷に対して国家の威儀を誇示する役割があった点を指摘した。特に、前線の城柵に関しては外郭門が裝飾性・防御性が高いのに対して、後方の国府が置かれた城柵では、政庁の格式が高く、門の役割に応じて格差がある点を整理した(村田2010)。

#### 1-4 本論の「比較視座」と研究課題

以上、中国都城門・日本都城門の研究史を整理した。多様な論点の中でも、重層的な階層構造を持つ都城において、各階層空間の結節点である中軸正門が象徴的な役割を果たした事が明らかになっている点が重要である。特に、宮城・皇城・外郭城の三重構造を特徴とする唐代都城を分析の中心に据えた上で、中軸正門の通時的・国際的な比較分析を行えば、「空間構造」の視点から中国都城の発展と東アジアへの展開に関する歴史性を追求できると考える。すなわち、各国で異なる伝統や建築様式を持つ都城門の遺構自体の比較ではなく、特に中軸正門が象徴する都城の階層空間の「連鎖構造」に関する通時的・国際的比較こそが、重要な分析視点だと考える。以上の「比較視座」を踏まえた上で、日中両国の都城門研究史を振り返ると、本論で考究すべき課題が見えてくる。本論では、以下の4つの課題を設定して、分析を進める。

**【1】漢～宋の中原都城・遼・金・元の草原都城における発掘された門遺構を通時的に比較する。**近年、中国都城門の重要な発掘調査事例が多く蓄積されている。しかし、調査事例の多い隋唐都城という限られた時空間での分類、あるいは門道数・闕・瓮城といった限られた視点での通時的分析が現在までの研究の主流である。漢・魏晋南北朝・隋唐・宋の中原都城、および遼・金・元の草原都城における都城門の発掘事例の悉皆的な集成と通時的・系統的な分析が必要と考える。**【2】各都城における門相互の関係性を空間構造の視点から分析する。**魏晋南北朝～唐代都城の研究では、中軸上に位置する建造物の関係性を重視した分析が蓄積されている。この点は、唐代都城における三重構造や南郊礼制建築の存在、あるいは宮城構造と三朝制の関係性が研究テーマとなってきたことに起因する。一方、渤海・日本都城門の分析では、三朝制の概念に基づく唐代都城の宮城構造との比較は盛んに議論されているものの、正門相互の関係性を深める議論が少ない。中軸上に位置する正門と正殿の関係性を各都城単位で分析しながら、空間構造の比較を進める必要がある。**【3】中国都城門・日本都城門の用語・概念を整理した上で、系統的な整理を行う。**中国・日本で都城門に関する膨大な研究が蓄積されているものの、中原都城・草原都城・高句麗・渤海・日本都城門の悉皆的な集成と比較という試みは行われていない。本論では、中国・日本における研究史を踏まえて、用語・概念などを整理した上で、発掘遺構の実測図を集成し、今後の研究の基礎を固める。さらに、各国単位の通時的分析や影響関係の整理に際しては、門遺構の構造に基づく系譜的な整理を重視する。**【4】門遺構の分析から、東アジア古代都城の国際的な構造比較を行う。**従来は三朝制を中心とした宮城構造の分析という視点から、唐長安城・洛陽城と渤海・日本都城を比較する研究が多かった。本論では、中原都城から草原都城への発展過程を中軸正門を中心とした構造的な分析から明らかにすると同時に、東アジアに展開した高句麗・渤海・日本都城との国際的な比較分析を行う。都城門の遺構分析を中心として、唐代都城の東アジアへの展開過程を考究することが本論の目的である。

#### 2. 古代都城門の分析視角

##### 2-1 分析対象と分析方法

本論で分析対象とするのは、漢～宋の中原都城・遼・金・元の北方都城、高句麗・渤海・日本都城の発掘された門遺構である。文献史学・建築史学の成果を適宜引用しながら、考古学的に門構造を検討する。まず、3～5では、都城毎に門遺構を整理する。この部分では基礎資料の提示を重視し、関連報告書に掲載されている実測図を提示する。

本論では時空間共に広い都城の門遺構を分析対象とするが、個別遺構の詳細な直接比較を目的とするわけ

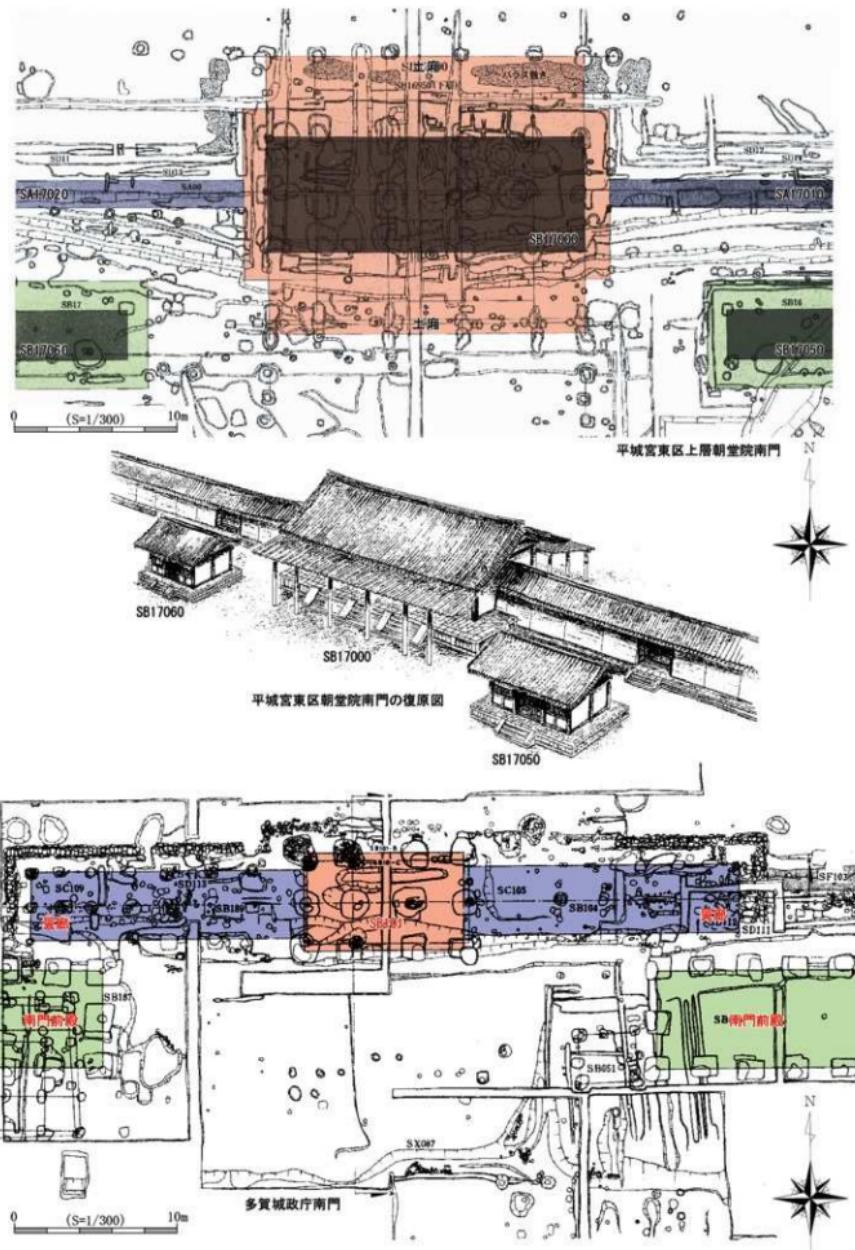


図15 日本都城門の附帯施設（上：平城宮東区上層朝堂院南門／下：多賀城政府南門）

ではない。都城の重層的な空間構造を連結する門に着目することで、都城の空間構造の論理を時空間を越えて比較する点に目的がある。必然的に考古学的な視点に基づく分類=「分ける」作業と共に、同一都域内の門の連関性や階層性を把握しながら、時空間を越えた系統関係を「纏める」作業が重要となる。具体的には、①中原都城の発展における門、特に門闕を中心とする系譜関係の把握、②唐代都城における中軸正門の関係性と階層性の把握、が課題となる。さらに、唐代都城で定式化する中軸正門相互の関係性が、③北宋、あるいは遼・金・元の草原都城という縱方向の時間軸の中でどのように展開するか、④同時代の高句麗・渤海・日本都城へ空間的にどのように展開するか、を考究する。以上の作業を通じて、唐代都城の空間構造の特色とその展開過程の歴史性を明らかにする。

なお、3～5での基礎資料の提示の後、6では上記①②③④の課題を論じる節を設ける。各節で論じる内容を以下に列挙しておく。

**【1】連体式双開門の発展と唐代都城門の諸類型。**中国都城の発展史上、唐長安城は大きな画期である。宮城・皇城・外郭城という重圏構造、太極殿と南郊円丘を結ぶ中軸線、三朝制に基づく宮城構造など、唐長安城は中原都城の「完成形」といえる。唐以降の都城は、遼・金・元の草原都城という過渡期を経て明清都城に至るが、その過程は思想空間として「完成化」された唐代都城の解体・再編成による発展と捉えることも出来る。以上を踏まえ、漢から魏晉南北朝を経て唐長安城に至る都城門の発展史を、宮城正門に採用された門闕、および中軸正門相互の関係性から整理する。**【2】唐代都城の構造と門の階層性－含元殿の成立－**重圏構造を持つ唐代都城において、各階層空間は中軸正門によって連結される。中でも魏晉南北朝で進んだ宮城正門の儀礼空間化、および宮城正門に採用された門闕と正殿が融合する現象が重要である。ここでは、「闕式主殿」である唐長安城大明宮含元殿の成立過程を宮城正門との関係性を踏まえて整理する。**【3】唐代都城の解体と再編成－北宋以降の正門の変遷－**唐長安城で完成した思想空間としての中原都城は、遼・金・元の草原都城での変容を経て、明清都城という新しい様式へと生まれ変わっていく。その過程は、唐代都城の思想空間の解体、および北方遊牧民族の思想を踏まえた再編成によって達成されていくが、その具体像を中軸正門の門闕・瓮城を中心として整理する。**【4】唐代都城門の東アジアへの展開**唐代都城は、同時期の東アジア世界への展開という歴史的文脈においても、思想空間の「解体・再編成」が行われながら展開する点に特徴がある。最後には、唐代都城と高句麗・渤海・日本都城の空間構造を門遺構を中心として比較する。

## 2-2 中国都城門の種類と構造

3～5で個別の都城門を提示する前に、本論で分析対象とする都城門の種類と構造について、整理しておく。中国と日本では、建物の基本構造が大きく異なる。古代中国では、埠積みの壁体（「壁構造」）と木造を組み合わせた形式が一般的だが、日本は木材を組み合わせて軸部を作る「軸組構造」を基本とする。両者を同一基準で分析することは難しいため、ここでは両者を分けて、その特徴を整理する。

中国都城門の最大の特徴は、城壁と門建築が一体化している点である。「土木混合結構」とも呼ばれ、漢以前の主要な様式であり、隋唐以降は城門が代表的な建造物とされる（傅熹年主编 2009p675）。城壁の版築と木造門が複雑に組み合う特殊な建築様式である。また、魏晉南北朝以降は中軸正門を中心として闕・瓮城などの附帯施設も存在し、門建築特有の専門用語も多い。日本では存在しない建築様式や概念を日本語で置き換えることは難しいため、本論では中国考古学で使用されている用語を基本的には使用して議論を進める。以下では、中国都城門の諸属性を整理した表1を踏まえて説明を加える。

中国都城門は研究史の整理でも言及したように、大きく3つの形式に分類される（傅熹年 1977・陳良伟 2002など）。（I）過梁式・（II）殿堂式・（III）発券式である。過梁式は門道左右に密に並べた柱（排叉柱）とその上の「梁」が天井部を構成するトンネル式の構造で、漢～唐代に一般的な門形式である。前漢までは城壁版築に1つ、もしくは3つの入口（門道）を設けて、その左右に排叉柱を並べる構造だが、後漢以降は門道左右に城壁よりも奥行きが幅広な墩台・隔壁を設ける構造へと変化する。この点は、門建築の大型化に伴う現象と思われる。門道左右の排叉柱は、その間が埠積で充填されることで暗柱となり、門道左右壁面には漆喰が塗布され、トンネル状の構造を呈するのが基本である。この門道部分は初層となり、通常はその上

部にも版築が施され、門樓が建造される（図3の復原参照）。過梁式門は、漢～唐代の一般的な城門様式とされており、北宋以降に埠積によるアーチ構造の発券式へと変化すると考えられている。ただし、近年の発掘調査では、遼・金・元の都城門でも過梁式が確認されており、過梁式と発券式は明確な時期差をもって入れ替わったわけではなく、徐々に後者が主体になる過程を経て明清都城へと発展したと推定できる。

過梁式・発券式が、外城・内城壁など堅牢な城壁上に設置される城門形式であるのに對して、宮城正門・皇城正門に採用されたのが日本考古学で呼ぶところの「總柱」構造を持つ殿堂式（II A）である。曹魏洛陽城宮城正門の閨闥門を代表例とするが、渤海海上京城皇城南門、遼上京城宮城東正門、元中都皇城南門など、格式の高い象徴的な門形式である。また、唐代においては、主殿と連体式双闕門が融合した長安城大明宮含元殿、あるいは門でありながら主殿として使用される長安城興慶宮勤政殿本樓などの事例があり、これらもその系譜を踏まえて殿堂式（II B）の範疇で理解しておく。なお、本来、殿堂式門とは宮城門・皇城門に採用される大型で象徴性の高い門形式を示すが、宮城内で見られる「屋宇式・殿宇式」と呼ばれる中・小型の木造門も分類の便宜上、殿堂式（II C）の範疇に含めて整理する。

以上、過梁式・殿堂式・発券式は、表1下にあるように、それぞれ存在時間幅が重複しながらも、主体となる時期が異なる点に特徴がある。そして、この3つの形式は、①構造、②門道数、③闕、④籠城などの諸属性で細分が可能である。以下では、①～④の諸属性毎に整理する。

①の構造については、過梁式を中心に説明する。過梁式は、傅熹年・董新林の排叉柱下部の構造分類（傅熹年 1977・董新林 2014）を踏まえれば、A-Dに細分出来る。I Aは、漢代に見られる構築方法で、不揃いな礎石（土襯石）の上に木製地覆を設置し、その上に排叉柱を並べる構造である。続く魏晉南北朝～唐代においては、方形礎石を等間隔に設置して、その上に排叉柱を立てる I B が主体となる。北宋期になると、土襯石を地中に設置して、その上にホゾ穴のある石製地覆を密に並べて排叉柱を立てる I C が一般的となる。一方、北方の遼では、漢・渤海の系譜を引き、石製地覆の上に木製地覆を設置して排叉柱を立てる I D も認められる。また、金・元では、復古的な I B や遼の系譜を引く I D など多様な形式が混在している点が、近年の発掘調査で明らかになりつつある。なお、三燕の1つである後燕（384-407）龍城の宮城南門の発掘調査では、埠積槽の中に木製地覆を置き、排叉柱を並べる特殊な事例が報告されており（万雄飛 2020）、今後の発掘事例の増加で過梁式の展開過程がより明らかになっていくことが期待できる。

さて、過梁式のうち、I A・I B・I C の代表的な事例を図示したのが、図16 ①である。過梁式門は、本論で対象とする最も普遍的な門形式のため、この図に基づき用語を含めて基本構造を確認しておく。過梁式門は、城壁に接続して奥行き方向に幅広に構築される版築：墩台、および三門道の場合は2基、五門道の場合は3基の隔壁で構成される。この墩台・隔壁の版築に挟まれた部分が、門道である。I A の漢長安城羈域門の例を見ると、門道左右に不揃いな礎石（土襯石）があり、その上に木製地覆を設置し、排叉柱を立て並べている点がわかる。最も原初的な過梁式門の下部構造である。漢代の I A は、中国東北部の三燕や高句麗に伝わり、渤海を経て遼の I D へ発展したと考えられる。一方、I B の唐洛陽城皇城右掖門では、門道左右にホゾ穴（榫眼）が中央にある方形の礎石が一定間隔で設置されている。最も手前、および最も奥の墩台屈曲部分に置かれるのが撞石である。門道左右の礎石上には断面方形の排叉柱が立て並べられ、柱の間は版築や埠積で充填されるため、壁面は平滑となり、漆喰などが塗布される。中門道は皇帝専用として隔離されるため使用された痕跡が少なく、左右門道に車轍が確認できるのが一般的である。また、門道中央付近には、石製の門扉施設が置かれる。唐宋～宋代には、I C が登場する。ここでは、唐洛陽城東城宣仁門・尚書省正門の事例を示した。I C は、門道左右に土襯石を設置し、その上にホゾ穴の開いた長方形の石製地覆を密に並べていき、排叉柱を立てる構造である。また、北宋期には車が通る部分に車道石を設置し、歩く部分を敷導する入念な構造となる。門扉は下部の石製施設のみ残存することが一般的で、門道方向に直交して閉門時に扉が載る門限石（門檻石）、左右の門扉が接触する中央部分には將軍石が設置される。扉は内開きが基本で、左右の排叉柱と接する場所で、断面回字形の門砧石、凹部分にはめ込む立頬石（門框石）が左右対称に設置される。門砧石の内側には、門扉の軸部を受ける鉄鵝台をはめ込む方形の穿孔がある。門砧石内側数メートルの位置には、閉門時に門扉を固定する止扉石が設置される。

表 1 中國都城門の諸属性

形式	構造			門道数	門	登城			
	A 不定形な礎石（土根石）を並べた上に木製地盤を設置し、その上に排又柱を立てる。	B 方形礎石の上に排又柱を立てる。	C 土根石を並べた上に石製地盤を設置し、その上に排又柱を立てる。						
I 通渠式	D 石製地盤の上に木製地盤を設置し、その上に排又柱を立てる。	(1) (2) (3) (5) 門道	Q1 繩立闇 Q2 双除機 Q3 連体双闇 Q4 連体双出闇	W1 橋円形（馬蹄形） W2 方形（長方形） W3 半円形					
	A 宮城正門・皇城正門で採用される大型殿堂式門。								
	B 主殿（連体双闇門）の構造をとる中軸正殿・門が主殿の役割を果たす事例など）。								
	C 中・小型木造門（原字式・數字式など）。								
II 殿堂式	唐傾アーチ式門。北宋～明清初期の門形式とされる。								
III 奉券式									
年代	前漢	後漢	魏晉南北朝	隋唐	北宋・遼	金	元	明	清
各形式 存在時間幅	通渠式 IA			通渠式 IB・IC・ID		殿堂式 II A・II B・II C		発券式 III	

※中國都城門には、大きく通渠式・殿堂式・発券式の3形式が存在する。それぞれの存在時間幅は重複しながら、主体となる時期が異なる。  
※通渠式は排又柱下部の構造で4種類に分類できる。殿堂式は、殿堂式門（北魏洛陽開闢門など）・門闕構造とする主殿（唐長安大明宮など）の2種類に分類できる。  
※門道数は1・3・5門道を基本とし、2門道もわずかに存在する。闕（Què）は4種類、鬼城（weng cheng）は3種類に構造上分類できる。

表 2 日本都城門の諸属性

析行	梁行	通絆	格式
1間	—	二本柱門（鳥居・延木門・棟門・上土門・築地門）	—
1間	1間	一間門（築垣門）	—
1間	2間	四脚門	都宅門など
3間	2間	八脚門（三間三戸・三間一戸）	官衙門など
5間	2間	五間門（五間三戸・五間一戸）	都城門（宮城門・宮門）・重要官衙／城樓外郭門など
7・9間	2間	七脚門・九脚門（五戸9）	内裏御門・大極殿南門・宮城門・羅城門など
3・4・5間	3間	梁行三間門（飛鳥～白鳳期の寺院中門に見られる梁行3間の重層門）	寺院中門など

※梁行三間門のうち、現存する法隆寺中門は四間二戸入母屋二重門。桁行偶数、二戸門（唐長安大明宮含闢門・渤海上海城宮城北門に2門道あり）は他に類例なし。

②の門道数について。中国都城門は、1・3・5門道の奇数を基本とし、二門道は唐長安城大明宮含羅門・晚期興安門、渤海海上京城宮城正北門など数例に限られる。便門や防御性の高い宮城北門に用いられる1門道を除けば、都城門は3・5門道を基本とし、中央は皇帝専用として隔離される「駕道」、左右門道は「傍道」で「左入右出」が基本である（徐龍国 2015）。左右門道には、車轍が見られるのが一般的で、北宋期以降は車道部分を車道石で「舗装」する場合もある。なお、5門道は唐長安城中軸正門の明徳門や丹鳳門にのみ認められ、例外的な最高格式である。

③の闕について。門闕は中国都城の中軸正門に採用された、非常に象徴的な附帯施設である。闕は中国語で「Que」と発音するため、ここではQ1-Q4に分類する。Q2-Q4の代表的な事例を提示したのが、図16②である。Q1は、門前の左右に門建築から独立した基壇で構成される独立闕である。漢代の明器や画像石、墓誌（重庆市文物局等 1992）などに事例があるものの、都城門で確実な検出事例はない。ここでは、今後の発掘調査による検出に備えて、類型として設定をしておく。Q2は、門建築の左右に距離を置いて設置される樓閣状の闕を双塼楼として設定する。日本都城では、平城宮中央区大極殿南門の東西樓（SB7802・SB18500）など、同様の型式を樓と表現するが、中国では闕と呼称する。しかし、後述する門前に突出する闕とは区別するため、ここでは唐洛陽城外郭城正門の定鼎門で使用されている樓の名称を採用し、双塼楼と呼称しておく。墩台と樓の間部分の城壁は飛廊とし、その内側で城壁に上る緩やかなスロープを馬道とする。双塼楼は、敦煌莫高窟など壁画資料にも多く描かれている（蕭默 1989）。Q3は、門左右の墩台から飛廊が門前面に突出して樓が置かれる構造で、墩台・闕台が飛廊で接続することから連体双闕と呼称する。東魏北齊都城内城正門の朱明門が、代表的な事例である。漢長安城の東正門とされる宣平門では墩台・闕楼が存在しないものの、門前左右に防御性の高い突出部が附属する点が確認されており、原初的な連体双闕に分類しておく。一方、連体双闕の中で、飛廊で結ばれた闕台の基壇が飛廊側、および門前東西外側に向けて突出する事例をQ4の連体双闕と呼称しておく。唐懿德太子墓の墓道北壁に描かれた闕門（図6右下）（王仁波 1973）が著名だが、母闕に対して、子闕が1つの場合は二出闕、子闕が2つの場合は三出闕と呼称している。前者の代表的な事例として北魏洛陽城宮城正門の閼闌門、後者の事例として元大都宮城正門の崇天門（復原）の事例を示した。門本体と飛廊で結ばれた双塼楼から、やはり門前に飛廊が突出して闕楼上に接続する三出闕は、最も格が高い門形式である。

④の瓮城について。瓮城「Weng cheng」は、W1-W3に分類する。明南京城の聚宝門など「内瓮城」の事例もあるが、本論では城壁外に突出する構造を楕円形・馬蹄形（W1）、方形（W2）、円形（W3）に分類する。

以上、中国都城門の構造と諸属性について整理した。これによって、各都城門は属性の組み合わせによつて、表記することが可能になる。例えば、唐洛陽城宮城正門の応天門であれば「I B(3)Q4」、唐洛陽城外郭城正門の定鼎門であれば「I B(3)Q2」といった具合である。

### 2-3 日本都城門の種類と構造

日本都城門は、中国都城門の土木混合型・壁組構造とは異なり、純粹な木造建築、すなわち軸組構造である点が特徴である。中国都城では殿堂式の中・小型木造門（II C）に分類した範疇に入る。日本都城門については、前述した中山敏史の分類案を採用する（山中 2003）。日本都城門は、基本的に桁行の間数で分類が行われており、7種類に分類されている。山中の分類を基に整理したのが、表2である。基本的な構造に関しては以上だが、その他の要素として礎石の有無、土庫の有無、柱間寸法や基壇の規模、版築の有無、階段や雨落溝の位置、遮蔽施設や道路との関係なども適宜整理する。なお、日本都城門では瓮城は存在しないが、門闕に関しては少数ながら類例があるため、平城宮中央区大極殿南門東西樓、長岡宮朝堂院南門など、発掘事例毎に検討する。また、藤原宮北面中門や平城宮東区朝堂院南門で検出されている兵舎・仗舎と思われる遺構など、附帯施設の存在に関しては言及する。さらに、日本都城門関連の用語の記述に際しては、奈文研・文化庁のてびきを参考にする（奈良文化財研究所 2003c、文化庁文化財部記念物課 2010・2013）。

最後に、門扉施設について整理しておく。今、中国都城門の門扉施設を整理したのが図17①、日本都城・山城の門扉施設を整理したのが図17②である。中国都城門の門扉施設については、隋仁寿宮線壁北門・渤海

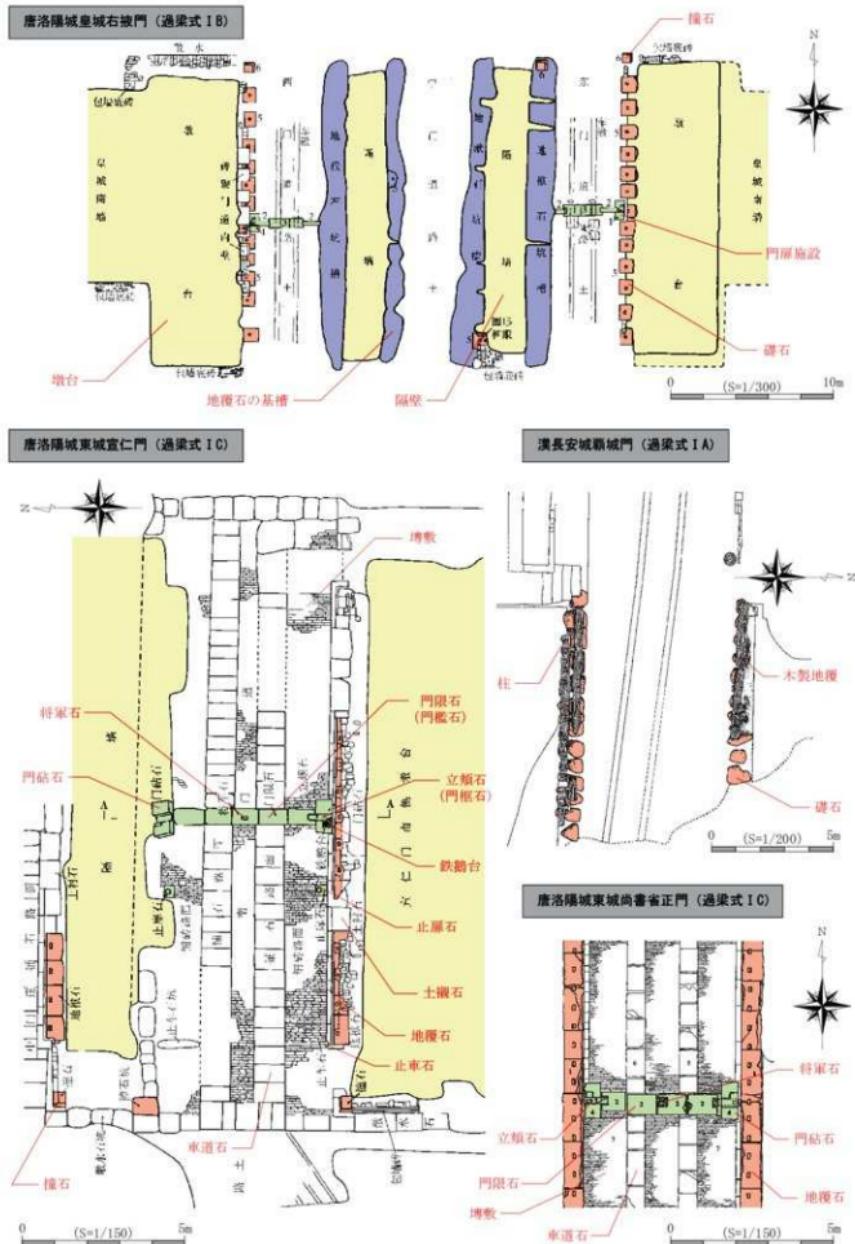


図 16 中国都城門（過梁式）の諸類と用語①

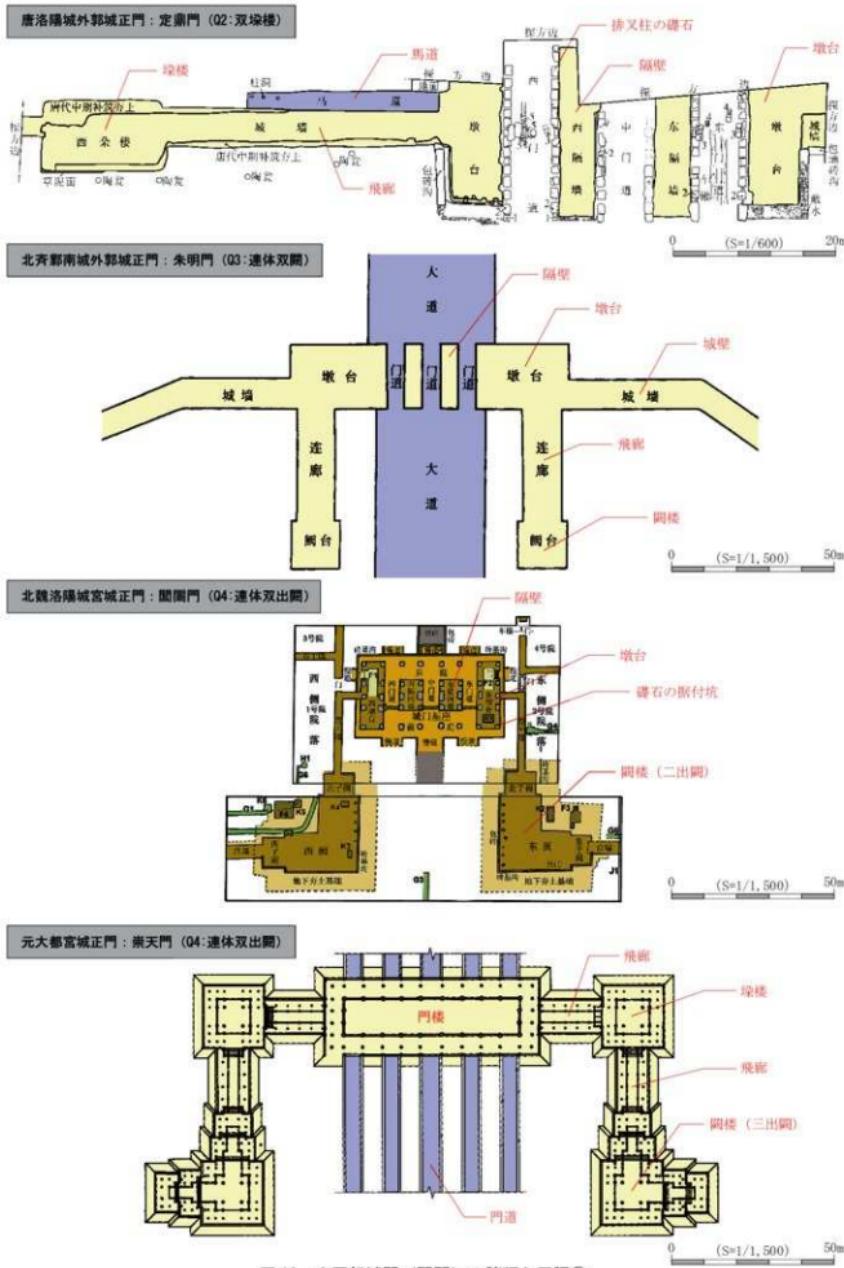


図16 中國都城門（門闕）の諸類と用語②

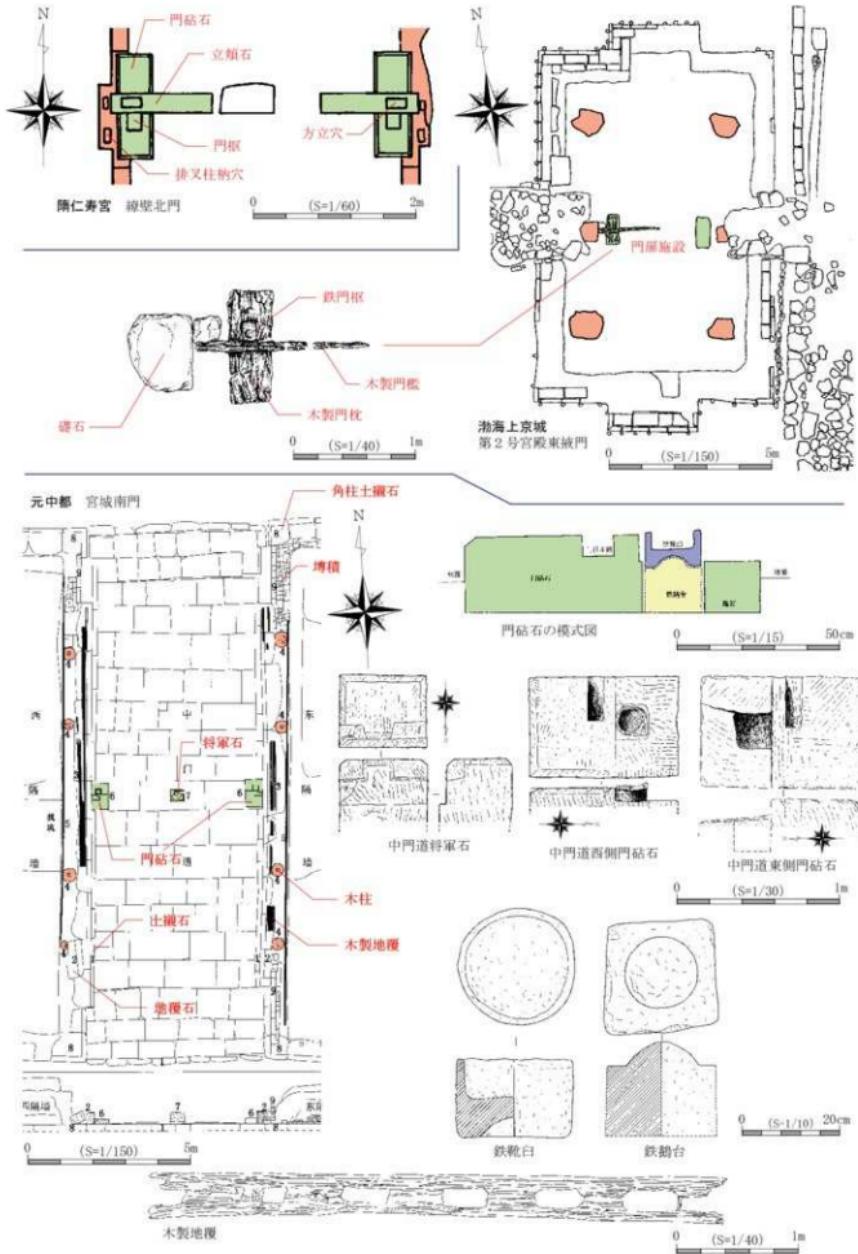


図 17 門扉施設（中国）の各部名称①

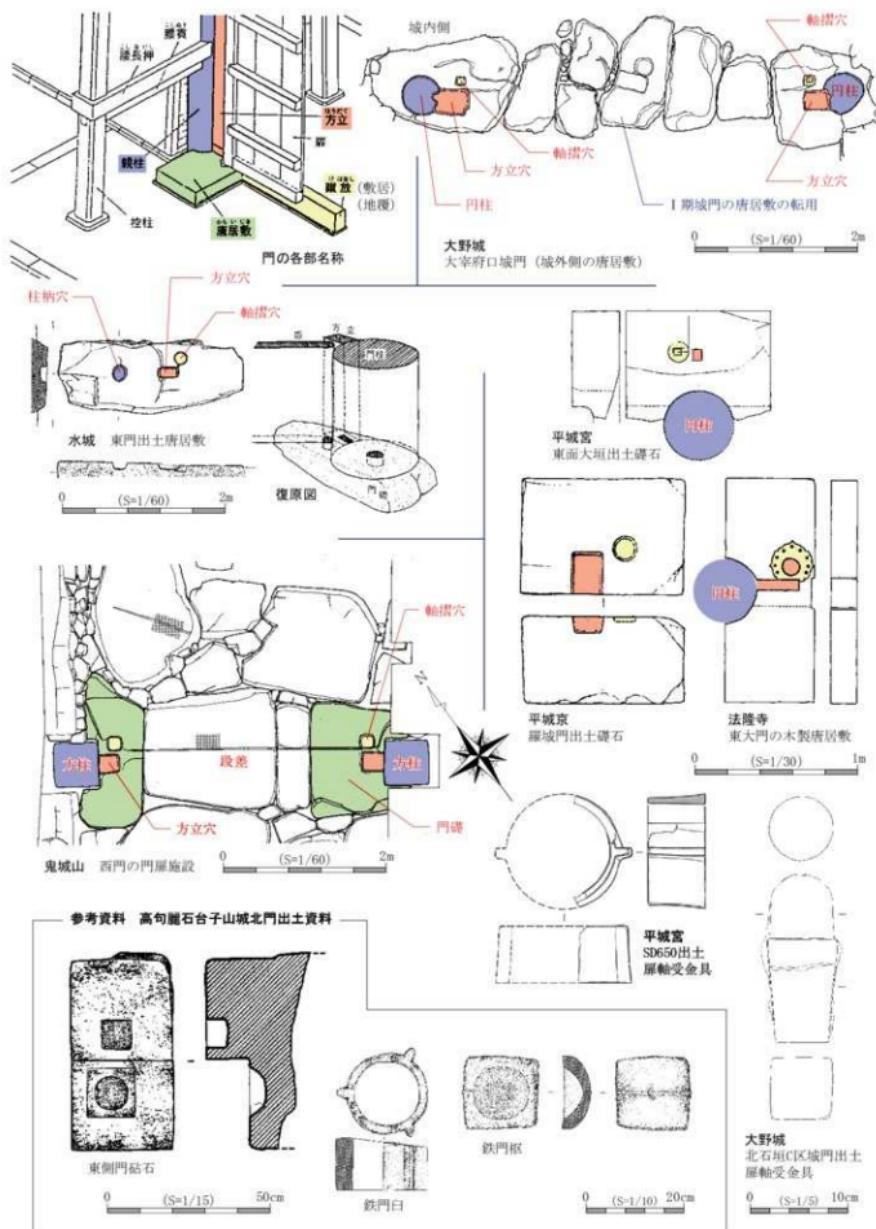


図 17 門扉施設（日本）の各部名称②

海上京城第2号宮殿東掖門・元中都宮城南門など、残存状況の良い事例からおよその構造を把握することができる。用語に関しては、既に整理した通りである。一方、日本に関しては都城門で完存した門扉施設を検出した事例ではなく、基本的には古代山城で残存状況の良い事例が確認されている。日本の古代山城は、朝鮮半島との関係性で評価される（成周繩・東勇介 1993、亀田 1995、向井 2016、井上 2017）が、城門の構造的な分析や分類（山口 2003・船田 2012）も研究が進展している。大野城（福岡県教育委員会 1991・2010）、鬼城山（岡山県総社市教育委員会 2005・2006）など門扉施設が完存している事例もあり、大野城北石垣C区域門では、扉軸受金具も出土している（大澤 2008）。なお、古代都城・山城の門の扉口開閉装置としての唐居敷（中国都城では門砧石と呼ぶ）に関しては、図17②左上のように用語や構造を整理した向井一雄の研究が参考になる（向井 1999）。都城の事例では、平城宮東面大垣出土礎石、平城京羅城門出土礎石が注目でき、近年では平城宮 SD650 出土金具のような以前は車軸金具と認識されていた金属製品も、高勾麗石台子山城（辽宁省文物考古研究所編 2012）の鉄門臼・門枢などの事例から、扉軸受金具と認識されるようになつた。ここでは事例の提示と用語整理のみ行つたが、今後、中国・朝鮮半島・日本列島の門扉施設の比較分析が進むことが期待される。

### 3. 中原都城（漢・唐・宋）と草原都城（遼・金・元）の門遺構

#### 3-1 漢代の都城門

##### （1）前漢長安城（図18①）

前漢長安城は、図18①左上にあるように複数の宮城を城壁（大城）が囲繞する不規則な平面配置を特徴とする。中枢は西南の未央宮で、正殿である前殿は南面し、宮門の西安門の南側には礼制建築が位置する。四方の城壁には各3門、合計12門がある。すべて一門三道形式で、東城壁門の3門のみ門前左右に突出部を有する。門道幅は6mほどで共通するが、隔壁幅に規模の差異が見られ、未央宮の宮門：西安門、長楽宮の宮門：霸城門の2門（城門幅52m）が他門（城門幅32m）に比べて、規模が非常に大きい（劉振東 2018）。

##### 【霸城門】（図18①）（王仲殊 1957・2010）

I A(3)Q3。一門三道の過梁式門である。南門道のみが残存し、門道幅8m（排叉柱部分の2mを除くと6m）・奥行き16mを測る。南門道の南城壁内に、建物・馬道を検出している。南北門道から各20mの南北地点に、ボーリング調査で南北幅10m、東西長40mの突出遺構が確認されている。実測図にある通り、南門道は残りが良い。門道左右に不定形な礎石（土襯石）を置き、その上に断面長方形の木製地覆を設置する。さらに、木製地覆の上には直径約30cmの円柱（排叉柱）を並べている。排叉柱は過梁を支え、その上部に版築がなされ、門楼が存在したと推定されている。南門道は王莽末年の戦火で消失、以後、使用されなかった。

##### 【西安門】（図18①）（王仲殊 1957・2010）

I A(3)。一門三道の過梁式門である。中門道・東門道が残存しており、幅・奥行きは霸城門南門道とはほぼ同じである。隔壁幅は14mで、城壁内側に建物を検出している。東門道下層では、埠積の排水暗渠を検出した。中門道・東門道は、王莽末年の戦火で消失した後、修築され唐代まで使用された。

##### 【宣平門】（図18②）（王仲殊 1958・2010）

I A(3)Q3。一門三道の過梁式門である。門道幅は約8mで、両側の排叉柱部分の2mを除くと約6mを測る。隔壁幅は約4mで、城門全体の幅が約32m、奥行きは城壁幅と同じで16mを測る。南北門道からそれぞれ南北17mの地点で、外側に突出する構造を特徴とする。突出部は南北幅25m、東西長35mを測る。宣平門は、王莽末年に消失して後漢初期に再建、さらに十六国後趙の時期に改築され、唐代まで使用された。

##### 【直城門】（図18②）（王仲殊 1957・中国社会科学院考古研究所汉長安城工作队 2009）

I A(3)。一門三道の過梁式門である。中門道・南門道の幅・奥行きは、霸城門南門道とほぼ同じで、排叉柱基底部が残存していた。中門道・北門道の西端で門限石を検出している。特に中門道の地面は平滑で使用痕跡が少なく、皇帝らが使用する「馳道」とされる。南門道下層では、前漢期の埠積排水暗渠を検出した。中門道・南門道は王莽末年の戦火で消失した後は使用されず、北門道のみ規模を減じて隋代まで使用された。北門道下層では、石版を用いて後漢以降に修築された排水暗渠も検出している。なお、城門の排水施設に関

しては、長安城全体の水利施設の系統的位置付けも行われている（[張建峰 2016](#)）。

## （2）後漢洛陽城

後漢洛陽城に関しては、城門が基本的には魏晉南北朝期に継続的に使用されているため、次節で整理する。

### 3-2 魏晉南北朝期の都城門

#### （1）曹魏・西晋・北魏洛陽城（[図 19 ①](#)）

後漢～西晋の大城、すなわち北魏の内城に関しては、後漢～西晋期に南壁4門、東西壁各3門、北壁2門の合計12門があり、北魏期には西壁に西陽門・承明門の2門が新設された。その中で北壁の大夏門がボーリング調査で三門道と確認されているが、発掘調査で構造が確認されているのは東壁の建春門、西壁の西陽門に限られる。一方、北魏宣武帝の時期に整備された外郭城に関しては、ボーリング調査によって北壁2か所、東西壁3か所で城門が確認されているが、外郭城門は簡単な建物構造だったと想定されている。後漢の北宮跡地に造営された曹魏・西晋・北魏の宮城に関しては、近年のボーリング調査で司馬門以外は有關と確認されており（[図 19 ①右下](#)）、その中で宮城正門の闕闌門が全面発掘されている（[钱国祥 2018](#)）。

#### 【建春門】（[図 19 ②](#)）（中国社会科学院考古研究所洛阳汉魏故城工作队 1988）

I B (3)。一門三道の過梁式門である。城門の南北幅30m、東西奥行き12.3mを測る。中門道のみ幅が広く8m、南北門道は6mで隔壁は4-5mである。門道左右には排叉柱を支えた礎石の抜き取り痕跡が確認でき、1列8個の礎石があったと推定される。門道や外よりに門限石の抜き取り痕跡も確認できる。北門道下層には排水暗渠も存在する。後漢・魏晋・北魏と使用され続けた城門と考えられている。

#### 【西陽門】（[図 19 ②](#)）（[钱国祥 2018](#)）

I B ? (3)。一門三道の過梁式門である。城門の南北幅26m、東西奥行き12.5mを測る。残存状況が悪く、墩台と隔壁が残存するのみだが、北門道下層には埠積排水暗渠が確認されている。なお、前漢長安城の城門では墩台が発達していなかったのに対して、漢魏洛陽城の内城（大城）門では、城壁幅よりも墩台奥行きが大きく、城門の建物が大型化している点も重要である。

#### 【闕闌門】（[図 19 ②](#)）（中国社会科学院考古研究所洛阳古城队 2003）

II A (3)Q4。一門三道、双出闕形式の大型殿堂式門である。城門の版築基壇は、城壁よりも内側（北側）に位置しており、東西44.5m・南北24.4mを測る。基壇上には桁行7間・梁行4間（桁行方向の柱間は、中門道の6m以外は5.7m、梁行方向の柱間は、南から5.7m・3.5m・3.5m・5.7m）の礎石建物が確認でき、東西墩台（南北約19.5m×東西約6.8m）および中央2つの隔壁（南北約8.8m×東西約6.9m）に挟まれた三門道の重層殿堂式門と推定される。三門道は幅約4.8m・奥行き約8.7mで、隔壁南端の門道礎石間に門限石の痕跡が認められる。基壇南北に3か所、東西に1か所のスロープが取り付く。城門の南側の東西には、東西闕が位置し、両者の間隔は41.5m、それぞれの闕は29m四方の規模で母闕と2つの子闕で構成され、曲尺形の双出闕形式となっている。双闕東西は宮壁に接続し、北側は版築壁によって城門の東西墩台と接続する。なお、未報告ではあるが、闕闌門北側の2・3号門は闕闌門と同規模の無闕殿堂式門、宮城西壁の神虎門は桁行5間・梁行2間の有闕式殿堂式門である点が、近年の発掘調査で判明している。

#### 【参考：北魏洛陽城永寧寺南門・西門】（[図 19 ③](#)）（中国社会科学院考古研究所洛阳汉魏城队 1995・中国社会科学院考古研究所 1996b）

北魏洛陽城内では永寧寺の南門・西門が発掘されており、参考資料として提示した。『洛陽伽藍記』あるいは『水經注』に記載される高さ90丈・九層木塔や太極殿と形が共通する仏殿などで知られる皇家寺院（[钱国祥 2017](#)）である。南門基壇は東西約31.8m・南北約13.8mの長方形、西門基壇は東西24-30m・南北18.2mの凸形を呈し、ともに桁行7間・梁行2間の三門道殿堂式門（II A(3)式）と推定されている。北魏の皇家寺院に、宮城門と同じ殿堂式門が採用されている点は重要である。

#### （2）東魏北齊鄆城（[図 20](#)）

534年に北魏が東魏・西魏に分裂すると、東魏孝静帝は鄆城に遷都した。曹魏十六国の鄆北城（[徐光冀 1993](#)）の南に、「東西6里、南北8里60歩」の規模で洛陽城を模倣し、住民と建築材料を移動して鄆南城が

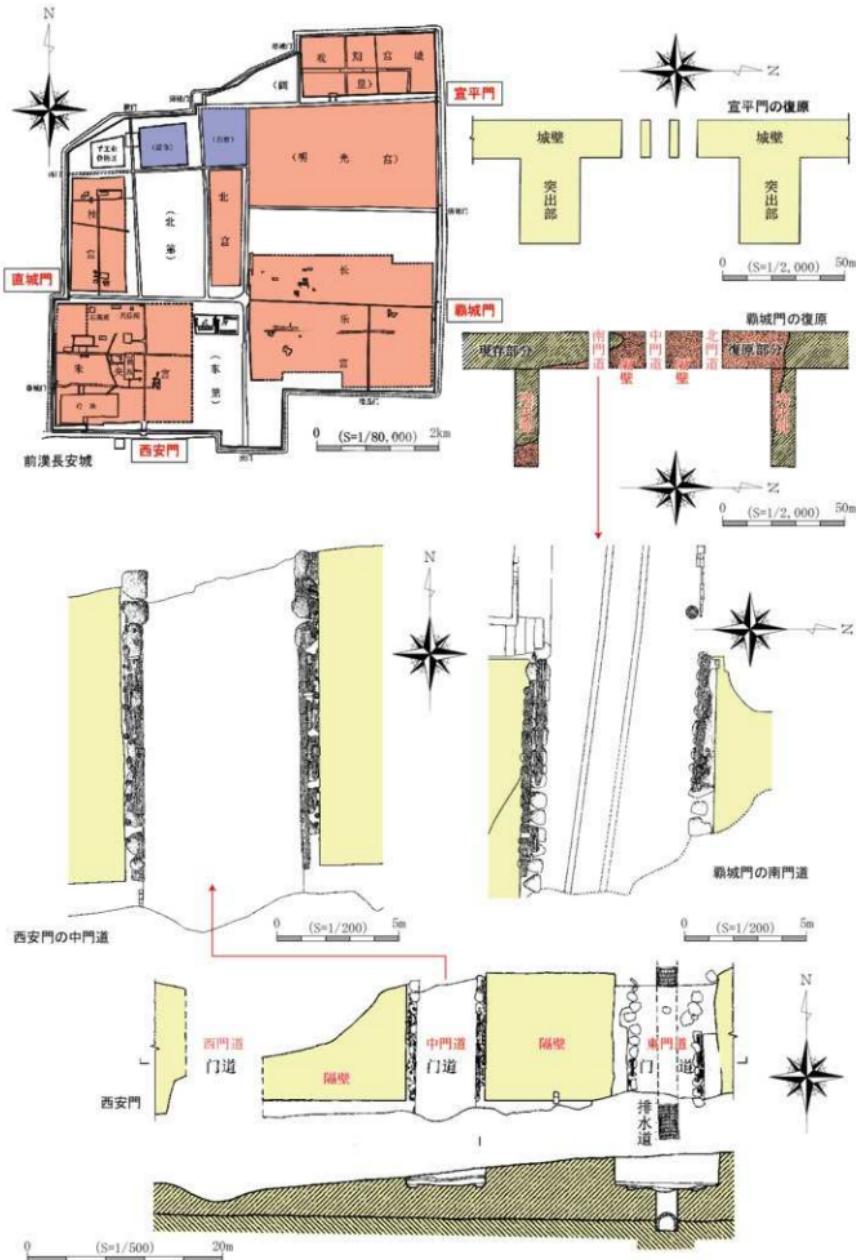


図 18 前漢長安城の城門①

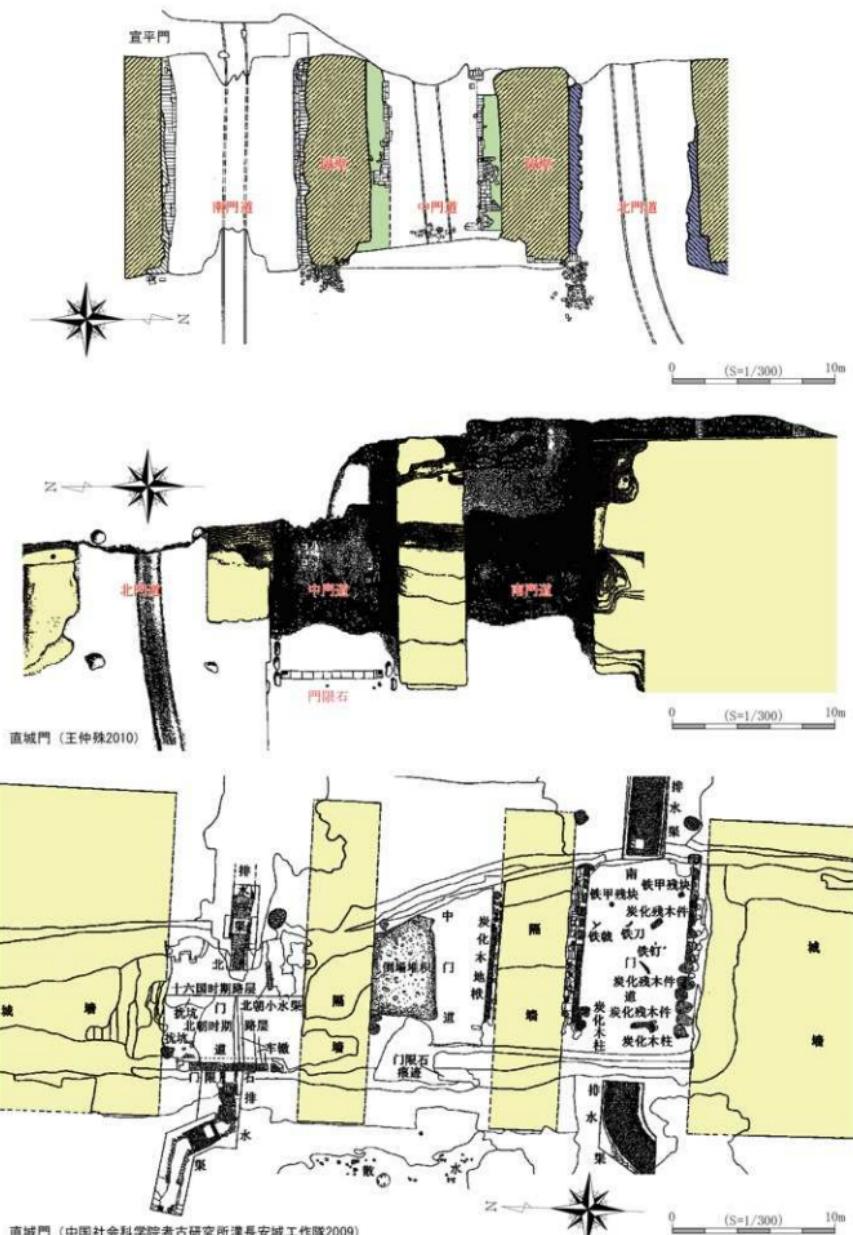


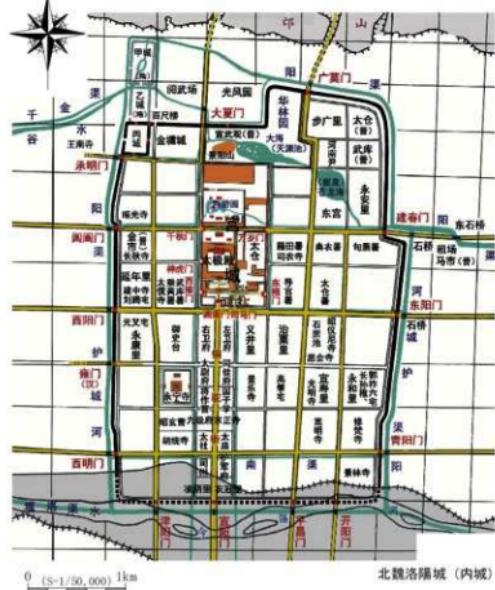
図18 前漢長安城の城門②

唐代都城の空間構造とその展開



北魏洛陽城（外郭城）

0 (S=1/80,000) 2km



北魏洛陽城（内城）



図 19 漢魏洛陽城の城門①

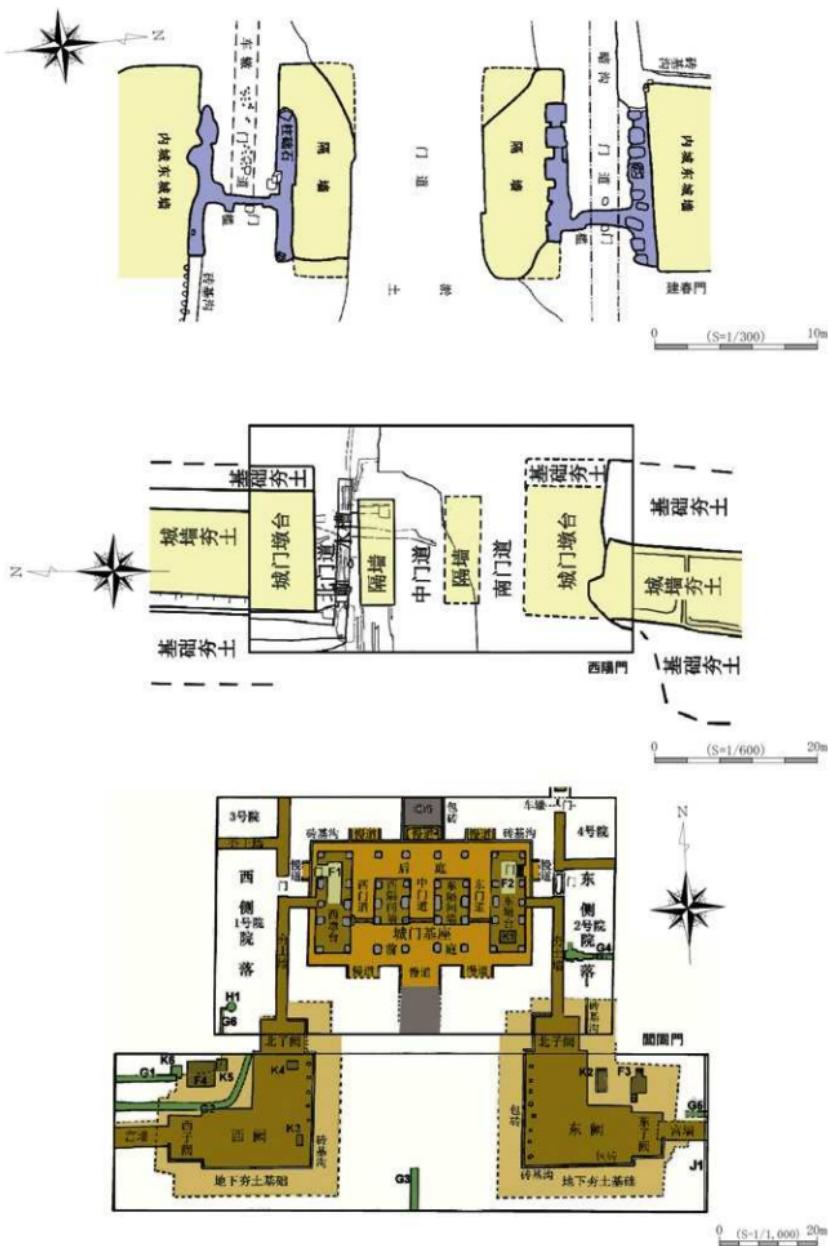


図 19 漢魏洛陽城の城門②

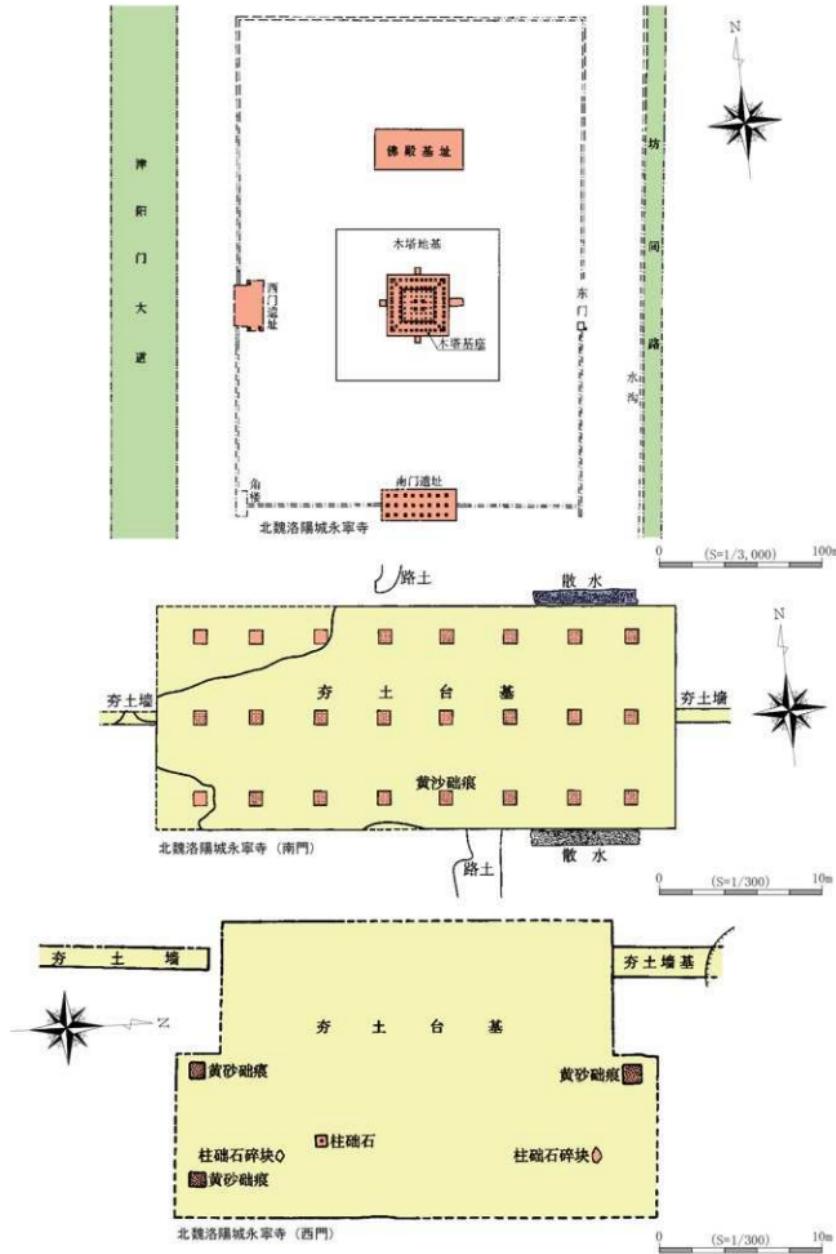
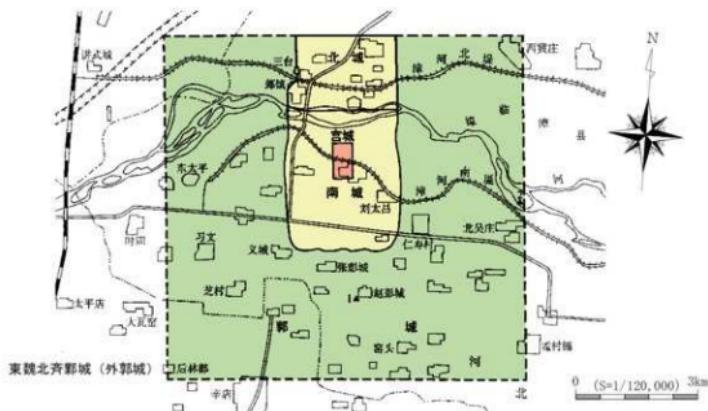
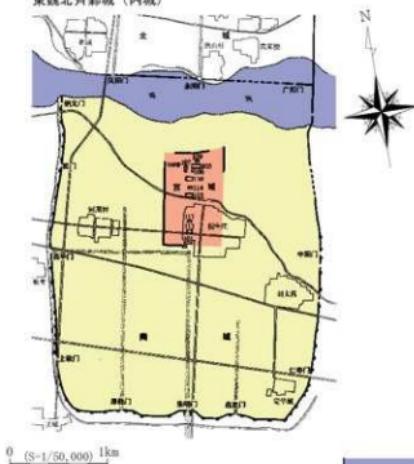


図 19 漢魏洛陽城の城門③



東魏北齊鄆城（外郭城）



0 (S=1/50,000) 1km

東魏北齊鄆城（宮城復原）

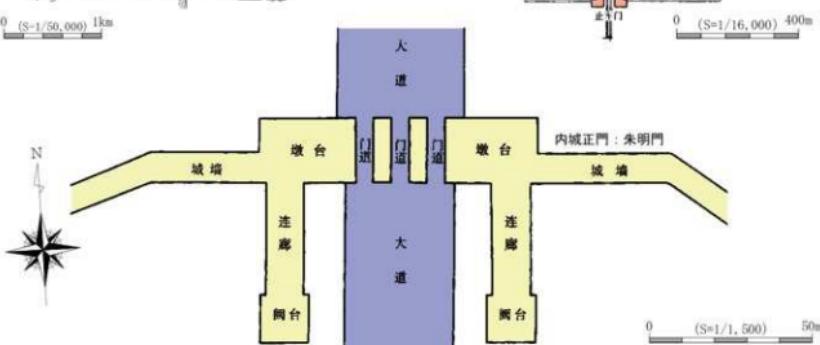


図20 東魏北齊鄆城の城門

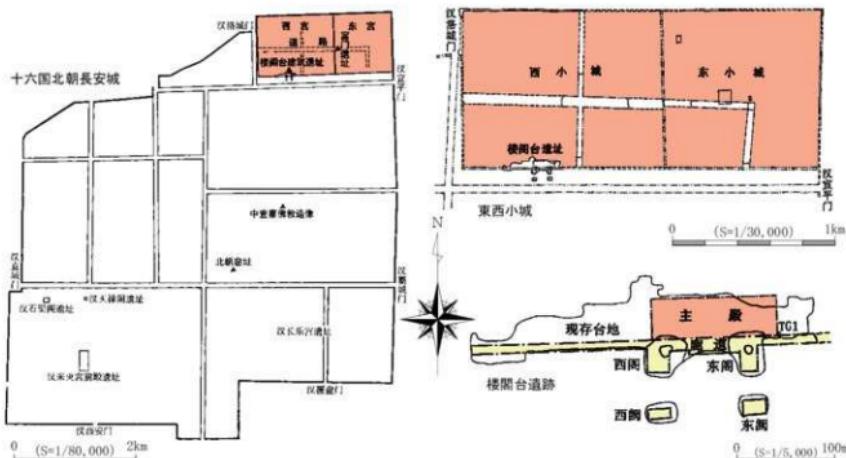


図 21 十六国北朝長安城の樓閣台遺跡

造営された。城門は北城南壁にあたる北側に3門、東西壁各4門、南壁3門の合計14門とされ、内城正門の朱明門のみ発掘調査されている。外郭城門は様相不明だが、宮城に関しては文献史料とボーリング調査によって、城門の名称と配置がある程度復原されている（徐光翼 2002・中国社会科学院考古研究所、河北省文物研究所鄭城考古工作隊 2003・中国科学院考古研究所等 2014）。

**【朱明門】**（図 20）（中国社会科学院考古研究所、河北省文物研究所鄭城考古工作隊 1996）

I B(3)Q3。一門三道、連体式双闕を有する過梁式門である。北魏洛陽城宮城正門：闕闔門とは異なり、城門が城壁上に位置し、墩台から闕が前面に突出する点が特徴である。東西墩台（東西 28.5m × 南北 20.3m）、2つの隔壁（幅 6m）に挟まれた中門道（幅 5.4m）・東西門道（幅 4.8m）の三門道形式である。東西墩台から幅約 12.2m、長さ 31m の飛廊が南に伸びており、約 14.8m 四方の闕台に接続する。両飛廊の距離は、約 56.5m で前述した北魏闕闔門よりも広い門前空間となっている。各門道の実測図が公表されていないため、詳細は不明だが、各門道左右には排叉柱を支える礎石の痕跡が検出されている。

**（3）北周長安城**（図 21）

前漢長安城の東北部では、ボーリング調査によって、十六国（前趙・前秦・後秦）～北朝（西魏・北周）の宮城遺跡が検出され、部分的に発掘調査が実施されている。宮城は東西小城に分かれているが、両者を隔絶する南北城壁中央に宮門（2号建築遺構）、西小城南壁上に樓閣台遺跡が確認されている。

**【宮門遺跡】**（図なし）（劉振東 2010）

I B(1)。発掘調査で、一門道と南北の壁体を検出している。特に北壁の残存状態が良好である。西側部分では壁体の外装塗が残存しており、中央にホゾ穴の穿たれた方形礎石が4つ検出された。礎石上には断面方形の排叉柱が立てられた痕跡を示す「柱槽」（壁体外装塗積の凹み）が確認できる。その他、8つの礎石抜き取り痕跡がみられ、東西各12個の礎石が南北壁で対応し、西から7個目の礎石想定位置に門限石の抜き取りが認められる。門道の南北幅 4.4–4.6m、東西長 13.2–13.3m に復原されている。

**【樓閣台建築遺跡】**（図 21）（中国社会科学院考古研究所漢長安城工作隊 2008）

西小城の南城壁、やや西寄りに位置する。独立した両闕、東西闕とそれを繋ぐ廊道、主殿で構成される。両闕間の距離は 74m で、西闕（東西 32m × 南北 20m、高さ 5.4m）、東闕（東西 28m × 南北 22m、高さ 6m）を測る。両闕は両闕の位置と対応し、西闕（東西 22m × 南北 34m、西闕まで 36m）、東闕（東西 18m × 南北 36m、東闕まで 30m）を測る。廊道は両闕よりも低い位置にあり、東西長 72m、南北幅 12–16m を測る。東西闕・東西闕・

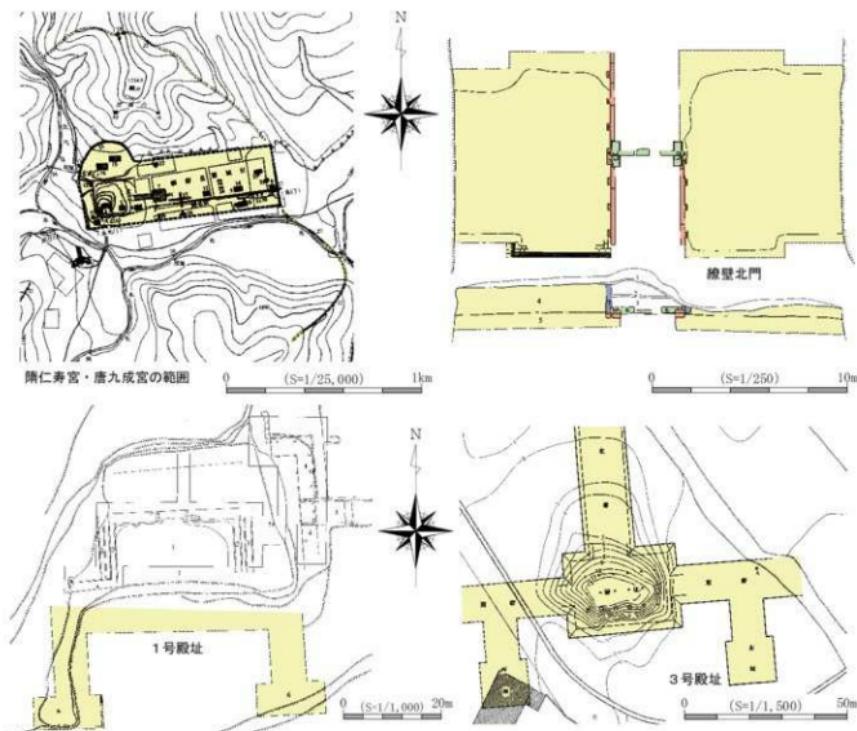


図22 隋仁寿宮・唐九成宮の城門

廊道で囲繞された部分は、広場とされる。その北側に東西長128m、南北幅41mを測る主殿が検出されている。ボーリング調査に基づく成果ではあるが、報告では、東宮は太子宮、西宮は皇后宮で、西宮の樓閣台遺跡は、前・後秦の太極前殿、北周期の「路寝」であり、両闕間の広場を「路門」と想定している。

### 3-3 唐～宋代の都城門

#### (1) 隋仁寿宮・唐九成宮（図22）

隋文帝、593年に造営が始まり、595年に完成した隋仁寿宮は、大興城・洛陽城の設計者としても著名な宇文愬によって設計された離宮である。文帝が避暑地として年間半分以上を過ごしたため、当時の政治の中核となつた。隋末に一時荒廃したが、唐太宗が修復して九成宮と改称し、高宗も離宮として利用した。宮城は東西約1km・南北約500mほどで、西側の天台山上に1号宮殿、すなわち仁寿宮が位置する。左右闕を有する特殊な1号宮殿に対して、宮城西南側の3号宮殿も同じ構造を持つ。なお、宮城外側には縁壁と呼ばれる外城壁が囲繞するが、北門が発掘調査されている。

#### 【縁壁北門】（図22）（中国社会科学院考古研究所 2008）

I B(1)。一門道の過梁式門である。東西墩台は、東西5.4m×南北10.7mを測り、外装塗が施される。墩台に挟まれた門道幅は3.76mである。門道左右には、各6個の礎石が並び、中央左右の門框石（立頬石）傍の柱を含めると、排叉柱は左右7本ずつになる。排叉柱は、左右埠積壁体の「柱槽」に痕跡として残存する。礎石間は地覆石が補填される。門框石下には門砧石があり、門道中央には門限石も残存する。北門は、隋仁

寿宮の造営時に創建され、一部修復されながら唐代まで使用された。門内東西には兵舎も検出された。

#### 【1号宮殿・3号宮殿】(図22) (中国社会科学院考古研究所 2008)

1号宮殿は、後述する唐長安城大明宮含元殿とも共通する所謂「闕式宮殿」である。主殿・左右閣・曲廊で構成される。主殿の基壇は、東西31m・南北残存長15.2mを測り、基壇周囲には隋・唐代二時期の雨落溝がめぐる。唐代は若干規模が縮小されている。前面左右の闇の残存状況は悪いが、東西14m・南北7m以上に復原されている。基壇東側には、基壇を囲繞する形の曲廊遺構が検出されている。一方、3号宮殿は、宮城西南側の点将台と呼ばれる高台上に位置し、主殿・飛廊・闇で構成される。主殿は東西約34m・南北約25mで北・東・西の三方向に飛廊が伸びる。基壇の周囲には残りのよい埠積外装が確認でき、主殿東北隅・東南隅には角石と呼ばれる立石が見られる。東西の飛廊はさらに南に伸び、東西約14.5m・南北約13.4mの東西闇に接続する。3号宮殿は、隋代に創建され、唐にも使用された禁苑内の大型宮殿とされる。

#### (2) 隋唐長安城 (図24①)

『隋書・地理志』によると、隋大興城は東壁（通化・春明・延興）・南壁（啓夏・明德・安化）・西壁（延平・金光・開遠）に各3門あり、北壁に光化1門あったという。『唐兩京條坊考』『唐六典』の記載から、唐代には北壁にも光化・華林（芳林）・興安の3門があったとされ、合計12門と想定される。外郭城門は、明徳門以外は三門道である。発掘成果が報告されているのは、明徳門・興安門のみである。その他、皇城・太極宮・大明宮・興慶宮の門号が整理されている（李春林2001）が、発掘報告されているのは、皇城の含光門、大明宮の丹鳳門（+含元殿）・含耀門・銀漢門・内重門・玄武門・重玄門、興慶宮の勤政殿本楼である。

#### 【興慶宮謹政務本樓】(図23) (馬得志 1959)

興慶宮南壁は、大明宮北壁と同じ夾城の構造を呈し、内側の城壁上に1号建築、すなわち勤政務本楼が位置する。西城壁から東へ125mの距離にあり、一門道の殿堂式門II A(1)である。勤政務本楼は城門建築でありながら、玄宗が政務をとった興慶宮の主殿とされる。長方形の基壇上には、桁行5間・梁行3間の礎石建物があり、東西各2間分が宮城壁と接続している。中央の門道幅は4.9mで、門道左右の城壁に接する場所で各8個の礎石がある。城門自体は殿堂式でありながら、中央門道は過梁構造を持つ特殊な形式である。門道には2つの門扉施設と車両の轍痕跡が確認されている。

#### 【明徳門】(図24①) (中国社会科学院考古研究所西安工作隊 1974)

I B(5)。外郭城正門、五門道の過梁式門である。城門幅55.5m・奥行き17.5mを測る。門道幅は5m、奥行きは外装塗を含めると18.5m、隔壁幅2.9mである。門道左右には、各列15個の礎石が並んでいたと想定されるが、全て抜き取られている。東側の3門道の中央部には、門扉施設が確認されている。特に中門道では彫刻された門檻石が検出された。城門内側の西側部分では、馬道と思われる遺構を検出している。なお、2018年の東城壁の発掘調査では、塼柱が検出されなかったという（美國強2018）。また、城門の南に幅3mの東西溝を検出し、溝内から石亀が発見された。さらに、門前東西には建物の痕跡（門侯の詰所か）、隔壁北側には各2個の水甕も検出された。城門は「左入右出」を基本とするが、両端2門道は車馬、内側の2門道は人が出入り、前述した精緻な彫刻門扉施設が示すように、中門道は皇帝が使用する馳道とされる。

#### 【含耀門】(図24①) (中国社会科学院考古研究所西安唐城工作隊 1988)

I B(2)。二門道の過梁式門で、大明宮の第2宮壁、宣政門の東側に位置する宮門である。城門幅は26.4m、奥行き12.5mを測る。東西墩台（幅6.2m）、隔壁（幅3.9m）、東門道（幅5.15m）、西門道（4.95m）で構成される。門道左右には排叉柱の礎石が各9個想定されており、芯々距離は約1m。北から3番目の礎石の位置に、門扉の痕跡が残る。東西墩台は宮壁と接続し、東西墩台より6mの地点で、幅4.5mの版築壁が南側に伸びる。城門南外は両壁に挟まれた東西約40mの閉鎖的な南北道路となる。

#### 【丹鳳門】(図24①) (中国社会科学院考古研究所西安唐城工作隊 2006)

I B(5)。大明宮正門、五門道の過梁式門である。城門幅74.5m・奥行き33mを測る。東西墩台（突出部を左右外側に向ける凸字形）。西墩台は南北最大24.1m・東西最大14.7m)、5門道（幅9.4m）、4隔壁（幅3m）で構成される。門道左右には、各列16-19個の礎石の据付・抜取痕跡が認められ、いくつかの礎石は原位置に残存する。門道の東西中軸線から南2mに、門扉の痕跡が認められる。西側3門道では、立頬石・門砧石

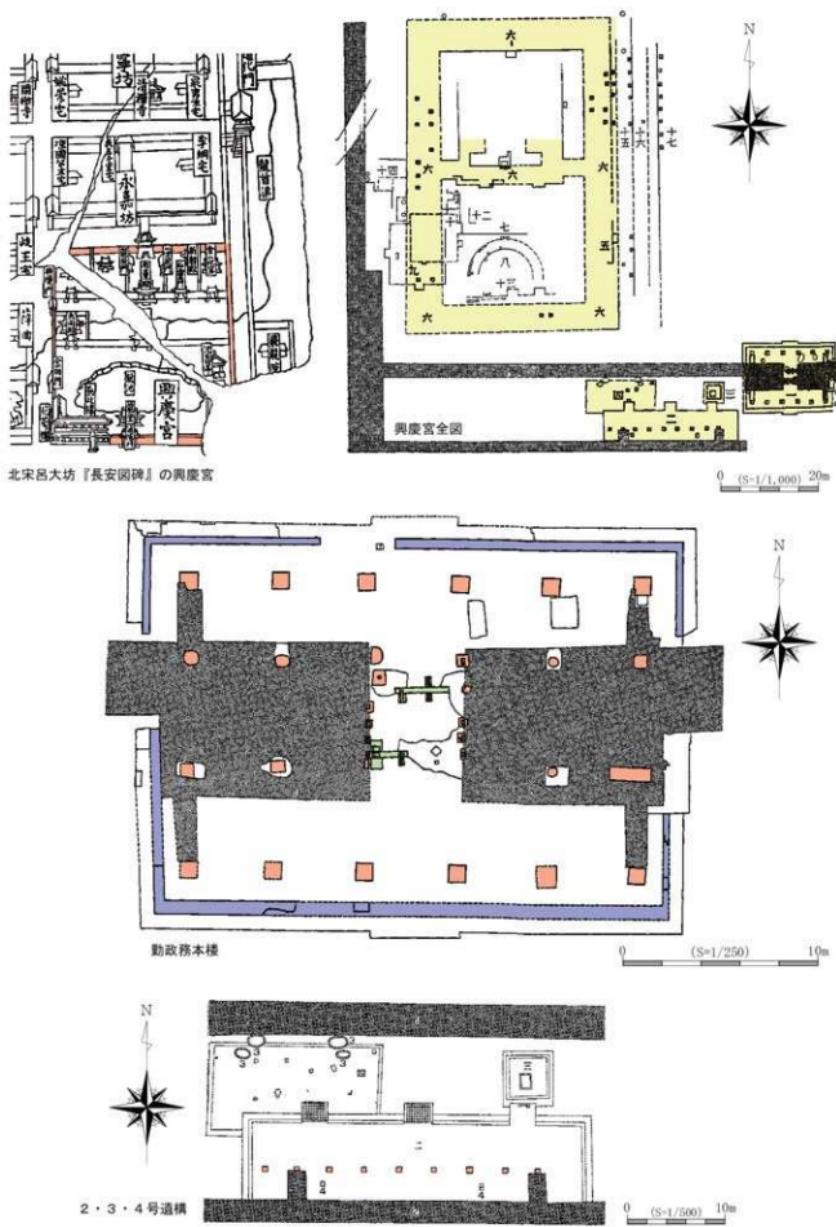


図 23 唐長安城興慶宮の遺構

が残る。東西城壁の内側には、馬道（西馬道：東西 54m × 南北 3.5m）は検出したが、塹壕は存在しない。

#### 【含光門】(図 24 ②) (中国社会科学院考古研究所西安唐城工作隊 1987)

I B(3)。皇城南壁西門、三門道の過梁式門である。城門は東西 37.4m、南北 19.6m を測る。発掘では西・中門道を唐代の遺構面まで検出し、東門道は北宋の遺構面（唐末の消失後、東門道のみ修築・使用された）で保護している。西門道（幅 5.35m）、中門道（幅 5.72m）、東門道（5.35m）で、隔壁は幅 3.07m を測る。門道左右には、各 15 個の礎石が並ぶ。礎石上の排叉柱の中で、火災により炭化して残存する個体があり、28 × 22cm ほどである。排叉柱の間は、埠積が施され、外面には漆喰が塗布される。排叉柱の「柱槽」からすると、南北両端の柱が最も内向きに傾斜しており、中心に近いほど垂直に近く、中間の 5 本はほぼ直立する。門道中央に門扉施設が残存し、左右に門砧石・立頬石、その間に門限石が残存する。西門道には車道石も残る。門道は北側から南側に向けて 26cm 低くなっている、城内から城外への排水を考慮した設計とされる。

#### 【興安門】(図 24 ②) (中国社会科学院考古研究所西安唐城工作隊 2014)

I B(3 → 2)。外郭城北壁東門、三門道から二門道に改築された過梁式門である。早期門は、東西 39m、南北 20m、門道幅 5.4–5.9m を測る。西門道と西隔壁が、晩期には西塹台として改築されている。晩期門は、東西 27.9m、南北 18.9m を測る。東西塹台幅 6.8m、東西門道幅 5.85m、隔壁幅 3m を測る。門道左右には方形礎石が並び、南から 7.6m の位置に門扉施設が確認できる。東西城壁は、西内苑東壁・大明宮西壁と接続する。東城壁北側には、馬道（東西 21.4m × 南北 3.8m）が検出されている。興安門は、隋大興城造営当時は北外郭城門として三門道で創建されたものの、大明宮造営に伴って「大明宮南城壁 5 門の 1 つ」となり、含龍門・昭慶門と同じ「一門二道」の宮門に機能が変化したと考えられている。

#### 【銀漢門・玄武門・内重門・重玄門】(図 24 ②③④) (中国科学院考古研究所 1959)

銀漢門は、大明宮北壁東門で、門楼が存在しない特殊な門遺構とされる。宮城北城壁に挟まれた幅 2.2m の空間に、壁面を埠積み、路面を敷壇する。中心の石壘部分、および北端、南端に門扉施設が想定される。

玄武門 I B(1) は、大明宮北面正門、1 門道の過梁式門である。城門は、東西 34.2m、南北 16.4m を測る。門道幅は約 5m で、左右には排叉柱の礎石が並んでいたと推定されるが、残存するのは東壁の南北端の礎石のみである。中央付近に門檻石が残存し、車轍痕跡も確認できる。玄武門の東西には幅 2m の版築壁が南に伸び、内重門に接続する。両門に囲まれた空間は、東西 57.5m、南北 27m である。

内重門 II C(1) は、玄武門の南 20m に位置し、玄武門と一体となる門である。報告では、「平房穿堂門」と呼称されるが、ここでは小型の殿堂式門（II C）の範疇で整理しておく。東西 15.6m、南北 11.5m を測り、基壇版築を持たず、周囲には敷壇による雨落溝がめぐる。南北には、雨落溝から 0.6m 突出する埠敷スロープが取り付く。門建築は特殊な形式で、東西城壁が中央に接続し、桁行 3 間・梁行 2 間の礎石建物が想定できる。報告者は、興慶宮勤務本楼との共通性を指摘する。

重玄門 I B(1) は、玄武門から北側 156m の夾城北壁に位置する 1 門道の過梁式門である。城門は、東西 33.6m、南北 16.4m を測り、玄武門との違いは東塹台東南隅、西塹台西南隅に屈曲部を持つ点である。塹台基壇の外装壇の南北外側には、幅 0.8m の雨落溝がめぐる。門道幅は 5.2m で、門道左右には礎石が各 11 個並ぶ。排叉柱の間は、埠・石で補填され、壁面には漆喰が塗布される。南から 4・6・8 個目の礎石の位置に、門扉施設があり、特に中央には門檻石・立頬石・門砧石が完存している。なお、重玄門の東西には北側に延びる城壁、南側に延びる城壁が検出されており、玄武門～重玄門の空間が、禁軍駐屯地として宮城北方の防御の要として機能した点が推定できる。太極宮北門を舞台とした「玄武門の変」が示すように、宮城北門が防御に特化した空間として発展した点が伺われる。本論では、玄武門・内重門・重玄門の 3 つの門を宮城北門建築群として把握し、「夾城門」と呼称しておく。

#### 【含元殿】(図 24 ④) (馬得志 1961・中国社会科学院考古研究所西安唐城工作隊 1997)

II BQ4。大明宮の主殿であると同時に、外朝大典の中心的舞台空間である。殿堂、左右門、左右角樓、飛廊、兩闕、龍尾道、殿前広場、朝堂、肺石・登聞鼓などで構成される建築群の総称である。城門ではないが、太極宮正門：承天門の構造・系譜を引く關式主殿である。殿堂基壇は外装石の範囲で東西 76.8m、南北 43m、周囲に雨落溝がめぐる。基壇上には、礎石据付穴下層に 4 つの方形石を平置きした「承柱石」（清代の王森

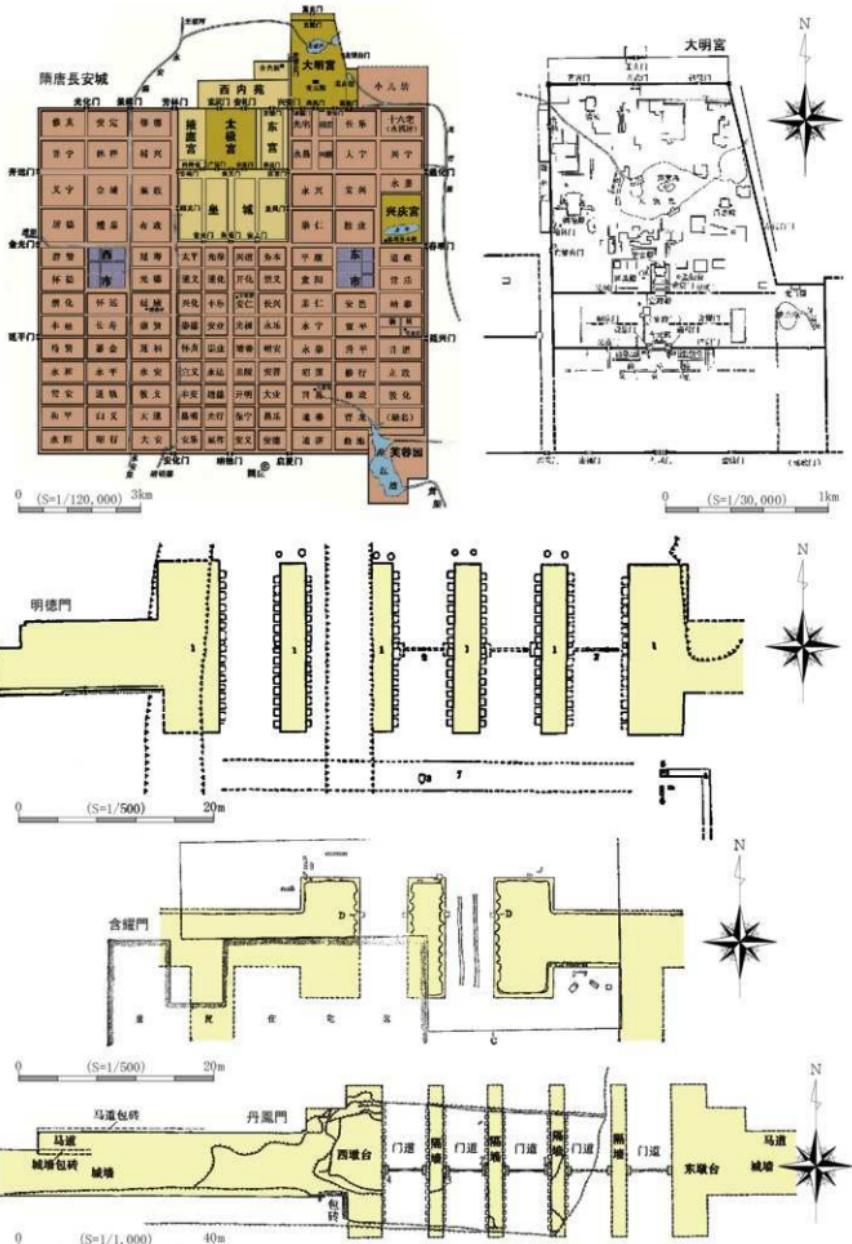


図 24 隋唐長安城の城門①

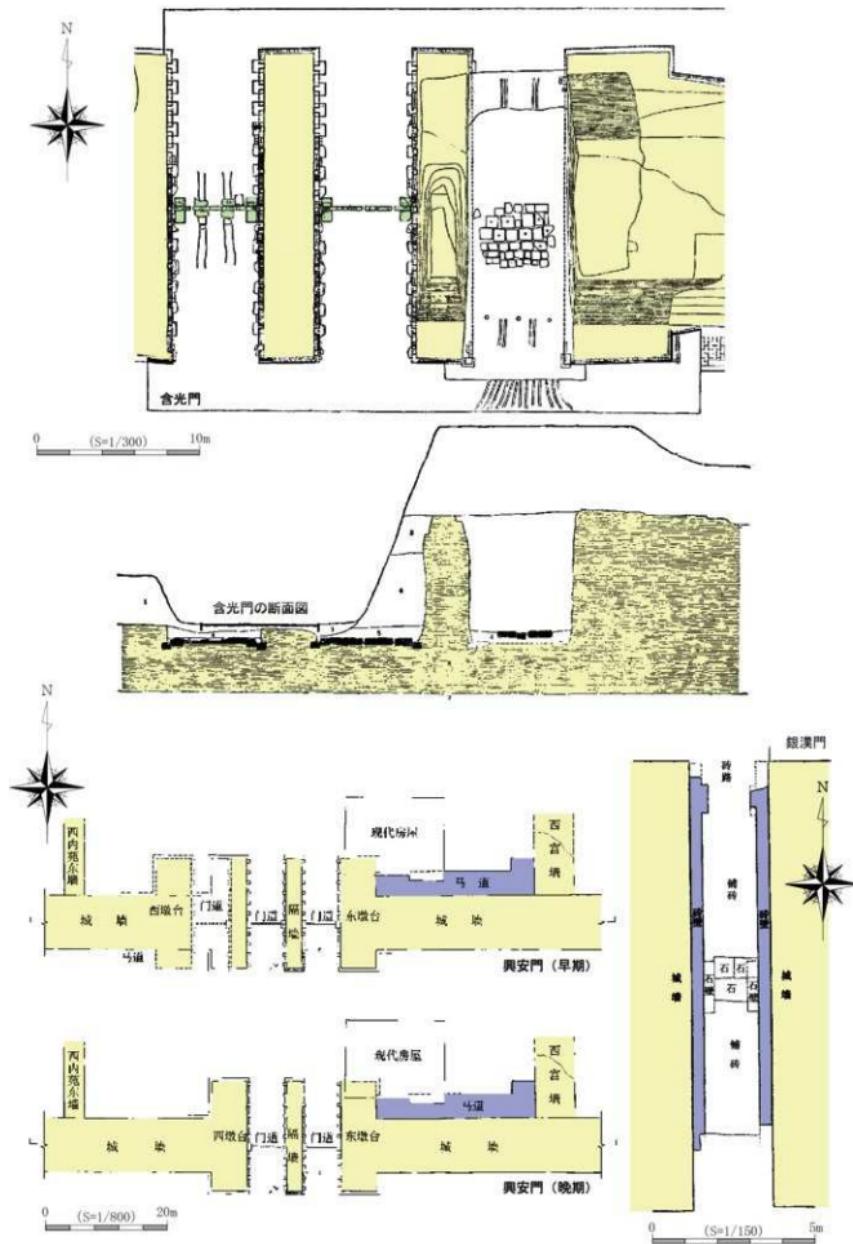


図 24 隋唐長安城の城門②

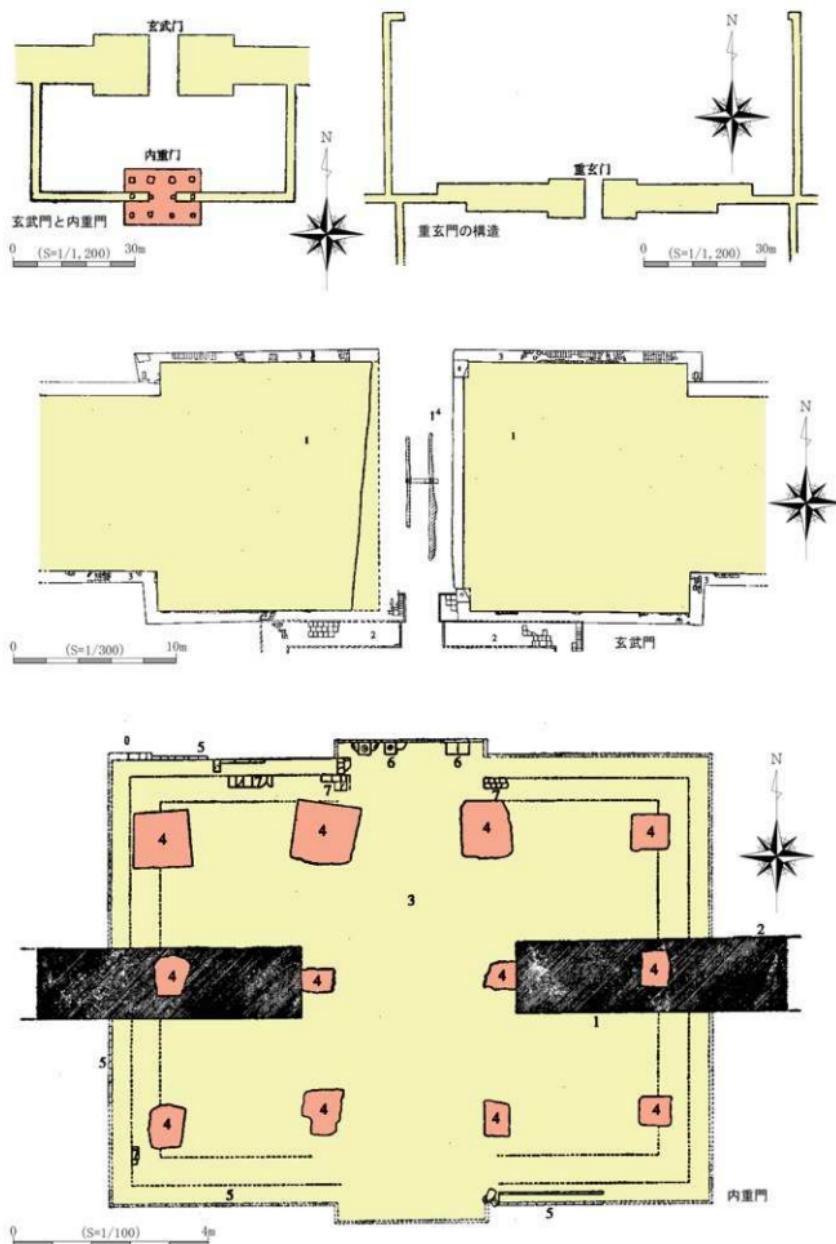


図 24 隋唐長安城の城門③

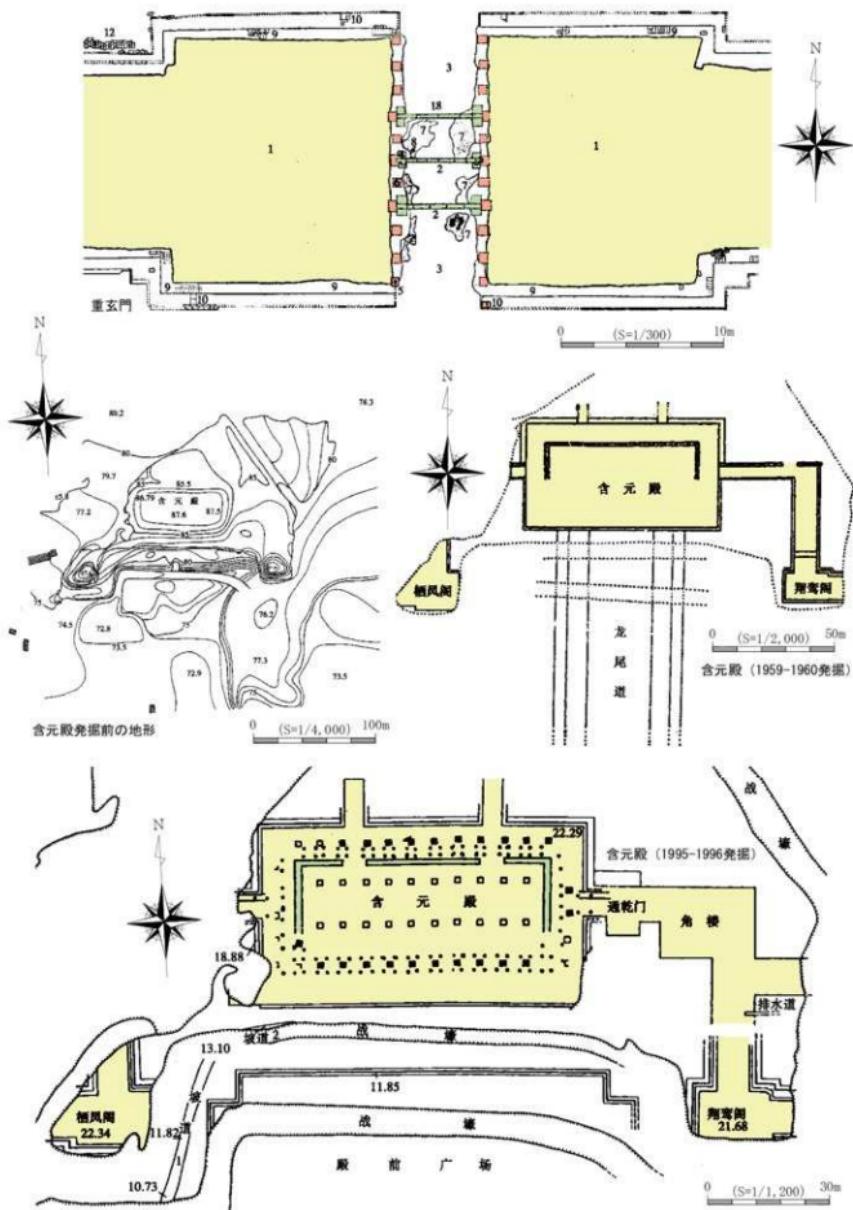
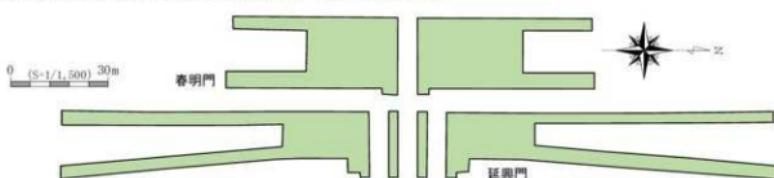
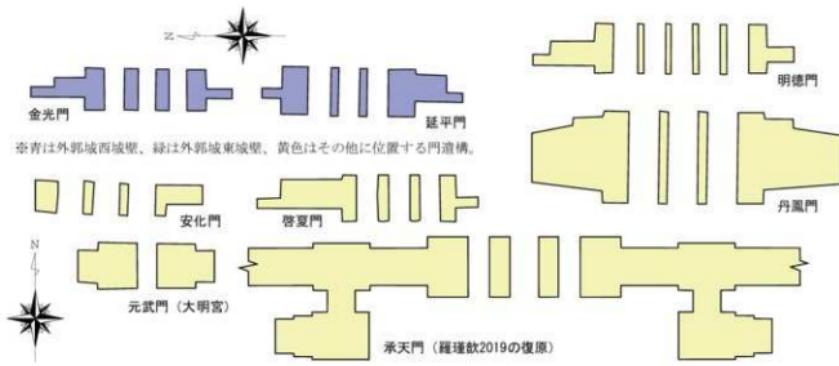


図 24 隋唐長安城の城門④



唐長安城外郭城門の規模（羅瑾欽2019）

城門名	門道数	門道幅	隔壁幅	門道と隔壁の総幅	城門棟台幅	城門奥行
明徳門（南壁中門）	5	5m	2.9m	36.6m	55.5m	18.5m
安化門（南壁西門）	3	7.2m	4m	29.6m	42.5m	10m
啓夏門（南壁東門）	—	—	—	24.67m	35m	15m
金光門（西壁中門）	3	5.2m	4.67m	24.94m	37.5m	11m
延平門（西壁南門）	3	6.7m	2.67m	25.44m	39.2m	15m
開遠門（西壁北門）	—	—	—	—	—	—
春明門（東壁中門）	1	5.33m	—	—	15m	23.6m
延興門（東壁南門）	3	6m	—	—	42m	21m
通化門（東壁北門）	3	—	—	—	—	—

唐洛陽城外郭城門の規模（羅瑾欽2019）

城門名	門道数	門道幅	隔壁幅	門道と隔壁の総幅	城門棟台幅	城門奥行
定鼎門（南壁中門）	3	5.8m	5.6m	2.86m	44.5m	21.04m
厚載門（南壁西門）	3	5.45m	—	—	—	—
長夏門（南壁東門）	3	5.25m	2.7m	21.15m	35.2m	18.5m
建春門（東壁中門）	3	5m	3m	21m	残34m	17m
永通門（東壁南門）	3	4.8m/4.95m/4.8m	3.6m/3.55m	21.7m	残29.75m	残13m

唐長安城と唐洛陽城の宮城・外郭城・大明宮における正門の規模（羅瑾欽2019）

城門名	門道数	門道幅	隔壁幅	門道と隔壁の総幅	城門棟台幅	城門奥行
承天門	≥3	6.4m/8.5m/6.2m	6.5m/6.8m	34.4m	残41m	19m
明徳門	5	5m	2.9m	36.6m	55.5m	18.5m
丹鳳門	5	9.4m	3m	59m	74.5m	33m
応天門	3	5m	5m	25m	51m	26.1m
定鼎門	3	5.8m	5.6m	28.6m	44.5m	21.04m

図24 隋唐長安城の城門⑤

文が命名／唐九成宮 37 号宮殿などでも検出されている) が存在し、その位置から柱配置が復原されている。基壇中央には、桁行 9 間(柱間 5.35m・東西両端間 5m)・梁行 1 間(柱間 9.7m) の柱痕跡(報告では「金柱」)がある。この柱痕跡の三方を围绕するように北壁(幅 1.3m)、東西壁(幅 1.5m)があり、柱と壁の芯々距離は北で 4.85m、東西で 5.3m を測る。さらに、北壁から北の檐柱列までは芯々 4.25m、金柱南列から南檐柱列までは 9.2m である。以上から、主殿は桁行 11 間(西 5.3/5.5, 3 × 7/5/5.3 東)・梁行 4 間(北 4.25/4.85/9.7/9.2 南)と表現される。基壇北側には東西 2 つのスロープがあり、基壇東西端には東の翔鸞閣・西の棲鳳閣に接続する飛廊が取り付く。

左右両閣は、母闕に 2 つの子闕が附帯する三出闕形式を呈する。『唐六典』によると、閣下には朝堂(馬得志 1987)・肺石・登聞鼓が配され、承天門の制度と共通する。残存する東側の飛廊は曲尺形を呈し、屈曲部では東西 22.4m × 南北 16.8m の角楼を検出し、主殿との間には通乾門が位置する。含元殿東西の通乾門と観象門は、皇帝が宣政殿で常朝に臨む際に文武百官が両門前に序班し入門したと言われる。通乾門の版築は、東西 7.7m × 南北 15.1m で建物構造は不明だが、1 門道と推定できる。

#### 【ボーリング調査で確認された門遺構】(図 24⑤) (陝西省文物管理委員会 1958・羅瑾歎 2019)

その他の城門として、陝西省によるボーリング調査の成果が平面形と法量で示されているのに加えて、宮城正門の承天門も復原案が提示されている。特に、承天門に関しては、明徳門・丹鳳門の発掘成果から朱雀門とともに五門道説が注目されてきた(李春林 2001)が、ボーリング調査で西墩台と 3 門道が確認されており、その法量(西門道幅 6.2m・西隔壁 6.8m・中門道 8.5m・東隔壁 6.5m・東門道 6.4m / 門道奥行き 19m)から、中央を御道とする三門道説が主流の解釈となってきた(龚国強 2018)。近年では、東都洛陽の宮城正門: 応天門の発掘成果から、左右塙樓から南に伸びた飛廊が三出闕に接続し、門前左右に朝堂・肺石・登聞鼓を配置する平面形が想定されている(罗瑾歎 2019)。

#### (3) 隋唐洛陽城 (図 25①) (中国社会科学院考古研究所 2014)

隋唐洛陽城は、外郭城・皇城・東城・含嘉倉城・宮城で構成される。文献史料の記載によると、外郭城には合計 8 門あり、南壁 3 門(厚載・定鼎・長夏)、東壁 3 門(永通・建春・上東)、北壁 2 門(安喜・徵安)である。外郭城で調査されているのは、厚載門・定鼎門・長夏門・永通門・建春門である。一方、皇城・東城・含嘉倉城・宮城では、文献史料で数多くの門が確認されているが、調査成果が公表されているのは、皇城(右掖門)、東城(宜仁門・尚書省正門)、含嘉倉城(德猷門)、宮城(応天門・長樂門・宣政門・安寧門・円壁南門・西隔壁東壁門・乾元門)の諸門である。なお、以下の整理に関しては、近年の報告書(中国社会科学院考古研究所 2014)および、各遺構の概報を参考にした。

#### 【厚載門】(図なし) (洛阳博物館通報 1960)

I B(3)。外郭城南壁西門。一門三道と推定され、礎石列を 2 列(幅 5.45m)のみ検出している。

#### 【定鼎門】(図 25①) (中国社会科学院考古研究所洛陽唐城隊・洛阳市文物工作队 2004)

I B(3)Q2。外郭城南壁正門、双塙樓を附帯する一門三道の過梁式門である。遺構は、唐代早期・中期・晚期、北宋期の 4 時期の変遷が確認されているが、創建時の構造を整理する。東墩台(東西 8m・南北 21.1m)、西墩台(東西 8m・南北 17.6m)を測り、周囲には外装塼・雨落溝がめぐる。3 門道は、左右礎石の芯々距離で 5.8m、奥行き 21m を測る。完存している西門道では、東西に排叉柱を立てる礎石が各 15 個並び、中央に行くほど密に、南北端に行くほど間隔をあけて設置されている。南北端には、撞石がある。門道中央部には、門砧石・立頸石などの門扉施設、および車道石が認められる。東西の隔壁は、幅 5.6m である。西城壁の南北幅は 4.5m で、北側に馬道が確認されている。西塙樓は東西残長 16.9m、南北残長 10.9m を測り、その西側には城壁下層に石積排水暗渠を検出している。

#### 【応天門】(図 25②) (洛阳市文物工作队 1988・中国社会科学院考古研究所洛陽唐城工作队 2007・中国社会科学院考古研究所 2014・中国社会科学院考古研究所洛陽唐城工作队・洛阳市文物考古研究院 2019)

I B(3)Q4。宮城正門、三出闕を附帯する一門三道の過梁式門である。5 回の発掘調査で、3 時期の変遷が確認されている。早期(隋: 則天門)、中期(唐高宗～武則天: 応天門)、晚期(晚唐～宋: 五鳳樓)で、特に門闕構造は大きく変遷する。城門部分(左右墩台・3 門道・2 隔壁)、東西方向の飛廊、塙樓、東西城

壁、馬道、南北方向の飛廊、三出闇で構成され、左右対称である。ここでは、中央区（城門）、東区（東飛廊・東塙樓・東城壁・東馬道・東闇）、西区（西飛廊・西塙樓・西城壁・西馬道・西闇）に分けて記載する。

中央区の復原幅は、東西 46.7m・南北 26.1m（北宋期は 54.5m・南北 26.6m に拡張される）を測る。周囲には外装石と雨落溝がめぐる。門道幅各 5m・隔壁幅各 4.5m で、門道左右には長方形の礎石がいくつか残存する。なお、北宋期の遺構としては東門道のみ残存するが、東に 3.5m 移動する大規模な修築が指摘される。

東区は東西飛廊・塙樓・馬道・南北飛廊・東闇で構成され、周囲には壁柱（合計 29 カ所確認）および外装石が見られ、その外側に雨落溝がめぐる。東西飛廊の南北幅は 16.5m 前後、塙樓は 18m 四方、南北飛廊の東西幅は 11.4m を測る。馬道は塙樓の東北側に接続している。東闇の南側は中州渠で破壊されるが、北方向、東方向、2 方向への双向三出闇形式と確認できる。東闇東西には、北宋期の小型建物が検出されている。

西区は 2010-2011 年の発掘で、詳細な変遷過程が明らかになっている。重要なのは、早期の門闇が北向きの単向三出闇形式だったのに対して、中期に北・西向きの双向三出闇形式となり、晚期に三出闇構造が完成したとされる点である。晚期には中期版築の西側に巨大な版築が増築され、版築上に柱穴・織木の痕跡が認められる。版築内の柱や横木（織木）は、版築構築時の足場や「堰板」を支えると同時に、完成後は版築内で「木筋」の役割を果たし、版築を強化したと考えられている。西区晚期の門闇構造は、東区で検出されている五代北宋期の構造と対応する。なお、晚期西闇楼の北西側には、埴積の基壇外装を持つ「碌墩」（平面 1.1-1.5m の方形を呈し、柱・礎石の重量を支えるために壺掘りした版築、石・瓦・磚の破片を粘性の高い土に混ぜ込んで版築する：磚石据付坑）建物を検出している。

#### 【右掖門】（図 25③）（中国科学院考古研究所洛阳发掘队 1961）

I B(3)。皇城南壁西門、一門三道の過梁式門である。左右墩台を含む範囲は、東西 36m × 南北 17.5m を測り、周囲には外装塙と雨落溝がめぐる。東西の隔壁幅は、ともに 3m である。東門道東壁、西門道西壁の残存状況が良好である。各門道幅は 5m、奥行き 17.5m を測り、東門道東壁では 13 個の方形礎石、北端に撞石が残存する。礎石中央のホゾ穴は、中央付近で垂直なのにに対して、南北端に行くほど中央に向けて角度を持つ。礎石上に残る排叉柱は断面円形で、排叉柱間を埋めた埴積壁が西門道西壁で残存している。東西門道の中央、南北端から 7 個目の礎石部分に、門砧石・立頬石・門限石・車道石の門扉施設（内開き）が完存している。東門道の南端では、炭化した長さ 3.75m・幅 1.75m の木製扉が検出されている。

#### 【永通門】（図 25③）（中国社会科学院考古研究所洛阳唐城队・洛阳市文物工作队 1997）

I B(3)。外郭城東壁南門、一門三道の過梁式門である。東側が近代の水渠で破壊されており、西側にも大きな擾乱坑があるため、全体規模は不明だが、門道・隔壁の構造は把握できる。南北門道幅 4.8m、中門道幅 4.95m、南北隔壁幅 3.6m を測る。門道左右には長方形の礎石が並び、ホゾ穴同士の間隔は 1.4-1.6m を測る。ホゾ穴は中央に行くほど垂直で、東西端に行くほど中央に向けて角度を持つ。内壁の柱槽と礎石上の排叉柱の痕跡からすると、柱の半分ほどが内壁部分に露出していたとされ、壁面には漆喰が塗布されていた。門道中央には、門砧石・立頬石・門限石・将軍石などの門扉施設が確認されている。門砧石の門軸の位置から、西側に閉鎖した（内開き）点がわかる。南北門道には、車轍痕跡が顕著に認められる。

#### 【長夏門】（図 25③）（中国社会科学院考古研究所 2014）

I B(3)。外郭城南壁東門、一門三道の過梁式門である。部分的な発掘調査から、唐代早期・晚期、北宋期の 3 時期が推定されている。城門の東西幅は 34.9m で、3 門道の幅は礎石抜取坑の中心距離で各 5.25m、隔壁の幅は各 2.7m を測る。

#### 【徳猷門】（図 25④）（洛阳博物馆 1981）

I B(1)。含嘉倉城北壁門、單門道の過梁式門である。城壁南北幅 = 門道の奥行き = 17m、2 時期の変遷が確認されている。下層は門道北部分を調査しており、東西各 5 カ所の方埠上に柱痕跡を確認し、門道幅は 2.9m に復原される。上層は 20-40cm ほどの黄土を充填して門道両側に各 6 個、後に 10 個の礎石を設置している。門道中央部には門扉施設の痕跡があり、路面には車轍痕が検出されている。

#### 【宮城西隔城東壁門】（図 25④）（中国社会科学院考古研究所洛阳工作队 1978）

宮城西隔城東壁では、東壁を利用した「廊房」と呼ばれる建物遺構を 7 基検出しており、3 号房部分で簡

単な門道が確認されている。幅は 1.58m で、西側に門扉の一部と思われる木炭が検出されている。

#### 【宣仁門】(図 25④) (中国社会科学院考古研究所洛阳唐城隊 2000)

I C(3)。東城東壁門、一門三道の過梁式門である。南門道、および中門道の一部が、発掘で検出された。南門道幅は左右内壁間で 5.36m、隔壁幅は 2.9m を測る。門道左右の地覆石は、土襯石の上に設置され、南北対称である。地覆石は平面長方形で、上に排叉柱を承ける長方形のホゾ穴が穿たれる。ホゾ穴相互の距離は 0.83m 間隔で、排叉柱の痕跡は断面隅丸長方形である。排叉柱間は埠塹で充填され、その壁面（内壁）には漆喰が塗布される。土襯石は、地覆石の下層に密に東西に設置されているが、内壁より路面側に 16cm ほど露出している。門砧石は、土襯石の上に直接設置されており、中央に凹状の溝（立頬石がはめ込まれる）、西側にホゾ穴（門臼）がある。ホゾ穴からは、鉄鶴台（半球形金属）が検出された。門砧石間にには門限石があり、門道中央には真ん中にホゾ穴がある將軍石が設置される。門道と門限石は、同レベルで段差はない。門砧石西側の門道左右には、扉を固定するホゾ穴がある止扉石（内開き）が門道に埋め込まれている。軸部までの距離は、約 2m を測る。地覆石の東西端には擋石が設置される。路面には 2 条の車道石が敷かれ、それ以外は敷塙されており、敷塙舗装面の南北端には止車石がある。門道には下層（隋唐）、上層（北宋）の 2 時期が認められ、このような舗装道路は後述する東城北宋門や、北宋期の揚州城の城門でも確認されている。

#### 【安寧門（重光北門】(図 25④) (中国社会科学院考古研究所洛阳唐城隊 2007)

東隔城北壁門、一門道で 4 期の変遷が確認されている。概報では重光北門と呼称されていたが、現在は安寧門と呼称される。東西墩台を含む唐代 I 期の城門は、東西 29.95m・南北 15.9m を測り、周囲には外装塙と雨落溝がめぐる。門道幅は 5.35m で、門楼の有無などは不明である。

#### 【長楽門】(図 25④) (中国社会科学院考古研究所 2014)

宮城南壁西門で、1960 年のボーリング調査で門道幅 5m、隔壁幅 4m の二門道に復原された。しかし、宮城南壁東門の明徳門がボーリング調査で三門道と判明するなど、現在は三門道の可能性が高いとされる。

#### 【建春門】(図 25⑤) (中国社会科学院考古研究所 2014)

I B(3)。外郭城東壁中門、ボーリング調査で南北墩台・隔壁を検出し、一門三道の過梁式門と推定される。門道の南北幅約 5m、隔壁の南北幅約 3m と報告されている。

#### 【崇慶門】(図 25⑤) (中国社会科学院考古研究所洛阳唐城隊 1989)

I B(1)。宮城中枢部の大内西壁南端で坐東朝西する單門道の過梁式門である。東の宣政門と対応する。大内西壁は幅 10.5m、外装塙がめぐる。門道幅は 4.4m、門道左右に各 5 個の礎石据付坑（左右の据付坑芯々距離では、幅 5.4m）があり、西北隅には礎石が原位置に残る。門道中央に、門限石の痕跡が認められる。路面には、顕著な車轍痕が認められる。

#### 【宣政門】(図 25⑤) (中国社会科学院考古研究所洛阳唐城隊 2006)

I B(1)。宮城中枢部の大内東壁南端で坐西朝東する單門道の過梁式門である。大内東壁は幅 11.7m、外装塙がめぐる。4 時期の変遷が確認されるが、唐代晚期について整理しておく。門道幅は左右の礎石痕跡の芯々距離で 5.65m、左右の礎石は残存していない。車轍痕が見られ、車道石が一部残存する。

#### 【円壁南門】(図 25⑤) (中国社会科学院考古研究所洛阳唐城工作隊 2000)

円壁城南壁中央門、特殊な單門道形式の門である。6 つの版築で構成され、東列北から南へ 1～3、西列北から南へ 4～6 と呼ばれている。2・5 版築が、東西で円壁城南壁に接続する。中央が門道とされるが、3 時期の路面遺構以外は検出されておらず、詳細は不明である。

#### 【東城尚書省正門（宋代門址・老集城門】(図 25⑤) (洛阳文物工作隊 1992)

I C(3)。1984 年に発掘され、概報では宋代門址とされる。陳良伟は東城尚書省正門としている（陳良伟 2002）が、李鑫らは老集城門と呼称する（李鑫等 2013）。門道東西に密に地覆石が並び、その上には排叉柱を設置するホゾ穴が 0.55m 間隔に並ぶ。地覆石間の門道幅は、4.65m を測る。門道中央には、左右の門砧石・立頬石（門框石）、および門限石（門檻石）、將軍石が完存する。門扉は北側向きに開閉し、その幅を示す立頬石の距離は、3.18m を測る。路面には 2 条の車道石が完存し、それ以外の路面は敷塙で舗装される。門の創建は北宋前期とされ、1126 年の金の侵攻で消失したと推定されている。

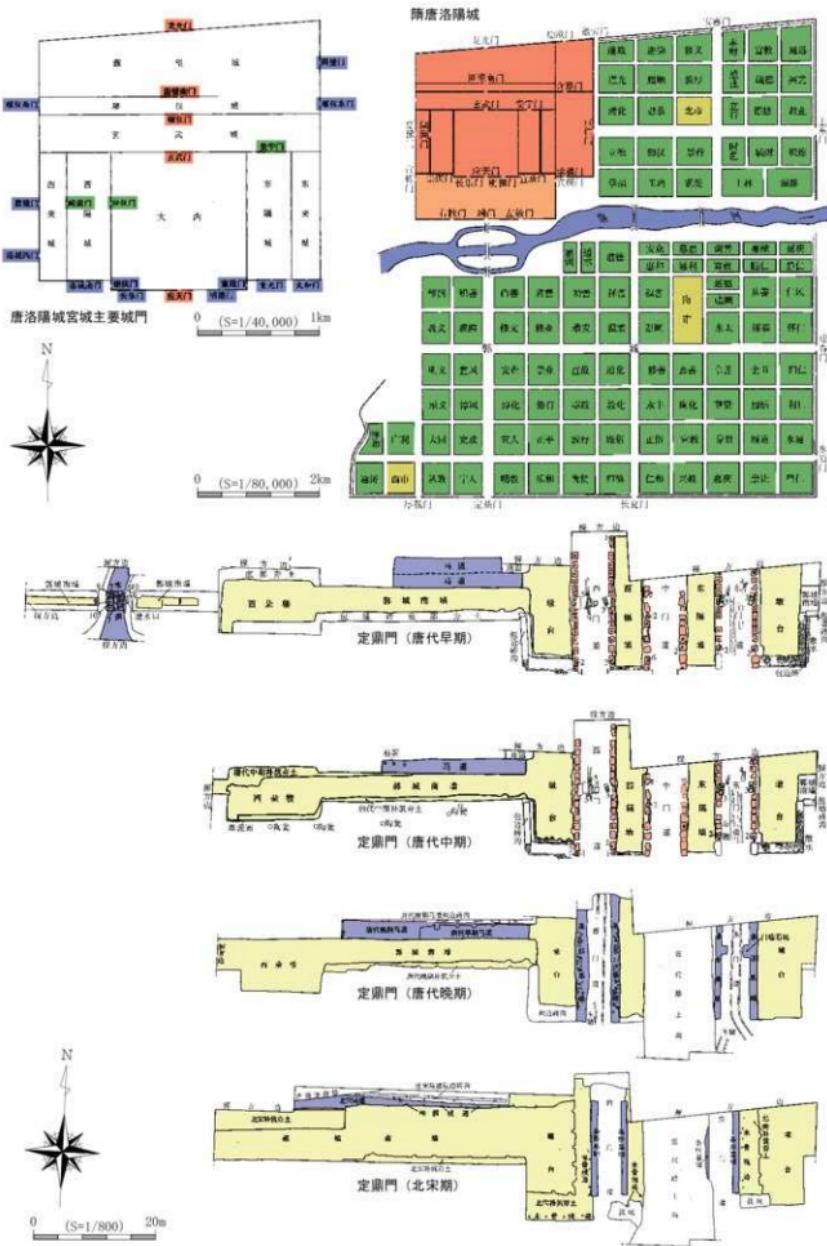


図 25 隋唐洛陽城の城門①

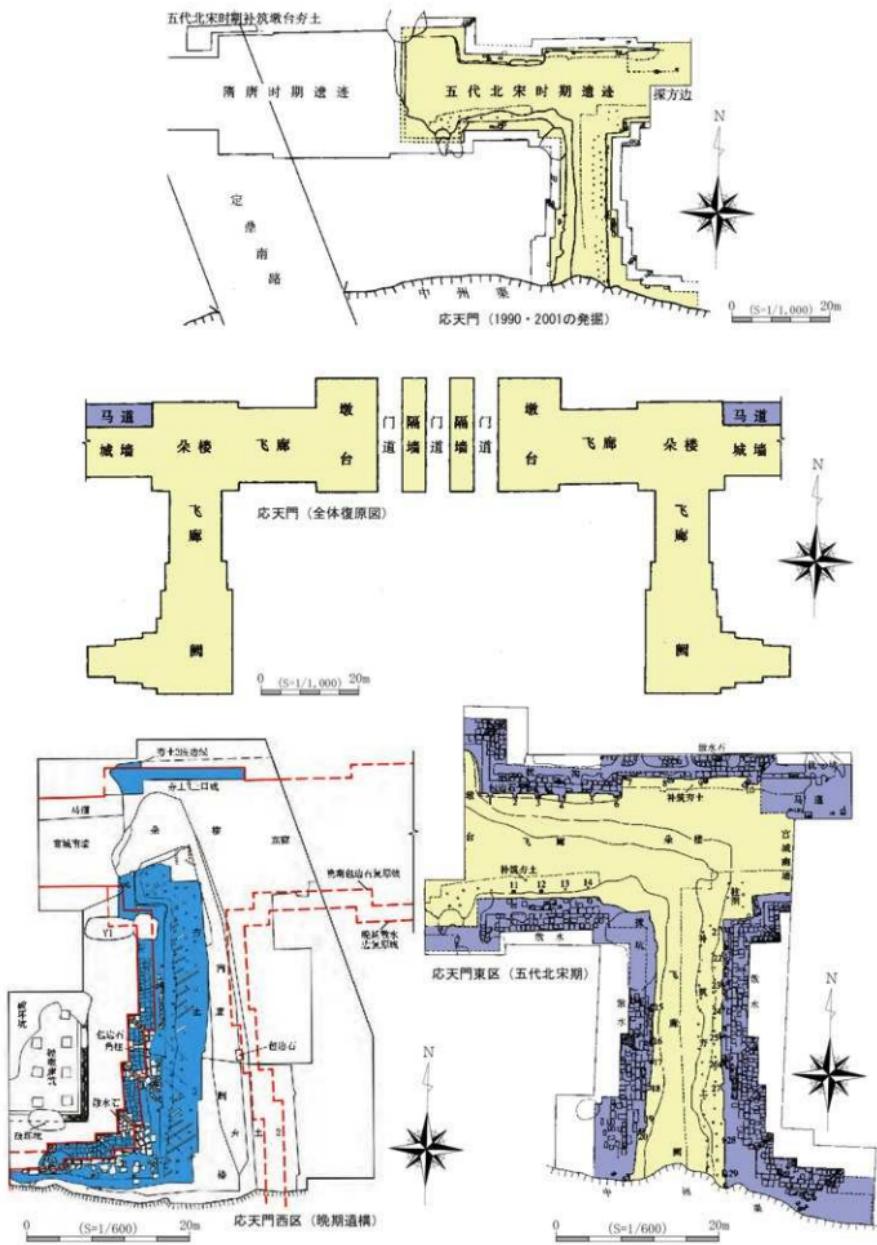


図 25 隋唐洛阳城の城門②

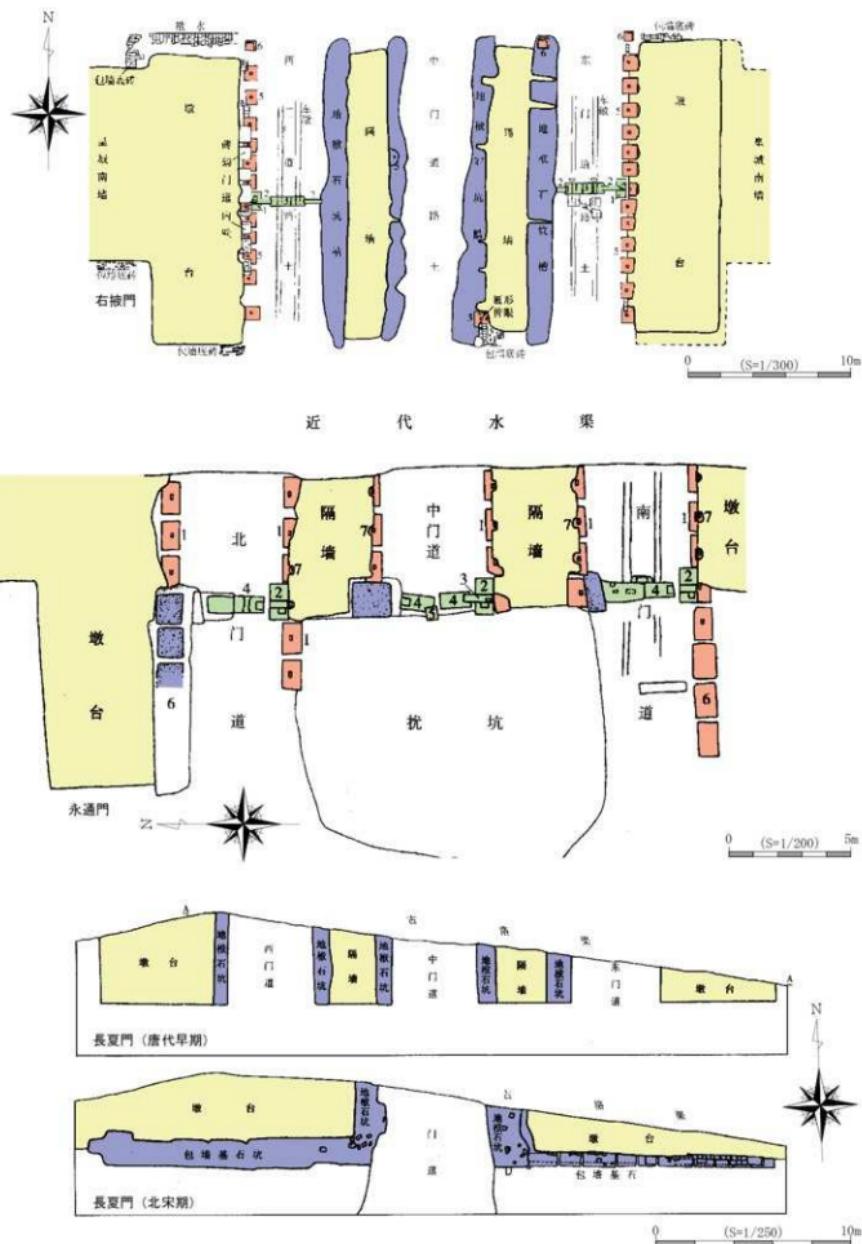


図 25 隋唐洛陽城の城門③

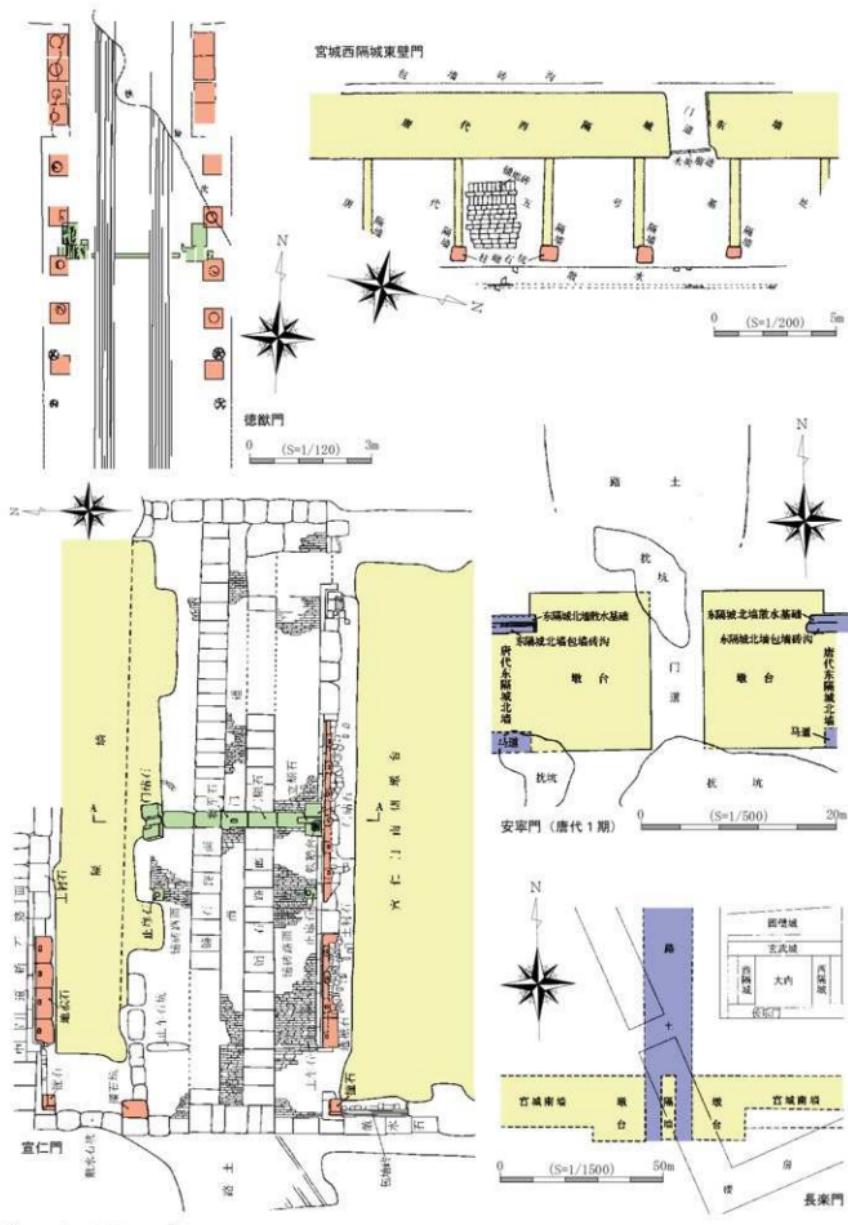


図25 隋唐洛陽城の城門④

第二部 東アジア古代都城門の構造・機能とその展開

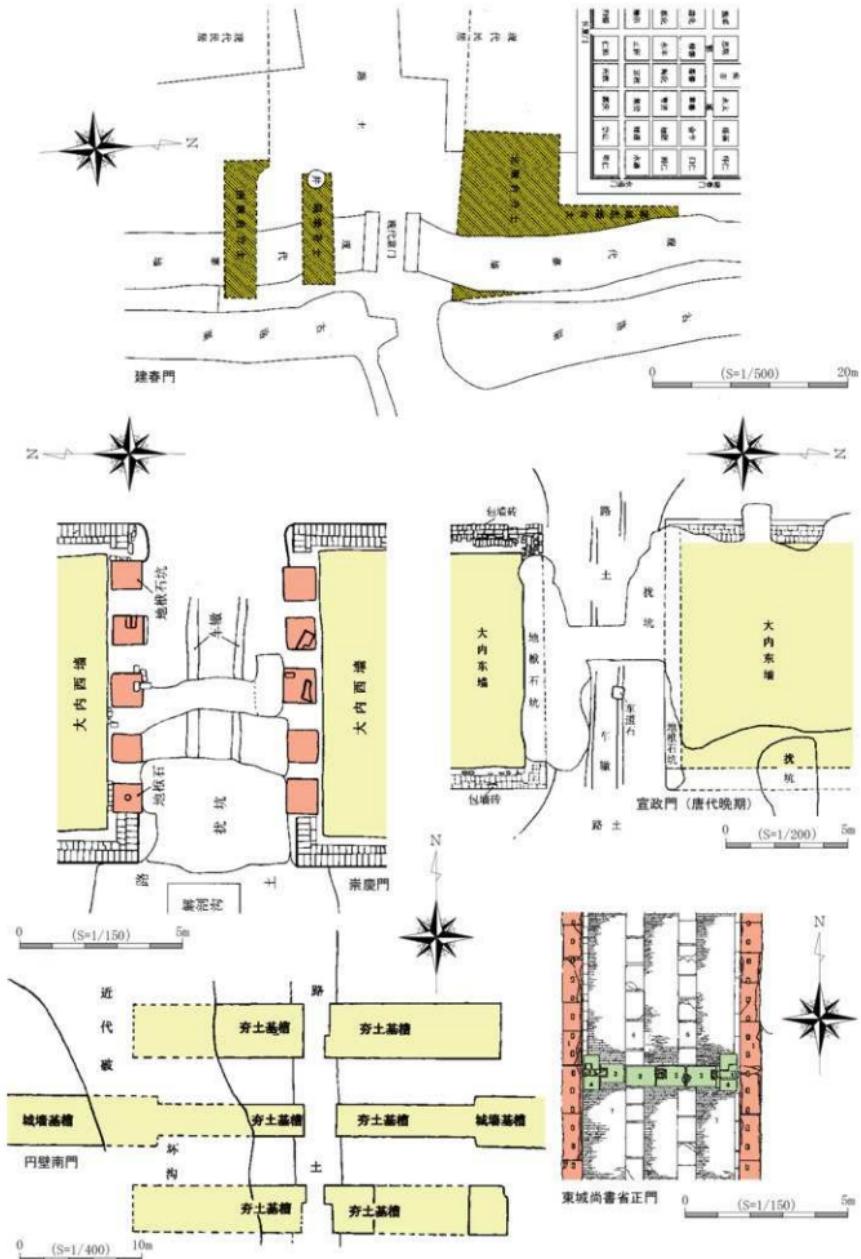


図 25 隋唐洛陽城の城門⑤

### 【乾元門】(図なし) (中国社会科学院考古研究所洛阳唐城队 1989・1994)

1989 年の概報では 1 号台基と呼ばれ、応天門の北側、乾元殿の南に位置する基壇遺構。その位置から乾元門と考えられているが、構造などの詳細は不明である。なお、応天門との間に位置する永泰門に関しても、部分的な発掘調査が行われているが、全体像は不明である (中国社会科学院考古研究所 2014)。

#### (4) 唐宋揚州城 (図 26 ①)

唐揚州城は、蜀岡の隋江都城を利用した北側の子城と南側の羅城で構成される。唐揚州城の範囲は広く、東西 3120m・南北 6000m を測る。羅城には北壁 1 門、東西壁各 4 門、南壁 3 門が確認されており、図 26 ① 右上 のように 1-12 号まで附番されている。その中で、西壁 5 号・8 号門、東壁 3 号門 (宋大城東門)、南壁 10 号門 (宋大城南門) が発掘調査されている。北宋揚州城 (宋大城) は、唐羅城東南隅に位置し、東西 2200m・南北 2900m で東壁 (東門)・南壁 (南門) は、唐羅城および各門を再利用している。宋大城は北壁 2 門、東・南・西壁各 1 門の合計 5 門だが、北壁東門以外の 4 門が発掘されている。南宋では、明代の『宋三城図』(図 26 ③中) にあるように、北宋大城の北側の夾城、蜀岡の西側を利用して宝祐城が南北に並ぶ配置となつた (図 26 ①左上)。以上、揚州城は唐～宋代の遺構を中心とするが、その修築過程も含めて検討する必要がある (汪勃 2015・2016)。なお、以下の整理に関しては、近年の報告書 (中国社会科学院考古研究所等 2010・2015) および、各遺構の概報を参考にした。

#### 【宋大城南門 (唐羅城南壁 10 号門)】(図 26 ①) (中国社会科学院考古研究所等 2013a・2015)

III (1)W2 (北宋～)。宋大城南門、方形銅城が附帯する單門道の発券式門である。唐・五代・北宋・南宋・明清の非常に複雑な変遷過程が確認されている。唐の主城壁・銅城壁は外装塙が施され、銅城東南隅・西南隅が角樓上の平面方形を呈する。この時期の主城門・銅城門の様相は不明である。銅城の西側には、水門遺構が確認されている。五代～北宋期に、銅城・銅城門が大きく改築される。主門道には礎石が確認できるため、排又柱を用いた 5m 幅の過梁式門と推定できるが、同時期の銅城門は発券式で中央に門砧石を確認している。門砧石の芯々距離は 4.1m を測る。この時期に主門道と銅城門を繋ぐ斜めの露道が整備されている (後述する「垂門斜道」)。その後、南宋～明清期にも修築が行われるが、銅城内の露道が 2か所で屈曲する形状になると同時に、銅城外に東西露道が整備された点が大きな変化である。

#### 【宋大城東門 (唐羅城東壁 3 号門)】(図 26 ②) (中国社会科学院考古研究所等 2013b・2015)

III (1)W2 (南宋～)。唐大城東門、方形銅城が附帯する單門道の発券式門である。主城門・銅城・銅城門・出城露道・護城河など、南宋期の城門の防衛体系がわかる事例である。主城門の門道左右は厳重に埴積されており、門道幅は 3.75m を測る。銅城は南宋期に造営され、東西 55.6m × 南北 43.6m、南壁に銅城門が開口する。銅城内は敷塙され、露道が屈曲して銅城門に接続する。銅城門は、幅 3.7m・奥行き 13.2m、門道左右に埴積する。このように銅城門が主城門右側の銅城壁上に位置 (銅城門が主城門の「旁門」となる) し、銅城内の露道が曲尺形を呈する形式を「旁門右道」と呼び、北宋末～南宋の特徴とされる。露道は南銅城壁の外側で東に屈曲し、その後、銅城東壁に沿って北上し、主門道に対応する位置で東に屈曲して護城河に至る。城門の下層には北宋期の遺構を確認しているが、主門道幅 5m で東向きの凸型を呈し、北側には馬面、東銅城壁内に東西露道 (南宋の銅城造営前の東西道路) を検出した。唐代城門に関しては、詳細は不明である。

#### 【宋大城北門】(図 26 ②) (中国社会科学院考古研究所等 2005・2012・2015)

III (1)W2。宋大城北門、方形銅城が附帯する單門道の発券式門である。主城門・銅城・銅城門・水門で構成される。五代後周期に創建され、北宋晚期に銅城を附加、南宋期に水門が拡張して整備された点が明らかになっている。主門道は左右壁体・路面共に 3期ないしは 4期の変遷が認められ、中央、および北側に門限石を検出している。銅城は東西 52.6m × 南北 40m を測り、外装塙がめぐる。銅城門は銅城東壁に 1カ所で、幅 4.2m・奥行き 13.6m、東側に向けてラッパ状に広がる (東端で幅 5.3m)。門道内には 2か所、門砧石が残存する。主城門から北側に延びる埠敷露道は、銅城内で東に屈曲して銅城門に接続、出口からさらに北側に屈曲し、銅城東壁・北壁に沿う形で続く。いわゆる「旁門右道」形式である。なお、北門 (陸門) には、西侧に水門が付随する点も特徴である。

#### 【宋大城西門】(図 26 ③) (中国社会科学院考古研究所等 1999・2010)



図 26 唐宋揚州城の城門①

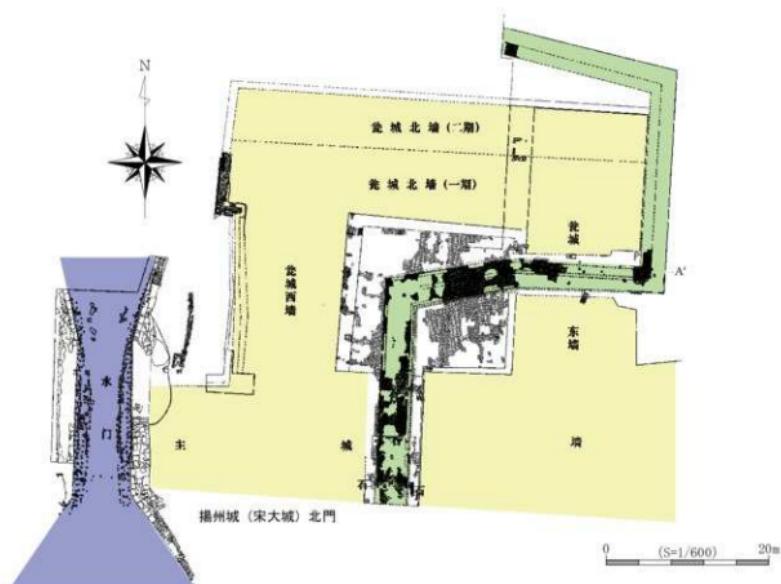
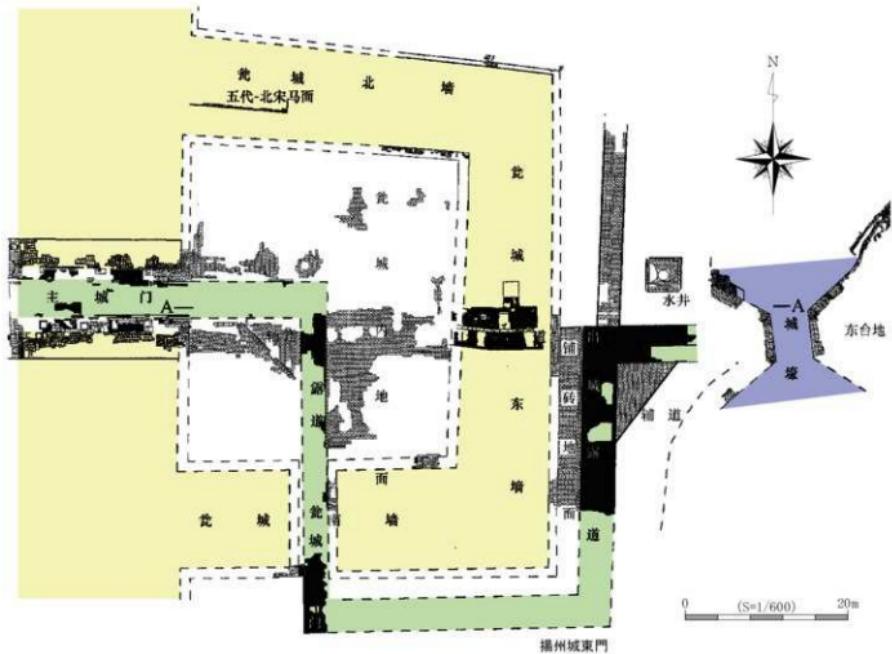


図 26 唐宋揚州城の城門②

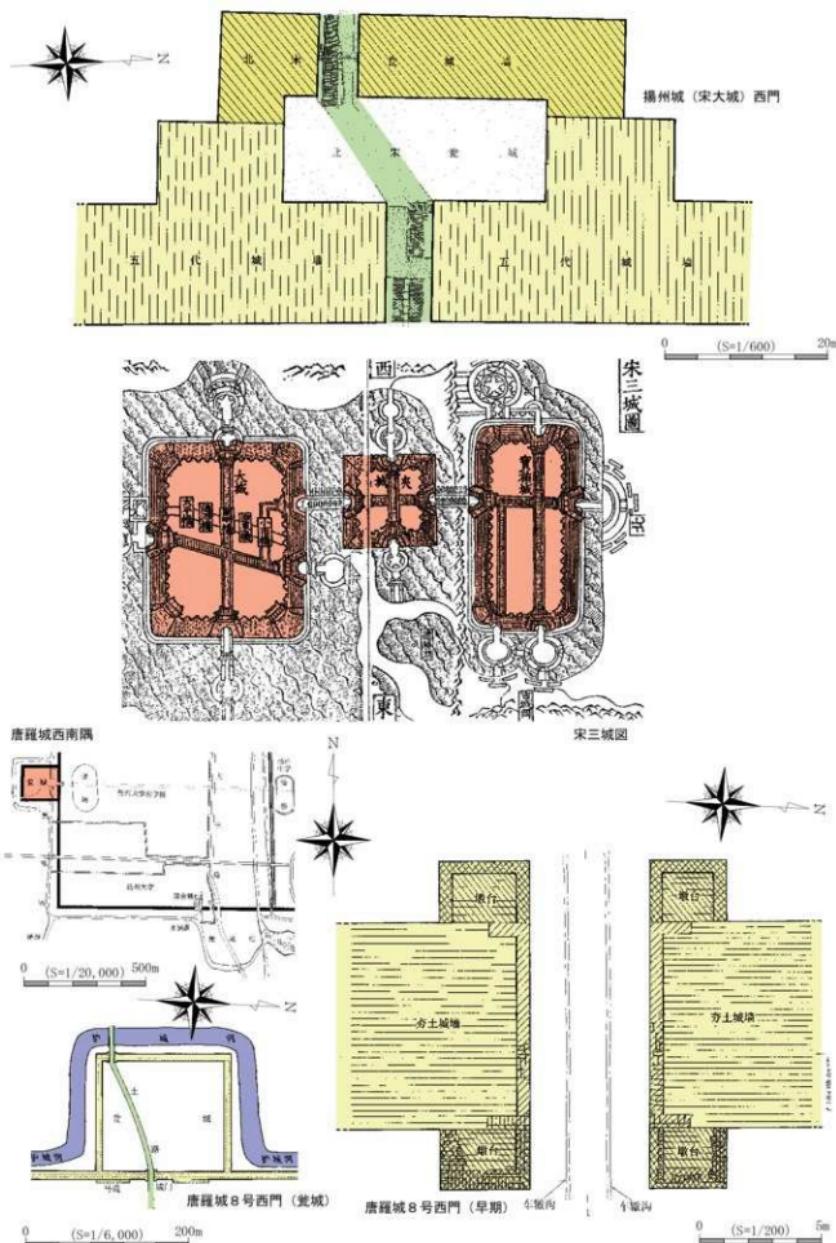


図 26 唐宋揚州城の城門③

III (1)W2。宋大城西門、方形瓮城が附帯する単門道の発券式門である。五代・北宋・南宋・明代の4時期の変遷が確認されている。五代の城壁幅は15mで、門道左右に9.3-9.6mに突出する馬面が同時に造営されており、外装塙が施される。門道幅5.7m・奥行き15mで、壁面には長さ42cm・幅24cm・厚さ5.5mの大型塙が積まれている。北宋期には、金兵の南侵に備えて、馬面外側に城壁が増築され、四角の平面形から凸形平面形の瓮城となつた。瓮城外側は東西23m・南北49.8mを測る。瓮城門は西南隅に位置し、幅4.7m・奥行き10mを測り、排叉柱の痕跡は認められず、発券式とされる。中央左右には、門砧石・立頬石・門限石が設置されている。主城門と瓮城門は、角度を持つ塙敷露道で結ばれている。このような主城門と瓮城門の軸線が異なり、両者が斜めの露道で結ばれている形式を、「歪門斜道」(晩唐～北宋期の揚州城門の特徴)と呼称する。南宋期には、さらに西側に城壁が附加されると同時に、瓮城内西南隅に看守の宿直室と思われる建物が建てられている。以上、宋大城西門は、現状で確認されている最も古い五代の発券式(券頂式)城門であり、北宋期に馬面が瓮城に改築される過程が判明した重要な事例である。

#### 【唐羅城西壁・8号西門】(図26③)(中国社会科学院考古研究所等 2010)

I B(1)W2。唐羅城西壁最南門、方形瓮城が附帯する単門道の過梁式門である。主城門・城壁・馬道・瓮城・瓮城門・護城河で構成される。瓮城は東西145m×南北168mの方形(長方形)で、瓮城門は瓮城の西南隅に開口し、主城門とは軸を若干ずらして、道路で接続(歪門斜道)されている。瓮城外の護城河は、幅20mほど。主城門道の内側左右には馬道が検出された。早期城門は唐代文化層の上にあり、門道幅5m・奥行き8.5mを測る。門道左右は、長さ30cm・幅15cm・厚さ4cmの塙を積み上げて構築されている。城壁から2.5m突出する塙台が増築されている。晚期城門は早期城門の0.5mほど上層で検出され、門道幅4.3m・奥行き10.6mを測る。晚期城壁は2m超東に移動している。南北2か所ずつ直径0.2mの柱穴が認められ、その間隔は5mで過梁式門と推定されている。中央には塙で作られた門檻があり、塙には「羅城」の刻印が発見されている。路面には車輪痕が顕著に認められる。城門は五代末の火災で消失したと推定される。

#### (5) 北宋東京開封城(図27)

北宋東京城は、皇城(宮城)・内城・外城の三重圈構造を特徴とする。近年、外城門におけるボーリング・発掘調査が進んでいる。東京城の外城は後周に造営が始まり、北宋神宗の時期に軍事防御機能の強化を目的として、城門(陸門)・水門外に瓮城(方形・半円形の2種類)が造営された(李春迎2017)。北宋期の外城門は12門とされるが、文献によると四方の「正門」(南薰門・新宋門・新鄭門・新封丘門)は皇帝が出入りする「直門両重」(方形瓮城で主城門と瓮城門の軸線が一致する)、それ以外は「偏門」で「瓮城三層、屈曲開門」(半円形瓮城で主城門と瓮城門の軸線が異なる)と表現されており、この点は考古学的調査でも確認されている(李春迎2004)。内城門の詳細は不明だが、皇城(俗称大内、すなわち宮城)正南門の宣德門に関しては、文献史料・絵画資料などから五門道・双塙樓・双闕形式に復原されている(図6左下)(李合群2008)。ただし、大規模な発掘調査が行われ、成果が報告されているのは順天門(新鄭門)に限られる。

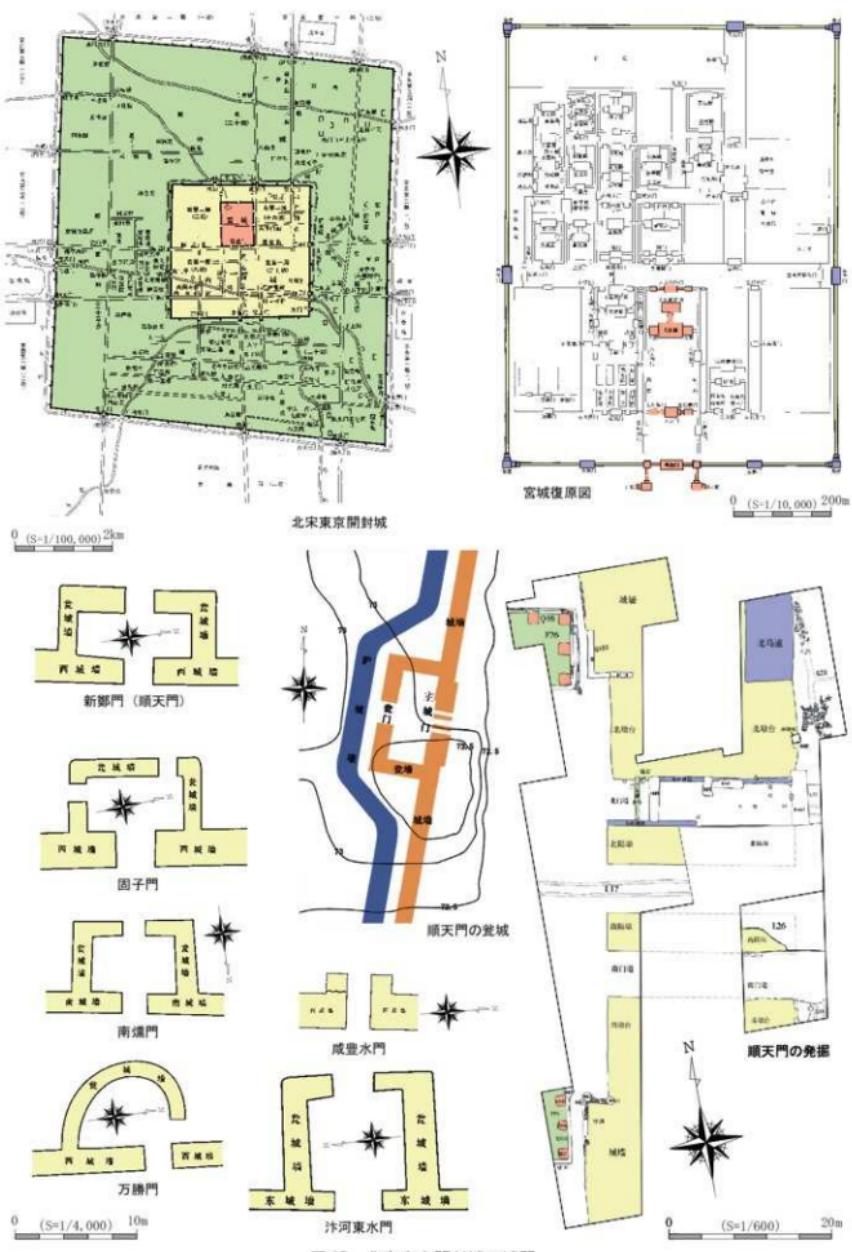
#### 【順天門】(図27)(河南省文物考古研究院等 2019)

I C(3)W2。外城西壁正門、一門三道の過梁式門である。主城門・長方形瓮城の西側に、護城河が南北に流れる。主城門は東西23.8m×南北54.2mで、塙台・3門道・2隔壁・馬道で構成される。塙台は城壁よりも若干が幅狭く、門道幅は中門道8m、南北門道5.3mに復原される。北門道の左右には地権石を設置した痕跡があり、西京洛阳城の北宋期の城門に見られる過梁式I C形式と思われる。門道の西側部分に、門限石の痕跡が検出されている。隔壁幅は4.8m、城門内の北側には馬道が検出された。主城門と瓮城門は同一軸線上に存在する(直門両重)が、瓮城内の主軸線に対して南北対称に比較的大型の「疊塙」建物が検出された。

#### 3-4 遼・金・元の都城門

##### (1) 遼上京城(図28①)

遼上京城は、北の皇城、南の漢城の二城で構成され、皇城中央東よりに宮城が位置する。近年の発掘調査の進展によって、主軸が東を向く点が判明している。皇城の東・北・西の中央部分に城門・瓮城を検出しておらず、西門(乾德門)・東門(安東門)が発掘調査されている。宮城門は、東門(東華門)・南門(承天門)・



西門（西華門）が発掘されている（汪益・董新林 2018）。なお、ここでは比較参考資料として、遼祖陵黒龍門の発掘事例も提示した。

#### 【皇城西門（乾德門）／皇城東門（安東門）】（図なし・未報告）（汪益・董新林 2018）

乾徳門 I D(1)WI。皇城西門、馬蹄形（梢円形）の瓮城を持つ單門道過梁式門である。南北墩台、門道、内側の馬道で構成される。主門道左右には、石製地覆とその上の木製地覆が残存している。木製地覆上のホゾ穴に排叉柱が立てられる（I D 形式）。石製地覆の東西長は 19.9m、門道幅は地覆石間で 6.2m を測る。中央には門限石、左右には門砧石がある。瓮城の平面形は馬蹄形で、東西 26.4m・南北 22.8m を測る。瓮城門も單門道で、南側に開口する。瓮城門の幅は 5.84m、奥行き 8m を測る。瓮城門左右には、礎石の上に木製地覆が置かれ、排叉柱が立てられる前漢代の系譜を引く I A 過梁式と考えられる。

安東門 I D(3)WI。皇城東門、馬蹄形（梢円形）の瓮城を持つ三門道過梁式門である。南北墩台・3 門道・2 隔壁の一部が発掘されている。主門道幅は各 4.5m、石製地覆の上に木製地覆を設置、排叉柱を立てる。

#### 【宮城東門（東華門）】（図 28 ①）（中国社会科学院考古研究所内蒙古考古第二工作隊等 2017）

I A(3)。宮城東門、三門道の殿堂式門である。城門の基壇は、東西 13.1m × 南北 31.2m で、基壇上に 22 節所の礎墩を検出した。基壇東側には 3 つのスロープがある。建物は桁行 7 間（南 2.53m/4.85m/4.85m/4.86m/4.85m/4.85m/2.53m 北）・梁行 2 間（3.14m 等間）である。スロープとの関係から、中央（当心間）、左右から 2 番目（稍間）の三門道と推定される。

#### 【宮城南門（承天門）】（図 28 ②）（中国社会科学院考古研究所内蒙古考古第二工作隊等 2019）

I A(1)。宮城南門、單門道の過梁式門である。東西墩台・單門道・馬面で構成される。西墩台は東西 6.7m・南北 11.8m を測り、周囲には外装塗が施される。墩台上面には、4 つの柱穴（建物もしくは永定柱）も確認できる。單門道は幅 7.8m で、左右には各 6 個の礎石（奥行き 5 間）が残存し、その上に木製地覆を置き、排叉柱を並べている。中央には、門限石・將軍石・門砧石など門扉施設が残存する。

#### 【宮城西門（西華門）】（図なし・未報告）（汪益・董新林 2018）

I D(1)。宮城西門、單門道の過梁式門である。門道幅は 6.4m で、門道内に將軍石や地覆石が残存する。

#### 【参考：祖陵黒龍門】（図 28 ②）（中国社会科学院考古研究所内蒙古考古第二工作隊等 2018）

I D(3)。遼初代耶律阿保機の陵墓、祖陵正門、三門道の過梁式門である。東墩台・東門道・東隔壁・中門道・西隔壁が残存する。門道は、幅 4.6m・奥行き 18.4m を測る。門道東西には石製地覆を密に並べて表面を平滑にしており、その上に木製地覆を設置する。東門道の東壁の木製地覆は完存しており、長さ 14.99m を測る。断面長方形（30 × 20cm）で、上面に 13 個の排叉柱と 1 つのホゾ穴（13 間）が残存する。排叉柱間の木製地覆上には、南北方向の凹みがあり、門道内壁となる木護板がはめ込まれたと推定される。門道中央の左右には門砧石、路面中央に將軍石があり、東門道では炭化した木製扉も検出された。門道の南側には、5 面で構成されるスロープ（「五瓣蝶翅慢道」）を検出している。このように、残存状態の良好な黒龍門は、遼代の過梁式門の構造を考える上で重要な資料である。

#### （2）金上京城（図 29）

金上京会寧府は、曲尺状の南北 2 城から構成され、南城の西寄りに皇城（宮城）が位置する。外城には 12 門が確認されており、特に南壁西門の瓮城の残りがよく、発掘調査が行われた。皇城は南城の西寄りに位置するが、東・中・西区に区分され、近年、発掘調査が進んでいる（黒龍江省文物考古研究所 2017）。中部が宮殿区とされ、南壁の三門道の城門と同じ中軸線上に大型建物の基壇が残存している。2018 年には、皇城門と南城南壁西門を結ぶ「中軸大街」が発掘され、路面幅 46m で両側に排水施設も検出された。宮殿区の中軸線上に位置する宮城門と外城南壁西門は、皇帝の使用する階層の高い門とされるが、三門道・單門道という差異がある。これについては、金上京城における外城門の防御性が重視されたと考えられている。

#### 【南城南壁西門】（図 29）（黒龍江省文物考古研究所 2019）

I B・I D(1)WI。南城南壁西門、半円形に近い梢円形の瓮城を持つ單門道の過梁式門である。瓮城の内径は東西 50m・南北 20m で、主城門の南東に瓮城門が位置する。主城門の門道の中央左右には門砧石、その中間に門限石が残存する。門砧石間の門道幅は 6.5m で、奥行きは 20m を測る。西壁門砧石の北側には、地

遼上京城における城門の類型（汪盈・董新林2018）

	一门三道	单門道	門道基础	
			A型	B型
殿堂式城門	宮城東門			
木过梁式城門	皇城東門	皇城西門		石地枕、木地枕、排叉柱
	宮城西門			石地枕、木地枕、排叉柱
	宮城南門		石柱础、木地枕、排叉柱	

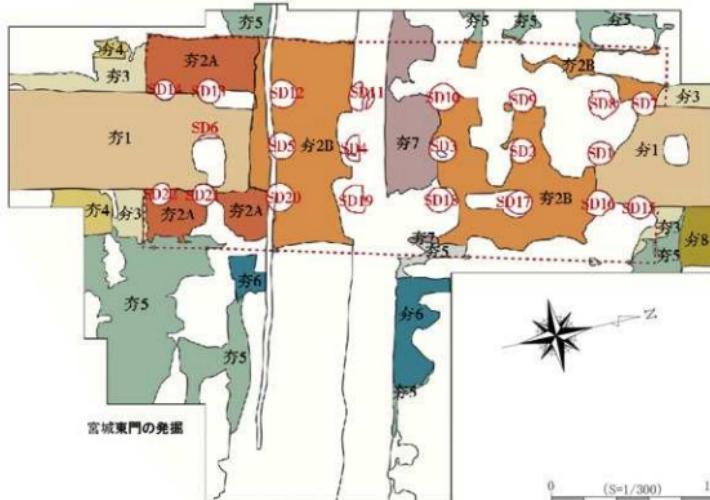
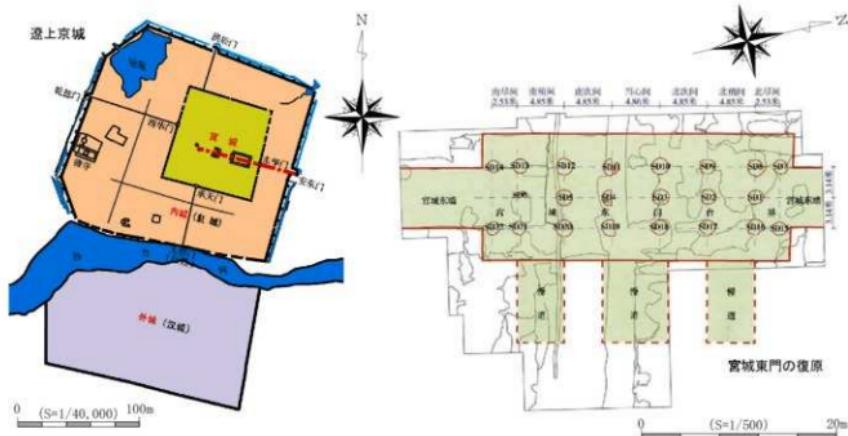


図28 遼上京城・祖陵の城門①

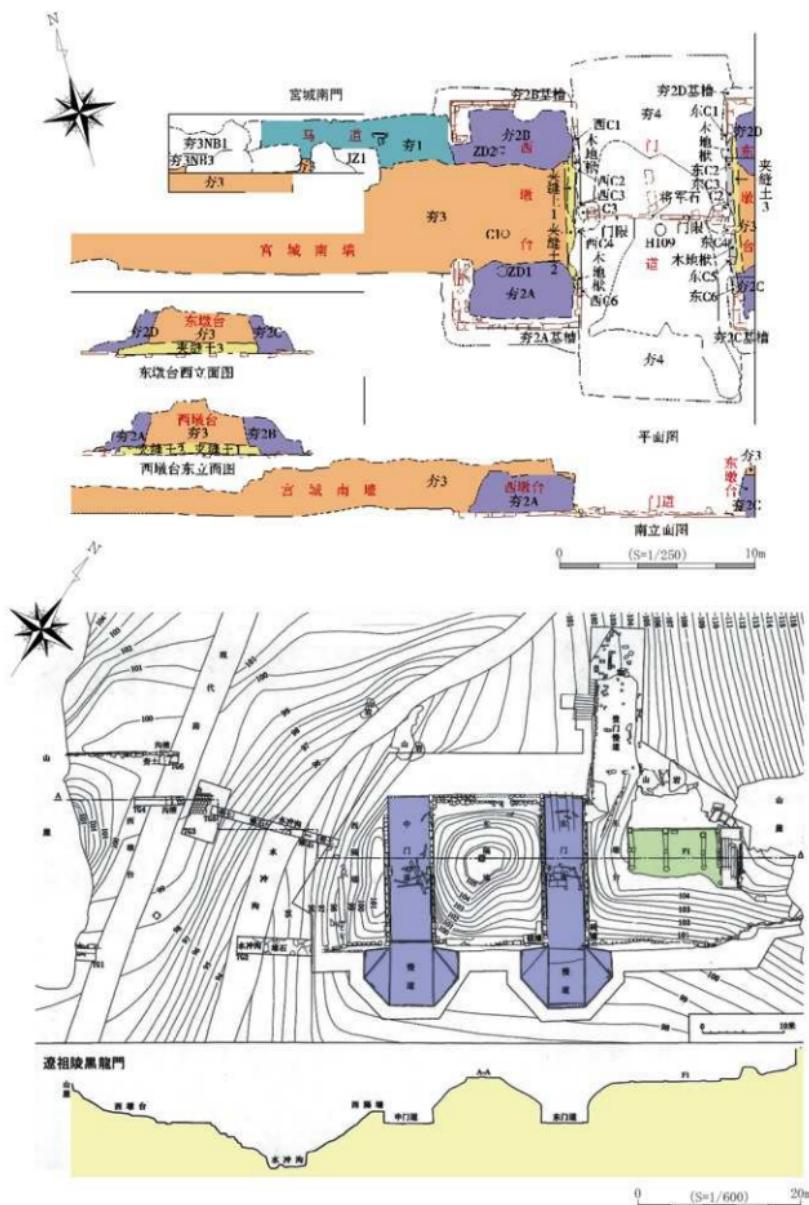


図 28 遼上京城・祖陵の城門②

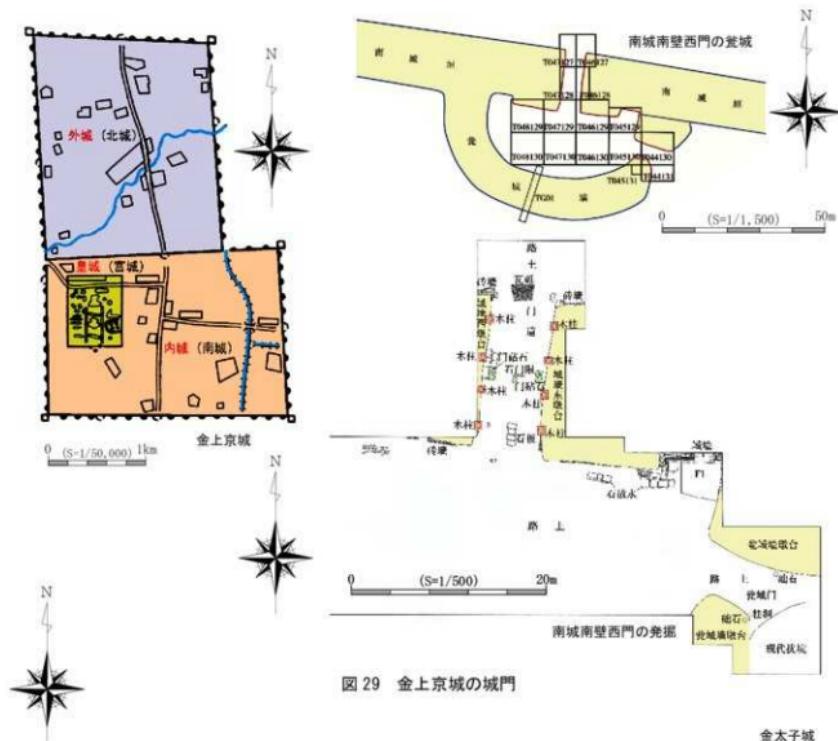


図 29 金上京城の城門



図 30 金宝馬城・太子城の平面配置

覆石が残存しており、その上に木痕が認められる。さらに、門砧石から北側、および南側の墩台際部分には、合計8個の長方形磯石とその上の炭化した木柱（直径60cm前後）が確認できる。木柱相互は、約3m間隔で、これらの立柱は城門頂部を支える「中心柱」とされる。西壁に一部残る地覆石の痕跡からすると、中心柱間には石製地覆と木製地覆・排叉柱が存在したと思われ、本類型は唐代に一般的なI-B（中心柱）と遼代に特徴的なI-D（排叉柱）を組み合わせた特殊な形式の可能性がある。なお、同時代の蒲峪路故城の南門（楕円形竇城をもつ單門道過梁式門）でも、門道左右の排叉柱の中で中央の4本のみが大きい中心柱が確認されている（木柱が地面に直接埋め込まれている点は異なる）（[黑龙江省文物考古研究所 1987](#)）。路面は石板で舗装される。城壁および墩台の南北は外装塙が施され、その周りに雨落溝がめぐる。竇城門は破壊が進んでいるが、一部に磯石が残り、門道幅4.5~5m、奥行き15mに復原されている。竇城内の東北隅には、オンドルが付随する小型の半地下式建物が検出されており、門衛の詰所とされる。

#### （3）金宝馬城・太子城（図30）（[吉林大学辽疆考古研究中心 2017・吉林省文物考古研究所等 2018・河北省文物研究所等 2019](#)）

金宝馬城は、金王朝の長白山祭祀の神廟遺跡とされる。城壁で囲まれた城内には、回廊で囲まれた中枢区画がある。主殿は南に月台を備える「工の字」形建築（JZ2・JZ3）で、南には回廊院南門（JZ1）が位置する。JZ1の基壇は東西19.2m×南北13.0mを測り、周囲は外装基壇が認められ、南側には「三瓣蝉翅慢道」がある。基壇上には磯石が残存しており、桁行3間・梁行2間の單門道の小型殿堂（門殿）式門II C(1)である。中央の「当心間」の6個の磯石は、覆盆式である。その他の磯石は、四面の壁体内の暗礎として設置されている。柱配置は『營造方式』の所謂「分心槽」と呼ばれる形式である（[李劍平編著 2011p122・梁思成 2001a](#)）。遼統和2年（984）建築の蔚県独楽寺山門（[梁思成 2001b](#)）などの著名な現存例も知られる。中心の左右には門砧石が確認でき、その距離は1.9mを測る。

金太子城は、金代中後期の皇室行宮とされる。東西350m×南北400mの長方形を呈する規模の小さな城跡で、南壁正門に竇城が附帯する。南門の軸線上に位置する南のF9と北のF3を中心とする「前朝後寝」の布局とされる。南門は幅4mの單門道で、中央に門檻石が残存する。門道左右には長方形の墩台が位置し、東西6m・南北10.6mを測る。墩台上には、各6基の方形の磉墩（一边1.5m前後）が規則的に配置されており、主城門は桁行3間・梁行2間の小型殿堂式門II C(1)W2と想定される。竇城は東西54m×南北38.5mを測り、竇城門（残存幅4.8m）は主門道と同じ軸線の南壁上に位置する。竇城内側の竇城壁から2.5~3mの場所には、6m間隔で柱穴が検出されている。南壁・竇城壁は幅約2mで、内外両壁に外装塙を施すが、外装塙内には3m間隔で木柱を立てている。なお、西院落の東壁・西壁にも幅3m單門道が確認されている。

#### （4）元上都（図31）

元上都は、宮城・皇城・外城の三重圈構造を特徴とし、合計13門が確認されている。宮城は、東・西・南の3門で竇城は附帯しない。ただし、南門外には曲尺状の遺構が附帯する。皇城は東西各2門、南北各1門の合計6門で、全て竇城が附帯する。外城は、皇城の東壁・南壁を除くと、西壁1門、北壁2門、南壁1門の合計4門で、やはり竇城が附帯する。皇城・外城の南・北壁に位置する竇城は長方形（南北50m×東西60m）で、東・西壁に位置する竇城は馬蹄形（楕円形）（南北60m×東西55m）を呈する。宮城の3門は発券式とされ、発掘されている皇城南門は主城門が発券式、竇城門が過梁式である。外城門の構造は、不明である。宮城の東・西・南の門に接続する中心T字大街の交差地点、その北側の1号殿下層遺構（東西36.5m×南北30m）が、フビライ建造の大安閣とされる。一方、宮城内最大の建造物は、北壁中央に位置する東西130m・南北60mの「闕式宮殿」で、その平面形状が故宮午門と類似する点が指摘されている。

#### 【宮城北壁闕式宮殿】（図31）（[内蒙古师范大学等 2014](#)）

II B04。主殿（東西67m×南北40m）・東西廄殿（25m四方）・廊道・闕台（東西24m×南北16m）・スロープ・殿前広場で構成される。闕台と西側スロープが発掘調査されている。廄殿と闕台は廊道で結ばれており、闕台は南向きに突出する凸形を呈する。版築と二重の外装塙で構築される。東闕台上には、各4個の2列の覆盆式の磯石が残存しており、磯石間の距離はおよそ3mを測る。闕台の南には、明台（東西10m・南北4m残存）がある。西闕台の北東側には、主殿側面に繋がるスロープを検出している。地面は塙で舗装されており、何

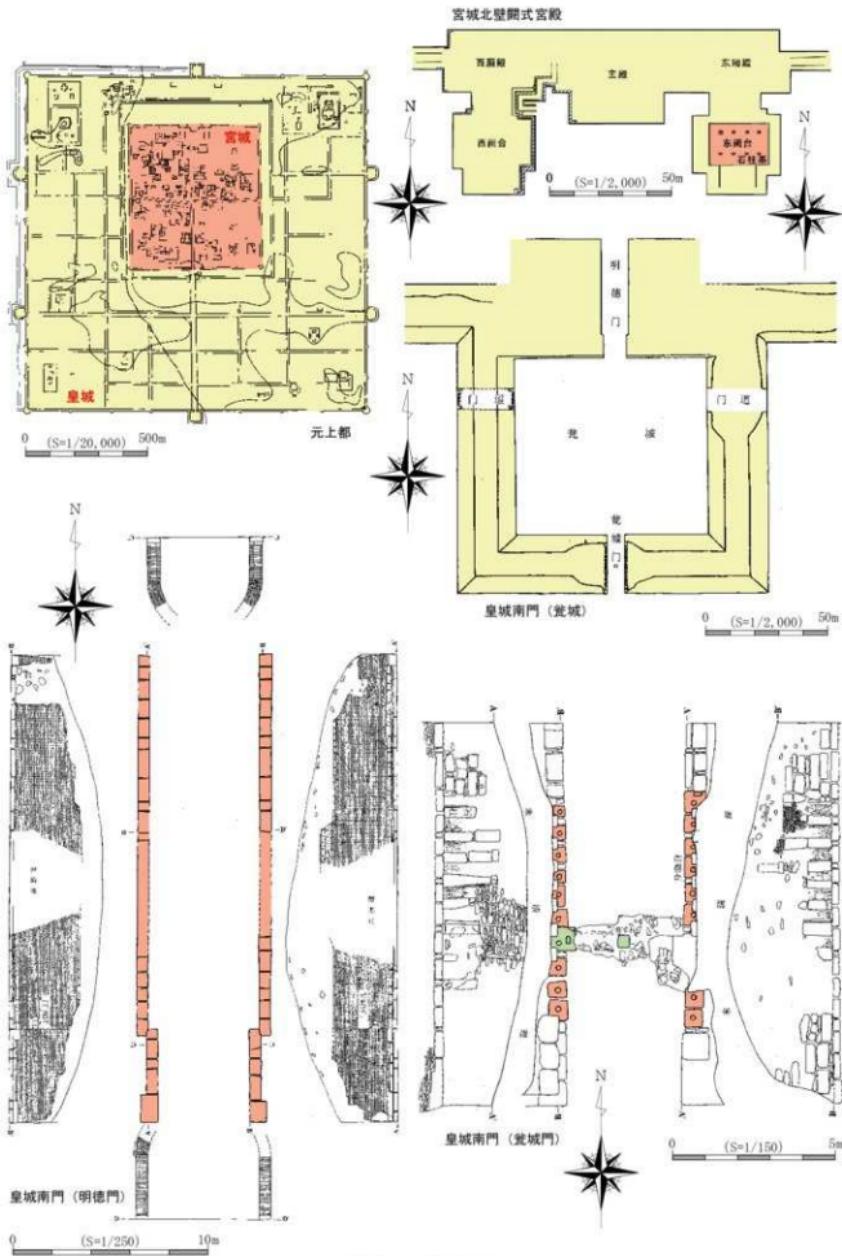


図31 元上都の城門

度か屈曲しながら主殿へ登る構造となっている。闕式宮殿は、北壁と同時に造営されており、1256-1258年のフビライ即位前の時期と想定されている。その構造的特徴から、唐長安城大明宮含元殿など中原の様式を採用しながら、草原都城特有の発展を遂げた形式と理解されている。

### 【皇城南門（明德門）】（図 31）（魏堅 2008）

III (1)・I B(1)W2。主城門は單門道券式、瓮城門は單門道過梁式である。瓮城壁東西の門道は、1358年の紅巾軍の攻撃後に使用された臨時門で、1368年の明軍侵攻の際に封鎖されたと考えられている。主門道幅は 5.7m だが、南側が狭くなっている。その部分は 4.7m 幅を測る。奥行きは 24m。門道左右の壁体は青磚が積まれておらず、門道南側は 23 層目、門道北側は 34 層目から天井のアーチ構造が始まる。瓮城は東西 63m・南北 51m・幅 12m で、外装塙がめぐる。瓮城門は主城門の軸線上、南瓮城壁中部にあり、門道は北端幅 3.8m・南端幅 3.5m で南に向けて細くなる。奥行きは 12m で、南端から北へ 5m の地点に將軍石が位置する。門道南北両端は 2.2-2.5m ほどの石積み壁になっており、その間の左右対称の位置に各 10 個ずつの方形礎石が設置されている。排叉柱間は高さ 1.5m ほどの長方形の石柱が建てられており、木柱と石柱の間は塙や石で充填される。門道左右の木柱は 10 本、その間の石柱は 9 本である。門道西側の南から 4 番目の礎石が大きく、將軍石の位置と一致し、排叉柱の円形ホゾ穴の東側に長方形の門軸となるホゾ穴が穿たれている。

### （5）元中都（図 32 ①）

元中都は、宮城・皇城・外城の三重構造を特徴とする。宮城には四周中央に各 1 門の合計 4 門、皇城には東壁 3 門、南壁 1 門、西壁 1 門、北壁 1 門の合計 6 門が確認されている。なお、外城に関しては、城門の位置が不明である。

### 【参考：宮城西南角台・1号宮殿】（図 32 ①）（河北省文物研究所 2012）

宮城正南角台は、北向き・東向きの三出闇構造の平面形を呈し、現在まで元代に発掘事例が他に確認されていないものの、元大都宮城正門の崇天門西闕の系譜を引く点が指摘されている（張春長 2003）。中心は正方形の基壇で、北向き、東向きに 3 回屈曲して北城壁・西城壁に接続する。版築の外側は塙積外装となっており、屈曲部に玄武岩製の角柱がある。角柱および塙下部には土襯石が並ぶ。土襯石の外側 1m 前後の場所には、南側に 6 個、西側に 8 個、内側に 4 個の「架杆柱」の柱穴・抜取坑が検出されている。また、版築内にも、上面に永定柱の痕跡や側面に織木の痕跡が検出されている。

1 号宮殿は、元中都宮城中心に位置する工字形の大型宮殿である。元大都の大明殿（延春閣）の系譜を引く宮殿で、南から月台・前殿・柱廊・寝殿・左右夾室・香閣で構成される（図 32 ①下）。

### 【宮城南門】（図 32 ②）（河北省文物研究所 2012）

I D(3)Q2。報告書では「三觀兩闇三門道過梁式門」と報告される。3 門道・2 隣壁・左右墩台・左右行廊・左右塙樓（報告では闕台）・門内の矩形広場・東西馬道で構成される。三門道の構造は、基本的に同じである。門道は、地覆石間に中門道幅 5.9m、東・西門道幅 5.0m、奥行き 18.4m を測る。中門道を例に構造を見てみる。門道左右には地面下に土襯石（東 16 個・西 15 個）が埋められており、門道部分では地覆石、南北端では角柱を設置する。地覆石は東西壁に各 9 個、全長 12.8m ほどで、表面が平滑に調整される。地覆石上には、炭化した木製地覆が残存している。墩台・隔壁の門道左右壁面、あるいは南北端の塙積壁には木板が貼られており、地覆石と木板の間に東西各 4 つの立柱（下に礎石）が確認されている（金上京南城南壁西門に近い I B・I D の組み合わせ形式か？）。中央左右には門砧石が 2 個、中央に將軍石が 1 個残存する。門砧石には、立頬石をはめ込む長方形のホゾ穴と門軸となる方形のホゾ穴がある。ホゾ穴（海窓）の中では、鉄鶴台とその上の鉄靴臼が詰びた状態で検出された。門道の路面は、石敷舗装されている。隔壁幅は 3.7m 前後、墩台幅 7m 前後で、隅角に角柱を設置し、南北は塙積外装が施される。墩台と闕台は行廊（飛廊）で接続し、左右闕台は東西 15m 前後・南北 16.5m 前後で、南北は塙積み、隅角に角柱を配置する。闕台上面では、柱穴も検出している。左右には城壁が続き、北西側では、馬道を検出している。以上、中都宮城正門は双塙樓を持つ三門道過梁式門だが、前述した元上都宮城南門・皇城南門、あるいは元大都和義門瓮城門（中国科学院考古研究所等 1972）の発券式の事例など、I・III 形式は元代まで選択的に採用されていた点がわかる。

なお、本城門の特徴的な部分は、北側に東西 80m・南北 31.5m 前後の矩形広場を持つ点である。広場の北・

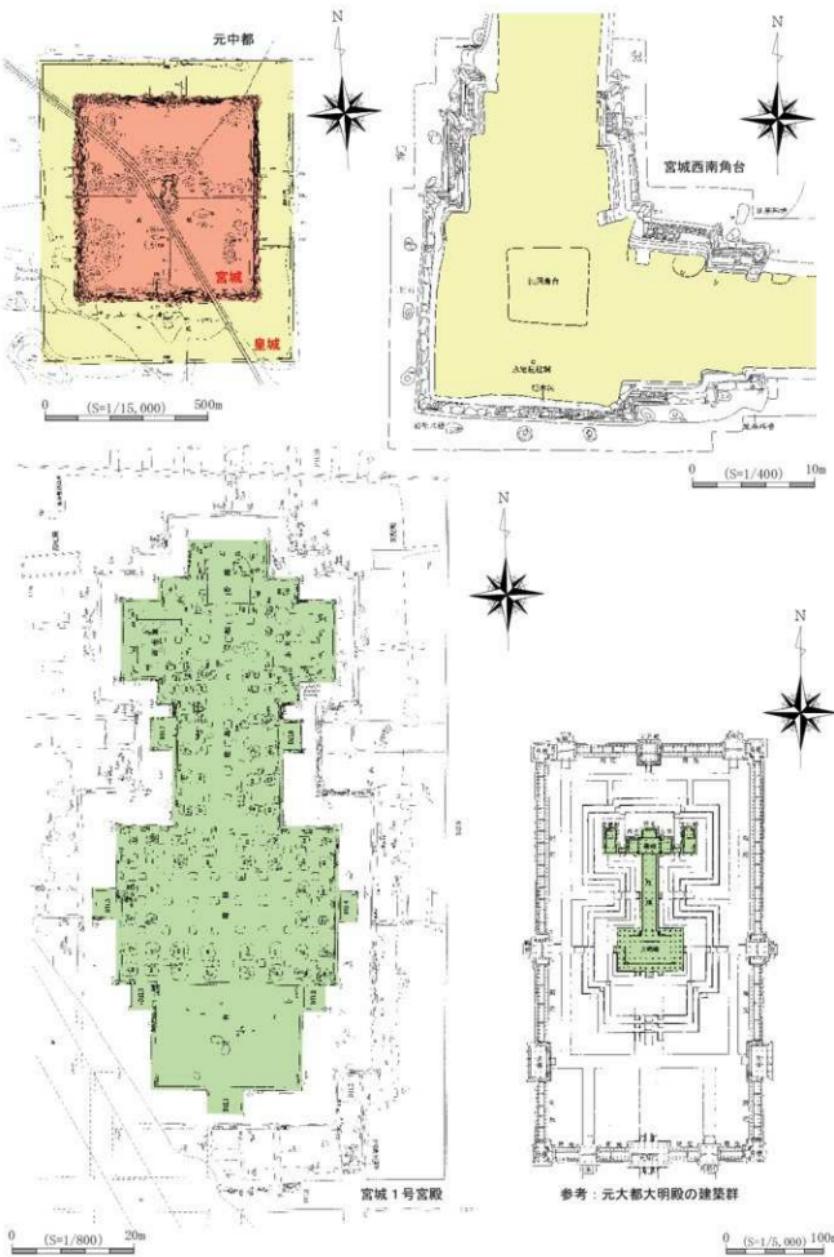


図32 元中都の城門①

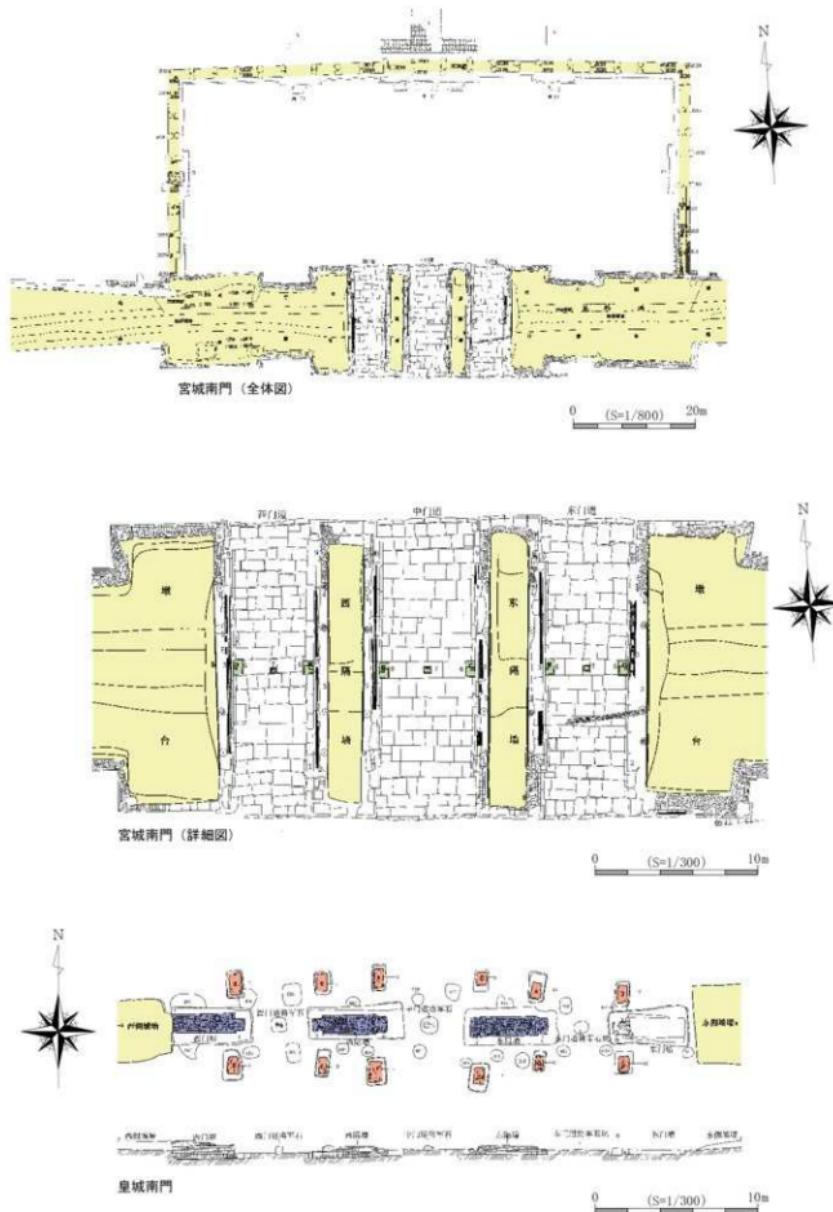


図 32 元中都の城門②

東・西の開壁は、東西の闕台に接続する。東西壁に1門（西壁・東壁門）ずつ、北壁には3門（西門・中門・東門）があり、北壁中門は三門道である。圍壁内には2列の礎石が規則的に並んでおり、開壁は埠積である。東・西壁門、および北壁東・西門は、圍壁内の礎石1間分が門で、幅5m前後の単門道となる。北壁中門のみ三門道で、中門道東西に各2個、東西門道の東端・西端に各1個の礎石が設置される。中門道幅4.95m、東西門道幅4.5mである。以上、矩形広場の門は非常に簡単な構造で「牌様式」の可能性が指摘されている。

#### 【皇城南門】(図32②) (河北省文物研究所等 2007・河北省文物研究所 2012)

II A (3)。礎石の数から、桁行5間・梁行2間の三門道殿堂式門に分類しておくが、実際には壁体と門扉施設で構成される特殊な門（桁行方向5間3戸・奥行きは門壁・隔壁南北幅）である。版築基壇や階段・スロープ、路面の舗装などを持たない非常に簡略化された城門である。東西城壁・東西門壁・東西隔壁・門道・門扉で構成される。東西門道と東西城壁の間には、東西門壁がある。埠積で構築され、門道側には門砧石を置く。門壁の壁面には漆喰が塗布され、赤色に塗られている（紅壁）。東西隔壁も埠積で構成され、東西に門砧石を置く。3門道は基本的に同じ構造をしているが、西門道幅5.3m・中門道幅6.4m・東門道幅5.1mを測る。各門道の中央には左右門砧石・將軍石が東西に並ぶ。門砧石には、門框石をはめる長方形の溝とその内側（北側）に内開き門扉の門軸のホゾ穴（海窓）がある。さらに、壁体側には門柱の円形のホゾ穴があり、その南北軸線上、門砧石の南北に各1個の「鐵柱」を承ける長方形の礎石が設置されている。南北の鐵柱礎石の中央には、長方形のホゾ穴が穿たれているが、穴の断面を見ると、いずれも門砧石方向に傾いている。このことから南北の礎石の上に置かれた木柱はセットで中央門砧石上の門柱を支える構造をしていたことがわかる。以上、構造的には牌坊式に近い簡単な門構造といえる。

### 4. 高句麗・渤海都城の門遺構

#### 4-1 高句麗の都城門

##### (1) 国内城 (図33) (吉林省文物考古研究所等 2004a)

高句麗の都城は、平地城と山城がセットになる点が知られている。中期高句麗では、国内城と丸都山城がセットになる。国内城は、いびつな方形を呈し、北壁（730m）・西壁（702m）および南壁西側部分が地上に残存している。城門に関しては、北壁に2門（西門・中門）、西壁に2門（北門・南門）が確認されている。

##### 【北壁中門】(図なし)

城内を南北に貫通する朝陽街によって、北門遺構は破壊されているが、東西の馬面が残存している。西側馬面（東辺6.5m・北辺10.25m・西辺6.25m）、東側馬面（東辺6.1m・北辺9.5m・西辺5.5m）で、両者に挟まれた中門道の幅は6.5mと推定される。

##### 【北壁西門】(図33)

I A(1)。單門道の過梁式門と考えられる。城壁・門道・馬面から構成され、持ち送り構造の石積みを主体として構築されている。壁体部分では、平面楔形の石の長辺を壁面に合わせて構築し、最下部には「基石」と呼ばれる大型の石を用いる。門道は北東隅・北西隅が直角で、門内の内側に向けてハの字状を呈する。北出口左右の直角部分に位置する「框基石」間で5.6m、門道の奥行きは13mを測る。北東の框基石から数えて5・6個目の東側基石（E5・E6）、および北西の框基石から数えて6・7個目の西側基石（W6・W7）が左右対称となる。E5・W6は門道側に突出しており、上面には長方形のホゾ穴（「門框礎石」と呼称）がある。一方、E6・W7の上面には門軸を承ける円形のホゾ穴（「門柱礎石」と呼称）があり、2つの石がセットで門砧石の役割を果たした点がわかる。北の框基石から門軸までの距離は3.15m、両者の距離は5.9mを測る。なお、この門扉施設の基石上面の壁側には、幅40-45cmの南北方向の凹溝が削りこまれている。門道左右の基石上面には、これと繋がる凹溝が続いており、木製地覆を設置した痕跡とされる。木製地覆の推定長は8.9mで、上面に排叉柱が並んでいたと考えられるが、詳細は不明である。ここでは、前漢長安城のI A形式の系譜を引く類型と考えておく。門道前面の左右には、馬面が存在する。門道から東馬面西辺までは3.6m、東馬面は東西9.5m・南北6mを測る。一方、門道から西馬面東辺までは4.1m、西馬面は東西9.3m・南北5.8mを測る。

##### 【西壁南門】(図33)

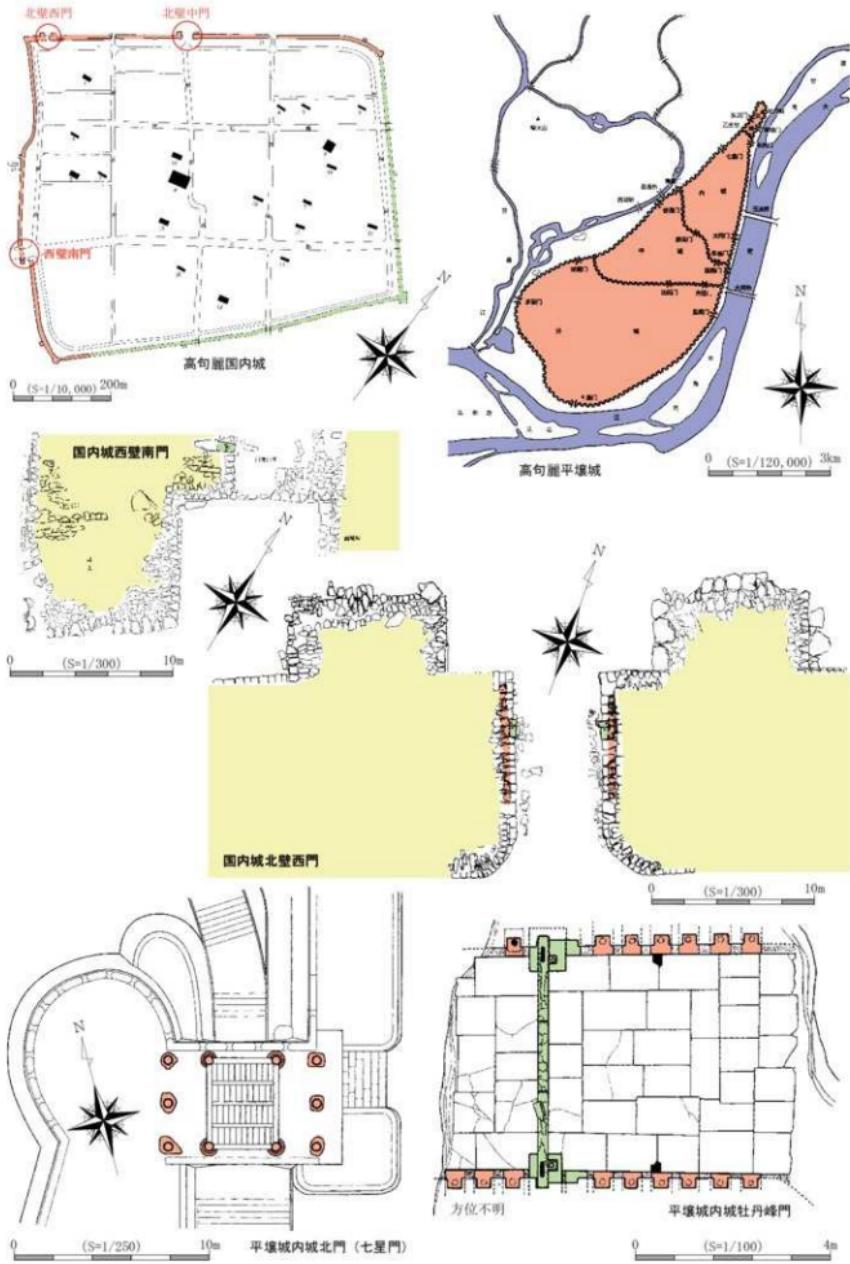


図33 高句麗国内城・平壤城の城門

I A (1)。單門道の過梁式門と考えられる。国内城の西南隅から、西城壁は北 235m の地点で、西に屈曲して更に北へ続く。この屈曲点に南向きの門道を持つ西壁南門がある。門道の西壁は比較的よく残存しているが、東壁の残りがわるく、門道幅は不明である。門道部分は南側が低く、北側が高い地形となっており「斜坡式門道」とされる。門道の西側では、門柱礎石を検出している。門柱を安置する方孔の西側には木製地覆を据えた幅 40cm の凹溝があり、北壁西門と同じ過梁式門と推定できる。なお、門の西側には東西 9.9m・南北 8.5m の南側に突出する馬面が検出されている。城壁の屈曲、スロープ式の門道、外側に突出する馬面など、西壁南門は瓮城に似た空間を作りだしており、防御機能を重視した構造と推定できる（[鄭元吉 2009](#)）。

なお、高句麗の都城門における防御性の高さは、平地城とセットになる山城で顕著である。前期高句麗の山城である五女山城では、城壁の屈曲を利用した城門が見られる（[辽宁省文物考古研究所 2004](#)）。また、国内城とセット関係にある丸都山城では、城壁を内側に屈曲させる 1 号門、門道左右の馬面状の突出によって、「瓮城」に近い空間を構成する 2 号門などが知られる（[吉林省文物考古研究所等 2004b](#)）。さらに、高句麗西部の重要な山城として知られる石台子山城では、城壁の屈曲部に門を設置する東門、門道の左右に馬面を持つ北門・西門などがある（[辽宁省文物考古研究所等 2012](#)）。これらの山城門では、いずれも單門道過梁式 I A(1) が採用されており、前期～中期高句麗では前漢長安城の影響を受けている点が想定できる。

### (2) 平壤城（図 33）（[朴灿奎 2015](#)）

後期高句麗の中心である平壤城は、大同江・普通江の合流地点に位置し、外城・中城・内城・北城から構成される。様相に関しては不明な部分も多いが、内城北門の七星門、内城内の牡丹峰門の図面が公開されている（[朴灿奎 2015](#)）。中でも、朴が牡丹峰門と呼ぶ高句麗期の城門は、小泉頼夫が 1930 年代に平壤神社参道で発掘した遺構（[小泉 1986](#)）で、その図面と共に広く存在が知られている（[成周鐸・東勇杰 1993](#)）。6 世紀後半の造営とされる牡丹峰門の図面を見ると、I B(1)、すなわち中原の唐代都城で多く見られる礎石に排叉柱を立てる單門道の過梁式門であることがわかる。門道幅は 5m ほど、門道左右に方形の礎石が配置される。断面方形の排叉柱間は内壁で充填されている。門限石・門砧石も完存し、門限石の中央付近には 1.45m 間隔で 28cm 幅の車道のための凹みがあり、さらに両端には方立穴が穿たれている。門砧石の方立穴内側には鉄製の軸受金具をはじめ込んだ軸受穴がある。門軸から 2.2m 内側の門道左右には止扉石と思われる痕跡もある。牡丹峰門の図面は、傅熹年も引用しており、「南北朝の城門では未発見だが、その同時代の影響を受けた高句麗時代の平壤羅城城門が II 型（本論 I B）に属する」と指摘している（[傅熹年 1977](#)）。

### (3) 安鶴宮（図 34）（[朴灿奎 2015](#)）

安鶴宮は、国内城から平壤城へ遷都した際の「王宮」の宮殿建築群とされる（[朴灿奎 2015](#)）。造営に際して破壊された下層の高句麗期墓葬の年代から、上限が 6 世紀中葉と指摘されており、高句麗滅亡まで使用されたと考えられている（[王飞峰 2015](#)）。菱形に近い方形を呈する城壁に围绕されており、各辺は 622m、周長 2488m と報告されている。東・西・北壁に各 1 門、南壁に 3 門（南壁西門・中門・東門）が確認されている。また、南壁中門の中軸上には、外殿・内殿・寝殿の 3 つの院落構造が見られ、各院落に南門がある。ここでは、城壁の 6 門、外殿・内殿・寝殿の南 2 門の図面を提示する。なお、安鶴宮の門遺構は、過梁式・発券式などは見られず、基本的には基壇上の礎石と木造建築で構成される殿堂式・殿門式（II A 類に分類する）である。

#### 【南壁中門】（図 34）

II A(3)。門基壇は東西 45.6m・南北 18m を測る（報告書の記述と原図の縮尺が矛盾するため、報告書の数値に合わせて原図の縮尺を調整した）。礎石は既に「流出」しており、礎石下の「塾石」が残ると記載されるが、礎石の据付坑に根石が残っている状況を示すものと思われる。痕跡は直径 3-3.5m、深さ 1-1.7m とあるので、いわゆる「礎墩」に近い構造と思われるが、以下では記述を統一し、「礎石据付坑」とする。柱の配置は、桁行 7 間（西 4.6m/6m/5.1m/6.1m/5.1m/6m/4.6m 東）・梁行 2 間（5m/5m）である。門扉施設は検出されていないが、中央および、左右から 2 間目が 6m 以上と幅広く、門道と思われる（七間三戸門）。東西端南側の礎石据付坑のみ、南に 1m ほどずれており、東西の城壁が左右に接続している。

#### 【南壁西門】（図 34）

II A(2?)。門基壇は、東西 36.1m・南北 17.6m を測る。部分的に礎石が残存する。桁行 6 間・梁行 2 間だが、

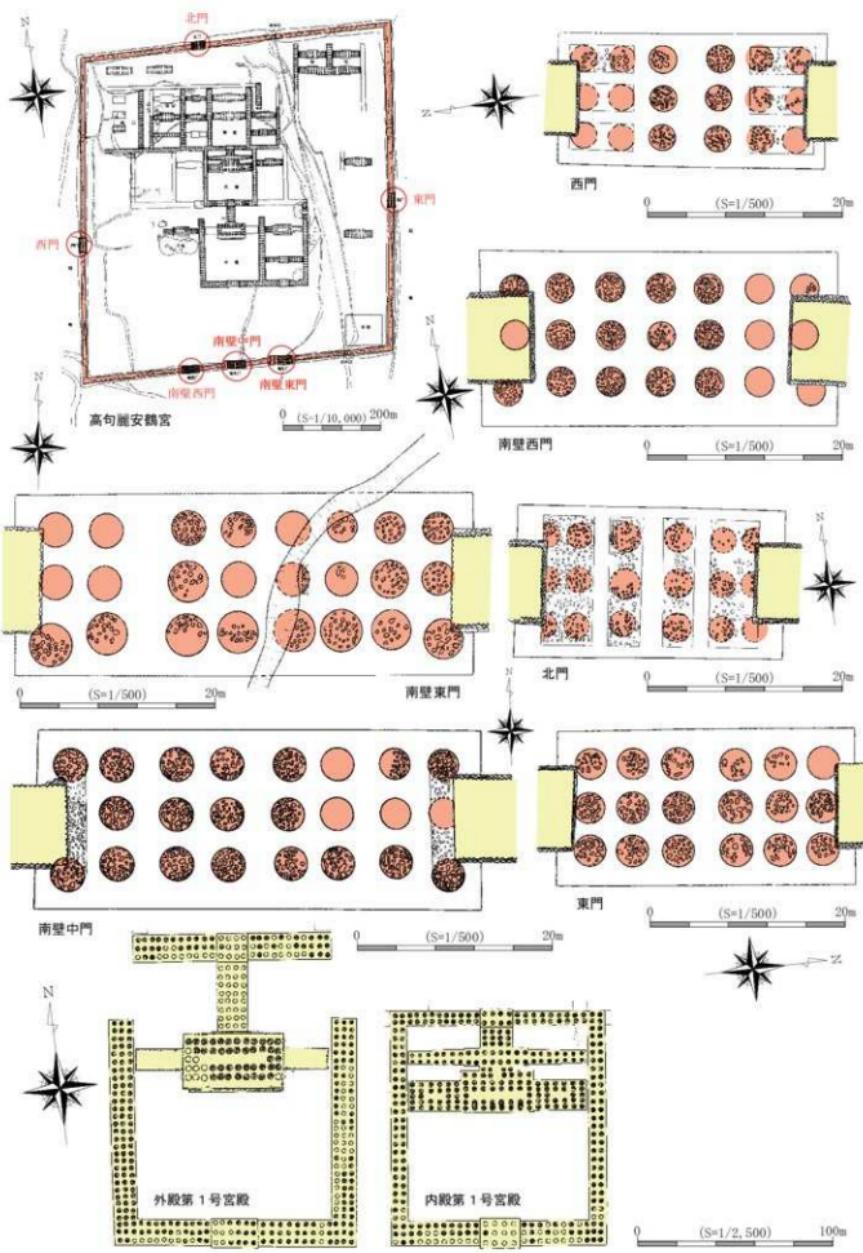


図34 高句麗安鶴宮の城門

門道数は不明。他の城門が三門道を基本にしている点から考えると、南壁西門のみ不規則な存在であり、二門道の可能性を考慮すべきかもしれない。

#### 【南壁東門】(図 34)

II A(3)。門基壇は、東西 46m・南北 18m を測る。南壁中門と同じ、桁行 7 間・梁行 2 間で、三門道と思われる。南壁中門・東門は、規模・構造はほぼ同じだが、南壁西門のみ東西規模が小さい。

#### 【北門】(図 34)

II A(3)。門基壇は東西 29m・南北 15.2m を測る。桁行 5 間・梁行 2 間、三門道と思われるが、礎石据付坑が南北方向の布掘となっている点に特徴がある。

#### 【西門】(図 34)

II A(3)。門基壇は、南北 29m・東西 14.6m を測る。桁行 5 間（北 4.3m/4.3m/6m/4.3m/4.3m 南）・梁行 2 間（4.3m/4.3m）、三門道で、両側 2 基の据付坑が長方形の布掘となる。門外には護城河が確認されている。

#### 【東門】(図 34)

II A(3)。門基壇は、南北 30m・東西 15.6m を測る。桁行 5 間（北 4.3m/4.3m/5.7m/4.3m/4.3m 南）・梁行 2 間、三門道と思われる。城内で最も低い位置にある城門で、東には護城河が検出されている。

#### 【外殿 1 号宮殿・内殿 1 号宮殿の南門】(図 34)

安鶴宮内の中軸線上には、南側にコの字状の回廊を持つ外殿・内殿・寝殿の 3 つの宮殿が、南から北に向かって配置される。それぞれの回廊には南門が設置されているが、外殿南門は 5 × 2 間、内殿南門は 3 × 2 間、寝殿南門は 3 × 1 間と徐々に規模が小さくなる規則性が認められる。なお、前述した城壁 6 門にも規則性がある。基壇規模は南壁 3 門が大きく、東・西・北門が小さい。しかし、城壁は基本的には三門道で統一されており、南壁西門のみ不規則な桁行偶数間のため、二門道の可能性が推定できる。

## 4-2 渤海の都城門

#### (1) 上京城 (図 35 ①) (黑龙江省文物考古研究所 2009)

上京城は、唐長安城を模倣した平面形で、宮城・皇城・外郭城の三重構造を特徴とする。中軸正門を中心には比較的多くの城門が発掘調査されており、分類（孙秉根・冯浩璋 2005）や建物復原（張铁宁 1994）、歴史的な位置付け（趙虹光 2012）などの研究も進んでいる。特に、宮城中枢部の構造に関しては、後述する西古城・八連城との関係性が整理されており（王培新 2014a・b）、三朝制という観点から唐長安城太極宮・大明宮との空間構造の比較も試みられている（劉曉东・李陈奇 2006）。外郭城では南壁正南門・南壁東門・北壁正門・北壁 11 号門、皇城では正南門が発掘調査されている。また、宮城では正門、南壁西の 3 号門、南壁東の 4 号門、1 号宮殿東西掖門、2 号宮殿南門・東西掖門、3 号宮殿東西掖門、5 号宮殿南門、宮城正北門が発掘・報告されている。上京城の報告に関しては、各概報と正報告（黑龙江省文物考古研究所 2009）に分かれて掲載されているが、以下、出来るだけ正報告書の記載を踏まえて整理する。

#### 【皇城南門】(図 35 ①) (黑龙江省文物考古研究所 2009)

II A(3)。三門道の殿堂式門である。基壇は東西 30m × 南北 11.35m を測り、東西は皇城南壁に接続する。四周は石積みによる外装で、南北両側に各 3 つのスロープがある。基壇上には、桁行 7 間（西 3.6m/3.9m × 5 /3.6m 東）・梁行 2 間（4.3m 等間）の礎石建物の痕跡が残る。礎石は玄武岩製で、直径 1.3m ほどの据付坑の上に設置されている。東西端から数えて、1・3・5・7 間目に石積隔壁が存在し、東西両端の礎石上には南北方向の隔壁もある。南北スロープに対応する隔壁がない部分、すなわち 2・4・6 間目が門道となり、その幅は約 3.9m である。基壇上からは、炭化木材・漆喰・瓦などの大量の建築部材が出土している。

#### 【第 2 号宮殿南門】(図 35 ②) (黑龙江省文物考古研究所 2009)

第 2 号宮殿の南側には、コの字状の「廊廡」と呼ばれる回廊（飛廊）がある。東廊・西廊・南廊で構成されるが、南廊中央に単体の門遺構が存在する。報告では「南廊中央門」とされるが、ここでは「第 2 号宮殿南門」としておく。II A(1)、單門道、木造建築の殿門である。基壇は東西 23.8m × 南北 12.1m を測り、四周に石積外装と雨落溝がめぐる。基壇の南北中央には、スロープがあり、北が幅 4.25m・南が幅 4.3m を測る。

基壇上には、桁行5間・梁行2間(4m等間)の礎石建物の痕跡が残る。東西端の南北礎石内側には、門と連接する南廊の礎石が設置されており、「双礎石」の状態が見られる。

#### 【第2号宮殿東西掖門】(図35②)(黒龍江省文物考古研究所 2009)

II C(1)、第2号宮殿の東西に位置する同規模・同構造の単門道の宮門である。基壇は、東掖門(東西7.4m×南北12.4m)、西掖門(東西7.4m×12.5m)を測り。基壇外装は切石で、周囲には雨落溝がめぐる。基壇の南北にはスロープが取り付き、東西には壁体が接続する。基壇上には6個の礎石が残り、桁行1間(4.2m)・梁行2間(3.2m等間)の建物が復原できる。東掖門中央東西には、木製門枕・門檻が残存する。木製門枕の北部分には、鉄製門枢も残存する。東西の門枕間の距離は2.4mを測り、内開きの門扉が想定できる。

#### 【第1・3号宮殿東西門】(図35③)(黒龍江省文物考古工作隊 1985a・黒龍江省文物考古研究所 2009)

第2号宮殿東西の東西掖門とは異なる建築様式だが、中軸上の第1・3号宮殿の東西にも、南北方向の通行のための門道構を検出している。特に第1号宮殿は、東西廊廡との間に東西15m・南北12mの基壇遺構が存在しており、門樓建築の存在が指摘されている。

#### 【外郭城正南門】(図35③)(黒龍江省文物考古研究所 2009)

I A(3)。三門道の過梁式門である。東西側門と中央門で構成される特殊な構造で、東西57.6mを測る。中央門は東西墩台、中門道で構成される。左右墩台は東西11.1m×南北11.6mで、自然石を積み上げて構築され、外周には黄土と漆喰が塗布される。墩台上部には、東西南北3列ずつの9個の円形柱穴が認められ、部分的に柱根が炭化して残存する。また、円形柱穴に対応するように、南北縁辺部には方形・長方形の柱痕跡も見られ、「補柱」と報告されている。門道は幅4.7mで、東西の木製地覆と敷石で構成される。敷石の範囲は幅4.2mで、東西の木製地覆にはカバノキが使用されている。墩台の東西外側には、東西6.5m・南北3.3mの壁体が接続する。左右側門の構造はほぼ同じで、東西墩台および門道で構成される。墩台は東西2m×南北7.2m、門道幅は4.5mを測る。墩台の外側南北には、合計4個の柱穴が残存する。門道左右には板石を南北に並べて、その上に幅0.2mの排叉柱の基礎となる木製地覆を設置している。

#### 【5号宮殿南門】(図35④)(黒龍江省文物考古研究所 2009)

II C(1)。第4号宮殿と第5号宮殿の間に位置する東西隔壁中央に位置する、單門道の宮門である。基壇は東西6.15m×南北10.4mを測り、東西には玄武岩切石積の隔壁が接続する。基壇外装は埴積で、外側には幅0.5mの雨落溝がめぐる。基壇の南北には、スロープが取り付く。基壇上には、4個の礎石が残り、東西間隔4.75m、南北間隔6.25mを測る。報告書では、桁行1間・梁行1間の建物とされるが、前述した第2号宮殿東西掖門と全く同じ構造のため、梁行方向の中央、城壁部分に礎石が存在した可能性が高い。その場合、桁行1間(4.75m)・梁行2間(3.13m)となる。中央には炭化した木製門枕・門檻が残存しており、門枕間で2.5mを測る。門南部の東西、城壁の南側では小型の建物を検出している。

#### 【外郭城南壁東門】(図35④)(中国社会科学院考古研究所 1997)

I A(1)。單門道の過梁式門である。門道・東西墩台・左右の外郭城南壁で構成される。門道は、幅5.4-5.5m、奥行き6.1-6.4mを測る。門道東西には、大きさや形状がバラバラな土襯石を南北に並べ、その上に片側2本の木製地覆が設置される。西側の木製地覆が炭化して残存するが、1本の長さは6.5m・幅0.35mを測る。左右木製地覆の幅を引くと、門道幅は4.0mほどと推定できる。東西墩台は石積みで構築され、西墩台(東西3.6m×南北6.1m)・東墩台(東西3.2m×6.4m)を測る。西墩台上の西縁には南北に4つの礎石がある。西南隅と西北隅を結ぶ直線状で、南から2.1m・1.7m・2.1mを測る。墩台中央の南北にも対応する礎石があり、西南・西北隅の礎石から東に1.8mを測る。礎石上には炭化した方形・長方形の木柱が残存する。西墩台の東縁には礎石が存在しない点から、この部分は門道西側の木製地覆上の排叉柱を利用したものと考えられ、墩台上に樓閣が想定できる。東墩台の東縁にも同じ痕跡があり、南から2.1m・2.0m・2.1mを測る。東墩台の基壇南北中央の礎石はなくなっているが、東西墩台は同じ構造と推定できる。西墩台西南隅・西北隅と東墩台東南隅・東北隅を範囲とした東西12.3m・南北6.1m、桁行5間・梁行3間で門道左右の木製地覆上の「永定柱」を利用した「樓閣式建築」と報告される。

#### 【外郭城北壁11号門】(図35④)(黒龍江省文物考古研究所等 1999)

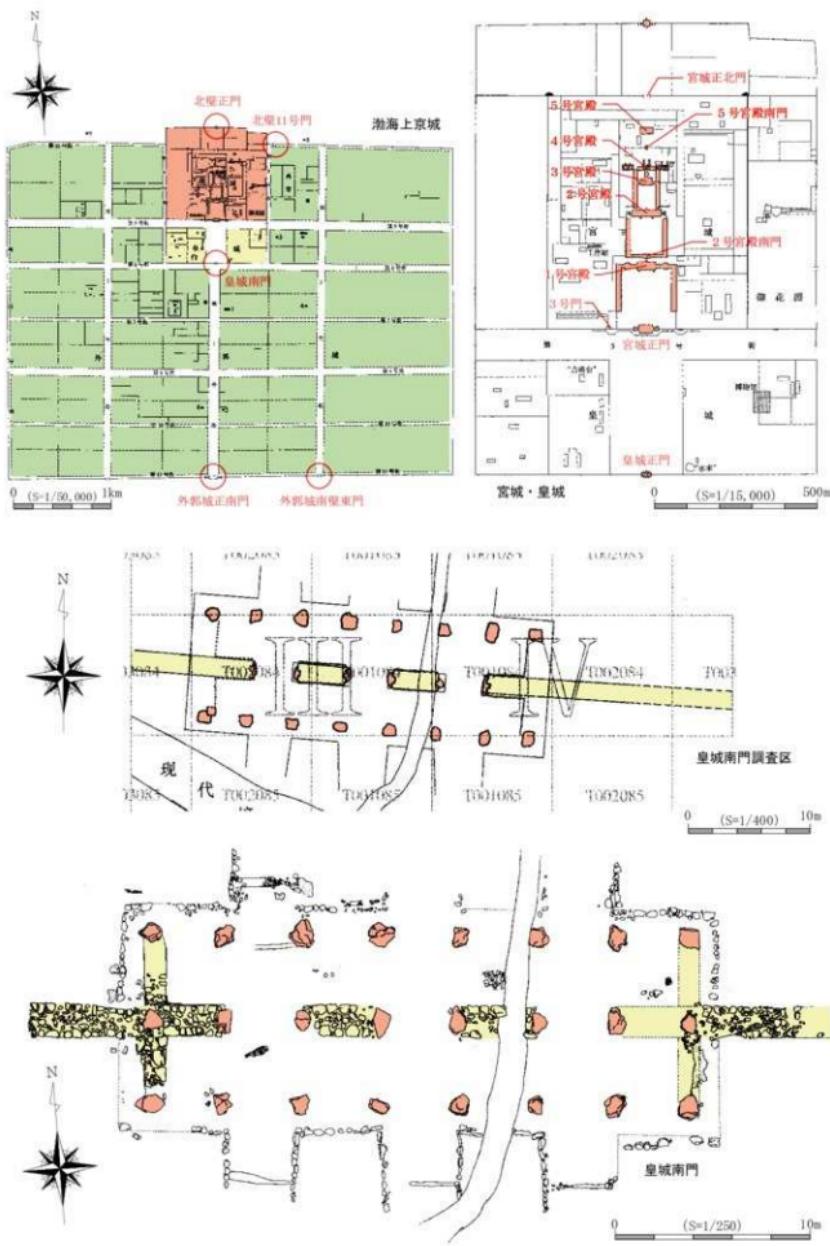


図35 渤海上京城の城門①

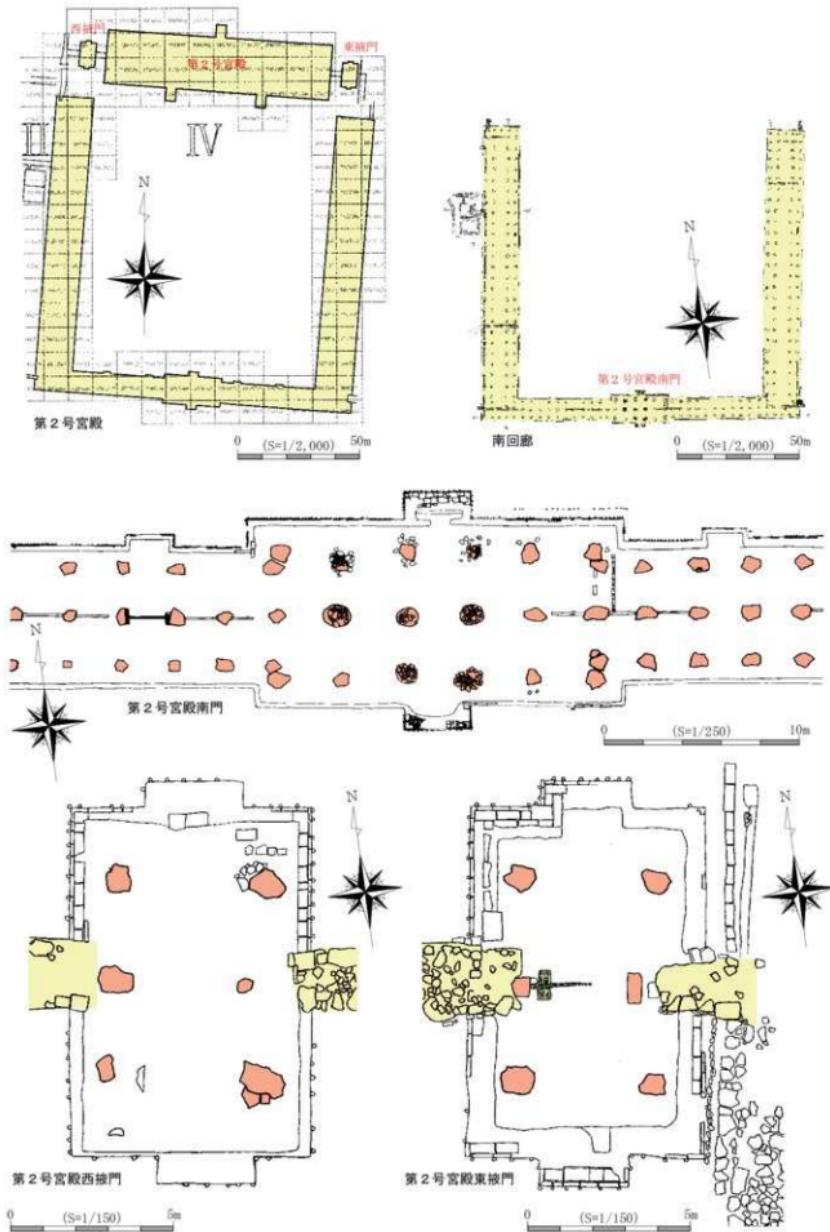


図 35 渤海上京城の城門②

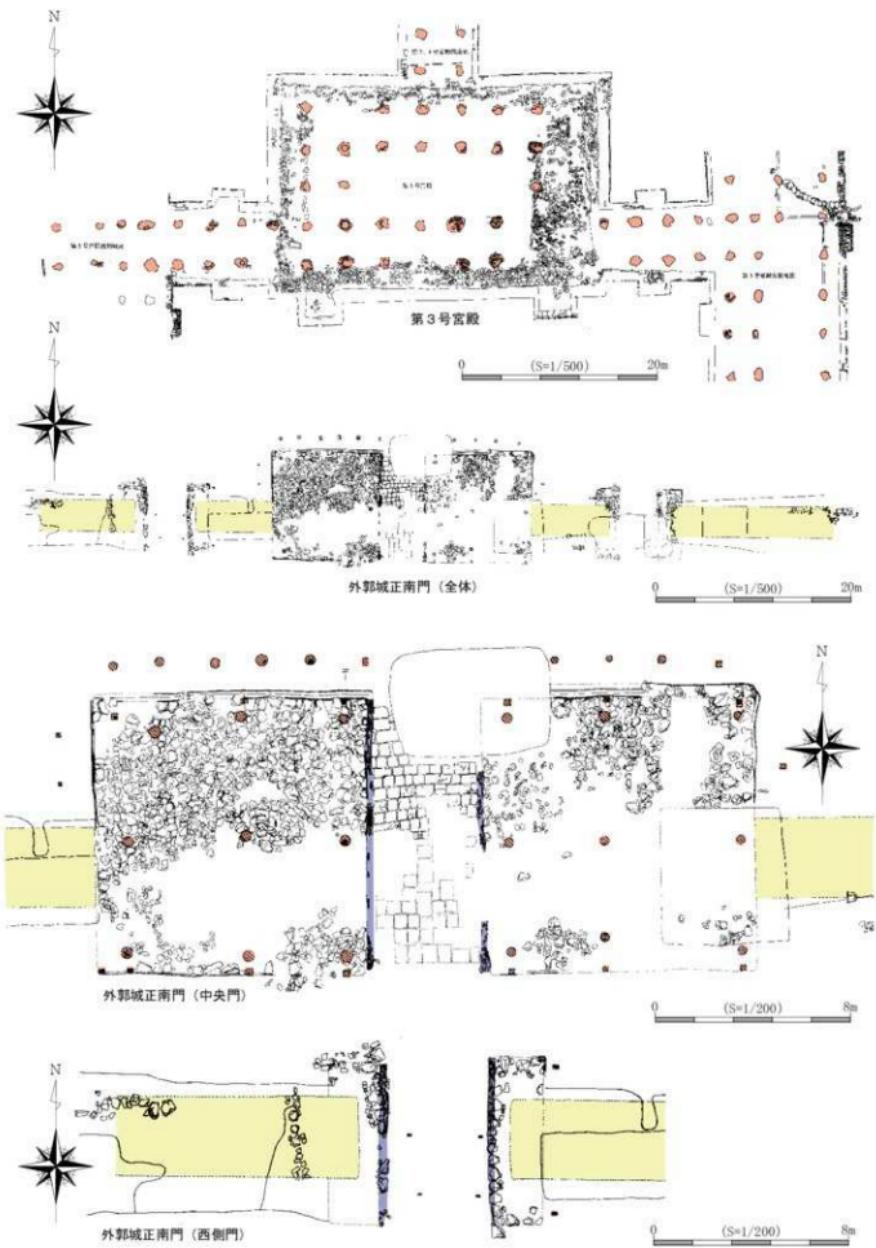


図 35 渤海上京城の城門③

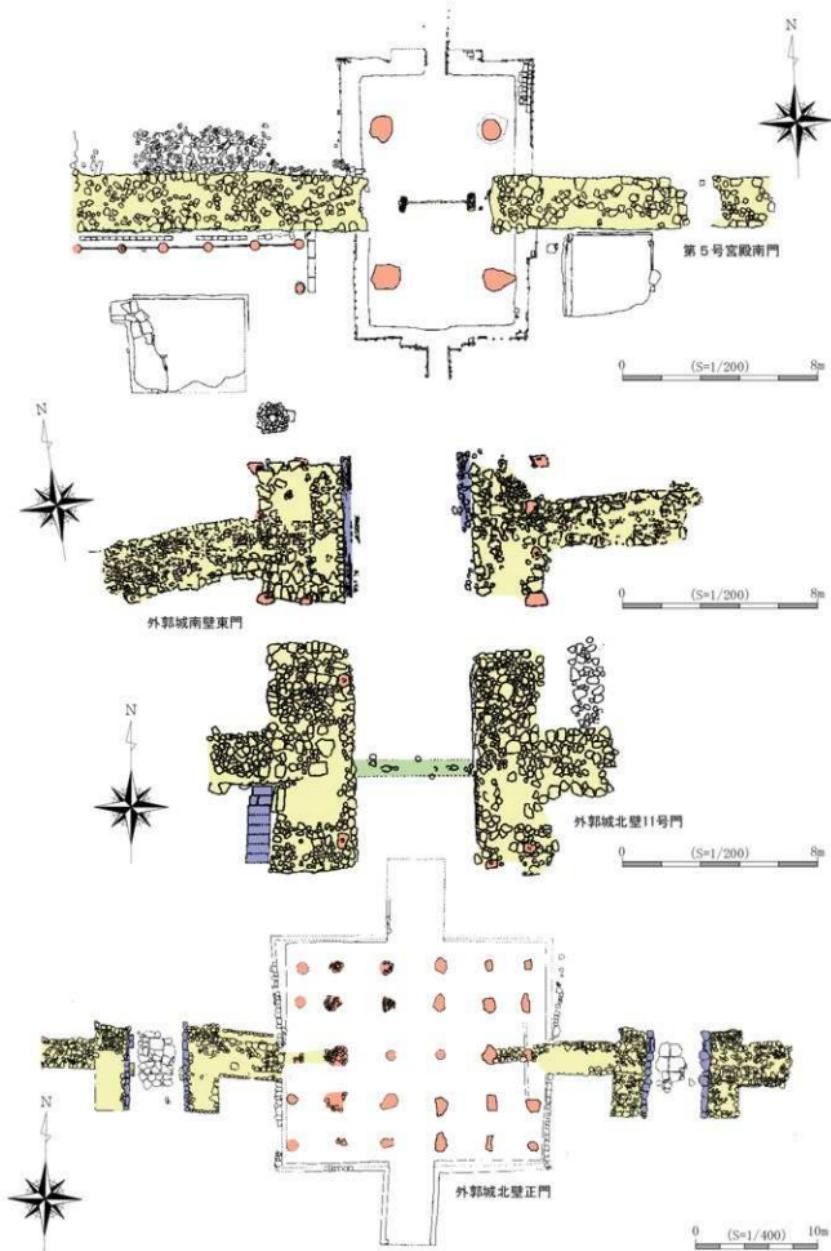


図35 渤海上京城の城門④

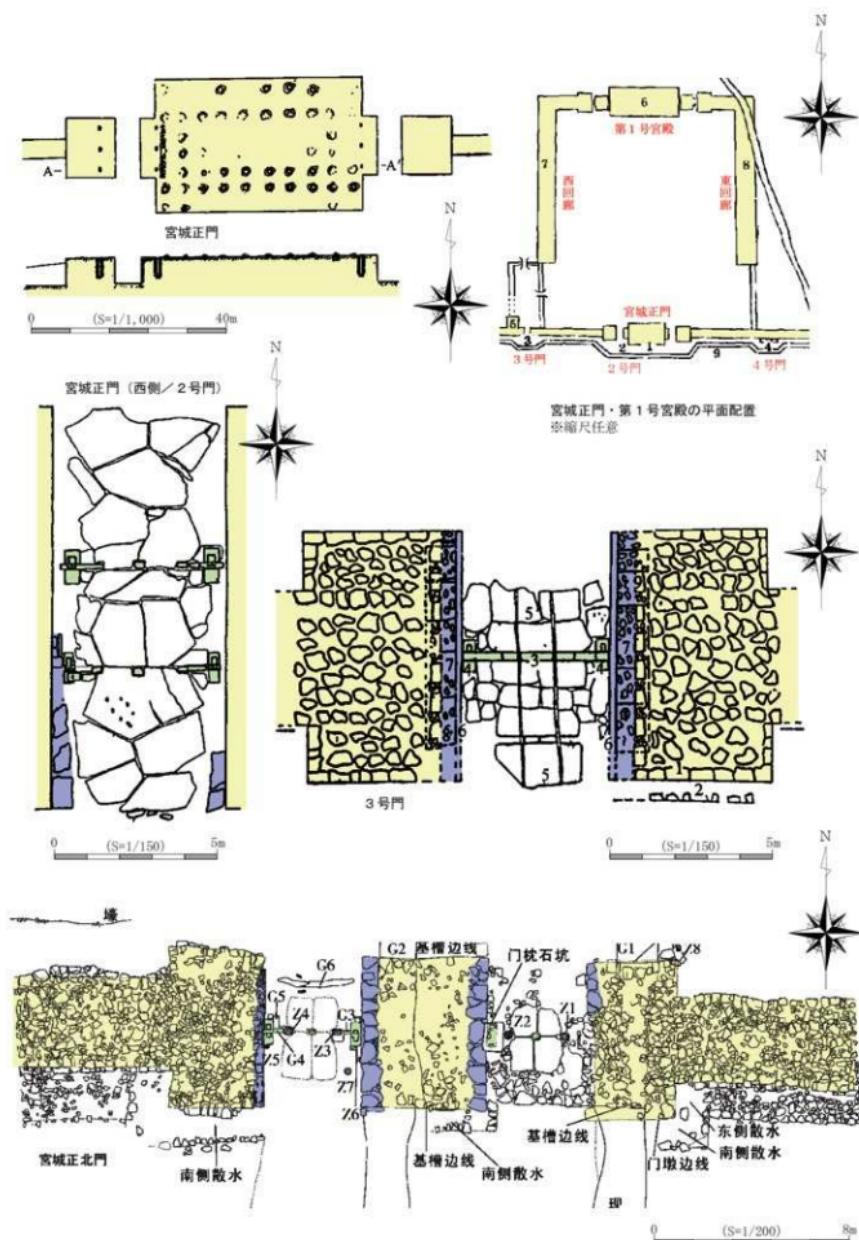


図 35 渤海上京城の城門⑤

I A(1)。單門道の過梁式門である。早期・晚期の二時期の変遷が指摘されている。門道と左右の墩台（東西 3-3.3m・南北 6-6.5m）で構成される。早期の墩台は石積みで構築され、周囲には漆喰が塗布される。墩台上には、東西南北 2 列ずつ合計 4 個の木柱の痕跡がある。西側墩台の西南側には、門楼に登るための階段を検出している。晚期には、墩台南北にさらに石積みが加えられると同時に、東西方向に 1.5m 間隔で 2 つの柱を立てている。門道左右の底部には、土襯石が並べられ、その上には炭化した長さ 3m の木製地覆が残存する。門道幅は 5.2m、奥行きは 7.5m を測り、北から 3.5m・南から 4m の場所に門檻の痕跡が残り、中央部分には將軍石も残存する。

#### 【外郭城北壁正門】(図 35④) (黒龍江省文物考古研究所等 2000・黒龍江省文物考古研究所 2009)

II A・I A(3)。中央の殿堂式門と左右の過梁式側門で構成される特殊な門遺構である。城門全体は、東西 52.1m・南北 30.8m を測る。中央基壇は、東西 21.9-22.6m・南北 18.4m で、四周は石積み、その外側には雨落溝がめぐる。基壇南北中央には、スロープが取り付く。基壇上には部分的に礎石および礎石据付坑が残存するが、中央を門道として利用する桁行 5 間（西 3.1m/4.2m/4.2m/4.2m/3.1m 東）・梁行 4 間（南 3.1m/4.2m/4.2m/3.1m 北）の殿堂式木造門と考えられる。中央基壇の中央東西には、東西 5.3m・南北 2.2m の壁体があり、東西側門の墩台と接続する。東西の側門はほぼ同じ構造で、墩台は東西 2.4m × 南北 7m、門道幅は 5.2m を測る。門道中央には幅 2.7m の敷石路面があり、幅 0.8m の砂土帯を挟んで、東西縁辺に南北方向の土襯石を並べる。土襯石の上には木製地覆が設置され、排叉柱が立てられていたと想定できる。墩台北縁から南へ 0.5m、そこからさらに 1.6m 南の位置の門道左右に合計 4 カ所の門扉施設の痕跡があり、左右の距離は 3.6m を測る。

#### 【宮城正門】(図 35⑤) (黒龍江省文物考古工作隊 1985b)

1982～1984 年に宮城正門、および西門（3 号門）・東門（4 号門）が発掘されている。宮城正門は、中央の基壇、東側門：1 号門、西側門：2 号門で構成される。中央の独立した門楼と左右の過梁式 2 門で構成される類例のない特殊な門遺構 II A・I A(2) である。中央基壇は左右に凸形の墩台を持つ構造で、突出部分を除くと、東西 42m × 南北 27m を測る。外装は二重となっており、外壁は切石積で構築される。基壇上には、大部分の礎石が原位置で残存しており、東西 10 列・南北 7 列、中央の 4 個が減柱され、その数は 66 個を数える。すなわち、桁行 9 間（3.8m 等間）・梁行 6 間（3.5m 等間）の礎石建物である。東西の突出部分には、南北に 3 個並ぶ長方形の柱穴が検出されており、1 号門東墩台・2 号門西墩台の柱穴と対応する。西墩台は、東西 10m・南北 12m・現高 5m を測り、玄武岩の切石外装の上に漆喰が塗布される。西墩台上には、東壁から 3m の位置に南北方向の 3 個の柱穴が並び、それぞれの距離は 3.2m を測る。基底部は、切石で固められており、底には礎石が残る。西門道は幅 5m・奥行き 12m で、不規則な形の玄武岩の板石で舗装されている。門道内に 2 カ所、南北 2.85m の距離に内（北）開きの門扉施設がある。東西の門砧石と門檻の凹槽、中央の將軍石が確認できる。門砧石間の東西距離は、4.3m を測る。門道左右の壁面には、15 個の垂直の柱痕跡が左右対称に残存する。柱の直径は 0.35m で、柱の南北距離は 0.45m を測る。排叉柱間は、石積で充填され壁体には漆喰が塗布される。排叉柱の下面には、木製地覆、その下に土襯石が残る。

#### 【宮城南壁 3・4 号門】(図 35⑥) (黒龍江省文物考古工作隊 1985b)

3 号門は、宮城正門の 2 号門から西に 57m に位置する。I A(1)、單門道の過梁式門である。東西墩台は、東西約 4.2m・南北約 7.6m で、玄武岩を積み上げて構築し、外装には切石を使用している。東墩台の南側には、雨落溝も残存する。門道は幅 4.6m・奥行き 7.6m の單門道で、玄武岩の板石を使用して舗装されている。敷石上面には車轍痕が認められる。門道中央、および南側には 2 カ所の門扉施設がある。中央部分の残りがよく、東西の門砧石、門限石が残存する。門砧石と墩台壁面との間、0.95m には土襯石が並べられ、そこに設置された木製地覆の上に排叉柱が立てられていた。壁面には、漆喰が施される。

4 号門は、宮城正門の 1 号門から東に 57m に位置する。I A(1)、單門道の過梁式門である。4 号門は門道幅 4.7m、東西墩台幅 4.5m で、3 号門とほぼ同じ構造で東西対称の関係にある門とされる。

#### 【宮城正北門】(図 35⑦) (黒龍江省文物考古研究所 2015)

I A(2)。第 5 号宮殿の北 92m、外郭城正北門の南 215m、宮城北壁中央に位置する。東西城壁・東西墩台・

1隔壁・2門道で構成される過梁式門である。東墩台（東西3.4~3.5m・南北6.7m）・西墩台（東西3.5m・南北6.5~6.7m）は石積みで構築され、南側に雨落溝がある。中央隔壁も石積みで構築され、東西5.2m・南北6.5mを測り、南側には同じく雨落溝が見られる。東門道（幅4.1~4.2m・奥行き6.6m）・西門道（幅4.1m・奥行き6.7m）ともに残存状況がよい。特に西門道の残りが良く、東西端には南北方向に10個の土襻石（報告では「門道石」）が並べられており、西側には土襻石上に長さ5.65m・幅0.4mの排叉柱の基礎となる木製地盤が残存する。門道中央には、4つの大きな石板が敷かれており、その中央の十字中心部分が長方形に削り抜かれており、將軍石がはめ込まれる。石板の両側中央には、柱穴（Z1~4）がある。西門道中央の東西には、門砧石が残存しており、両者の距離は3.2mを測る。門砧石間にには、柱穴2個と將軍石が位置する。なお、門砧石のすぐ南側にも柱穴（Z5・Z6）が検出されている。

### （2）西古城（図36①）

西古城は、外城（北壁632m・南壁628m・東壁734m・西壁726m）と内城（北壁187m・南壁188m・東壁311m・西壁307m）の二重構造を特徴とする。外城門は、北壁中央に1門、南壁中央に1門、東壁にも1門検出されているが、西壁には城門が確認されていない。外城南門・北門は、発掘調査されている。一方、内城門に関しては、南門、および中枢部（1~4号宮殿）と5号宮殿の間にある東西隔壁中央門（内城隔壁門）が発掘されている。なお、外城南門・内城隔壁門に関しては正報告書が刊行されているが、外城北門・内城南門に関しては、簡報で簡単な図面が示されるのみである。

#### 【外城南門】（図36①）（吉林省文物考古研究所等 2007）

城門の破壊が進んでおり、門構造などは不明。単門道。門道幅は3.36m、奥行き8.4mに復原されている。門道東西には、河卵石を用いた墩台の基礎が残る。東墩台は東西4.2~4.4m・奥行き8.4m、西墩台は東西4.4~4.7m・奥行き8.4mを測る。墩台は城壁を包み込むように構築されており、北端・南端には大型の石を利用している。一部には、漆喰の痕跡が残る。また、墩台上部には比較的大きな石が確認でき、報告では礎石と関係性を指摘している。城門の構造は不明だが、後述する八連城外城南門と近い構造と想定できる。

#### 【内城隔壁門】（図36①）（吉林省文物考古研究所等 2007）

II C(1)。単門道の小型殿門である。2号宮殿と5号宮殿の間にある隔壁中央に所在する門で、単門道の木造門である。前述した渤海海上京城2号宮殿東西掖門、同5号宮殿南門と類似する、いわゆる四脚門である。門は、長方形の版築基壇の上にあり、北側が破壊されているが基壇推定範囲は東西7.3m・南北9.8mとされる。基壇上には、6個の礎石と据付坑が残存する。木造建築の門は、桁行1間（4.25m）・梁行2間（2.5m等間）の規模で、報告では「瓦檐門樓建築」と呼称されている。中央に門扉があったと思われ、中央礎石間にには帶状の河卵石の堆積が認められる。基壇南北には階段が存在したとされ、歩行用の門と推定できる。

#### 【外城北門】（図36①）（吉林省文物考古研究所等 2016）

門は後世の破壊が著しく、構造は不明だが、十字形の掘込地業を検出している。範囲は東西5.5m、南北5.45mを測る。東西の外城北壁は残存しており、南北5.4mの石積で構築される。詳しい構造は不明だが、遺構の状況からして単門道の過梁式門の可能性が高い。

#### 【内城南門】（図36①）（吉林省文物考古研究所等 2016）

II A(3?)。基壇は東西26.4m・南北16.5mの長方形を呈する。周囲は、黒色・黄色粘土を塗状に固めた「土坯（日干煉瓦）」による外装で、最も残存している部分で5段積まで確認できる。基壇の南北中央にはスロープがあり、幅は3.2~3.3mを測る。基壇南北の破壊が進んでいるため、東西スロープの存在は確認できない。基壇上にも礎石や据付坑は確認できず、周囲の雨落溝なども検出されていない。基壇上では、東西方向の3つの布掘地業（基槽）が検出されており、それぞれ東西23.3m・南北1.6m・深さ0.7mを測り、南北間隔は3.5mである。布掘地業内部は、河卵石と赤褐色土が交互に9層敷き詰められており、この部分の上に礎石・柱などが存在していたと推定されている。なお、東西には内城南壁が基壇に接続している。西古城内城南門の規模は、後述する八連城内城南門とほぼ共通しており、三門道の殿堂式門の可能性が高い。

### （3）八連城（図36①）（吉林省文物考古研究所等 2014）

八連城は、外城（東西707m・南北745m）と内城（東西216m・南北318m）の二重構造を特徴とする。外城

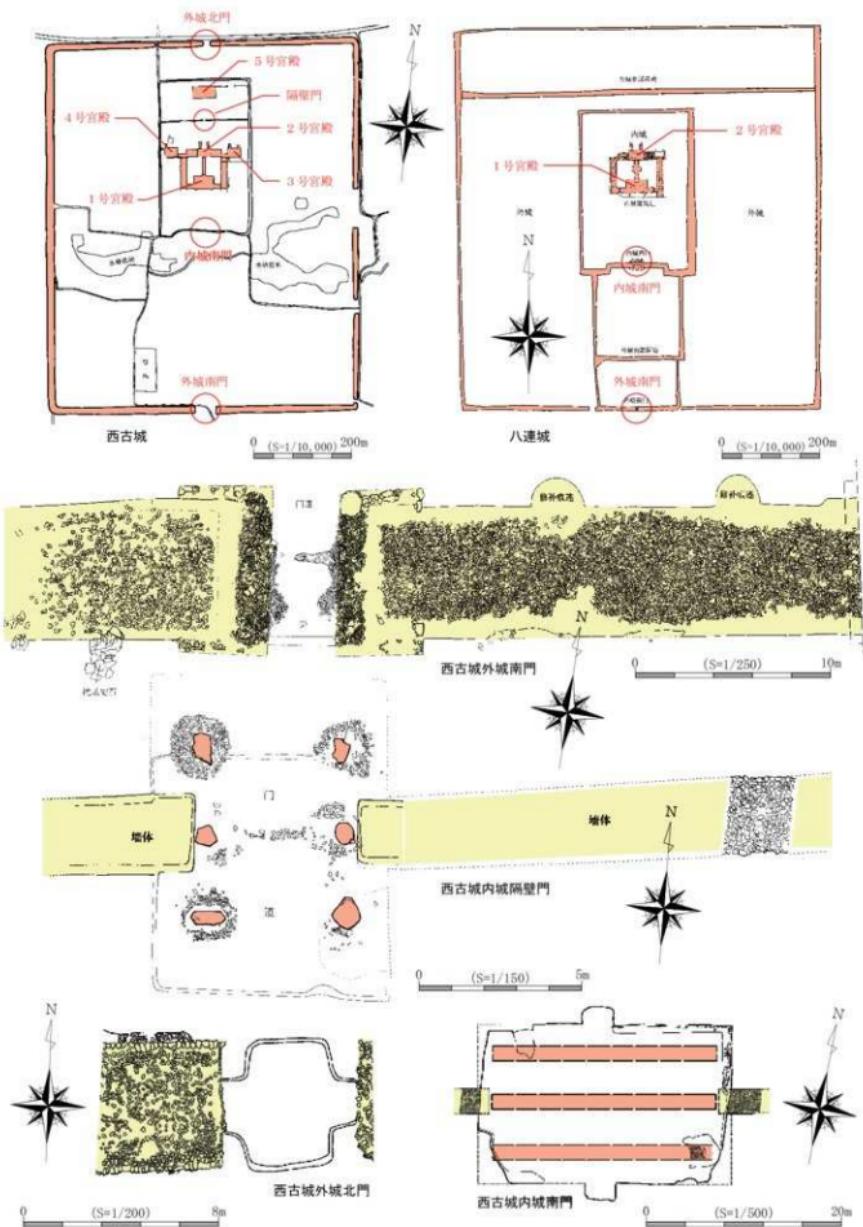


図36 渤海西古城・八連城の城門①

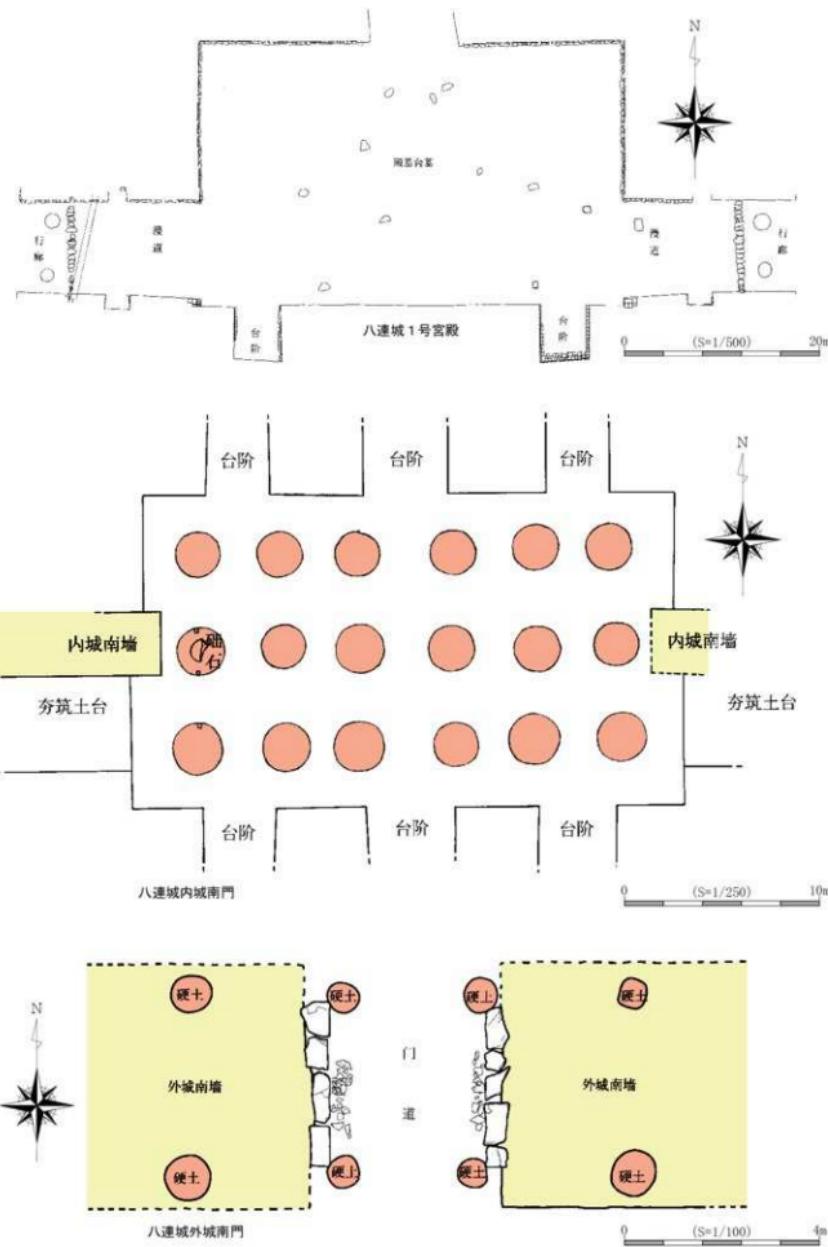


図36 渤海西古城・八連城の城門②

の四周中央、および内城の東・西・南壁中央に門が想定されているが、確定しているのは中心軸上に位置する外城南門・内城南門だけである。内城北側に中枢部が位置し、廊道と回廊で連結された南側の1号宮殿・北側の2号宮殿で構成される。1号宮殿（図36②）は、殿前広場を持つ「前朝」空間（上京城3号宮殿に相当）で、2号宮殿は「後寝」空間（後宮寝殿、上京城4号宮殿に相当）とされる。また、内城南門とその南側の閉鎖空間は、国家的な儀礼空間と想定されている。以下の記載は、報告書に準拠する。

#### 【内城南門】（図36②）（吉林省文考古研究所等 2014）

II A(3)。三門道の大型殿堂式門である。基壇は東西27.4~38.6m・南北16.2mの長方形で、東西には内城南壁が接続している。接続部分の城壁幅は3.3mで、基壇・城壁には外装博が施され、表面には漆喰が塗布される。東西城壁の南側には、版築土台が検出され、城壁上の瓦や漆喰が崩落して堆積していた。基壇上には、桁行5間・梁行2間の礎石建物の痕跡が残る。直径2.5m前後の円形の礎石据付坑には、河卵石と黄色版築が交互に敷かれ、その上に板状の礎石が置かれる。基壇南北には各3つの階段が設置されており、その幅は基壇上の柱間と対応しており、中央階段が4.5m幅、西端階段が3.5m幅、東端階段が3.5~4m幅を測る。

#### 【外城南門】（図36②）（吉林省文考古研究所等 2014）

I A(1)。外城南門は、規模の小さな単門道過梁式門とされる。門道は幅3.2m、奥行き5.2mを測る。東西の城壁を墩台として利用し、門道左右には西側4個、東側5個の大型の石を並べる。石はまっすぐな面を内側にして直線的に並べられており、報告では墩台両壁の石積底部の土襯石とされる。門道中央部の東西、土襯石の内側には南北1.6mほどの範囲に破碎された石を敷く部分があり、報告ではこの部分に排叉柱を並べる過梁式門と推定する。なお、土襯石の南北、および墩台内に円形の硬土を検出している。城門の木造建築に関連すると指摘されるが、構造は不明。柱列と考えると、桁行3間（3.2m/2.8m/3.2m）・梁行2間（3.7m）となる。報告では過梁式門とされるが、実際には唐長安城興慶宮の勤政殿本樓などの殿堂式の構造に近い。

## 5. 日本都城の門造構

### 5-1 7世紀の都城門

#### （1）飛鳥京（淨御原宮）（図37）

#### 【内郭南門 SB8010】（図37）（奈良県立橿原考古学研究所 2008）

内郭前殿SB7910の南側で検出した桁行5間（10尺等間・推定総長14.8m）・梁行2間（9尺2間・総長5.4m）の五間門（掘立柱建物）である。西側妻の中央に掘立柱群SA8020がとりつく。基壇などは検出されていないが、南側に雨落溝SD8021、北側に石敷SX8022が確認されている。階段や雨落溝の途切れ目などは確認されていないものの、報告では中央3間に扉を想定し五間三戸門に復原している。

#### 【エビノコ西門 SB7402】（図37）（奈良県立橿原考古学研究所 1982）

正殿SB7701西側で検出した桁行5間（10尺等間・総長14.5m）・梁行2間（9尺2間・総長5.4m）、南北棟の五間門（掘立柱建物）である。内郭南門SB8010と同規模、東西の雨落溝もほぼ同様の構造である。

#### （2）大津宮（図37）

#### 【内裏南門 SB8001】（図37）（滋賀県教育委員会文化部文化財保護課ほか 1992）

大津宮推定中軸線上に位置する門SB8001（掘立柱建物）は、東北隅部分のみが発掘され、桁行4間以上、梁行2間と推定されている。東側には、回廊SC001が取り付く。柱穴は一辺1.6mほどの方形で、深さは1.1~1.2mを測る。判明している柱間寸法は、桁行（西3.24m/3.14m/3.1m/2.7m）・梁行3.2mである。回廊SC001の南側柱列は、SB001の棟通りの柱列と一致し、これを中軸として南に折り返して複廊と推定されている。桁行2.6m・梁行2.08mで、SB001との接続部分のみ1.51mと近接する。なお、SB001に関しては七間門に復原されるが、黒崎直は地中梁の組み合わせパターンから五間門の可能性を指摘した（黒崎2001）。

#### （3）難波宮（図38①）

#### 【前期難波宮内裏南門 SB8301・東八角殿 SB875401・西八角殿 SB4201】（図38①・図46）（大阪市文化財協会 1995・大阪市文化財協会 2005）

孝徳朝の長柄豊崎宮とされる前期難波宮の内裏南門は、日本都城史上最大級の門であると同時に、左右に

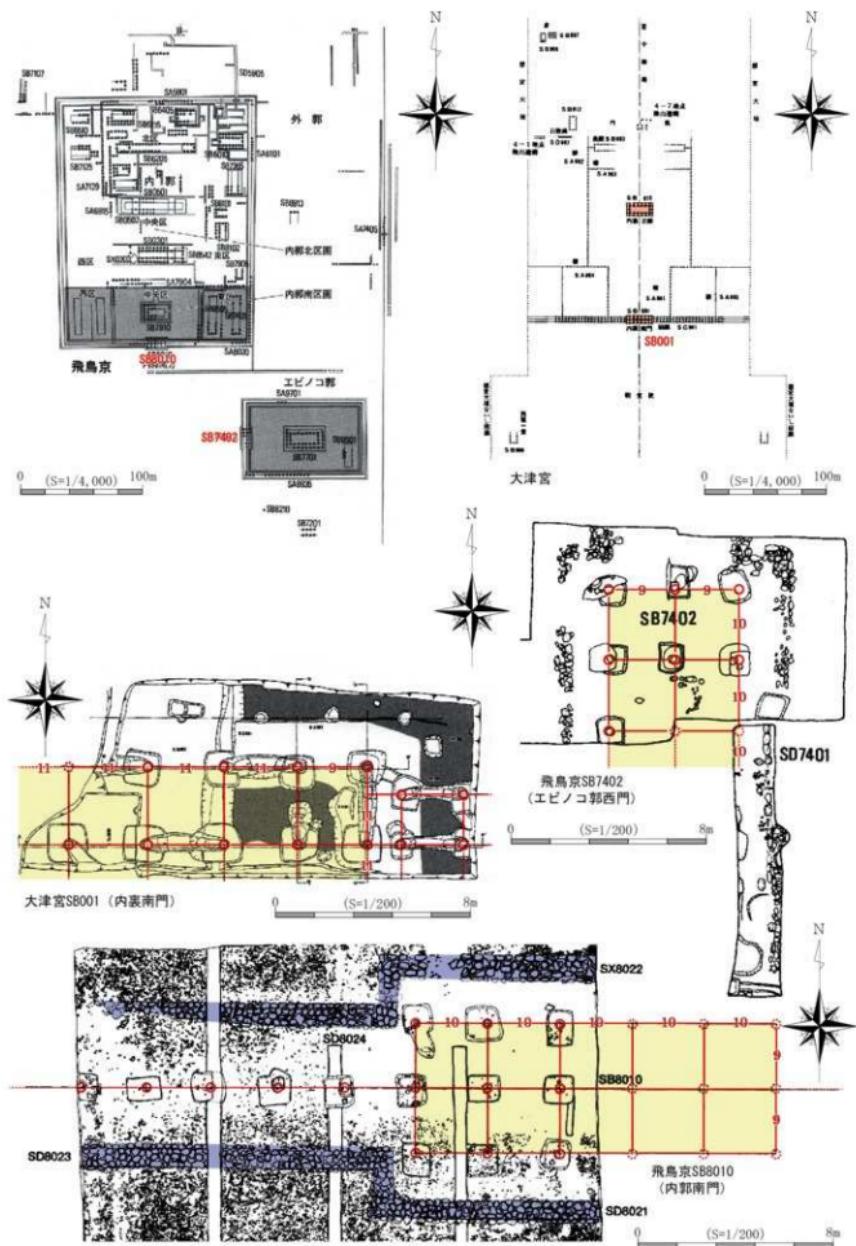


図37 飛鳥京・大津宮の門遺構

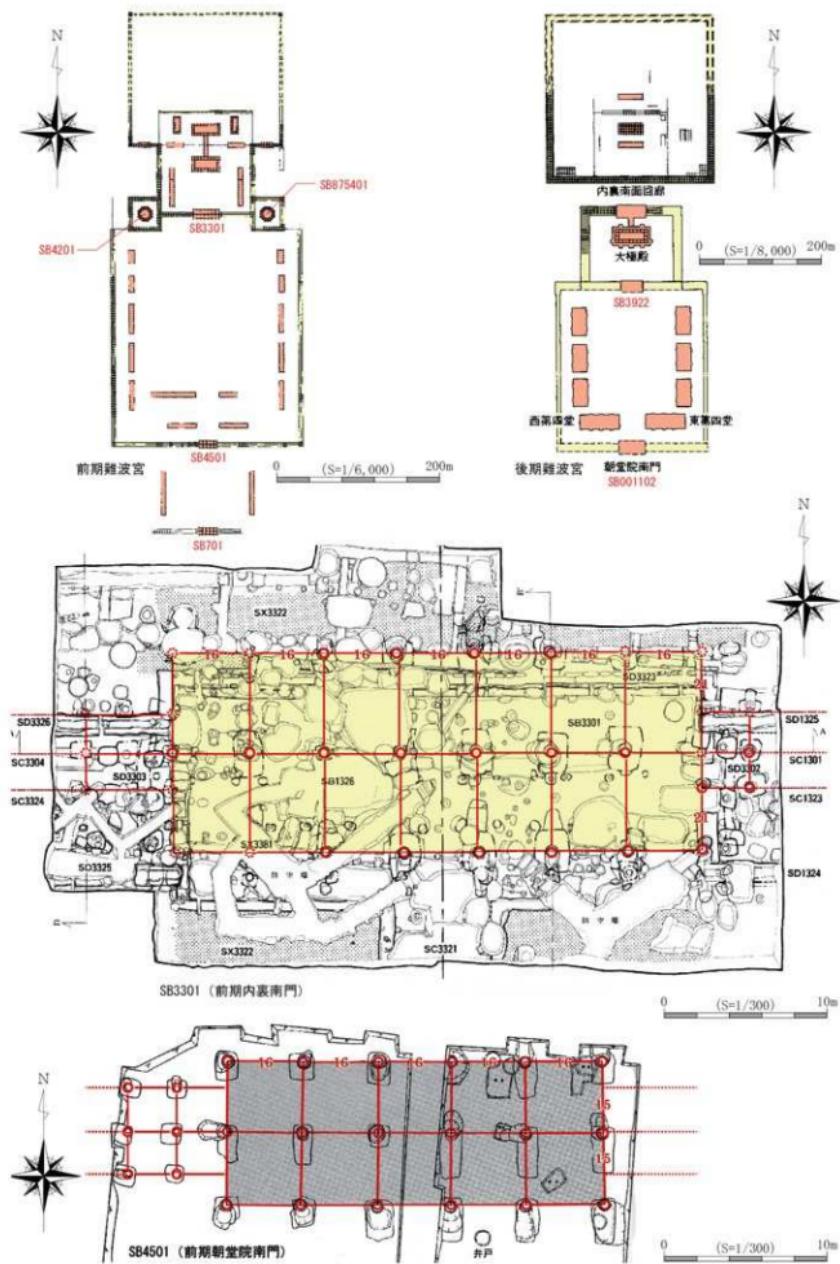


図38 雞波宮の門造構(①)

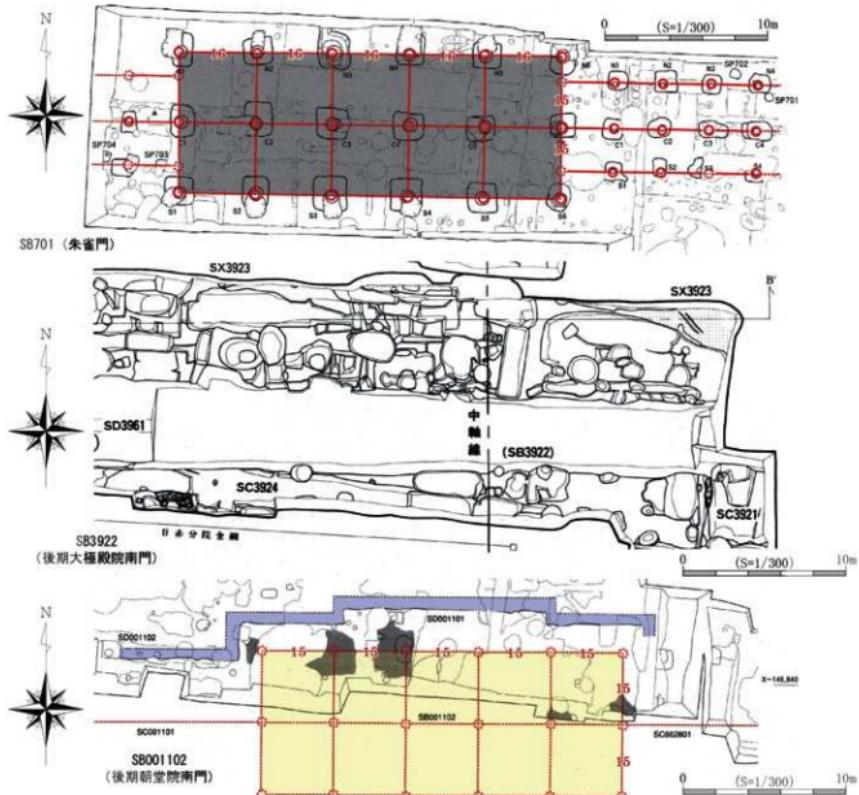


図38 難波宮の門造構(2)

取り付く複廊が東西の八角殿院に接続する特徴的な構造を持つ。ここでは、門と八角殿に分けて記述する。

内裏南門SB3301は、桁行7間（16尺等間・総長32.68m）・梁行2間（21尺2間・総長12.26m）の七間門（掘立柱建物）である。東西妻柱から外側1.5mの地点の構状造を基壇外装の抜取穴とする説によれば、基壇の東西規模は35.45m以上となり、藤原宮大極殿南門・平城京羅城門に次ぐ規模を持つ。南北側柱列の外側1.4mのところには、小柱穴が確認されており、基壇の痕跡と考える説もある。

東西の八角殿院は、東八角殿SB875401・西八角殿SB4201とその周囲を方形に取り囲む回廊から構成される。両者はほぼ同規格であるため、ここでは東八角殿院の報告から、その構造を紹介する。東八角殿SB875401は、平面八角形の三重の柱穴（最外周・外周・内周柱穴）がめぐる掘立柱建物である。最外周の柱列は、対辺距離17.4m(60尺)、一辺7.1mを測る。八角殿を取り囲む複廊は、桁行2.85-2.95m(10尺等間)・梁行2.3-2.4m(8尺等間)で、回廊全体では東西・南北回廊の棟通り柱の心々間距離が、東西36.8m・南北36.7mでほぼ正方形を呈する。なお、西八角殿院は東西36.8m・南北37.01mとされ、両者はほぼ同規格である。

【前期難波宮朝堂院南門 SB4501】(図38①)(大阪市教育委員会ほか1985)

桁行5間（16尺等間）・梁行2間（15尺2間）の五間門（掘立柱建物）である。報告が古いため、詳細は不明だが、基壇・雨落溝などは確認されなかったようで、後述する朱雀門SB701および東西複廊と基本的に同一構造と考えられる。

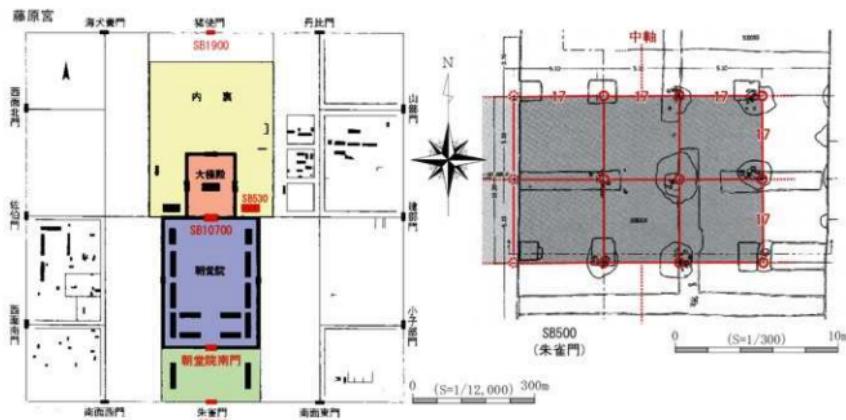


図 39 藤原宮の門遺構①

## 【前期難波宮朱雀門 SB701】(図 38 ②)(大阪市文化財協会 2004)

桁行5間（16尺等間・総長23.52m）・梁行2間（15尺2間・柱間寸法4.7m + 4.42m）の五間門（掘立柱建物）である。基壇や雨落溝などは検出されておらず、確認されたのは門と東西複廊の柱穴のみである。SB701の柱穴は一辺1.8m前後の方形で、棟通りの柱筋の柱痕跡の底レベルが浅く、南北柱筋が深い。東回廊（SC701）は桁行9間、西回廊（SC702）は桁行1間分を検出しており、桁行は10尺等間（門の取り付き部分のみ11尺）、梁行は9尺と4分の1等間とされる。なお、SB701を重層門と考える説もある（李 2004）。

## 【後期難波宮朝堂院南門 SB001102】(図 38 ②)(大阪市文化財協会 2005)

基壇はほぼ削平されており、基壇北辺裾周りの地覆石の抜取痕跡（SD001101）から、基壇の範囲が推定されている。それによると基壇の東西長は約27m、北辺中央に東西13.5m・南北0.9mの階段がある。報告書では、桁行5間・梁行2間（15尺等間・柱間寸法4.4m）の基壇を伴う礎石建物を想定する。なお、後期難波宮の大極殿院南門 SB3922（図 38 ②）（大阪市文化財協会 1995）に関しては、大極殿院南壁の存在から位置が特定されているものの、削平により明確な遺構は検出されなかった。ところで、後期難波宮に関しては、中枢である大極殿院の西側（中枢から西へ158m）で南北2棟の五間門を検出している。五間門区画東面北門（SB843001）、東面南門（SB852201）は、桁行（中央3間15尺・両端10尺）・梁行2間（10尺2間）の同規模の掘立柱建物（大阪市文化財協会 2005）だが、区画の性質が不明で、門の位置付けも難しい状況にある。

## (4) 藤原宮 (図 39 ①)

## 【朱雀門 SB500】(図 39 ①)(奈良国立文化財研究所 1976a)

朱雀門 SB500は、桁行4間分を発掘調査で確認しており、桁行5間（17尺等間）・梁行2間（17尺2間）の五間門（礎石建物）に復原されている。掘込地業などは確認されておらず、基壇も失われていたが、礎石の据付穴と根石の存在から柱配置が把握されている。

## 【朝堂院南門】(図 39 ②)(日本古文化研究所 1941)

日本古文化研究所が「南の門址」として発掘成果を報告している。基壇や雨落溝などは検出していないようだが、礎石の据付穴を確認しており、桁行5間（西17尺/16尺/18尺/16尺/17尺東）・梁行2間の五間門（礎石建物）と報告している。提示されている図面、および藤原宮内における他の門の規模から考えて、桁行5間（17尺等間・総長25.5m）・梁行2間（17尺等間・総長10.2m）の可能性が高い（青木 2010）。

## 【北面中門 SB1900】(図 39 ②)(奈良国立文化財研究所 1976b)

桁行5間（17尺等間・総長25.2m）・梁行2間（17尺2間・総長10.1m）の五間門（礎石建物）である。後世の削平によって、基壇・雨落溝や礎石の根石などは検出されなかつたが、礎石据付穴の壺地業の存在で

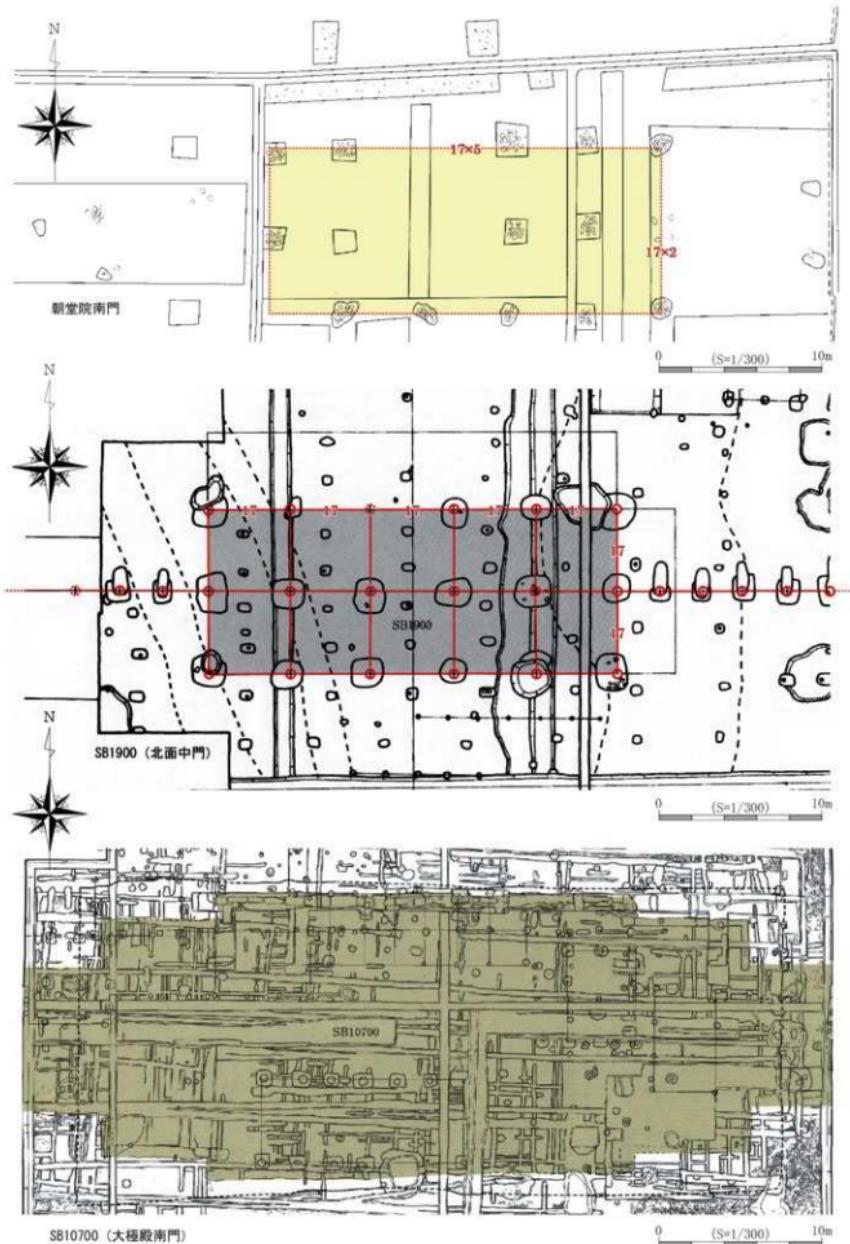


図39 藤原宮の門造構②

柱配置が復原されている。壇地業は1.8四方の不正方形の穴に厚さ5cm前後の版築を施すもので、特に東側の南北溝SD1901の埋め立て部分に位置する壇地業の底部では、大量の栗石を底部に敷き詰めていた。付近から出土した凝灰岩片の存在から、凝灰岩切石で化粧した基壇が想定されている。

#### 【大極殿南門 SB10700】(図39②) (奈良文化財研究所 2008)

日本古文化研究所の発掘を踏まえて、奈良文化財研究所が2007年に全面発掘を行っている。基壇の大半は削平されており、礎石据付穴なども確認できなかったが、基壇外装の据付・抜取痕跡から規模が判明している。基壇は東西40.1m・南北14.4mを測り、南北中央に幅24.7m・出1.2mの階段と思われる突出部を持つ。なお、基壇の造成に際しては、東西44m・南北20mの範囲で掘込地業をしている点が判明している。柱配置に関する情報は発掘では確認されていないが、藤原宮大極殿院は東門SB9500(奈良文化財研究所2003a)、西門SB2200(奈良文化財研究所1978a)が桁行7間(14尺等間)・梁行2間(12尺2間)に復原されており、七間門が想定される。また、前述した朱雀門・朝堂院南門・北面中門がいずれも柱間寸法を17尺等間とする点、発掘で確認された階段の張り出しから、桁行7間・梁行2間(17尺等間)の七間五戸門に復原されている。

### 5-2 8世紀の都城門

#### (1) 平城宮・平城京(図40①)

##### 【朱雀門 SB1800】(図40①) (奈良国立文化財研究所 1978b・1994a)

桁行5間・梁行2間(17尺等間)の五間門(礎石建物)である。基壇の掘込地業の範囲は、南面大垣が接続する部分で東西31.9m、南北平均16.6mを測り、平城宮内の門遺構で最大規模である。基壇は、地山を1.5m掘り下げて川原石を敷き詰めた後に版築する絶地業で、ある程度まで版築してから柱位置に布堀り(側柱)、あるいは壇掘り(棟通りの柱)で礎石の据付穴を掘る。その後、根石を置いて礎石を据付け、版築によって基壇を完成させている。残存する礎石は直径1m以上で、特別な加工は施されていない。門東西に取り付く南面大垣SA1200は、基底部幅9尺である。建物は、五間三戸の入母屋造りの二重門に復原されている。

##### 【若犬養門 SB10200】(図40①) (奈良国立文化財研究所 1982a)

基壇は既に削平され、礎石・根石も残っていないが、整地上の柱推定位置に合計7カ所の壇地業の痕跡を検出している。その痕跡から、桁行5間・梁行2間(17尺等間)の五間門(礎石建物)と推定される。SB10200の南では二条大路SF9440の北側溝SD1250、南側溝SD4006を検出しているが、門前の北側溝には間口2間・奥行き1間の橋脚SK10260がある。中心は門の中軸と対応し、柱間寸法は正面各8尺・奥行き12尺である。

##### 【建部門・東院南門 SB16000ABC】(図40②) (奈良国立文化財研究所 1994b)

棟門SB16000Aが、桁行2間・梁行1間の掘立柱門SB16000Bに建て替えられ、最終的に奈良時代後半に礎石建ち門SB16000Cが造営された。SB16000Cは、桁行5間(中央3間13尺・両端間10尺)・梁行2間(10尺2間)の五間門(礎石建物)である。北側柱列、東妻柱の礎石据付痕跡を検出している。礎石据付穴は、一辺2mの方形で大量の平瓦を敷いた後に根石を置いている。門の北側には、凝灰岩を組んだ雨落溝が残存し、一部には基壇化粧の凝灰岩も残存する。

##### 【小子部門 SB5000】(図40②) (奈良国立文化財研究所 1967)

平城宮東張り出し部の入り口に南面して開くSB5000は、1966年の調査で盛土と礎石据付痕跡の一部が確認されていたが、小澤毅の再検討によって桁行5間(中央3間15尺・両端間10尺)・梁行2間(15尺2間)の五間門(礎石建物)に復原された。小澤は、中央区朝堂院南門SB9200・第二次大極殿院南門(下層)SB11210と同一規格の門とし、平城宮造営当初に創建されたと想定する(小澤1994)。

##### 【壬生門 SB9500】(図40②) (奈良国立文化財研究所 1981)

基壇上部は削平されており、礎石・根石などは残っていないが、基壇の掘込地業の範囲(東西28.9m・南北14m)が判明している。掘込地業は北側を丁寧に版築しているのに対して、南側は簡略化された築成となっている。掘込地業の北西部分で地覆石の抜取痕跡を検出しており、凝灰岩を用いた壇正積基壇と推定されている。基壇地業の東西では、基底幅9尺の南面大垣SA1200を3.6mほど取り込んでいる。南側の二条大路SF9440の北側溝SD1250にかかる橋の痕跡は確認されていない。

### 【第一次大極殿院南門 SB7801】(図 40 ③) (奈良国立文化財研究所 1982b)

基壇や礎石据付穴などは既に削平されていたが、掘込地業、地覆石の抜取痕跡、北側雨落溝、北面階段などが確認された。掘込地業の範囲は、東西 31.5m・南北 17.5m で深さ 0.5-0.6m を測り、丁寧に版築されている。基壇の東北・西北隅で基壇縁に沿って L 字形にめぐる地覆石の抜取痕跡 (SD7852B) があり、その外側に疊敷の雨落溝 SD7833 が検出されている。北面中央には、長さ 14.2m、北へ 1.2m 張り出す形で大型の凝灰岩片が堆積し、北面階段の痕跡とされる。上層の堆積から復原されている基壇規模は、東西 28m・南北 16.2m で、桁行 5 間 (中央 3 間 17 尺・両端間 15 尺)・梁行 2 間 (20 尺 2 間) の五間門が想定されている。

なお、SB7801 は、単層切妻造案 (5 × 2 間) (奈良国立文化財研究所 1982b)、重層入母屋造案 (5 × 3 間) (奈良国立文化財研究所 1994e)、単層切妻造案 (5 × 2 間) (清水ほか 2004) (図 10)、重層入母屋造案 (5 × 2 間・5 間三戸門) (北山 2012、中島 2013・2014) と建物復原案が変遷している。

### 【第一次大極殿院南面東櫻 SB7802】(図 40 ③) (奈良国立文化財研究所 1982b)

第一次大極殿院南門 SB7801 の東側に位置する桁行 5 間 (総長 22.9m・15.5 尺等間)・梁行 3 間 (総長 11.52m・13 尺等間) で直柱の東西棟建物である。側柱が掘立柱、内部の柱を礎石建ちとする「掘立柱・礎石併用建物」である。側柱の柱穴は 3.5m × 2.5m の平面長方形、深さは 2.75m の巨大なものである。内部の礎石据付穴は平面 2.7m 四方で、深さ 0.15m の中心に根石が残存していた。SB7802 は、南面築地回廊 SC5600 の中層疊敷改修時に増築されたもので、下層の回廊北雨落溝 SD7813 と院内疊敷層を埋めて、東西 29m・南北 8m の基壇を回廊北側に付け足して造営している。南側は築地回廊と一体化しており、築地回廊の一部を開いて新たに増築されたことがわかる。南北方向の柱筋は、回廊南側柱と一致しており、SB7802 南側柱と SC5600 の南側柱の間隔は 3.6m (12 尺)、回廊の南側を片流れの廊状にした樓閣建築とされる。

### 【第一次大極殿院南面西櫻 SB18500】(図 40 ④) (奈良文化財研究所 2011)

東櫻 SB7802 と左右対称に存在する桁行 5 間 (15.5 尺等間)・梁行 3 間 (13 尺等間) の総柱建物である。側柱を掘立柱とし、内部を礎石建ちとする樓閣建築である。南面築地回廊 SC7820 の北側に基壇を 2 回に分けて、東西 27.6m・南北 8.9m の範囲で増築している点が判明しており、東櫻・西櫻は大極殿院創建当初には存在しなかった点も追認された。

なお、第一次大極殿院は、天平勝宝年間に西宮に改築されるが、II 期 (天平勝宝 5 年～長岡遷都) の南門 SB7750A、III 期 (平城太上天皇の大同 4 年～) の南門 SB7750B (図 40 ③) (奈良国立文化財研究所 1982b) が確認されている。SB7750A は、基壇や礎石据付痕跡などは確認されていないが、南北に基壇地覆石の抜取痕跡を確認しており、基壇の規模は東西 20m・南北 12.7m に復原されている。南北中央は東西 13.44m・南北 1.05m 分張り出しており、階段とされる。階段の東西幅を建物の桁行と考えて、桁行 3 間 (15 尺等間)・梁行 2 間 (12 尺 2 間) の八脚門に復原されている。SB7750B は、基壇の痕跡は確認されていないが、掘立柱の痕跡が確認されており、桁行 5 間 (中央間 13 尺・脇間 10 尺・端間 8 尺)・梁行 1 間 (18 尺) と推定される。

### 【中央区朝堂院南門 SB9200】(図 40 ④) (奈良国立文化財研究所 1980・1987a)

中央区朝堂院南門と思われる遺構は基壇・礎石痕跡なども残っていないかたが、掘込地業の範囲 (東西 26m・南北 16m・深さ 0.35m) が確認されており、検出した土坑から 4 個の礎石が投棄されている状態で見つかった。発掘では 4 時期 (A ～ D 期) の変遷が確認されたが (奈良国立文化財研究所 1980)、その後、東側の区画の発掘成果によって、解釈が更に変化した (奈良国立文化財研究所 1987a)。B1 期の掘立柱場 SA9201・9202 の間に、B2 期に礎石建ちの五間門 : SB9200 が造営された (8 世紀前半)。建物は、桁行 5 間 (中央 3 間 15 尺・両端間 10 尺)・梁行 (15 尺 2 間) の切妻造の单層門とされる。門基壇の南外側には、庇を受ける掘立柱列があり、この柱列と南側柱通りを描えて、門前東西に桁行 3 間 (9.5 尺等間)・梁行 2 間 (15 尺等間) の東西棟建物が各 1 棟造営される。C 期 (8 世紀中頃) には東西の掘立柱場が仮設的な板塀となり、D 期 (奈良時代後半) には SB9200 の南庇が取り外され、東西は築地塀に作り替えられた。

### 【第二次大極殿院南門 SB11210・SB11200】(図 40 ⑤) (奈良国立文化財研究所 1993)

第二次大極殿院は、地上に痕跡をとどめる II 期以降、大極殿基壇などの下層にある I 期遺構の 2 時期に整理されている。第二次大極殿院南門も I 期の SB11210、II 期の SB11200 が確認されている。大極殿下層正殿

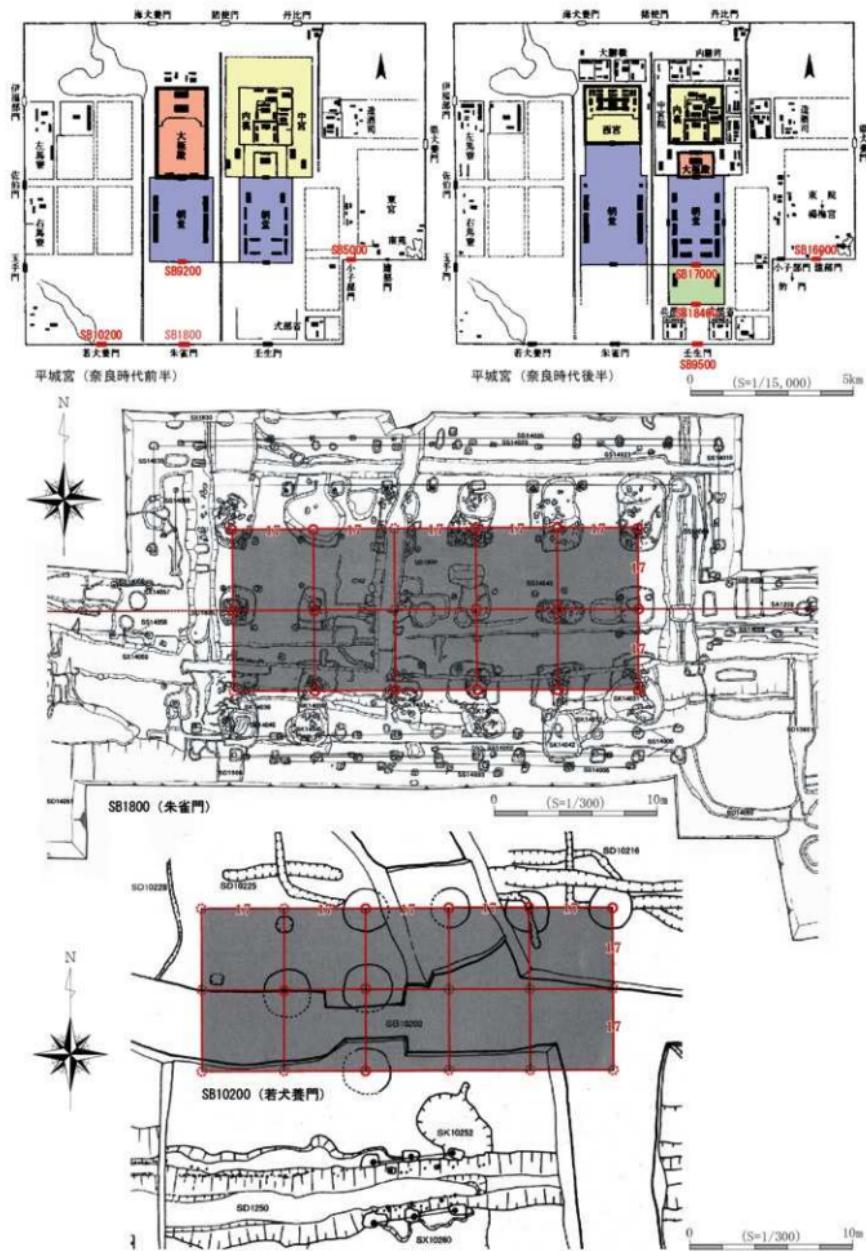


図40 平城宮の門造構①

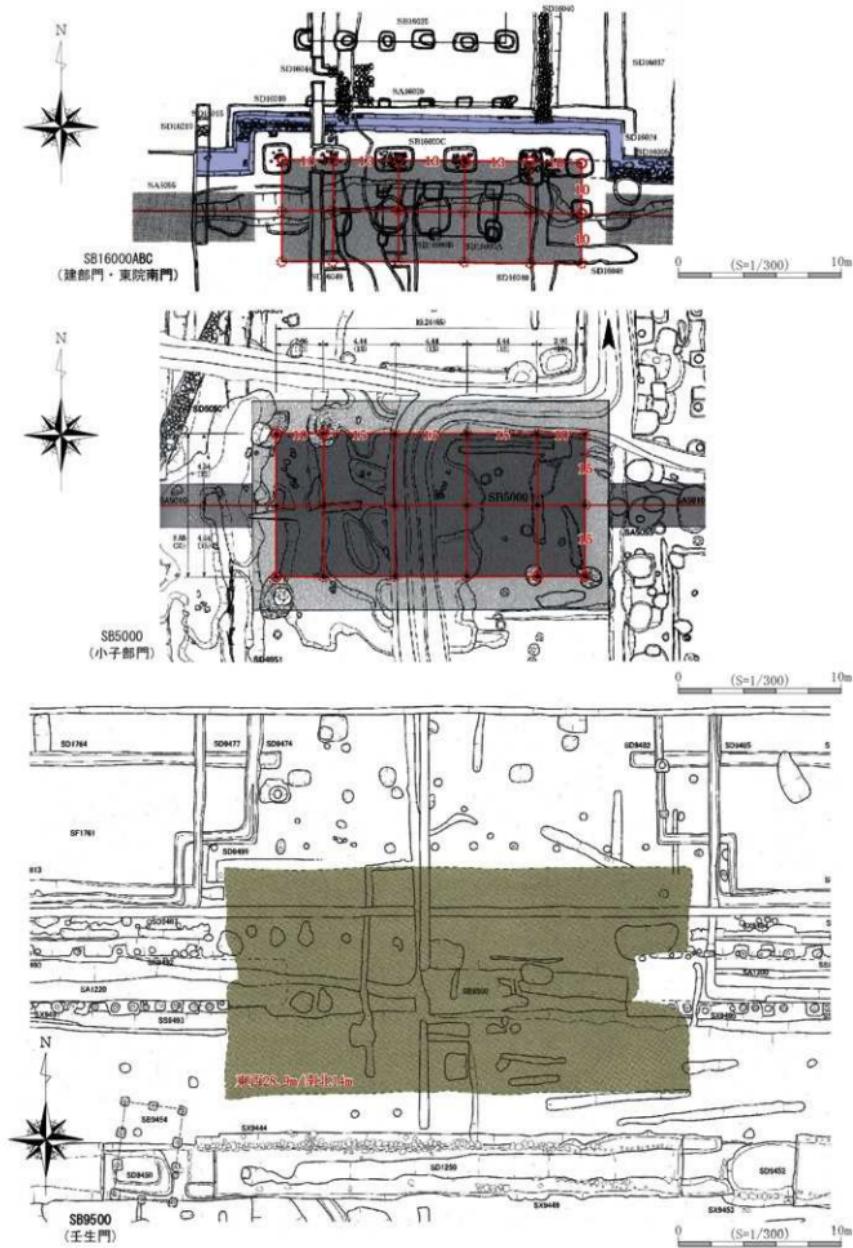


図 40 平城宮の門造構②

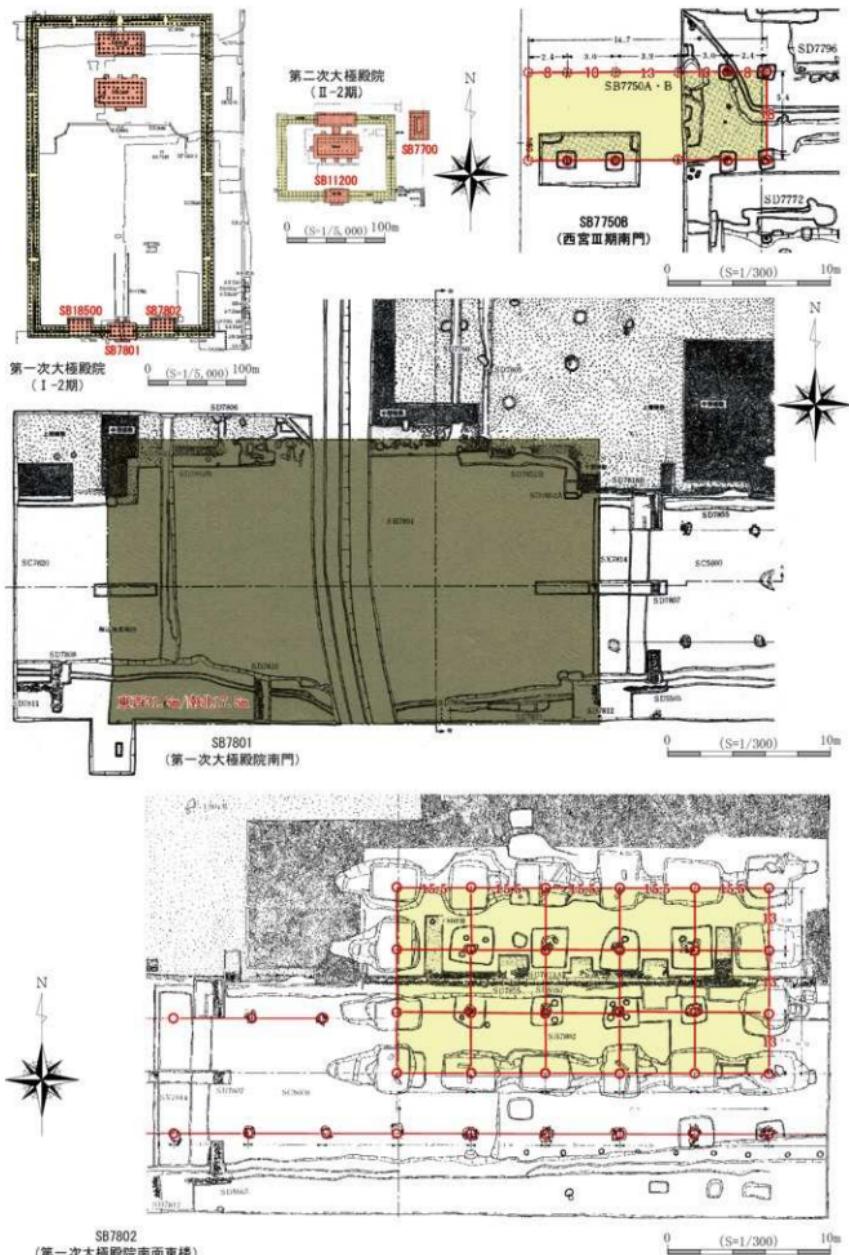


図 40 平城宮の門造構③

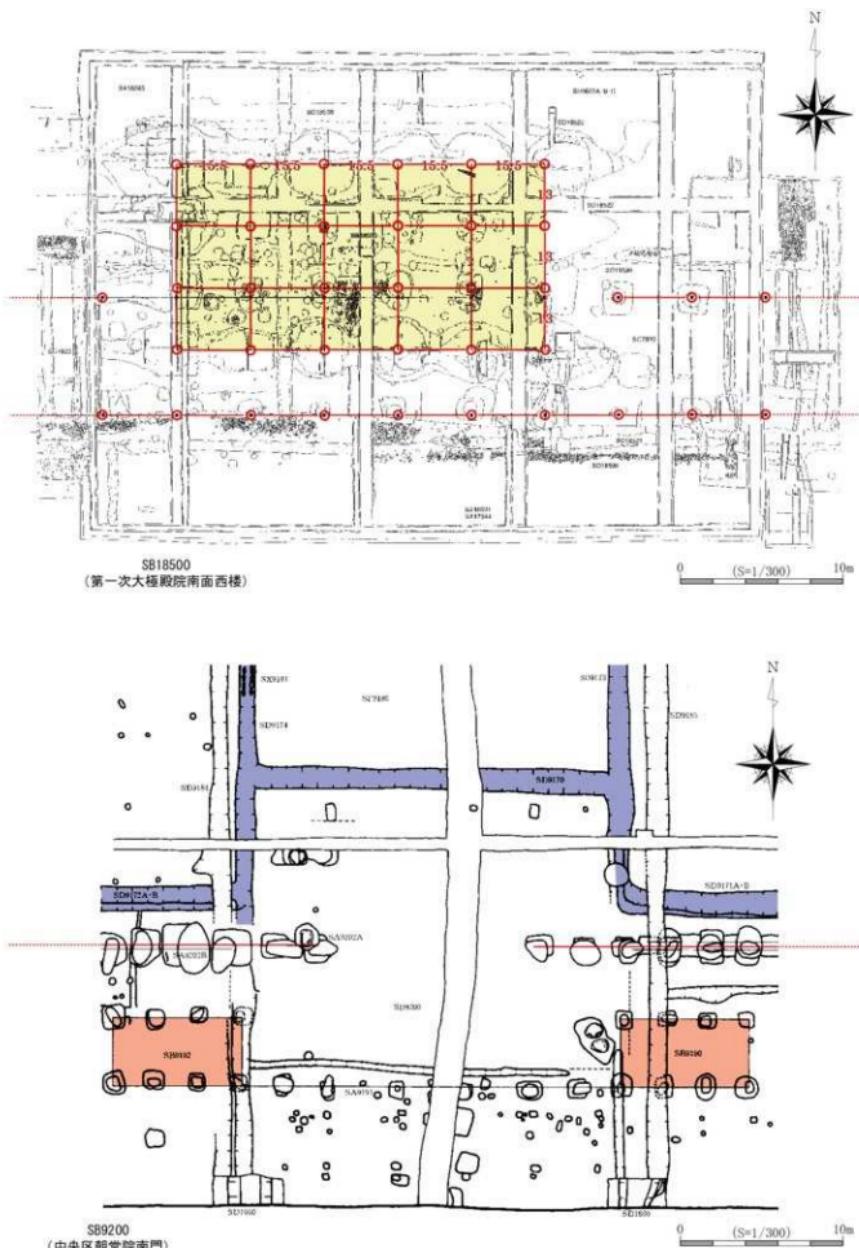


図 40 平城宮の門造構④

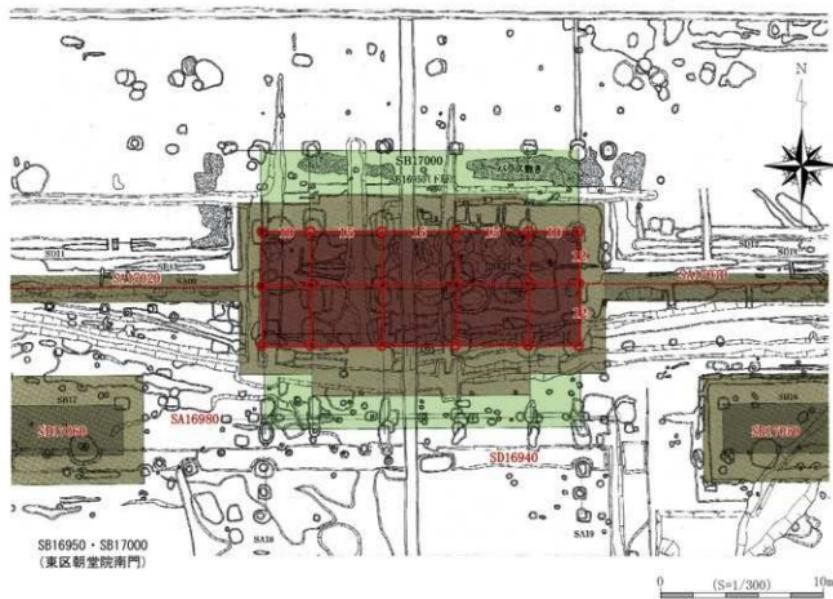
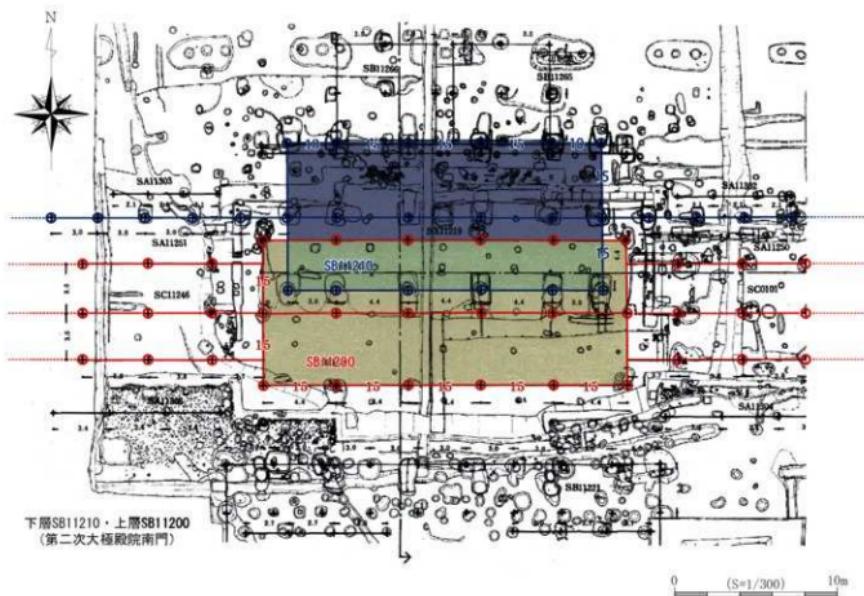
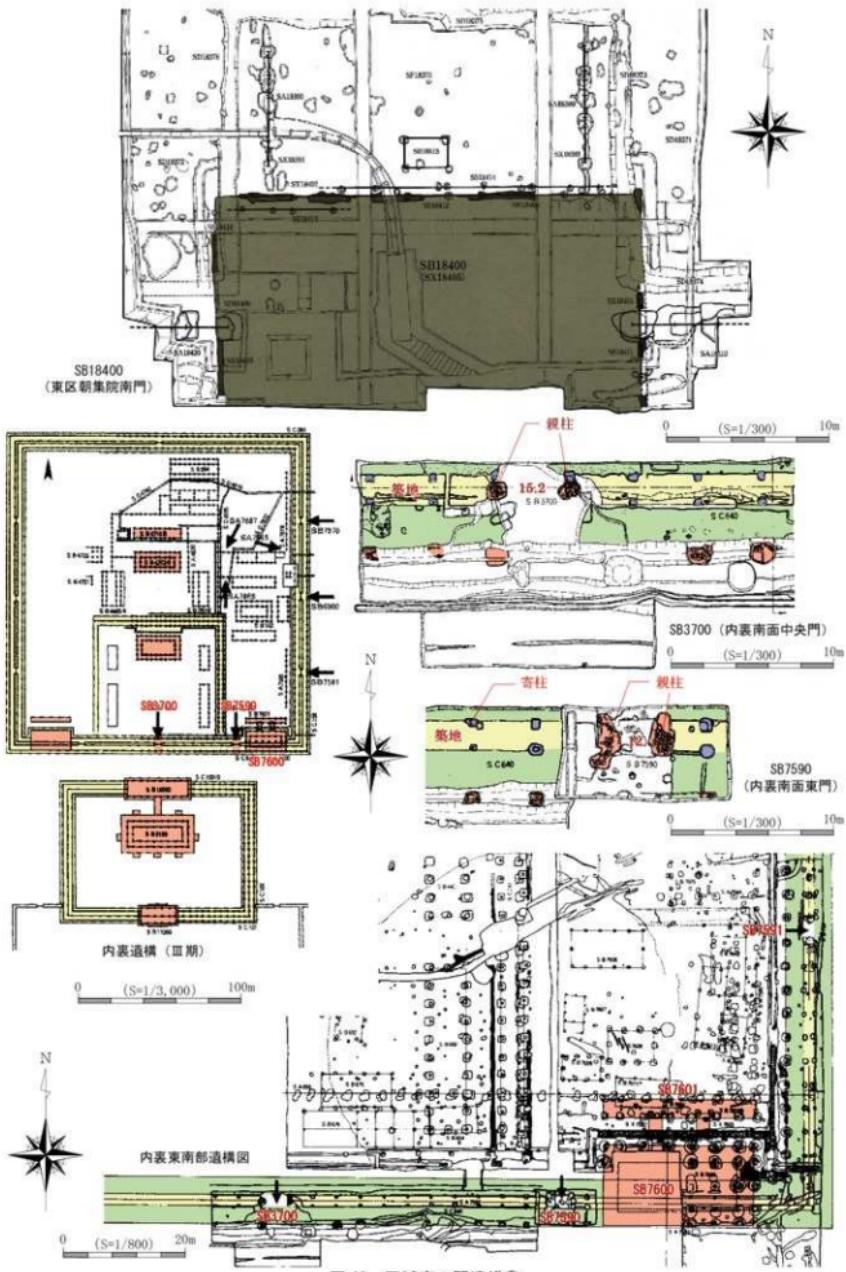


図 40 平城宮の門造構⑤



SB9140 の南正面に位置する桁行 5 間（中央 3 間 15 尺・両端間 10 尺）・梁行 2 間（15 尺 2 間）の五間門（掘立柱建物）が SB11210 である。基壇は地山削り出しを基本とし、南面に中央 3 間分の階段が検出されている。基壇の出は、東・西・南については 1.8m を測り、北は不明。階段と基壇の入隅部分で凝灰岩の破片を確認しており、凝灰岩切石の壇正積基壇とされる。掘立柱の抜取痕跡の上面は上層南門の版築によって埋められており、SB11210 の解体と上層南門の建設は一連の工程とされる。SB11210 の東西妻の中央柱には、南面東堀 SA11250 と西堀 SA11251 がとりつく。一方、II 期の第二次大極殿 SB9150 の南正面に位置する桁行 5 間・梁行 2 間（15 尺等間）の五間門（礎石建物）が SB11200 である。基壇の規模は、東西 26.1m・南北 13.8m で、基壇の出は南北が 8 尺、東西の蟻羽の出は 6 尺、切妻造に復原される。基壇の北側には、壇正積の凝灰岩切石の一部が残存しており、その外側には雨落溝 SD11211 がある。基壇南北には、桁行中央 3 間分（13.3m）の階段を検出している。SB11200 の東西には、東回廊 SC0101 と西回廊 SC11246 の複廊がとりつく。

#### 【東区朝堂院南門 SB16950・SB17000】（図 40 ⑤）（奈良国立文化財研究所 1996）

平城宮造営当初に造営された下層の掘立柱の門 SB16950、および上層の礎石建ちの門 SB17000 の 2 時期の変遷が確認されている。SB16950 は、桁行 5 間（中央 3 間 15 尺・両端間 10 尺）・梁行 2 間（10 尺 2 間）の五間門（掘立柱建物）である。基壇の規模や外装などは不明だが、東西妻の中央柱に掘立柱堀が取り付く。SB17000 は、梁行 12 尺等間として礎石建ちに立て替えた奈良時代後半の朝堂院南門である。掘立柱建物の柱を抜取り、その抜取り穴を版築で埋め、基壇を造成している。礎石据付穴の底部が残存しており、柱配設が確認された。基壇北側には、壇上積基壇の外装、および雨落溝の抜き取り痕跡を検出しており、基壇の出は南北 6 尺、東西 5 尺に復原されている。基壇規模は、東西 22.3m・南北 10.7m を測る。基壇北側には、中央 3 間の幅の階段痕跡も検出されている。門の東西には、築地堀がとりつく。門の南北両面には土庵の柱穴が東西に並んでおり、北庵は北側柱列から 17 尺、南庵は 2 時期あり 14 尺・17 尺離れた 2 列が検出された。

なお、東区朝堂院では近年、東門が発掘され、桁行 5 間（中央間 15 尺・脇間・端間 10 尺）・梁行 2 間（12 尺）の掘立柱の五間門 SB20160（奈良時代前半）が確認されている（奈良文化財研究所 2019）。

#### 【東区朝集院南門 SB18400】（図 40 ⑥）（奈良文化財研究所 2003b）

基壇上面は完全に削平されており、基壇南端部は調査区外で確認されていない。基壇周囲の地覆石の据付痕跡から、基壇の規模が東西 26.2m・南北 13m 以上に復原されている。門の東西には、掘立柱堀（東堀 SA18410・西堀 18420）を検出しているが、奈良時代後半に推定される築地堀は検出していない。

#### 【内裏南面中央門 SB3700・南面東門 SB7590・南面東樓 SB7600】（図 40 ⑥）（奈良国立文化財研究所 1991）

内裏Ⅲ期に遮蔽施設が築地回廊となった際に、南面築地回廊 SC640 に開いたのが中門 SB3700、東門 SB7590 で、SC640 東端に回廊を取り込んで建つのが内裏東樓 SB7600 である。

内裏外郭の南面築地回廊 SC640 は、築地堀の基底部幅が 6 尺、側柱に対応する位置に凝灰岩切石製の築地寄柱の礎石が南北 1 対で 15 カ所に残存している。北面・東面築地回廊では、築地と側柱の芯々距離が 13 尺で、桁行は 13 ~ 13.3 尺と復原されている。南面築地回廊では中央門で桁行 15.2 尺、東門で 12 尺、SB7600 の中央 5 間が 13.3 尺・両端間 9 尺以外は、13.3 尺等間に復原されている。SB3700 は、門芯を内裏南北中軸上、および築地堀の交点に置き、15.2 尺の柱間を持つ「潜門形式」とされる。左右に親柱の礎石据付痕跡を検出しており、北側には築地寄柱の抜取り痕跡も認められる。一方、SB7590 は中門から東 12 間目に開く 12 尺の柱間を持つ潜門で、左右の親柱礎石据付痕跡とその南北に寄柱礎石据付痕跡を検出した。なお、中門を含めた東西 1 間、すなわち 3 間分、および東門 1 間では回廊基壇上に石敷歩道の存在が指摘されている。

南面回廊 SC640 東端には桁行 7 間・梁行 4 間の四面廊付礎石建ち重層建築の SB7600 が位置する。柱間寸法は、身舎桁行 13.3 尺・梁行 13 尺、廊の出 9 尺である。基底部幅 6 尺の築地回廊を建物内に取り込んでいる。北・東・西の側柱から基壇の出は 6 尺とされ、SC640 の北側溝と連続する凝灰岩切石製の側溝がめぐる。SB7600 の北側には、階段 SX7602・SX7603、および桁行 7 間・梁行 1 間の掘立柱建物 SB7601 がある。階段は SB7601 から SB7600 の 2 階に登るためとされ、SB7601 は SB7600 の階隠しとしての機能を持つと同時に、北側広場に面して SB7600 の前殿的な機能を持ち合わせた建造物とされる。

#### 【羅城門】（図 11）（奈良国立文化財研究所 1972）

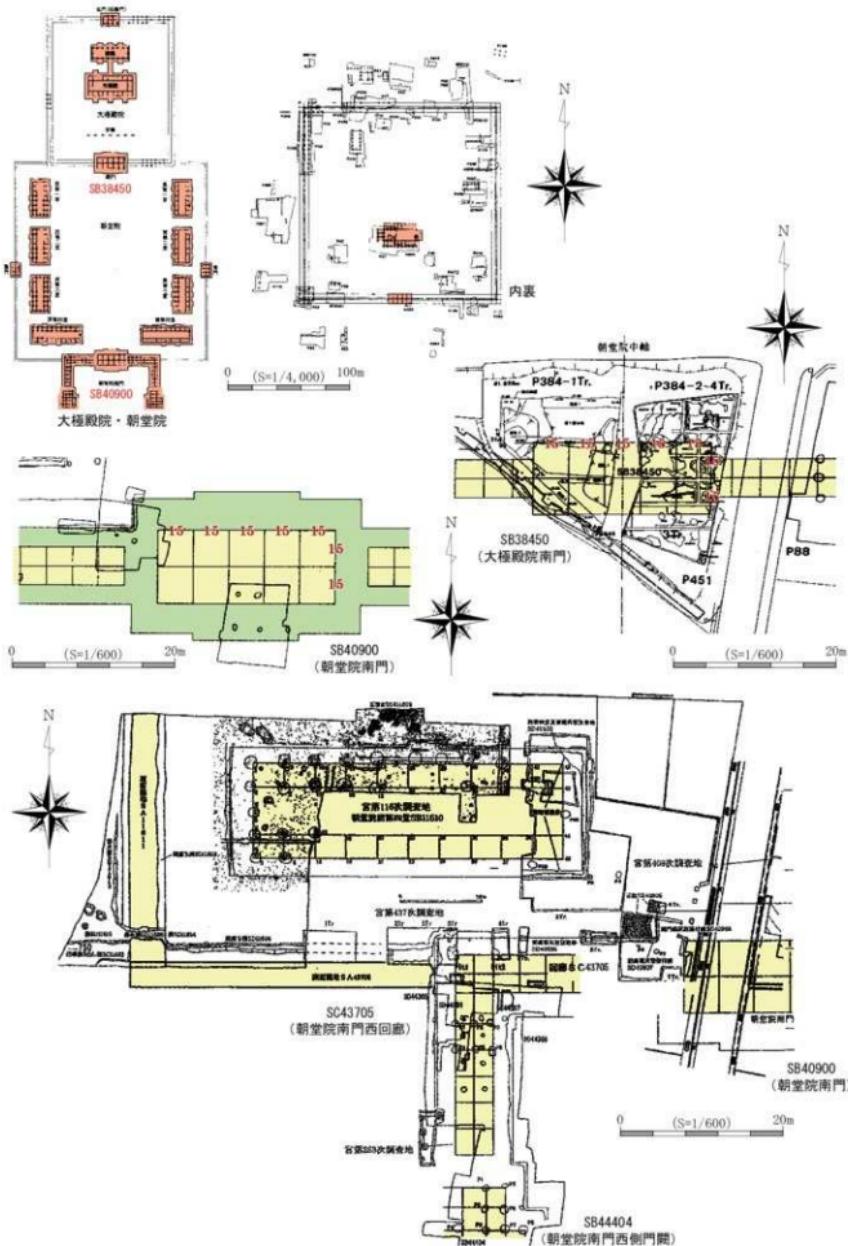


図 41 長岡宮の門造構

羅城門については、発掘調査によって基壇の掘込地業を確認しており、基壇規模が東西32m・南北17m、桁行5間・梁行2間（17尺等間）の五間門と推定された（奈良国立文化財研究所 1972）。一方、井上和人は、その後の発掘成果に基づく朱雀大路中心軸と西側溝の位置関係から羅城門の基壇を再検討し、基壇規模を東西41.5m・南北16.4mに復原した。さらに、基壇の規模から建物寸法を推定し、桁行7間（中央5間17尺・両端間15尺）・梁行2間（15尺2間）の重層入母屋建物を想定した（井上 1998b）。井上説に対して小澤毅は、平城宮の宮城門が基本的に17尺等間の五間門である点を踏まえて、桁行7間・梁行2間（17尺等間）の七間門を想定し、藤原宮大極殿南門から平城京羅城門への移築の可能性を提起した（小澤 2012）。

なお、羅城門に関しては、近年の発掘調査によって東西に羅城と思われる特殊な「二本柱列造構」（図47）が検出されている。東側の羅城は、東一坊大路の東側溝西側まで続いており、片側の長総約530m、羅城門の「両翼」一坊分のみ整備されていたとされる（山川・佐藤 2008、大和郡山市教育委員会 2012・2014など）。一方、羅城門の造営年代や羅城の構造・範囲などについては、批判的見解もある（小澤 2008）。

## （2）長岡宮（図41）

### 【朝堂院南門 SB40900・SC43705・SB44404】（図41）（向日市埋蔵文化財センター 2006・2007a）

朝堂院南門SB40900は、桁行5間・梁行2間（15尺等間）に復原されているが、西側で前面に屈曲する翼廊（南北面南北回廊：西／SC44307）、および出闌形式の櫻閣（SB44404）を検出している。SC44307は、東西2間・南北6間の南北方向への突出を確認している。柱間寸法は、東西2.4m（8尺）・南北3.3m（11尺）に復原されている。回廊基壇の西側、および東側の地覆石の据付・抜取痕跡を確認している。SB44404は、礎石の据付痕跡を8か所確認しているが、北側へ突出する出闌形式である以外、詳細は不明である。平安宮朝集院南門：応天門に附帯する翔鷺櫻の前身遺構とされる。

### 【大極殿院南門 SB38450】（図41）（向日市埋蔵文化財センター 2001・2007b）

基壇・礎石などは失われており、建物東半分の礎石抜取穴の痕跡から、桁行5間・梁行2間（15尺等間）の五間門（礎石建物）に復原されている。

## 6. 東アジア古代都城門の構造・機能とその展開

### 6-1 連体式双闕門の発展と唐代都城門の諸類型（図42）

**都城門の種類と発展** 中国都城門は、版築で構築される城壁と木造建築が融合する「土木混合式」を特徴とする。特に城壁の一部に空閑地を設けてトンネル状に門道を構築する城門の場合、過梁式（I）と発券式（III）の大きく2者が存在する。歴史的には前者から後者へと変遷するのは確かだが、両者の交代は急激に進んだものではなく、北宋～元に併存しながら緩やかに入れ替わっている。例えば、元上都皇城南門では、両者が主城門（発券式）・瓮城門（過梁式）で併存するように、両者は選択的に造営されたと推察できる。この点は、明清期の発券式城門で、城壁の一部である門道（下部構造）とその上の門櫓（上部構造）が分離をしているのに対して、元代までの過梁式門は上下構造が不可分であった点と関係すると思われる。過梁式門の門道左右の排叉柱は、門道上部の梁を支えるだけでなく、城壁・墩台・隔壁内部の暗柱と組み合って上下一体の土木混合の城門建築を形成した点に特徴がある。両者は建築様式の異なる城門として、10～13世紀の長期期間、併存したのである。大型埠を用いて完全なアーチ構造を形成、その上の版築によって高い城壁を構築した後に、礎石を配置して重層の城櫻を建造する完全な発券式門の登場は、元上都・中都での過梁式の存在を考えると、元大都、及び明代以降の都城門で達成された変化と想定できる。

一方、基壇上の木造建築の左右に城壁が取り付く、あるいは木造建築の初層部分に城壁を取り込む大型殿堂式門（II A）は、魏晋南北朝の宮城正門として登場し、唐代に闕式主殿（II B）に発展した。大型殿堂式門は、渤海・日本など同時代の東アジア各国に影響を与えると同時に、過梁式・発券式と結びつきながら、明清期の宮城正門の連体式双闕門へと発展する。大型殿堂式門は、過梁式門から発券式門への長い過渡期において、宮城門を莊厳化する役割を担った点に特徴がある。なお、宮城内の隔壁に設けられた小型の木造門（II C）自体は、普遍的に存在したと思われるが、魏晋南北朝～唐において宮城正門を莊厳化する役割を担った大型殿堂式門（II A）及び闕式主殿（II B）は、中国都城門の発展の中で重要な形式に位置付けられる。

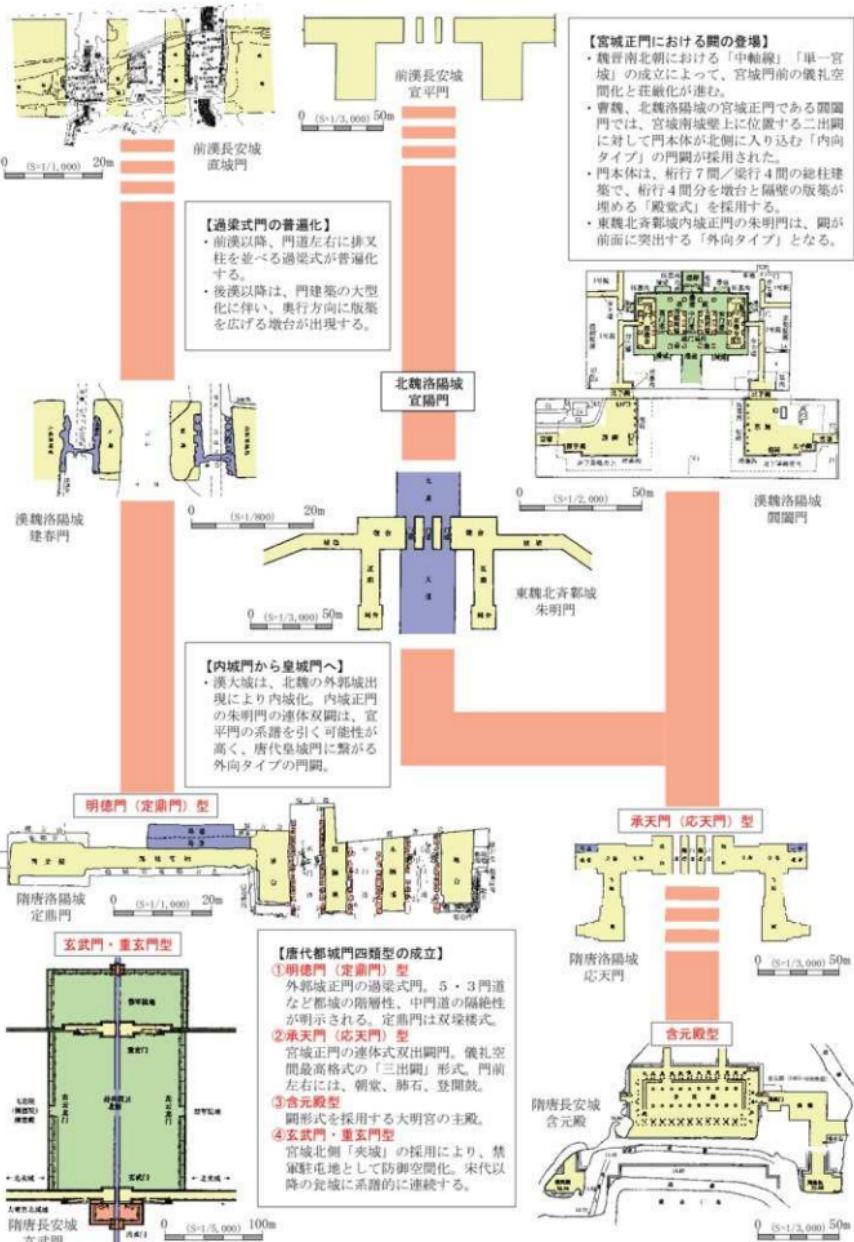


図42 漢～唐における門闕の発展と「唐代都城門四類型」の成立

**漢～魏晋南北朝の都城門** 漢唐期に一般的な過梁式（I）は、傅熹年が類型化したように（傅熹年 1977）、不揃いな形の礎石（土襯石）の上に木製地覆を設置して排叉柱を立てる I A から、方形礎石に排叉柱を立てる I B、石製地覆に排叉柱を立てる I C へと変化した。唐代に一般的な I B にも、隋仁寿宮・唐九成宮の練壁北門のように、礎石間を石製地覆で充填する事例があり、このような形式から「表面を平滑に加工して上面にホゾ穴を穿つ地覆石」を整然と並べる I C が発展したと思われる。I C は、北宋の東京城・西京城で一般化した類型と想定できる。傅熹年の的確な整理は、最近の発掘成果からも追認できる。

前漢長安城の城門は、一門三道の過梁式門を基本とするが、この段階の城門には城壁よりも幅広な墩台は存在しておらず、門道は城門の切れ目部分に位置する。東城壁の3門のみ門左右に突出部が附帯するが、城門建築と翼廊によって接続する後世の門闕などとは、構造が明らかに異なる。防御性を重視した構造と推定できるが、「坐西朝東」する前漢長安城の東壁のみに設置される点を考えると、象徴的な意義も伺える。なお、門の格式自体は、隔壁幅を含めた規模に差異が認められ、未央宮南門の西安門・長樂宮東門の霸城門の格式が高かった点が推定されている（劉振東 2018）。その後、過梁式門は後漢～魏晋南北朝にかけて、城壁幅よりも奥行きのある墩台・隔壁を構築するようになり、城門建築自体が大型化する流れが読み取れる。

魏晋南北朝における大きな画期は、魏晋・北魏洛陽城の宮城正門における二出闕構造を持つ大型殿堂式門、闕闔門の登場である。中軸線・單一宮城制・太極殿東西堂システムの成立と連動して、宮城正門の儀礼空間化・莊厳化が進み出現した類型である。城壁上に双闕が位置し、殿堂式の門建築自体は城壁に対して内側に建造（城壁に対して、門本体が内側に位置する構造を本論では「内向タイプ」と呼称する）される。闕と門建築は幅狭の版築壁で接続されており、宮城壁が闕に直接取り付く点が特徴である。近年の調査で、漢魏洛陽城の宮城門は基本的に同じ形式が採用されている点が判明しており、永寧寺南門・西門における殿堂式門の採用に見られるように、最高格式として殿堂式が宮城門に採用された点も読み取れる。なお、東魏北齊鄆城の宮城におけるボーリング調査でも、中軸正門に同じ「内向タイプ」の門遺構（図 20 中右）が確認されており、闕闔門の形式が魏晋南北朝を通じて影響力を持った点が伺える（錢國祥 2003）。

**連体式双闕門の成立** 魏晋・北魏洛陽城の宮城正門：闕闔門に対して、唐代では皇城正門となる内城正門の形式が問題となる。北魏洛陽城の内城正門：宣陽門は洛河の北移によって失われているため不明だが、東魏北齊鄆城の内城正門：朱明門で過梁式の連体式双闕門が確認されている点は注目できる。朱明門は宣陽門の系譜を引く可能性が高く、門道左右の墩台から飛廊が南側に伸びて闕台と連接する構造を呈する。闕闔門が「内向タイプ」だったのに対して、朱明門は城門と城壁が同一軸線上にあり、闕が外側に突出する構造（城壁に対して、飛廊と闕楼が外側に位置する構造を本論では「外向タイプ」と呼称する）が重要である。宮城正門に採用された「内向殿堂式門」に対して、内城正門に「外向過梁式門」が採用されている事実は、同じ双闕でも両者の系譜が異なる点を示唆する。本来、漢代の「大城」であった漢魏洛陽城の城壁は、北魏期の外郭城の出現によって「内城化」するが、前漢長安城の城壁（大城）東壁には宣平門・霸城門で城門左右に突出部が確認されていた点が注目される。北魏洛陽城の内城正門である宣陽門は、後漢大城の正南門に該当する。すなわち、漢代に存在した大城門の外向突出部が城門建築と連接することで「連体式双闕門」が出現し、東魏北齊鄆城朱明門に繼承された可能性を想定しておきたい。今、魏晋南北朝における宮城正門を「闕闔門型（内向殿堂式双闕門）」、内城正門を「朱明門型（外向過梁式双闕門）」と呼称すれば、両者は明らかに異なる系譜をもって出現し、同時期に異なる空間的機能を持って併存した類型と位置付けられる。

**唐代四類型の成立** 唐代都城は、宮城・皇城・外郭城の三重圏構造が、中軸線によって接続する点に特徴がある。中軸上の外郭城正南門、皇城正南門、宮城正南門、宮城正北門（外郭城北門）の4つが正門となる。唐長安城では、皇城正門（朱雀門）の様相は不明だが、それ以外の中軸正門は調査で構造が明らかになっていている。なお、唐長安城に対して門道数などで格差が存在するものの、唐洛陽城の外郭城正門・宮城正門が発掘されている点も重要で、両京を比較すれば唐王朝中枢部の都城門の設計思想を分析できる。

唐長安城外郭城正門：明徳門は五門道の過梁式門である。同じく三門道の過梁式門である唐洛陽城定鼎門では、双塙楼が採用されるが、明徳門では発掘で塙楼や闕楼が附帯しない点が指摘されている。宮城門に関しては、唐洛陽城天門で三出闕の過梁式連体双闕門が確認されている。墩台ではなく左右の塙楼から南に

伸びた飛廊が三出闕に接続しており、出闕形式を持つ「閻闍門型」、連体式の「朱明門型」の融合によって唐代宮城門が成立した点が読み取れる。その場合でも、構造的な特徴は「外向」で、基本的には「朱明門型」の系譜を引く点が想定できる。一方、唐長安城太極宮正門：承天門に関しては、ポーリング調査の成果を重視して三門道を想定する説が主流（[美國強 2018・羅瑾欣 2019](#)）だが、実際の発掘調査で認識が大きく変わる場合も多い。例えば、大明宮正門：丹鳳門は1958年のポーリング調査で三門道と認識されていたが、発掘調査によって五門道と判明した。さらに、中軸正門の明徳門・丹鳳門が五門道で、皇城南壁西門の含光門が三門道である点など、承天門の五門道説は未だ有力な仮説だと考える。なお、北宋東京城の宮城正門：宣徳門、元大都宮城正門：崇天門は絵画資料や文献史料から五門道と判明しており、現存する明清北京城の宮城正門：午門も中央の3門道に加えて左右に屈曲する2門道を持つ五門道である点も考慮すべきだろう。

太極宮正門：承天門の構造は不明だが、その「制度」が大明宮正門：丹鳳門と正殿：含元殿の空間に継承されている点、及び発掘によってその構造が判明している点が注目できる。丹鳳門は五門道の過梁式門だが、明徳門の城門幅 55.5m・門道幅 5m をはるかに上回る城門幅 74.5m・門道幅 9.4m を測り、宮城門の隔絶性を象徴する存在である。丹鳳門は含元殿と一体で三朝制の外朝大典空間を構成したとされ、太極宮正門：承天門に附帯する双闕・朝堂・肺石・登聞鼓などの諸施設は、全て主殿である含元殿に整備された。含元殿の主殿は、宮壁東西軸よりも北側に位置し、構造的には内向の「閻闍門型」の系譜を引くものと思われるが、主殿における双闕の採用過程に関しては後述する。

最後に宮城北門：玄武門に関しては、外郭城・皇城・宮城正門が中軸南門としての象徴的な役割を担っていたのに対して、防御性の高い極めて特徴的な門構造である点が知られる。玄武門は單門道の過梁式門で、南側には小型のII C式門である内重門が位置する。内重門は桁行3間・梁行2間の木造建築で、東西妻側に幅の狭い城壁を取り付く。内重門左右の城壁は東西で北側に屈曲し、玄武門の左右墩台の東西に取り付き単独の院落を構成する。さらに、玄武門北側には宮城北側の防御施設である夾城が存在し、夾城北門として單門道過梁式の重玄門がある。玄武門・重玄門は巨大な墩台と3つの門扉施設を有する強固な門構えとなっており、夾城を挟んで玄武門・重玄門がセットで宮城防衛の要となる城門だった点が推定できる。太極宮北門を舞台とした「玄武門の変」（626年：李世民が、皇太子の李建成と弟の齊王元吉を玄武門を抑えて殺害した事件）が示すように、宮城北門は禁軍駐屯地として重要な役割を果たしたと思われるが、大明宮の玄武門・重玄門の構造はその機能を反映した構造である。この特徴的な様式を本論では「夾城門」と呼称しておく。なお、唐洛陽城宮城北側の円墻城南門でも、夾城門に近い構造が確認できる点も重要である。

以上、唐長安城では、外郭城正門：明徳門・宮城正門：承天門・宮城正門と主殿が融合した外朝空間：丹鳳門・含元殿・宮城防衛の北門群：玄武門・重玄門・すなわち中軸上に位置する正門にそれぞれの機能が特化した建造物群の「様式」が成立している点がわかる。唐代都城で外郭城・皇城・宮城という三重園構造が成立したことによって、各階層空間を接続する正門が象徴的な発展を遂げた結果といえる。中軸正門はそれぞれの象徴的な意義に応じて各空間を接続する機能を発展させると同時に、中軸上の有機的な連関性を持つ建造物群としてデザインされている可能性が高い。このように唐代都城で出現した①外郭城正南門・②皇城正南門・③宮城正南門・④宮城正北門という正門の構造的特徴は、同時代の東アジア都城、あるいは北宋以降の都城に大きな影響を与えていくことになる。残念ながら②の皇城正南門については遺構の状況が不明だが、③については太極宮・大明宮に異なる類型が存在するため、本論では合計4つの様式を「明徳門型」「承天門型」「含元殿型」「玄武門・重玄門型」と呼称する。将来的には「朱雀門型」を加えた5類型を設定できる可能性もあるが、考古学的テクニカルな型式設定として、唐代都城門の四類型を設定し、同時代の東アジア、あるいは北宋以降にどのように展開・変容するかを整理していきたい。

## 6-2 唐代都城の構造と門の階層性－含元殿の成立－（図43）

宮城正門の儀礼空間化 魏晋南北朝における洛陽城の宮城正門：閻闍門（内向殿堂式双闕門）が、東魏北齊鄆城で見られる内城正門：朱明門の「外向過梁式双闕門」と融合し、唐代宮城門（承天門・応天門）の様式が出現した可能性を指摘した。近年の発掘成果によって、閻闍門の創建は太極殿と同じく魏晋期に遡る点

が指摘されている点（錢国祥 2016）からすると、曹魏明帝期の太極殿・東西堂システムの成立に連動して、宮城正門の莊厳化・儀礼空間化が進んだ点が想定できる。その後、北魏の外郭城の成立により中軸線の重要性はさらに高まり（佐川 2016）、唐の三朝制の採用によって外朝大典の空間として、太極宮正門の承天門前が象徴的に整備されることになる。太極宮正門の承天門の機能は、大明宮の造営に伴って丹鳳門から含元殿までの空間へ移行され（何翌利 2019）、唐太極宮の太極殿で行われていた元会などの国家的な儀礼（渡辺 1996）が施行される外朝大典空間の舞台が初めて完成する。

**開式主殿の登場** 唐長安城大明宮含元殿は、龍尾道・主殿と飛廊で連接された三出闇構造の樓閣鳳・翔鸞閣などの構造を有すると同時に、殿前左右の朝堂・肺石・登聞鼓など宮城正門の機能が主殿と融合している点が大きな特徴である。含元殿の様式は様々な用語で呼称されるが、本論では宮城正門の様式である双闕の構造が採用された主殿である点を重視し「開式主殿」と呼称する。前述したように、含元殿は主殿が宮壁東西軸の内側に位置する「内向タイプ」で、平面構造からすると「閨闥門型」の系譜を引く可能性が高いと考える。しかし、宮城正門である閨闥門の様式から、主殿と門闕の融合様式である含元殿への飛躍は大きく、両者の間を埋める構造を考える必要がある。内田昌功は、十六国北朝長安城の樓閣台遺跡を路門の遺構と推定し、含元殿への発展の図式を想定した（内田 2010）。樓閣台遺跡はボーリング調査で検出した遺構であり、構造的な分析は難しいものの、主殿が宮城南壁の内側に隣接する点や北周における三朝制の採用などの歴史的背景を考えても説得力のある仮説である。しかし、元会儀礼の実施空間として、路門では主殿と門の構造が融合しうるという思想的な背景が、樓閣台遺跡の存在によって北周に遡り得るとしても、宮城正門ではなく正殿に双闕様式が採用される含元殿の構造的な系譜を説明できるわけではない。その点において、宇文愬によつて設計された仁寿宮仁寿殿を含元殿の直接的な祖型と考える馬得志の議論は、考古学的な発掘と構造認識に基づく極めて論理的な見解（馬得志 2005）だと考える。含元殿は高宗 662 年に造営が開始され、翌年に完成したが、高宗は太子時代に太宗が改名した九成宮に隨行しており、即位後も 654～678 年の間に 8 回、毎回半年ほど九成宮で過ごしたとされる。この隋仁寿宮・唐九成宮で確認されている 1 号宮殿は、主殿の前面左右から伸びる飛廊が樓閣に接続する建造物で、構造的な特徴は含元殿の祖型として十分な要素を持つ。馬得志の「任何事物的发展都有其源流。例如建筑物的形式设计，一是创始，一是模仿沿袭或在其基础上在予发展革新」（馬得志 2005p259）という指摘は極めて的確に含元殿の出現経緯を表現していると考える。

以上、魏晋南北朝期に莊嚴化が進んだ宮城正門は、北周三朝制の採用によって国家的儀礼空間へと発展する。一方、隋仁寿宮・唐九成宮で採用された両翼構造を持つ主殿が、大明宮含元殿の造営に際して宮城正門・承天門の構造・機能を融合し、唐代都城の完成化された思想的な舞台が出現した可能性が高い。

**含元殿出現と展開の意義** 含元殿は唐王朝の元会儀礼の中心舞台であり、皇帝権力の隔絶性と儀礼を通じた「帝国秩序」を生み出す象徴的空间であった点は既に様々な視点で論じられている（渡辺 1996 など）。なお、唐長安城太極宮と大明宮の基本構造と機能は一致していたとされるが（古瀬 1998a など）、即位儀礼は含元殿ではなく、唐末に至るまで太極宮で行われる（尾形 1982・金子 1994）などの重要な違いもあった。しかし、含元殿が唐を中心とする「國際秩序」を具現化する空間として機能した点は、大伴古麻呂の「天宝の争長事件」（石井 1983）などのエピソード（遣唐副使の大伴古麻呂が孝謙天皇の天平勝宝 6 年正月に報告した出来事／日本の使節が天宝 12 年～753 年の玄宗皇帝の元会に参加し新羅と席次を争ったとされる）が端的に示している。元日朝賀儀を代表とする国家的な儀礼舞台としての含元殿の象徴的な存在と特徴的な構造は、東アジア世界に大きな影響を与えたとされ、渤海海上京城の宮城、あるいは日本平城宮の構造を「唐三朝制」の概念で理解しようとする研究（魏存成 2004・2016、��晓东・李陈奇 2006、今井 2012）が行われてきた点も研究史で整理した通りである。宮城門と主殿の融合という空間構造に関する思想は、玄宗が政務を執ったことで著名な興慶宮謹政務本様（單門道の殿堂式門）でも認められる現象で、唐代都城において皇帝権力を象徴する場所として宮城門が「中枢化」していた点が伺われる。

このように両翼を有する開式主殿という含元殿の極めて特徴的な構造は、渤海・日本など同時期に展開した東アジア都城で強く意識された一方、後述する北宋以降の都城では、基本的には継承されなかつた点も重要である。出闇構造を持つ宮城正門は、北宋宣德門など定式化していくものの、宮城門と主殿が融合するの

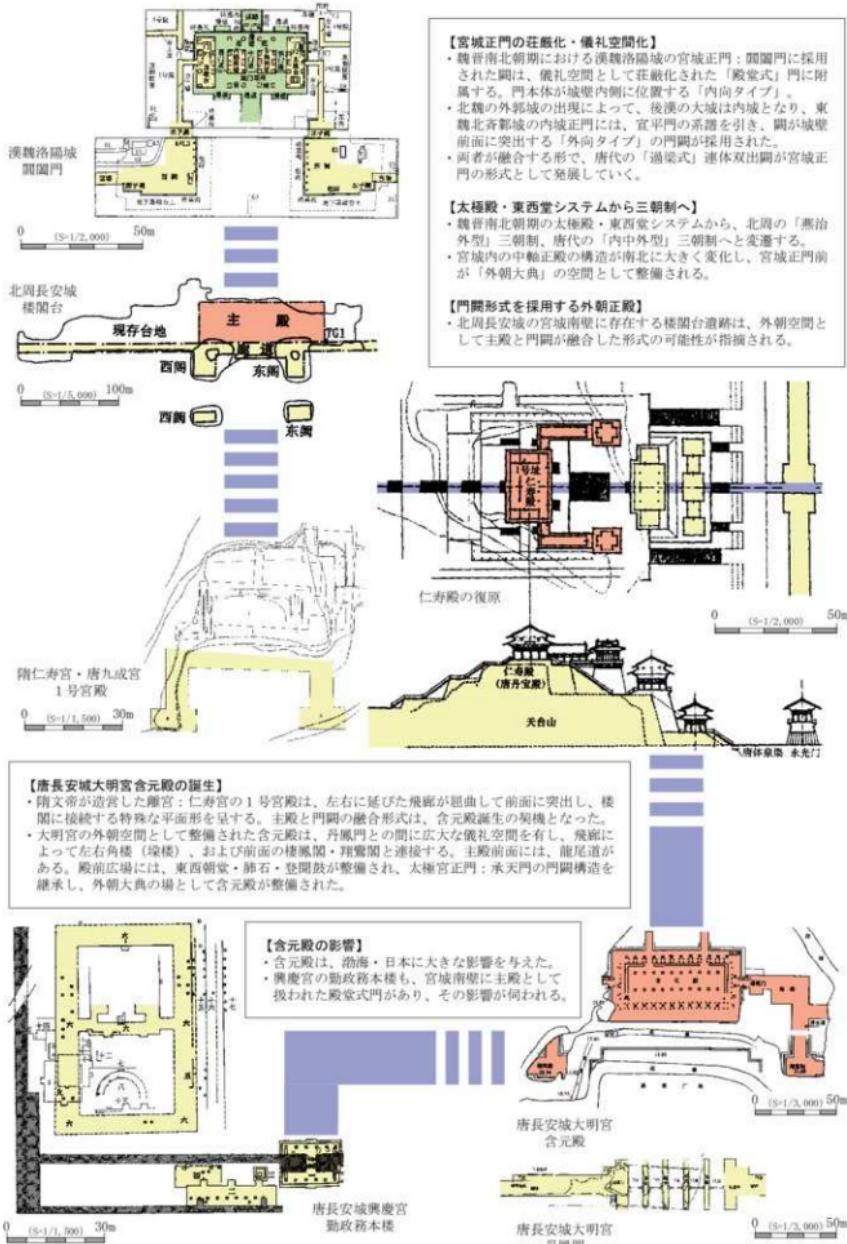


図 43 含元殿の成立過程

は、都城発展史上においても北周～唐の限られた時期の特殊な現象と把握できるだろう。ただし、都城の宮城中枢部の主殿が、金・元代に登場する「工字形」構造に変化していく中でも、元上都宮城北壁の闕式宮殿など部分的に含元殿の構造的系譜を引く建造物が出現する点も注意しておく必要がある。

### 6-3 唐代都城の解体と再編成—北宋以降の正門の変遷—（図44①②）

**北宋東京城・西京城および宋代揚州城の都城門** 北宋期の城門に関しては、東京開封城・西京洛陽城、および揚州城の事例がある。北宋期の特徴としては、①外城（唐代の外郭城）・内城（唐代の皇城）門に瓮城が採用される点、②過梁式I Cが主流になると同時に発券式IIが出現する点、③宮城（皇城と呼称）正門に唐代に成立した三出闇の双闇門が採用される点、が挙げられる。以下、3点に関して整理してみる。

①に関しては、北宋東京城の内外城に設置された陸門・水門に瓮城が採用されている点が特筆できる。瓮城は、唐長安城・洛陽城では採用が確認できず、北宋東京城、特に神宗以降の時期に防御機構として採用された城門形式とされる。しかし、都城門での瓮城の採用は揚州城の唐羅城でも認められ、西壁最南門の8号門（五代末の火災で消失）は、発掘調査で瓮城の構造が確認されている。唐揚州城における羅城の造営時期は不明だが、文献に登場する城壁・護城河などの造営記事は『資治通鑑』の建中4年（783）、あるいは『旧唐書』乾符6年（879）の修築記事である点から、唐後半～末の整備と思われる（中国社会科学院考古研究所等 2010・2015）。一方、揚州城の宋大城西門の発掘では、門前左右が外側に突出する五代の城壁に、北宋期に瓮城壁が外に向けて増築された点が確認されている。以上、唐後半～末・五代十国の中乱期に、防御機構としての瓮城の採用が進んだと思われるが、中原都城での本格的な採用は北宋期以降と推定できる。

②に関しては、北宋西京洛陽城の東城宋代門（老集城門）・東城東壁宣仁門で過梁式I Cが採用されており、北宋東京城順天門でも確認されたI C式が北宋期においては主体的であった点が想定できる。なお、揚州城の宋大城南門では唐羅城の城門が明清期まで利用されるが、北宋期には主城門（唐城門を修築）が過梁式、瓮城門が発券式とされる。一方、五代に造営された揚州城宋大城の北門・西門は発券式、南宋の遺構が残存する東門も発券式で、少なくとも北宋期には発券式IIIが南方で出現している点が確認できる。しかし、発券式が急激に普及したわけではなく、後述する遼金元でも北方では過梁式門が主体で、元上都の宮城正門では主城門に発券式、瓮城門に過梁式が採用されたように、両者は選択的に採用されていた点がわかる。

③に関しては、唐洛陽城の応天門を改築した北宋西京の宮城正門：五鳳樓、北宋期の絵画資料（図6左下）に見られる東京の宮城正門：宣德門が注目できる。宣德門は、北宋東京外城西壁正門である順天門の構造を参考にすると、五門道過梁式門である可能性が高く、五鳳樓と同じ城門左右の塀から南に伸びる飛廊が三出闇に連接する様式と思われる。唐長安城宮城正門の承天門（五門道か？）と同じく、西京洛陽城五鳳樓の三門道に対してより格式が高い五門道を採用したものと考える。唐代都城で定型化した宮城正門の様式は、北宋東京城へ受け継がれた後、元大都・明清北京城の宮城正門の双闇門へと発展した可能性が高い。

**遼・金・元の都城門** 隋代に関しては、上京城の城門の様相が判明している。皇城・宮城に採用されているのは單門道過梁式門で、漢代都城の影響を受けて成立した高句麗・渤海都城のI A式を発展させたI D式を採用する（董新林 2014）。また、皇城門には馬蹄形の瓮城を設置する。注目されるのは、中軸線に位置する宮城東正門に三門道の大型殿堂式門II Aが採用されている点である。魏晉南北朝の洛陽城宮城正門：闕闐門で出現した類型だが、唐長安城・唐洛陽城・北宋東京城の宮城正門が過梁式双闇門I B・I Cである点からすると、遼上京城宮城正門の大型殿堂式門の系譜は中原都城ではない可能性が高い。過梁式門の構造的系譜が示すように、遼は渤海都城の影響を強く受けたと思われ、渤海上京城皇城正門や西古城内城南門・八連城内城南門に見られる殿堂式門が遼上京城宮城正門の直接的な系譜と考える。

金代に関しては事例が少ないものの、金上京城の内城南壁西門で單門道過梁式門が検出されている点が注目出来る。唐代I B式と遼代I D式を組み合わせた構造を持つ城門の可能性があり、城外には半円形の瓮城が設置されている。一方、神廟遺跡である金宝馬城南門、行宮とされる金太子城南門では、桁行3間・梁行2間の小型殿堂式門が採用されており、規模の大きい城壁を伴わない「宮門」には、土木混合式ではあっても基本的には木造建築に近い様式が採用されている点がわかる。

元代に関しては、上都・中都の中軸正門の様相が判明している。元上都は宮城・皇城・外城の三重圈構造を持つが、皇城正門が発掘調査されている。平面方形の瓮城を持ち、主門道は單門道発券式、瓮城門は單門道過梁式で、元代においても過梁式・発券式は選択的に採用されていた点がわかる。なお、元上都で注目すべきは、宮城中軸線上の北壁に位置する闕式宮殿である。その特異な位置が注目されており、史料に基づく殿名比定や機能推定などの研究が蓄積してきた（陸思賢 1999・魏堅 2008）が、中軸上に位置する主殿に東西廡殿、およびその前面に闕樓が付随する平面形は、明らかに唐長安城大明宮含元殿の構造的特徴を継承している。しかし、宮城門と主殿の融合によって、外朝大典の国家的空間を現出させる唐含元殿の本来的な機能や思想が維持されたわけではなく、その構造的な特徴のみが「痕跡的」に残存し、元代の新しい思想に基づいて特殊な主殿が造営されたものと推定できる。

一方、同じく宮城・皇城・外城の三重構造を有する元中都是、元大都の構造的特徴を引く都城として注目でき、宮城中枢主殿、宮城正門、皇城正門の構造が発掘調査で明らかになっている。宮城中枢部の主殿は、所謂「工字形」基壇を持つ大型宮殿で、元大都の大明殿（図 32 ①右下）・延春閣の系譜を引く正殿である。宮城正門は、元大都宮城正門：崇天門の系譜を引くと考えられるが、構造は若干異なり、「三觀兩闕三門道過梁式」と報告される様式である。過梁式は唐 I C 式、遼 I D 式を融合させた形式で、元上都皇城南門の瓮城門で見られる過梁式とも異なる。門建築の東西には、崇天門で想定されている前面に突出する連体式双闕ではなく、双塚楼が採用されている。また、城門は三出闕の連体双闕ではないものの、宮城壁の西南隅・東南隅には三出闕の角楼を造営しており、元中都の宮城正門に関しては、双塚楼と東西三出闕角楼で元大都崇天門と同様の空間を表現した可能性が高い。なお、門内の矩形広場の存在は特徴的で、その構造は唐大明宮玄武門内側の内重門の構造に類似する。皇城正門は、門砧石と礎石を含めた柱配置から、5間×3間の殿堂式門に分類したが、実際には埠積壁と門扉施設で構成される特殊な門形式で「牌坊式」に近い構造である。  
**夾城門から瓮城へ** 北宋、遼金元の都城門について整理した。この時期の重要な論点として、①瓮城の出現、②宮城闕門の発展、③思想空間の変容過程、の3つがある。以下、各論点を整理する。

まず、①瓮城の出現について。瓮城は、中国では新石器時代から存在する普遍的な防御施設であるが、中枢の中原都城に採用されるのは、北宋東京開封城からである。なお、北宋東京城を遡る時期の唐揚州城で既に出現している点を考慮すると、中原都城における瓮城の系譜は、李春林や陳良伟が指摘するように唐長安城大明宮北門の建築群（重玄門・夾城・玄武門・内重門）、すなわち本論で夾城門と呼称した様式（「玄武門・重玄門型」）から発展したと考えるのが妥当である（李春林 2001・陳良伟 2002）。この点に関しては、唐長安城大明宮北門の防御機構と渤海海上京城の宮城北側の閉鎖空間（宮城正北門→外郭城北壁正門）を比較した趙虹光が、その共通性の高さを強調している点も注目できる（趙虹光 2012p117）。一方、唐東都洛陽城の宮城北側の円壁城南門でも、3つの單門道が南北に並ぶ特殊な門が採用されており、その共通性が看取できる。夾城に関しては、高宗～武則天の時期の洛陽城において上陽宮への秘密の通路として存在した麗景夾城（韓建华 2010）が知られており、興慶宮南側・東側の夾城など、特に玄宗期に防護・移動連絡施設として発展した点が指摘されている（趙雨乐 2004）。唐長安城（洛陽城）における宮城北門の防御機能が夾城と結びつき発展した「玄武門・重玄門型」の夾城門は、都城門における防護性の高い特徴的な空間構造の1つの類型として認識できる。唐代都城の宮城北門建築群は、渤海海上京城などに影響を与えるとともに、唐後半～末にかけて揚州城などで瓮城として造営され、北宋東京城から本格的に採用されたものと考える。これら唐揚州城・北宋東京城に見られる瓮城が平面方形である点は、その構造的系譜が唐長安城「玄武門・重玄門型」の夾城門に由来する点を強く示唆している。一方、若干時期が下る遼・金の都城で展開する瓮城は、馬蹄形・梢円形の「鉤形」である点が特徴で、高句麗や渤海の山城、あるいは草原地域に展開していた城郭等の系譜を引く可能性がある。元上都において、皇城・宮城の南北中軸線に位置する瓮城が方形、皇城東西壁の瓮城が梢円形を呈する事実は、草原都城において上記の2つの系譜が融合している点を示すものだろう。

**宮城闕門の発展** 次に、②宮城闕門の発展について。北宋、および遼・金・元に展開した都城の宮城門においても、大きく2つの系統が存在する。まず、北宋東京城の宮城正門：宣德門に関しては、発掘調査が行われていないものの、絵画資料で構造が判明しており、唐洛陽城の宮城正門：応天門を改修した西京五鳳樓と

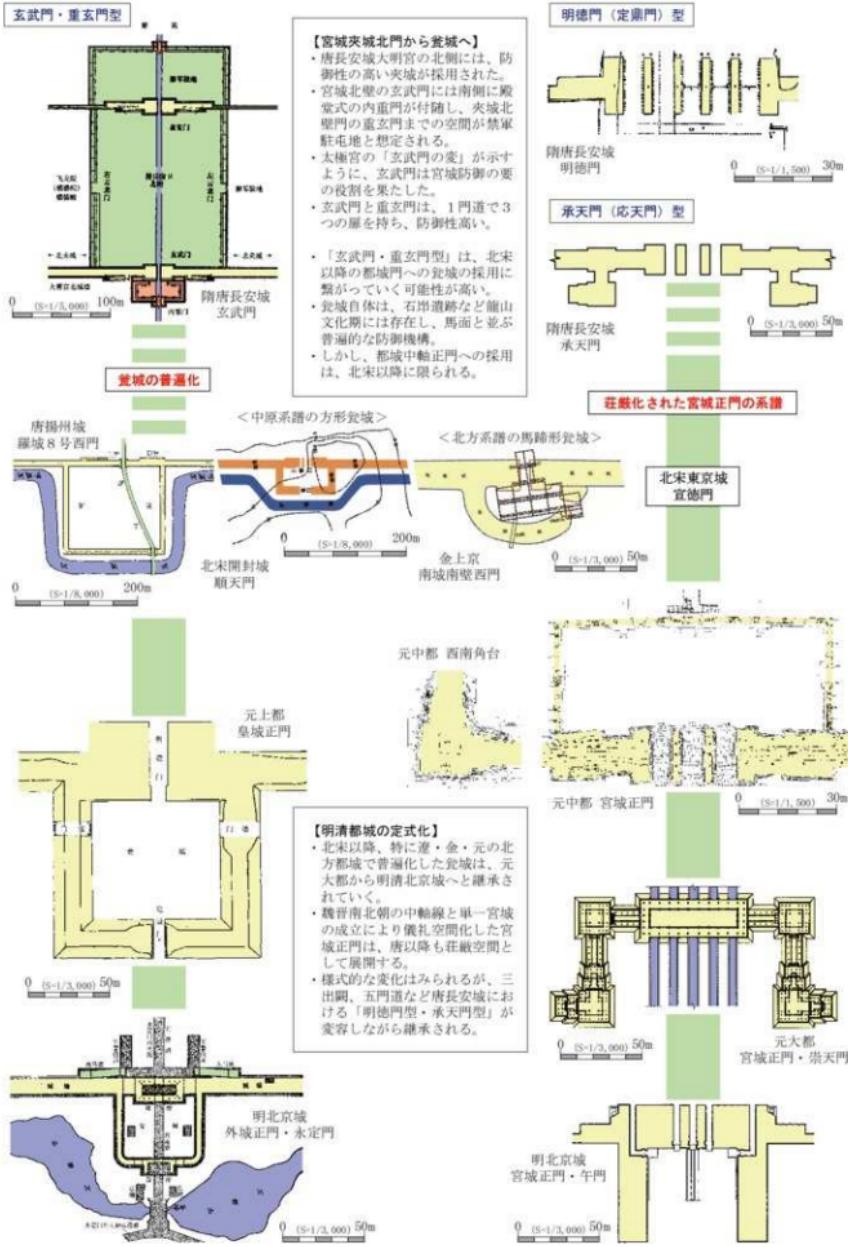


図44 唐以降における都城門の発展とその系譜①

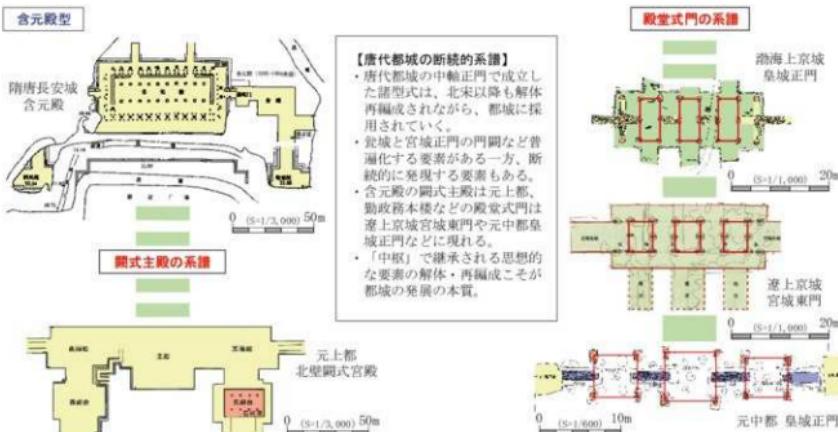


図 44 唐以降における都城門の発展とその系譜②

同じ三出闕の連体式双闕門である点がわかる。5門道で、門楼と東西塹樓・東西闕が飛廊で連結する様式は、唐長安城太極宮正門：承天門の系譜を引く可能性が高い。一方、北方の草原地帯に展開した遼上京城の宮城東正門は、渤海海上京城皇城南門・西古城内城南門・八連城内城南門の系譜を引く大型殿堂式門である。上記2つの系譜は、過梁式 IC・ID、あるいは方形・楕円形瓮城のように、金・元の草原都城で融合が進んだものと想定できるが、最終的には北宋宣徳門の系譜を引く元大都宮城正門：崇天門として結実し、明清期の午門へと発展することになる。

以上の二系統の存在を考えると、元中都の宮城正門に元大都崇天門の様式が採用される一方で、皇城正門には簡易化した殿堂式門が認められる点も理解できる。元中都皇城正門は、渤海から遼の草原都城へ展開した殿堂式門（II A）の最終的な形態と想定できる。その後、明清期の都城における城壁の巨大化によって門楼は、下部の門道とは構造的に分離して城壁上に建造される様式（発券式：III）が一般化し、門道と一体化した木造城門である殿堂式は、宮城内の宮門（II C）としてのみ、残存することになる。

**思想空間としての都城の変容過程** 最後に、③思想空間の変容について。北宋～元までの都城門に関するここまで議論を整理したのが、図44である。唐長安城（洛陽城）では、宮城・皇城・外郭城の三重圓構造が成立し、特に中軸上に位置する正門が異なる階層空間を接続する象徴的・機能的役割によってそれぞれ発展を遂げ、有機的な関係性を持つ四類型として成立した点を指摘した。唐代都城の思想空間は、大明宮含元殿という形で結実することになるが、北宋以降の都城においては三重圓構造という基本構造が継承されていくにも拘わらず、その階層空間を接続する門に関しては、本来的な連闕が解きほぐされ、各王朝が創始する新しい思想空間の中で再編成されながら更なる発展を遂げることになる。

まず、外郭城正南門の「明徳門型」は、宮城正北門（外郭城正北門でもある）の「玄武門・重玄門型」の夾城門と融合し、外郭城（外城）・皇城（内城）において防御性の高い瓮城門として発展する。平面方形の瓮城は、唐後半～宋にかけて都城門として唐揚州城に採用されており、北宋東京城で普遍化する。北宋東京城においては、楕円形の瓮城も確認されている（劉春迎 2004・孟凡人 2019）が、外城南正門の南薰門など中軸正門で方形瓮城が採用されている点が重要だと考える。その後、高句麗・渤海の山城、あるいは草原都城で展開する馬蹄形（楕円形）瓮城と、中原都城の中軸正門で採用された夾城門由来の瓮城が融合し、元上都・大都から明清北京城へと発展した可能性が高い。次に、宮城正門に採用された連体式双闕門の類型である「承天門型」は、唐東都洛陽城の応天門（北宋西京の五鳳樓）を介して、北宋東京城の宣徳門、元大都崇天門、明清北京城午門へと発展する。一方、北方の遼上京城宮城東正門では、渤海都城の皇城門・内城門で

見られた殿堂式門が採用されるが、金・元都城では中原都城の双闕式宮城門へと収斂されていく。元中都の皇城正門で見られた様式は、殿堂式II Aの最終形態である可能性が高い。最後に、宮城正門と主殿が融合した唐代都城の最高格式である「含元殿型」は、同時期の渤海・新羅・日本など東アジア諸国に大きな影響を与えたと考えられているが、北宋以降に採用されることはない。宮城中枢部の主殿は宮城門とは空間配置上も、構造上も明確な「距離」を持つことになり、金・元代に一般化する「工字形」主殿が都城の中枢部として明清都城に継承される。含元殿の構造が、かろうじて残存要素として復古的に出現するのは、元上都宮城北壁の闕式宮殿のみである。その場合も本来的には宮城門、すなわち宮城南壁と融合するはずの主殿が、宮城北壁に位置して南面しており、外朝大典空間としての含元殿の思想的背景が継承されたわけではなく、あくまでも唐代都城の「復古的」要素として採用されたものと思われる。

このように見てみると、思想空間として「1つの完成形」とされる唐代都城は、中国都城の発展史上の大きな画期ではあっても、その空間構造が固定化して後世に継承されたわけではない点が明らかである。「長安城は決して中国都城の完成形態ではなく都城制のなかの一到達点にすぎない」と指摘した新宮学は、北宋以降の金・元・明清都城の重圓構造に着目して、近世の皇城空間の成立過程を論じた（新宮 2009）が、考古学の遺構研究や構造分析においても通時の視点が重要だと考える。特に、都城の空間構造の分析で重要なのは、唐代に成立した宮城・皇城・外郭城の三重圓構造に着目する視点である。新宮が指摘するように、唐代における宮城・皇城は一体として内城空間を形成しており、皇城が独立しているわけではない（新宮 2009p290）。北宋期にも唐代の基本構造が引き継がれ、宮城（大内）・旧城（裏城）・新城（外城）の三重圓構造が認められるものの、唐代の皇城にあたる空間—旧城は官民を区別する場所ではなく階層的コミュニケーション空間として発展した点が指摘されている（久保 2014）。すなわち、唐代都城における重圓構造は、北宋以降、特に皇城空間を中心として性格や機能が変質しながら発展しており、それ故に、異なる階層空間を接続する中軸正門もその本来の連環を解きほぐされ、各王朝が創始する新しい思想空間の中で再編成されていった点が想定できる。「思想空間の解体・再編成」こそが、都城の発展における本質と言えよう。

以上、北宋以降における都城門の発展過程を概観すれば、唐代都城の思想空間がさらに解体・再編成されて新しい思想空間へと発展している点が読み取れる。この点は、唐代に東アジアに展開した高句麗・渤海・日本都城においても同じで、「完成化された固定的な唐代都城の構造」が各国に「引き移された」わけではなく、唐代都城の単純な模倣の上に各国都城が造営されたわけでもない。当時の東アジアの国際的な階層秩序を反映し、各国は唐の長安城・洛陽城の思想空間を積極的に学びながらも、各国の伝統や支配体制に合致する形で戦略的に都城を導入し、その思想を解体・再編成する作業を通じて、新たな都城を創始していると考える。このように考えれば、唐長安城・洛陽城の平面的な特徴、あるいは特定要素のみに注目して、各国都城との共通性・非共通性を議論する比較研究の方法論自体に限界がある点がわかる。重要なのは、唐代都城の思想空間をどのように解体・再編成し、各国において新しい空間構造を現出させているのか、という原理面（メカニズム）の比較である。

#### 6-4 唐代都城門の東アジアへの展開

**高句麗の都城門** 高句麗の都城は、平地城・山城がセットになる点が最大の特徴である。中期高句麗の国内城では、漢代の系譜を引く單門道過梁式門 I Aが採用されており、城門が馬面と組み合う防御性の高い門構造が特徴である。特に国内城西壁南門では、城壁の屈曲部で南に突出する馬面と南北方向の城門が造営されており、前期高句麗の五女山城（辽宁省文物考古研究所 2004）、中期高句麗の丸都山城（吉林省文物考古研究所等 2004b）、あるいは高句麗西部の重要な山城として知られる石台子山山城（辽宁省文物考古研究所等 2012）などでも認められる様式である。この点は、本書第1部の西域都市で論じた「屈曲門」と同様な構造・機能を持つものと推定できる。一方、後期高句麗の平壙城では、南北朝期の中原地域では未発見の過梁式 I Bが内城牡丹峰門に採用されている点が注目できる。中原地域における都城の最新の造営技術が、高句麗に流入している点が想定できる。また、後期平壙城と同時期の「王宮」とされる安鶴宮は、菱形に近い特殊な城壁で囲繞されるが、中軸線上で、南側にコの字状の回廊を持つ外殿・内殿・寝殿の3つの院落が連続する

平面配置を特徴とする。城門は、殿堂式 II A に分類しているが、木造建築の城門の左右に城壁が取り付く構造である。中軸正門を見ると、南壁中門  $7 \times 3$  間（3戸）、外殿南門  $5 \times 2$  間、内殿南門  $3 \times 2$  間、寝殿  $3 \times 1$  間と北側に向かって徐々に規模が小さくなる規則性がある。城壁の6門に関しては東・西・北門の規模が小さく、南壁の3門の規模が大きい。以上、後期高句麗の平壙城・安鶴宮に関しては、牡丹峰門に見られる I B 過梁式門、あるいは安鶴宮の整然とした平面配置と殿堂式門など、その具体的な系譜は明らかではないものの、中原都城の情報が常に更新される状況にあった点が推測できる。

**渤海の都城門** 渤海上京城に関しては、中心的な都城である上京城と唐長安城の共通性が指摘されてきた（刘晓东等 2006・趙虹光 2012・魏存成 2016）。また、西古城・八連城は、上京城の宮城部分に相当する点も研究史上的基本理解となっている（王培新 2014b など）。渤海海上京城の城門に関しては、I 類（單門道）：排叉柱と墩台上の永定柱による「過梁式木門樓」、II 類（三門道もしくは一殿両門式）：殿宇式・大型門楼、の2種類に分類されている。II 類は、外郭城正南門・皇城南門・宮城南門・外郭城北壁正門など中軸正門で、I 類よりも格式が高く、特に宮城南門は第5号街と皇城中央の広大な広場に開く最高格式の城門で、唐長安城承天門と同じく渤海王の重要な儀礼空間だった可能性が指摘されている（孙秉根 2005）。以上を踏まえ、ここでは2つの視点から渤海都城門を整理する。①構造に基づく分類、②中軸正門の関係性、の2点である。

まず、①の構造的な分類について。研究史上的分類は門道数が要素となっているが、本論では過梁式門（I）と殿堂式門（II）の大きく2種類に分類した上で、渤海海上京城の特徴として両者を融合させた類型（岳天懿 2020 など）が存在する点を整理してきた。すなわち、3種類である。まず、過梁式門では、外郭城南壁東門・外郭城北壁11号門・宮城正北門がある。宮城正北門の特殊な二門道を除けば單門道で、門道左右に土襯石を並べて木製地覆を設置する漢・高句麗の系譜を引く過梁式 I A である。なお、外郭城正南門も中央門道の左右墩台を大型に、左右門道を小型に構築するという特殊な構造ではあるが、やはり三門道の過梁式門である。次に  $7 \times 2$  間（皇城南門）、 $5 \times 2$  間（第2号宮殿南門）、 $1 \times 2$  間（第2号宮殿東西掖門／第5号宮殿南門）と規模の違いがあるものの、礎石建物を基本とし、左右に回廊・城壁が取り付く殿堂式門（II A・II C）がある。最後に渤海海上京城における特徴的な構造の類型として、中央の殿堂式門の左右に過梁式の「脇門」を設置する外郭城北壁正門・宮城正門がある。前述した過梁式三門道の外郭城正南門も、中央門道を過梁式で作る点以外は、同様な思想に基づく城門である。なお、唐宮城における「側門」は特別な用語として用いられる（松本保宣 2006）ため、ここでは「脇門」と呼称しておく。宮城正門は  $9 \times 6$  間、外郭城北壁正門は  $5 \times 4$  間の殿堂式門楼で、東西に過梁式の脇門を持つ点が特徴である。特に宮城正門は中央に門道が存在せず、構造上は二門道で、渤海王の隔絶性を表現する構造となっている点が注目される。

構造における三分類を踏まえた上で、②中軸正門の関係性を整理してみる。今、唐長安城（大明宮）と渤海海上京城の中軸正門の構造を比較したのが、図45である。まず、唐長安城の中軸正門の大きな特徴は、宮城正門・主殿が融合した含元殿前の龍尾道という特徴的な施設によって、中心（皇帝権力）の隔絶性が明示されている点である。明徳門・丹鳳門は中央駆道のほか、左右に各二道が存在するが、臣下が「皇帝の空間」にアクセスする門道は龍尾道前で左右各一道に集約され、東西龍尾道から含元殿へアプローチすることになる。また、含元殿左右の通乾門・觀象門は、皇帝が宣政殿において常朝に臨む際に文武百官が序班し、入門したという記録があり（松本 2019 など）、含元殿以北が皇帝の空間（本来の宮城門）として認識されていた点がわかる。一方、北門建築群に関しては、防御性の高い單門道が連続する点が唐長安城大明宮の特徴で、含元殿以南に皇帝権力の隔絶性を「可視化」する象徴的空間が設計されているのとは対照的な機能的空間である点が読み取れる。この唐長安城の中軸正門の構造との比較という視点で渤海海上京城の中軸正門を見てみると、三門道の外郭城正南門・皇城正南門に対して、宮城正南門において中心が隔絶されている点が読み取れる。渤海海上京城の宮城正門で表現されたのは、明らかに中心を隔絶する空間、すなわち含元殿空間の模倣と推定できる。さらに、渤海海上京城の宮城1～3号宮殿いずれもが前面中央にスロープがない点も確認でき、宮城正門で見られる中心の隔絶性が「反復的」に表現されている点も読み取れる。一方、宮城北門建築群の様式は、唐長安城とは大きく異なる。すなわち、宮城正北門は都城門の中でも唐長安城大明宮含耀門以外に類例のない二門道（皇帝が通行しない門）だが、宮城正門と同じく北に対して中心の隔絶性を表現したもの

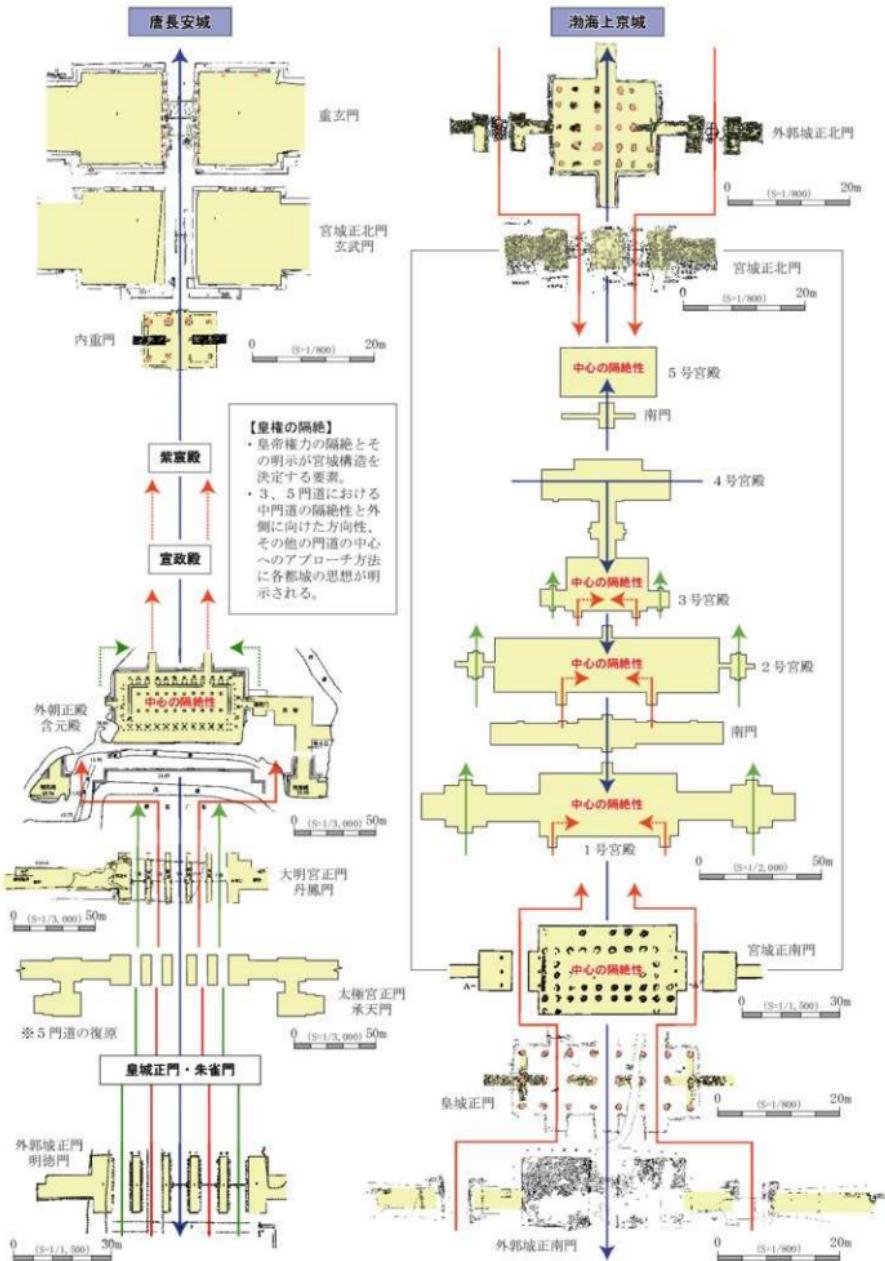


図 45 唐長安城と渤海上京城における中軸正門の比較

とみられる。宮城正北門・正南門は、二門道を採用することで渤海王の隔絶性を表現したのである。それに対して外郭城正北門の三門道は、南側の皇城正門・外郭城正南門と対応する構造と位置付けられる。渤海海上京城は宮城全体の隔絶性が南北正門によって象徴的に明示されている構造が最大の特徴だと考える。

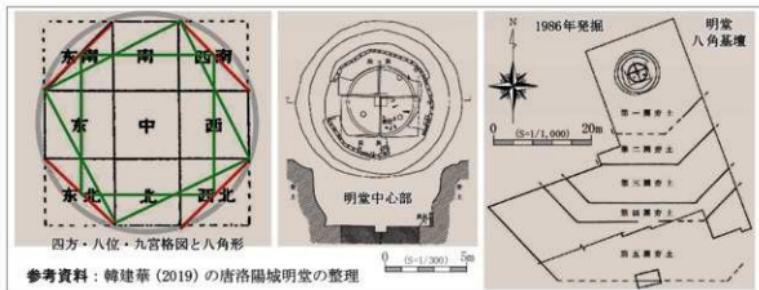
以上、①②の論点の整理から渤海海上京城の構造的特徴を把握した。唐長安城、特に大明宮含元殿の空間を強く意識しながらも、独自の論理で都城が構造化されている点を読み取ることが出来る。その際に、宮城南側における中心の隔絶性が渤海王の居住空間である4号宮殿に対するものと考えるのであれば、北門建築群が象徴している隔絶性の中心は、おそらく5号宮殿だと推定できる。上京城5号宮殿は、西古城5号宮殿と同じ特徴的な空間配置から、様々な機能が想定されてきたが、渤海王の権力を隔絶すると同時に、北側からのアプローチの方向性を持つ点から考えると、唐長安城大明宮の麟德殿（中国科学院考古研究所 1959・劉致平等 1963・楊鴻勛 1987など）に類する機能を持っていた可能性がある。すなわち、渤海海上京城は大明宮含元殿や麟德殿など、唐長安城大明宮の思想的空间を模倣しながらも、独自の論理で空間構造を再設計している点を読み取ることが出来る。渤海海上京城は唐長安城との高い共通性が指摘されている都城だが、その造営過程も単純な模倣というわけではなく、唐都城の思想空間を解体・再編成して、渤海の支配体制に合わせた都城を造営している点が重要だと考える。

なお、最後に西古城・八連城との関係性を整理しておくと、両者は上京城の宮城部分の平面配置を持ち、外城南門に單門道過梁式、内城南門に $5 \times 2$ 間の殿堂式門を採用する。渤海海上京城中軸正門で单門道を採用するのは、2号宮殿南門・5号宮殿南門のみで、異なる論理で設計された都城である点が読み取れる。さらに、西古城・八連城における内城南門における大型殿堂式門の採用は、渤海海上京城の皇城正門に対応すると思われるが、意識としては宮城正門として設計されている可能性が高い。この点は、渤海都城に採用された大型殿堂式門が、遼上京城の宮城東正門へと展開する点を考慮しなければならないだろう。

**日本の都城門** まず、日本都城門に関しては、前期難波宮・大津宮・飛鳥京・藤原宮・平城宮（京）・長岡宮・平安宮の様相について、年代順に概要を整理する。なお、日本都城門の構造は、中国都城では殿堂式と分類した範疇に属し、木造建築の左右に回廊や築地塀などが取り付く構造を基本とする。中国都城門で一般的な城壁・門道・門建築が一体化する土木混合型の構造は、日本都城門では事例がなく、百済経由で高句麗山城の影響を受けた「朝鮮式山城」に類例がある（岡山県総社市教育委員会 2005・2006など）。

まず、孝徳朝の長柄豊崎宮とされる前期難波宮は、中軸正門の朱雀門・朝堂院南門・内裏南門の構造が判明している。朱雀門 SB701・朝堂院南門 SB4501は、桁行5間（16尺等間）・梁行2間（15尺2間）、同規模の五間門である。一方、内裏南門 SB3301は、桁行7間（16尺等間）・梁行2間（21尺2間）、日本都城史上最大級の七間門である。左右に取り付く複廊によって、東西八角殿院と接続する。孝徳朝に続く天智朝の大津宮では、内裏南門 SB001が発掘調査で桁行7間（中央5間11尺・両端間9尺）・梁行2間（11尺2間）に復原されているが、地中梁の組み合わせから五間門の可能性が高い（黒崎 2001）。この点は、続く天武朝の飛鳥淨御原宮（伝承飛鳥板蓋宮跡III b期遺構）の内郭南門 SB8010・エビノコ郭西門 SB7402が、桁行5間（10尺等間）・梁行2間（9尺2間）である点とも共通する（林部 2001）。7世紀末の694年に成立した藤原京では、羅城・羅城門が存在せず（井上 2004p215・小澤 2008p208）、宮城門が問題となる。藤原宮の門構造を整理した青木敬によると、宮城門：五間門、大極殿門院：七間門という規格性が存在する（青木 2010）。中軸正門を見ると、朱雀門 SB500・朝堂院南門・北面中門 SB1900が桁行5間（17尺等間）・梁行2間（17尺2間）の五間門であるのに対して、大極殿南門 SB10700のみ七間門が想定されるなど、大極殿南門=内裏南門が藤原宮最大の門と確認できる。図46に示した前期難波宮の中軸線と同じで、7世紀代の都城では内裏南門が最も重要な門と意識されていた点がわかる。なお、7世紀代の門遺構は桁行等間である点が特徴で、前期難波宮内裏南門・藤原宮大極殿南門の門戸数については、確実なところは不明である。しかし、藤原宮大極殿南門の基壇南北中央にある幅24.7mの階段と思われる突出の規模が、門遺構の桁行5間分（17尺×5間 = 85尺）とほぼ一致し、七間五戸門の可能性が高い。小澤義は藤原宮大極殿南門が平城京羅城門に移築されたと考えており、この点は、井上和人の復原による平城京羅城門が七間五戸門である点とも符合する。

8世紀初頭に造営された平城京は、羅城門が七間門に復原されており、近年の発掘調査で羅城門の東西



前期難波宮

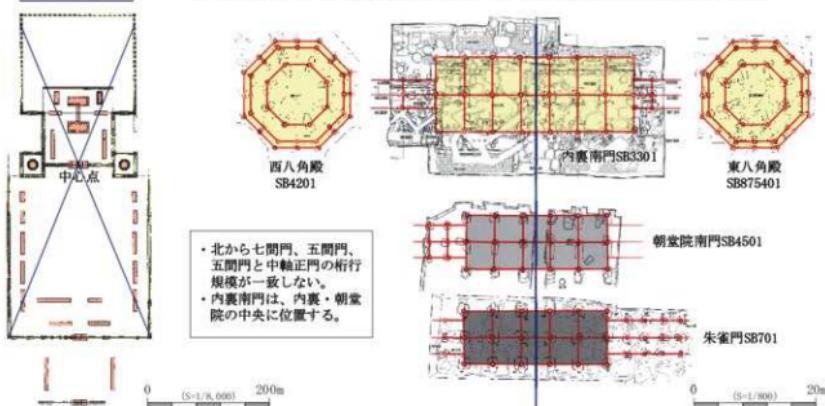


図 46 前期難波宮における中軸正門の構成

1坊分に2本の柱をセットした遮蔽施設（羅城）が検出されている（図47）（大和郡市教育委員会ほか2014）。羅城門は発掘当初、平城宮朱雀門と同じ桁行5間・梁行2間（17尺等間）と想定されていたが、井上和人の再検討で、桁行7間（中央5間17尺・両端間15尺）・梁行2間（15尺2間）に復原（井上1998b）され、近年では藤原宮大極殿南門が移築されたと考える小澤毅によって桁行7間・梁行2間（17尺等間）と推定されている（小澤2012）。一方、平城宮に関しては、宮城12門のうち、発掘されているのは佐伯門・玉手門・若犬養門・朱雀門・壬生門・小子部門・建部門の7門である。佐伯門・玉手門は基壇の一部が確認されているだけだが、朱雀門SB1800・若犬養門SB10200と同じ桁行5間・梁行2間（17尺等間）の規格とされる。壬生門に関しては東西28.9m・南北14mの朱雀門に次ぐ規模の基壇を検出しているが、建物構造については不明である。小子部門SB5000は桁行5間（中央3間15尺・両端間10尺）・梁行2間（15尺）、建部門SB16000Cは桁行5間（中央3間13尺・両端間10尺）・梁行2間（10尺2間）と判明している。以上の状況から、井上和人は、平城宮の宮城門には朱雀門と同じ基本規格が存在し、壬生門・小子部門・建部門がその規模を減じた破格の門と位置付けた（井上2010p37）。

平城宮内の門に関しては、図51に中央区・東区に分けて、関係性をまとめた。まず、中央区では朱雀門の北側、中央区朝堂院南門SB9200が桁行5間（中央3間15尺・両端間10尺）・梁行2間（15尺2間）とされる。注目すべきは、第一次大極殿南門SB7801である。掘込地業のみが残存するが、その規模から桁行5間（中央3間17尺・両端間15尺）・梁行2間（20尺2間）と想定され、東西に取り付く築地回廊上には東楼SB7802、西楼SB18500が附帯する。第一次大極殿南門は、その規模や東西楼閣の存在など、奈良時

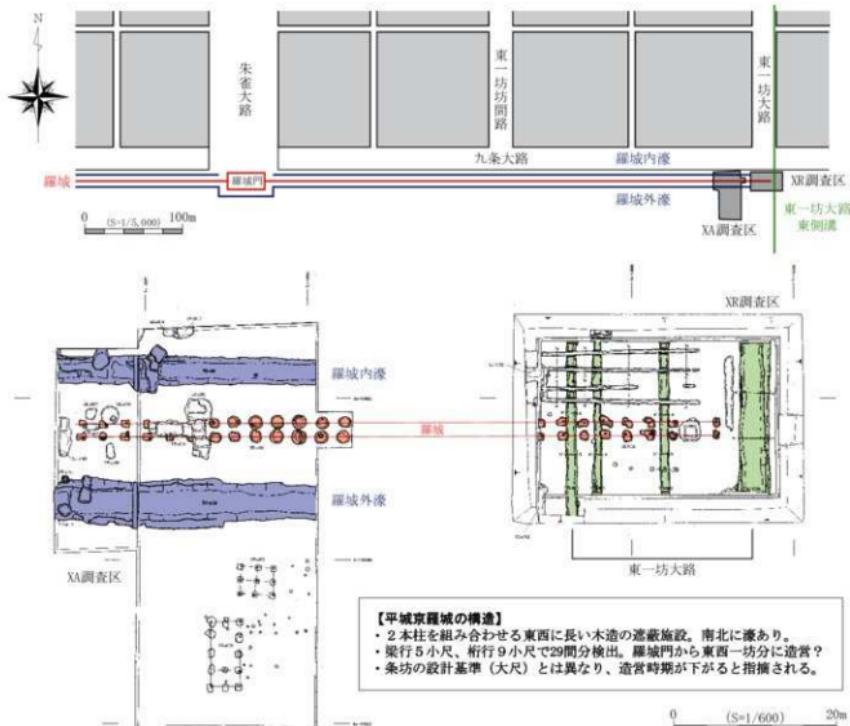


図47 平城京における南面羅城の復原（上）と発掘成果（下）

代前半において最も格式の高い門である点が明らかである。一方、東区は奈良時代後半の上層遺構を中心に整理すると、壬生門北側に朝集院南門 SB18400 が検出されているが、建物構造は不明である。東区朝堂院南門 SB17000 は、桁行 5 間（中央 3 間 15 尺・両端間 10 尺）・梁行 2 間（12 尺 2 間）の五間門で南北に土蔵が設置されている。門前左右には仗舎（SB17050・SB17060）が確認されている。その北側には、奈良時代前半期の中宮閨門（大安殿南門）SB11210 が、第二次大極殿院造営に際して桁行 5 間・梁行 2 間（15 尺等間）の礎石建ち南門 SB11200 に建て替えられている。東区最北部には、奈良時代を通じて内裏が存在したが、南面築地回廊上に位置する 3 つの門のうち、発掘されている中央門 SB3700・東門 SB7590 は、どちらも簡便な「潜門」形式である。なお、南面築地回廊上の東西には、櫻闇が設置されているが、東櫻 SB7600 は北側広場に面する構造をしており、門の莊厳施設とは考えにくく、内裏南面の門は極めて機能的な空間となっている。内裏の門が簡易な施設である点は、称徳天皇が居住したとされる第一次大極殿院跡地の西宮南門 SB7750A が、桁行 3 間（15 尺等間）・梁行 2 間（12 尺 2 間）の八脚門に復原されている点とも符合する。

長岡宮では、大極殿院南門 SB38450、朝堂院南門 SB40900 が桁行 5 間・梁行 2 間（15 尺等間）の五間門と判明しているが、朝堂院南門の東西廊が南に屈曲し、三出闇に接続する連体双闇門である点が重要である。平安京羅城門・平安宮朱雀門に関しては、遺構が確認されていないため、文献記録のみが研究対象となる。朱雀門・羅城門共に七間五戸重層門とする説が主体ではあるが、井上和人は平城宮朱雀門と平安宮羅城門の関係性から、平安京羅城門の九間門説を再検討すべきと指摘する（井上 2010b p31）。なお、平安宮八省院の朝集院南門の応天門には、連体式双闇門が採用されている。

発掘された日本都城門を年代順に整理した。以下、本論では3つの論点を設定し、中国都城門との比較を行う。すなわち、①日本都城における最大門の移動現象、②唐代都城の三重圓構造からみた日本都城門、③正門から見た日本都城の空間構造とその変化、である。

**日本都城における最大門の移動現象** 日本都城の中軸正門における大きな特徴として、門戸数不一致の原則がある。唐長安城・洛陽城においては、外郭城・皇城・宮城正南門の門道数は五・三門道、宮城北門群は單門道となるように統一されており、宮城を中心として中軸正門が相互に連関しながら設計された点に特徴がある。一方、渤海海上京城では宮城正南門・正北門で、唐長安城含元殿の空間を模倣した渤海王の隔絶性を示す二門道が採用され、その南北には三門道が採用される規則性が認められた（図45）。このように、中軸正門の門道数・門戸数は、どのような思想的背景を基に都城の階層空間を設計・配置しているか、を知るうえで重要な要素である。日本都城門では、中軸正門の門戸数が一定ではなく、7世紀には内裏南門、8世紀には羅城門が最大規模・門戸数になる特徴がある。この「最大門の移動現象」を整理してみたい。

中軸正門の関連性がわかる7世紀代の都城としては、前期難波宮・藤原宮がある。前期難波宮に関しては、その先進的な構造を説明する際に、天武朝の造営を想定する説（山中1986・2018など）がある。一方で、飛鳥京III b期のエビノコ郭正殿の存在を画期として評価し、前期難波宮内裏前殿→エビノコ郭正殿→藤原宮大極殿の系譜を想定する説が主流である（重見2020など）。孝徳朝の長柄豐碑宮と想定される前期難波宮の中軸正門を整理した図46を見ると、多くの研究で強調されてきたように内裏南門の規模が際立っている。門戸数を確定する要素はないものの、藤原宮大極殿南門の七間五戸門との共通性が伺われ、朝堂院南門・朱雀門は五間三戸門と考えられる。前期難波宮内裏南門（図46左下）・藤原宮大極殿南門（図50中）は、宮城のほぼ中心という象徴的な位置にあって、朝堂院と内裏を接続する重要な機能を果たしたものと思われる。藤原宮においても、朱雀門・朝堂院南門・北面中門などの中軸正門が五間門なのに対して、大極殿南門（内裏南門）のみは大型基壇を持つ七間五戸門である。以上、7世紀の日本都城においては、内裏に居住する天皇が出御する空間（内裏前殿・大極殿）に南面する門の格式を最も重視する原則が認められる。

8世紀の平城京では、都城最大門が羅城門へと移行する。平城京羅城門は、井上和人の研究によって七間五戸門の可能性（井上1998）が指摘されており、都城最大門は平安京羅城門に継承されていく可能性が高い。近年には、小澤毅が発掘調査の成果を踏まえて、藤原宮大極殿南門の建造物が平城京羅城門に移築された可能性を指摘した（小澤2012）。小澤の指摘は、7世紀の都城最大門であった内裏南門・大極殿南門の象徴的機能が8世紀都城の羅城門へと「移行」した点を示すとともに、平城京羅城門の直接的系譜を示した点で重要である。そもそも、中国都城においては、前漢長安城に系譜を持つ三門道過梁式門の2つの隔壁、および魏晋南北朝で発達する左右墩台を合わせた7要素（3門道・2隔壁・2墩台）を都城門の基本形としてきた。北魏洛陽城宮城正門の闕闌門で出現した大型殿堂式門が桁行7間・3門道である点も、この伝統を引き継ぐものである。すなわち、中国都城宮城正門の「七間三道門」は最高格式と認識されていたと思われ、殿堂式七間三道門は、後世では遼上京城宮城東正門・元中都皇城南門・東アジアでは高句麗安鶴宮正門・渤海海上京城皇城南門へと継承されている。殿堂式では、唐長安城興慶宮（中央1門道）、渤海八速城内城南門（中央1門道・両端2門道）など、「五間一道・五間三道」が格式の下がる類型といえる。その意味では、過梁式門ではあるが、11要素（5門道・4隔壁・2墩台）で構成される唐長安城明徳門・丹鳳門などは、まさに「破格」の格式であったと想像できる。このような中国都城における殿堂式門の格式を踏まえると、7世紀の日本では都城門の最高格式として宮城七間門を強く意識し、両端間を除く中央5間をすべて門戸として利用する日本独自の「七間五戸門」（中国都城門は、殿堂式・過梁式共に門道間に必ず隔壁を持つ）を創造したものと思われる。その格式は、前期難波宮内裏南門→藤原宮大極殿南門（内裏南門）→平城京羅城門→平安京羅城門へと継承された可能性が高い。ここでは、平安京羅城門を「七間門」と想定するが、「九間門」を想定しにくいのは、單門道（3・5要素=3・5間）・三門道（5・7要素=5・7間）・五門道（11要素=11間）を基本とする中国都城門の発展史上、思想的に存在し得ない類型だからである。

以上、日本都城では中国都城宮城正門の「七間三道門」が強く意識されており、前期難波宮・藤原宮では内裏南門に最高格式の門を採用したものの、平城京遷都の際にその格式が羅城門へと移されたと考える。す

なわち、日本都城における最大門の「移動現象」は、緩やかな変化ではなく、平城京羅城門の誕生による劇的な変化と想定できる。本来、都城門の規模は、空間相互を隔絶する城壁の規模と相関することを原則とするが、中国式の「閉鎖式里坊制」ではなく、「開放式里坊制」を採用した日本都城においては、城壁構造と門の規模が必ずしも一致しない点に特徴がある。律令国家の完成段階に入った8世紀の日本では、平城京において、主に諸外国からの使節や国内向けに威信を示す（田島 1986・古内 2017など）ための装置として、宮内最大門であった藤原宮大極殿南門を羅城門へと移築し、図47のように東西1坊分の「翼廊状」の羅城（山川ほか 2008）を造営したものと思われる。平城京羅城門の象徴性とその機能は、平安京羅城門まで継承されていくことになる。なお、都城最大門の「移動現象」に関しては、奈良時代の大寺院、すなわち興福寺（奈良文化財研究所 2010b）、大安寺（奈良市教育委員会 1999）、薬師寺（奈良国立文化財研究所 1987b）などにおいて、中門よりも南大門が大きい事実（奈良国立文化財研究所 1994a 図21など）と連動する現象である可能性が指摘されている（清水 2010）。この点に関しては、平城京で誕生した新しい象徴的空間である羅城門・羅城の空間構造が、1つの格式として寺院や官衙、例えば多賀城政庁南門の翼廊形式（図15下）（宮城県多賀城跡調査研究所 1980・1982）などに影響を与えたと考える。平城宮・京で確立した都城門の様式、例えば桁行中央間が広く両端間が狭くなる柱配置（李 2004など）、七間五戸門・五間三戸門・八脚門などの明確な階層的序列は、8世紀における都城門・官衙門・寺院門の基準になったと思われる。

**唐代都城の三重圓構造からみた日本都城門** 本論では、漢～唐における都城の発展史を整理する中で、唐長安城・洛陽城における外郭城・皇城・宮城の三重圓構造こそが、唐代都城の基本構造である点を確認した。この異なる階層空間を相互に「連接」するのが都城門であり、外郭城正南門・皇城正南門・宮城正南門・宮城正北門の4つ要素が唐代都城の空間連鎖の要である。中でも唐長安城大明宮含元殿において、宮城正門・主殿の融合した構造が成立した点が大きな画期であり、その思想と特徴的な構造が東アジア都城に強い影響を与えた点が想定されてきた。含元殿の殿前空間は、元会などの国家的儀礼が施行される外朝空間と位置付けられているため、唐の三朝制が渤海や日本にどのような影響を与え、外朝・中朝・内朝の三朝が各国都城における宮城のどの部分に該当するのか、という視点で国際的な比較研究が蓄積されてきた（劉曉東等 2006・今井 2012b）。しかし、唐長安城の三重圓構造を模倣した渤海海上京城とは異なり、日本都城は藤原京以降「京・宮」の二重構造を基本としている。まずは外郭城・皇城・宮城という唐都城の基本構造が、日本都城の構造にどのように反映されているか、を議論する必要がある。平城京以降の羅城門を外郭城正門と把握する点は問題ないので、実際には皇城門・宮城門が日本都城で存在するのかどうか、が問題となる。

日本都城では、宮城と皇城が区別されておらず、朱雀門を宮城門とも皇城門とも呼称したことから、隋唐都城よりも古い都城の原型を伝えていると考えた岸俊男の議論が著名である（岸 1976）。一方、宮城門と皇城門を区別した上で、平城宮以降の都城中枢部を位置付けたのが、金子裕之である。金子は、「日本では皇城・宮城一体、皇城の考え方方が曖昧」であった点を前提とし、『続日本紀』和銅3年（710年）正月の藤原宮に関する記載「皇城門外朱雀路」も日本では宮城・皇城の区分が曖昧だったために、2つの語を同義に用いたと考えた。さらに、唐長安城では東西二朝堂の北側に宮城門が位置するため、日本都城では大極殿門が該当するものの、実際には大極殿院・朝堂院が日本都城では一体である点から「ここ（大極殿門）で宮城と皇城を分離することはできない（一中略）」限られた状況下で唐の宮城構造を真似るなら、宮城・皇城が一体化した朝堂院（朝集殿院）南門を宮城門にする「ほかない」とし、長岡宮朝堂院南門の門闕を位置付けた（金子 2007）（図5中）。唐都城の宮城門・皇城門の存在から日本都城の中枢部を理解しようとした金子の視点は非常に重要である。しかし、新宮学が指摘するように、唐代都城の宮城・皇城は一体として内城を構成しており、皇城が独立しているわけではない。また、唐代都城の基本構造は北宋以降にそのまま継承されるわけでもなく、特に唐代の皇城空間（北宋東京城では、「皇城」は「宮城」の別称として用いられた）は、北宋以降には空間的機能が変質する（久保 2014）とともに、特に元代のモンゴル的要素との融合によって近世皇城空間が新しく成立していく点が指摘されている（新宮 2009）。つまり、唐代都城においても宮城・皇城が一体化した「内城空間」の中で、皇帝と臣下の「象徴的な境界」に位置するのが宮城門だったことになる。

以上の研究を踏まえれば、宮城・皇城の明確な区別がないとされる日本都城も、唐代都城の本来の構造を

反映している可能性が高く、宮（唐代都城の宮城+皇城、すなわち内城）の南面中門が「皇城正門」であり、宮内部において天皇と臣下の象徴的な境界が「宮城正門」と認識されていたと考える。結論を先に述べれば、日本都城において「宮城正門」は固定的存在ではなく、歴代都城で一定の方向性をもって移動（南下）していくと考えている。ただし、文献史料や研究史上的呼称では、宮城門・皇城門が混在するため、本論では日本都城における宮の南面中門（唐代都城の皇城正門＝内城正門）を「空間的皇城正門」と呼称し、宮内において天皇と臣下の境界に位置して儀礼空間の中核として機能する門（唐代都城の宮城正門）を「儀礼的宮城正門」と呼称し議論を進める。空間的皇城正門＝朱雀門（奈良時代後半－壬生門）なので、実際には各都城における儀礼的宮城正門を認識する作業が中心的課題となる。その際に注目されるのは、魏晋南北朝以降、歴代都城の宮城正門には必ず門闕形式が採用されている点である。本論では、門が、附帯する建造物を含めてどのように莊厳化されているか、に着目して日本都城における儀礼的宮城正門の意義を考えてみたい。

日本における都城門の莊嚴化に関しては、宮城内における中心建物（門を含む）周辺に位置する「樓閣建築」の重要性を指摘した上野邦一の整理（[上野 2010](#)）が注目できる。これらの建物は、山田邦和が「樓閣附設建築」と呼称するものを含む。山田は「樓閣附設建築」を、唐長安城承天門・含元殿などを模倣して、桓武天皇が長岡宮・平安宮内に造営した建造物と位置付けている（[山田 2007](#)）。しかし、上野・山田が指摘する「樓閣（附設）建築」を見ると、全てが同一レベルで比較できる建造物ではなく、いくつかのタイプに分類ができる点に気づく。[図 48](#) に示したように、本論では以下の I ～ III 類に分類する。

**【I 類】中軸正門と回廊によって接続する建造物** 前期難波宮内裏南門 SB3301 に取り付く東西回廊によつて接続される東八角殿 SB875401・西八角殿 SB4201、平城宮中央区第一次大極殿院南門 SB7801 に取り付く東西築地回廊上に位置する東樓 SB7802・西樓 SB18500、平城宮内裏南壁の東西両端に位置する東樓 SB7600・西樓、長岡宮朝堂院南門 SB40900 に取り付く東西回廊が前面に屈曲して接続する東門闕・西門闕（SB44404）、平安宮朝集院南門：応天門の門闕である栖鳳樓・翔鸞樓が該当する。中軸正門に附帯する施設として、本論で議論の対象となる類型である。I 類は、中軸正門東西に独立院が接続する I A 類、中軸正門東西回廊上に樓閣が位置する I B 類、中軸正門に翼廊と双闕楼が附帯する I C 類に細分が可能である。**【II 類】回廊の屈曲部に位置する建造物** 平安宮八省院の大極殿前面左右に位置する蒼龍樓・白虎樓、平安宮豊楽院の豊楽殿東西に位置する壽景樓・栖霞樓が該当する。中国都城では「角樓」と呼ぶ建造物で、前者は大極殿、後者は豊楽殿を莊嚴化する役割を果たしたと思われる。**【III 類】大極殿の東西に位置し、空間としては内裏の内部で独立して存在する建造物** 藤原宮大極殿院東西の大型磯石建物：東樓 SB530・西樓、平城宮東区第二次大極殿院東西の南北棟建物：東樓 SB7700・西樓が該当する。藤原宮・平城宮とともに、大極殿院外側の内裏に単独で位置するため、大極殿を莊嚴する施設かどうかは不明。

このように整理すると、「角樓」と呼ぶべき II 類、内裏の内部で独立する III 類を除く I 類のみが、確実な中軸正門の莊嚴化施設と位置付けられる。まず、I A 類の前期難波宮内裏南門東西の八角殿に関しては、内裏南門と接続しているのは正確に言うと八角殿である。中国都城でもこのような形の附帯施設は確認されておらず、正確な機能は不明である。近年、進展が著しい前期難波宮の研究（[積山 2020・李 2020](#)など）だが、八角殿については古市晃が 5 説（仏殿説／鐘台説／東西樓閣説／儒教・道教建築説／鐘樓・鼓樓説）にまとめた（[古市 2004](#)）ように諸説あり、結論には至っていない（[岸 1988](#)、[中尾 1995a・2014](#)、[李 2014](#)など）。中国都城に目を向けると、宮城中枢部の八角形建築として思い浮かぶのは、唐洛陽城に武則天が建造した明堂である。天地の祭神や祖先祭祀を行う空間であるとともに、皇帝の德治を示す明堂は 688 年に唐洛陽城宮城中枢部の乾元殿の場所に造営された。738 年に玄宗が明堂の撤去を命じた際の史料の記載として「又去柱心木、平座上置八角樓」（[王溥 1955p281](#)）とあるが、2008 ～ 2012 年に行われた全面発掘によって巨大な八角形の版築が確認された（[図 46 上](#)）（[中国社会科学院考古研究所洛阳唐城队 1986・韓建华 2019](#)）。ちなみに、明堂の北西に位置する天堂は巨大な円形版築を持つが、中心坑は同じ八角形である（[洛阳市文物考古研究院 2016](#)）。唐洛陽城の明堂は、孝德朝長柄豈砲宮と想定される前期難波宮よりも年代的に新しいため、前期難波宮八角殿の祖型として想定されることはあまりないようだが、前漢長安城（[中国社会科学院考古研究所 2003](#)）・漢魏洛陽城（[中国社会科学院考古研究所 2010](#)）でも確認されている礼制建築：明堂は、皇帝の統治・

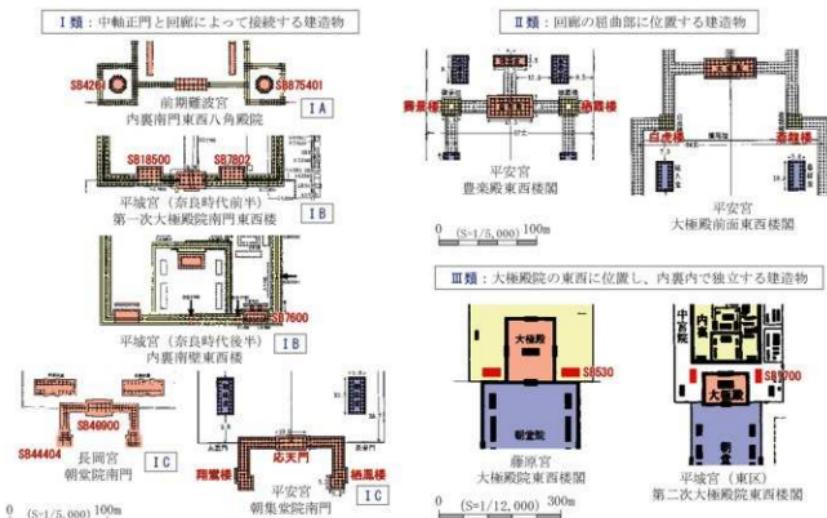


図 48 日本都城における「中軸を莊厳化する施設」の分類

支配の根源を示す象徴的な建造物であり、7世紀段階の日本都城が中国都城における礼制建築（明堂）の思想的影響を受けている可能性は十分にある。前期難波宮では回廊を通じて八角殿院が内裏正門と接続するところから、本論では礼制建築（明堂）の影響を受けた「内裏南門を莊厳化する左右楼閣」を想定しておく。

次に、I B 類とした平城宮中央区大極殿院南門東西樓（奈良時代前半）、東区内裏南壁東西樓（奈良時代後半）に関しては、ともに平城宮内の築地回廊上に造営された楼閣ではあるものの、性質・機能が異なる点が推定できる。中央区大極殿院南門 SB7801 に取り付く東西築地回廊上の東樓 SB7802・西樓 SB18500 は、大極殿院創建よりやや遅れる I -2 期に造営された東西楼閣だが、構造的には本論の中国都城の分類で Q2 とした双塼楼に該当する。確実に、中軸正門である大極殿南門を莊厳化する施設である。一方、平城宮東区の内裏 III 期に遮蔽施設が築地回廊となった際に、南面築地回廊上、潜門形式の中門 SB3700・東門 SB7590・西門の左右、すなわち南壁東西隅に造営されたのが東樓 SB7600・西樓である。発掘された東樓 SB7600 に注目すると、築地回廊造営時の III 期（745-760 年頃）と時期が新しい点に加えて、北側に階隠し機能を持つ SB7601 が位置するなど、内裏内部に向けた構造である点に特徴がある。重見泰は、飛鳥～奈良時代中頃までの内裏南門に関して、「見えない王」である大王の私的空间は本来出入りのない閉ざされた空間であったため、南門も簡易であり、内裏南面に格式の高い門が開くのは、平城宮中央区の「西宮」南面築地回廊上における八脚門 SB7750A 以降と指摘する（重見 2020p148-151）。すなわち、日本都城において、天皇の私的空间である内裏正門は莊厳化の対象ではない可能性が高い。なお、平城宮の東樓 SB7600 と同様の構造は、後期難波宮の内裏南面複廊の東西隅（SB1021・SB11222）にも認められる（高橋 2014）。

最後の I C 類は、長岡宮朝堂院南門 SB44404、平城宮朝集堂院南門：応天門に附帯する屈曲する翼廊、東西闕楼である。中国都城の分類で指摘した Q4、すなわち連体双出闕に該当する。明らかに唐長安城太極宮承天門、唐洛陽城応天門を模倣する正門の莊嚴施設である。

ここまで日本都城における中軸正門を莊嚴化する附帯施設を I 類とし、平城宮内裏南壁東西樓を除く 4 例を確実な「莊嚴化された門」と位置付けた。各都城の中軸正門の規模と附帯施設の有無を整理した表 3 によると、附帯施設によって「莊嚴化された門」は、前期難波宮内裏南門→平城宮中央区大極殿院南門→長岡宮朝堂院南門→平城宮朝集堂院南門となり、徐々に南側に移動（南下）した点がわかる。中国都城において附

帶施設を持つのは基本的に宮城正門である点を考えれば、本論の結論は極めてシンプルである。すなわち、日本都城では唐代都城の三重圓構造が常に意識されており、唐外郭城正門は京正門の羅城門、唐皇城正門は宮正門の朱雀門（奈良時代後半のみ壬生門）に該当する一方、唐宮城正門は内裏南門（前期難波宮・藤原宮）→大極殿南門（藤原宮・平城宮）→朝堂院南門（長岡宮）→朝集院南門（平安宮）と該当する門が徐々に南下したものと考える。以上、日本都城の発展史上の大きな特徴として、「空間的皇城正門が固定化」する一方で、「儀礼的宮城正門が南下」する現象を把握できる。なお、本論の「儀礼的宮城正門」とは、『養老令』で規定される「宮城門」（『大宝令』の「外門」）ではなく、7～8世紀の日本都城の宮内において、当時の人々が「天皇と臣下の空間の境界（接続点）」と考えていた場所（唐代都城における「宮城正門」の位置）を示す。つまり、唐代都城の基本構造である三重圓構造は、日本都城でも強く意識されており、宮城・皇城を一体の「内城」と把握する考え方も踏襲したと考える。唐代都城では、宮城・皇城が南北に配置されるが、日本都城では「皇城の中に宮城を包摂する」空間構造であるため、「儀礼的宮城正門」の位置が見えにくくなるものの、天皇と臣下の空間の境界は常に意識されており、両空間を連接する正門に関しては天皇が出御する特別な儀礼空間として認識されていたと考える。

以上、日本都城の造営に際しては、中国唐代都城の三重圓構造が基本となったと想定できるが、実際にはその思想的空间が解体・再編成されて、日本独自の空間として再設計されている点が重要である。特に、唐代都城における宮城正門は、天皇と臣下の境界を示す門として強く意識されたと思われるが、日本都城では内裏と一体化した大極殿院、及びその南側の朝堂院という「二大院」が宮内に配置される基本構造が藤原宮・平城宮で成立したため、実際には宮内に日本独特の三分節構造が現出することになった。『大宝令』（701）と『養老令』（718）の規定にある三門は、この宮内三分節構造を反映するものと想定できる。すなわち、大極殿南門（内裏外郭南門）一内門・闇門、朝堂院南門一中門・宮門、宮南面中門（朱雀門・壬生門）一外門・宮城門という基本認識である。その中で大極殿南門こそが、唐代都城の宮城正門にあたる空間（「儀礼的宮城正門」）と認識されていたと思われ、天皇が出御する特別な空間として機能したと考える。

**正門から見た日本都城の空間構造とその変化** ここまで議論した「都城最大門の移動現象」、および「儀礼的宮城正門の南下現象」を踏まえて、日本都城中枢部の空間構造の変遷を整理してみたい。日本古代都城の正門の規模と構造を整理した表3、および中枢部の変遷過程を整理した図49を基にまとめてみる。日本都城中枢部の変遷過程に関しては、研究史上あらゆる角度から分析されてきた。近年の中枢部の変遷を整理した図版を見ると、中尾芳治（中尾 2014p218-219 図8）、渡辺晃宏（渡辺 2020p12 図7）、重見泰（重見 2020p182 第23図）など、いずれも大極殿の系譜を中心に整理している点が特徴である。特に、渡辺の図版に象徴的に示されているように、「天皇の日常的政務空間（内裏前殿）」および「国家的儀礼空間（大極殿）」の系譜・系統関係から、変遷を考える研究が主流である。その際に宮内の空間的「分節構造」は意識されておらず、朱雀門・壬生門のラインで各都城の図版が「揃えられて」いる。一方、本論では日本都城の中心にあるのは内裏で、その構造変化（橋本 2011）こそが、中枢部の変遷において重要な役割を果たしたと考えるため、内裏の中心（図49 黄色）で各都城を合わせた。さらに、儀礼的宮城正門（図49 赤色）・空間的皇城正門（図49 青色）・外郭城正門（図49 緑色）という唐代都城の三重圓構造からみた分節構造を示した。

まず、7世紀の都城では、前期難波宮の内裏南門に関して、中尾が唐長安城太極宮承天門の模倣を想定し、内裏を唐宮城・朝堂院を唐皇城に対応する空間と指摘している点（中尾 2014p208 など）が注目できる。すなわち、朱雀門を皇城正門、内裏南門を宮城正門とする考え方で、この議論の背景には佐竹昭の文献史学からのアプローチがある。佐竹は、大宝令以前の敕宥儀礼を検討し、藤原宮大極殿南門が唐長安城太極宮承天門の機能の一部を受容していると指摘した（佐竹 1988）。唐長安城太極宮承天門前の東西朝堂、大明宮含元殿前の東西朝堂の在り方が、孝德朝長柄豊碑宮に導入されたと考える中尾は、内裏南門東西の八角殿院も唐制を模倣した鼓樓・鐘楼と考えている（中尾 1995a・2014）。この点に関しては、唐代の時報・諸門開閉システムを検討した吉田歎が、唐代においては宮城中枢部の正殿前庭（太極宮前庭・宣政殿前庭）に鐘楼・鼓樓が設置され、承天門の鼓によって諸門が開閉されていたことを指摘している点が重要である。吉田は、中國では皇帝が時間を支配し、その時間（昼夜を分ける諸門の開閉時間）を人民に知らしめる「住民支配の要

表3 日本古代都城における正門の規模と構造

都城門(規模)	前期難波宮	藤原京	平城京		長岡京	平安京	
			中央区	東区(上層)		聖来院	朝堂院
内裏南門	造構番号 SB3301(東西棟)	—	SB3700(東西棟) 1(?) 2(?) ?	— 1(?) 2(?) ?	— 5(13×5)? 2(14×2)? ?	承明門 ? ?	— ? ?
	桁行(尺×間数) 7(16×7)						
	梁行(尺×間数) 2(21×2)						
	基礎規模(?)						
大極殿院 南門	造構番号 SB10700	—	SB7801(東西棟) 5(?) 2(?) 40.1×14.4	SB11200 5(15×5) 2(15×2) 27.8×16.2	SB38450 5(15×5) 2(15×2) 26.1×13.8	— — — ?	— — — ?
	桁行(尺×間数) 7(17×7)						
	梁行(尺×間数) 2(17×2)						
	基礎規模(?)						
新朝院 南門	造構番号 SB4501	—	SB9200 5(10+15×3+10) 2(15×2) ?	SH17000 5(10+15×3+10) 2(15×2) 26.0×16.0	SB40900(回) 5(?) 2(?) ?	儀式門 会昌門 昇天門(回) ?	?
	桁行(尺×間数) 5(15×10)						
	梁行(尺×間数) 2(15×2)						
	基礎規模(?)						
朝集院 南門	造構番号 SB18400	—	— — — 31.9×16.6	?	— — — 28.8×14.0	昇天門 ?	?
	桁行(尺×間数) 5(16×5)						
	梁行(尺×間数) 2(15×5)						
	基礎規模(?)						
宮正門	造構番号 朱雀門SB701	朱雀門SB500	朱雀門SB1800 壬生門SB0500	羅城門SB700 5(17×5) 2(17×2) ?	— — — ?	朱雀門 ?	?
	桁行(尺×間数) 5(16×5)						
	梁行(尺×間数) 2(15×5)						
	基礎規模(?)						
京正門	造構番号 7(17×7)	—	7(17×7) 2(17×2) 41.5×16.4	— — ?	羅城門 ?	?	?
	桁行(尺×間数) —						
	梁行(尺×間数) —						
	基礎規模(?)						

※緑トーンは、各都城の最大規模を持つ門。黄トーンは、東西棟・闕など附帯施設を持つ門を示す。赤枠は想定される「儀礼的宮城正門」。

※尺は、1尺=0.3m前後の唐大尺を示す。門号は通説に従って表示すると同時に、発掘された門は各報告書に基づく造構番号で表示した。

の位置に承天門があった」とする一方で、日本では陰陽寮の漏刻台に鼓が置かれるように「天皇による時間の支配を表現する姿勢が弱い」(吉田 2011) としている点も注目出来る。前期難波宮の内裏南門では、唐代都城の宮城正門が強く意識されつつも、その機能や意義が日本都城では大きく変質している点が重要だと考える。唐代都城における宮城正門は、本来的には外朝大典の儀礼空間として機能したが、佐竹が指摘するように「日本の宮室における中国的な外朝機能の希薄性は、天皇が自らの正当性を、民衆を前にした儀礼の場で論理的に示す必要を感じなかつたから」(佐竹 1988p16) という指摘は、極めて的確な表現だといえる。

前期難波宮内裏南門の系譜は、遺構の規模や構造からみて藤原宮大極殿南門(内裏外郭正門)の七間五戸門に引き継がれた点は確実である。藤原宮大極殿南門には左右樓閣などの荘嚴施設は存在しないが、「内裏前殿」としての大極殿と「五位以上官人の侍候空間」(吉川 2005) としての朝堂院の間にある大極殿南門が、「儀礼的宮城正門」の役割を果たした点は佐竹の分析(佐竹 1988) でも明らかで、だからこそ朱雀門を「羅城門」と呼称したものと思われる。唐長安城太極宮承天門前・大明宮含元殿前に整備された朝堂は、集議・儀礼・訴訟の空間(佐藤 1977) であり、日本都城の朝堂とは性質が異なる。しかし、小澤毅が「四朝堂であれ十二朝堂であれ、朝堂が官人の侍候空間であり、大極殿南門より南の朝堂院は臣下の空間であった」とし、「大極殿南門が天皇の空間の南端に位置し、臣下の空間である朝堂院との結節点として機能した」と指摘(小澤 2012p684) するように、藤原宮大極殿南門は明らかに唐の宮城正門を意識した建造物だと考える。

710年の平城京の造営に際しては、704年に帰国した粟田真人を執節使とする第7次遣唐使の持ち帰った情報が重要な影響を与えた点が想定されており(井上 2008p22など)、平城京と唐長安城の共通性が様々な角度から指摘されてきた(王 1997など)。平城京の最大の特徴は、外郭城正門、すなわち羅城門の出現である。前期難波宮内裏南門・藤原宮大極殿南門など、宮内において天皇の権威を象徴する存在として機能した最大の七間五戸門は、国家の威信を国内外に明示する象徴的な存在である羅城門へと移行した。羅城門は、日本

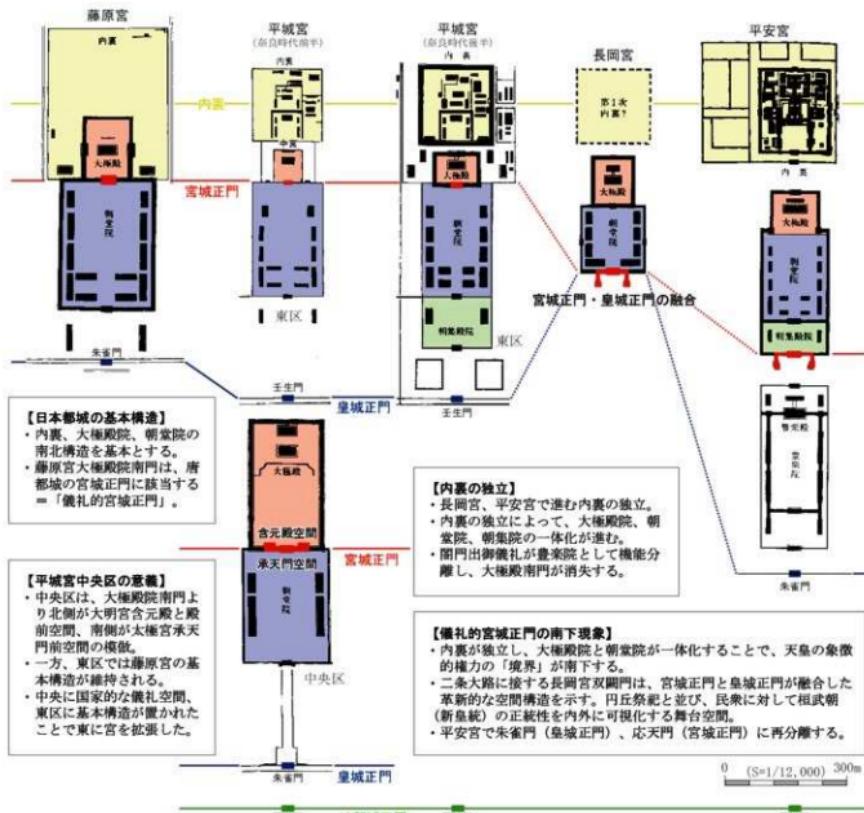


図49 「宮城正門」「皇城正門」「外郭城正門」の概念からみた日本都城中枢部の変遷

都城の国家的シンボルとして、その存在が平安京まで継承されることになる。このように、前期難波宮・藤原宮の「天皇の権威を象徴する内裏（大極殿）南門」から、平城京の「國家の威信を示す羅城門」へと最大門は移動したが、大極殿南門の「儀礼的宮城正門」としての機能・役割は、平城宮でもそのまま継承されたものと思われる。『続日本紀』に記載された「重闇門」を検討した小澤毅は、藤原宮大極殿南門・平城宮中央区大極殿南門（奈良時代前半）、平城宮東区大極殿南門（奈良時代後半）に比定し、藤原宮・平城宮の「重闇門」は一貫して大極殿南門を指す呼称であった点を指摘した。また、朱雀門・羅城門も維続して重層であった点を強調した（小澤 2012）。小澤が重層と指摘する大極殿南門・朱雀門・羅城門は、唐代都城の三重圓構造の結節点に位置する宮城正門・皇城正門・外郭城正門に該当する門である。例えば、藤原宮大極殿南門・平城宮中央区大極殿南門が、宮中に位置する点はよく知られている（藤原宮大極殿南門はほぼ中心、平城宮中央区大極殿南門はやや北側に位置する：小澤 2018p303）が、図50に示したように、その位置はまさに唐長安城の皇城・宮城の中心、すなわち承天門の位置に対応する。藤原宮・平城宮の大極殿南門が、唐代都城の宮城正門を志向して設計されている点は、都城の空間構造上も明らかである。日本都城における朝堂院の本質は、臣下が天皇に侍候するための空間とされる（吉川 2005）が、天皇と臣下の空間の境界にある大極殿南門が唐代都城における宮城正門と同じ象徴的な意義が付与されながらも、日本の支配体制に合致する

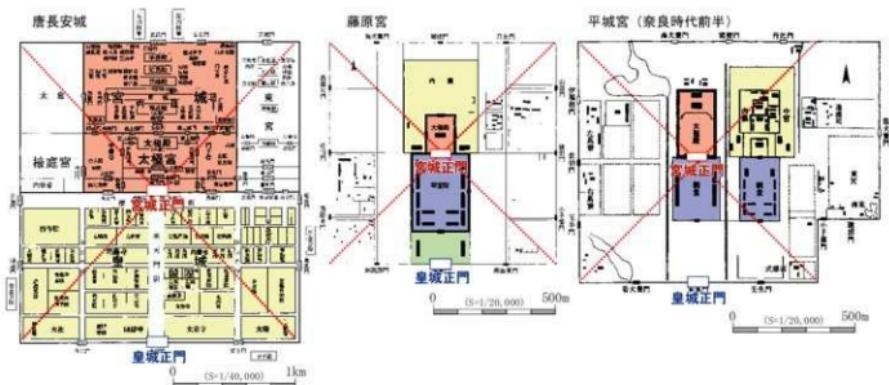
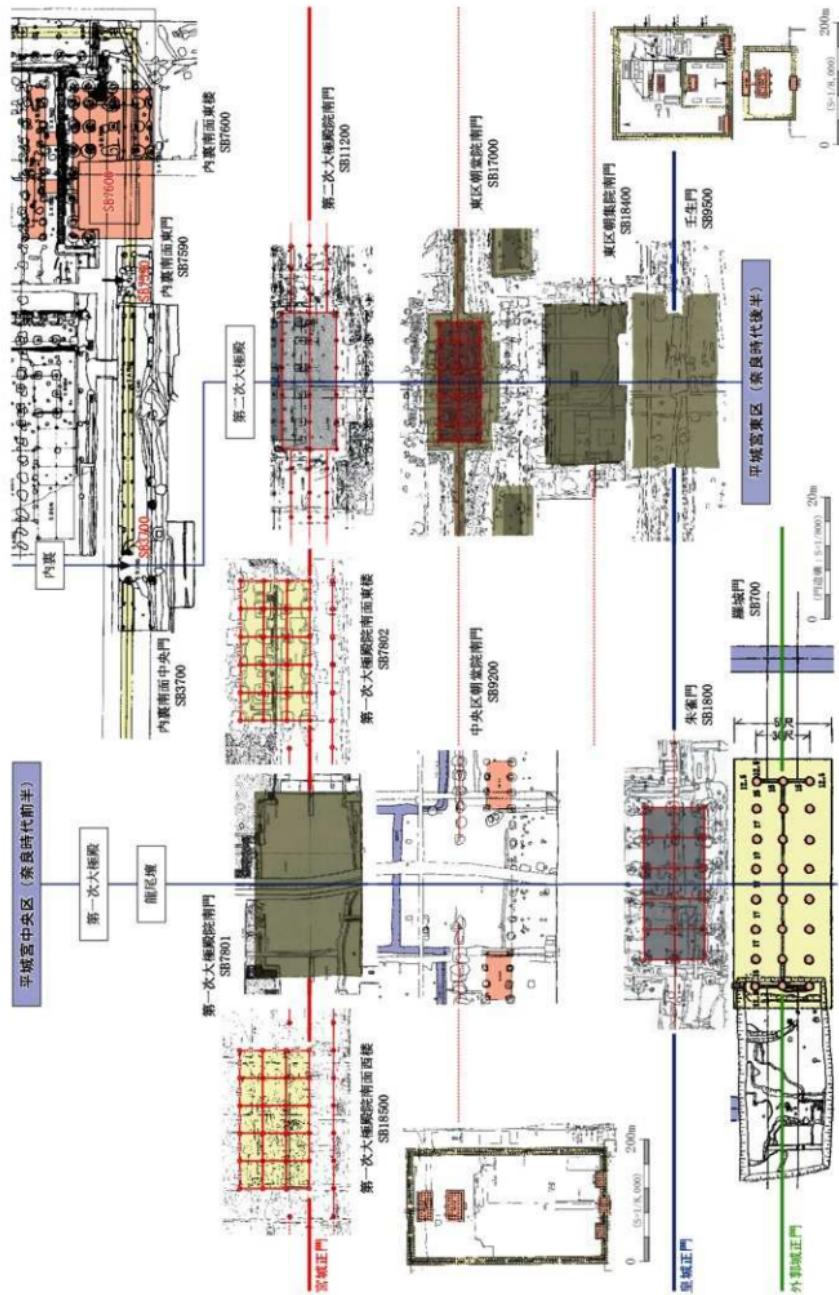


図50 唐長安城・藤原宮・平城宮の「宮城正門」と「皇城正門」の位置

形で設計し直されている点が重要だといえる。以上、日本都城では平城京の誕生によって初めて、唐代都城における外郭城正門（羅城門）、皇城正門（朱雀門）、宮城正門（中央区大極殿南門）の「三重圏構造」が実現したと考える。平城宮中央区大極殿院南門 SB7801 は「儀礼的宮城正門」と認識されていたからこそ、天皇が出御する空間（橋本義則の「閑門出御型」）となり、その空間を莊厳化する施設として東樓 SB7802・西樓 SB18500、すなわち中国都城 Q2 の「双塼樓」が採用されたのである。

このように奈良時代前半の平城宮（図51左）では、唐長安城の皇城正門を朱雀門、宮城（太極宮）正門を中央区大極殿院南門、という空間配置で再現する一方で、中央区大極殿院内部の空間構造（大極殿・龍尾壇・殿前広場）は唐長安城大明宮の外朝空間（丹鳳門へ含元殿）を模倣した可能性が高い（浅野 1990・狩野 1990・鬼頭 2000・今井 2012b・積山 2013など）。その場合、中央区大極殿南門 SB7801 は、平城宮朱雀門との関係では「承天門」、平城宮中央区大極殿との関係では「丹鳳門」、両者の空間構造を同時に再現したことになる。すなわち、平城宮中央区大極殿南門 SB7801 は、唐長安城太極宮・大明宮両者を模倣した空間の結節点に位置する重要な存在であると同時に、羅城門（外郭城正門）・朱雀門（皇城正門）と並ぶ三重圏構造の最奥の宮城正門として、天皇権力の隔絶性を表象したものと考える。以上、平城宮最大の特徴は、奈良時代前半の中央区において唐長安城太極宮・大明宮の空間構造を同時に表現した点にあると考えるが、もう一つの大きな特徴は、東区において藤原宮の基本構造：内裏／大極殿院（中宮院）／十二朝堂院を継承する（小澤 2003・2018・渡辺 2020など）点である。列島の伝統的な大王を中心とする支配体制と中国都城の思想が結びついて創造された7世紀の都城：藤原宮の基本構造では、第7次遣唐使がもたらした情報（唐長安城太極宮・大明宮の空間構造）を表現するのが難しく、中央区に「承天門型」「含元殿型」の空間構造を再現し、藤原宮までの伝統的な空間構造をもう一つの軸線として東区に「スライド」させたもの（図51右）と思われる。中央区が国家的な儀礼空間、東区が日常の政務空間として奈良時代前半に併存した点は、発掘調査によって明らかになっているが、本来、国家的な儀礼空間としての役割を果たすべき「儀礼的宮城正門」と認識されていたのは、あくまでも中央区大極殿南門 SB7801 だったと考える。それゆえに、SB7801 には莊厳施設として東西楼が造営されたのに対して、東区下層中宮閨門 SB11210 は、藤原宮大極殿南門の系譜を引き、莊嚴施設などが造営されなかつた可能性が高い。しかし、奈良時代後半の「遷都後」には、東区に中心が移行し、壬生門が「空間的皇城正門」、東区大極殿南門が新しい「儀礼的宮城正門」と認識されたと考える。

長岡宮・平安宮に向けた日本都城中枢部の変化は、内裏の独立（古瀬 1998b・橋本 2011）、儀礼空間（大極殿出御型・閑門出御型）の機能分化（橋本 1995）などの方向性が指摘されてきた。その際に重要なのが、「儀礼的宮城正門・空間的皇城正門」の空間配置がどのように変化したか、である。長岡京は、新しい皇統の都を造営するという桓武朝の理念のもとに、複都制を廃して平城京と後期難波宮が1つにまとめられた点



に歴史的意義があるとされる。また、後期難波宮の中軸部が長岡宮に移建された点も定説となっている（中尾 1995b・國下 2014 など）。長岡宮では中軸上の大極殿南門 SB38450、朝堂院南門 SB40900 が検出されており、特に朝堂院南門は二条大路に接して、その南面に一辺 600 尺四方の正方形区画が東西に存在したとされる（朝堂院南面区画・図 13・古闇 2020）。長岡宮朝堂院南門は、唐長安城太極宮正門；承天門、および唐洛陽城宮城正門；応天門に採用された連体双闕門（連体双出闕 Q4）である。正門を莊厳化する附帯施設の存在から、平城宮中央区大極殿院南門・東区大極殿院南門の系譜を引く「儀礼的宮城正門」である可能性が高い。注目すべきは、日本都城初の中国式連体双闕門の採用が、宮南壁中門、すなわち二条大路に接する朱雀門（空間的皇城門）の位置という点である。長岡宮において、日本都城史上初めて「儀礼的宮城正門」と「空間的皇城正門」が融合し、宮南面大路の「広場」に開かれたことになる（図 49）。長岡宮において、朝堂院南門と朱雀門が「兼用」なのは、「仮説の都」の造営を急いだためという解釈（鍋田 1996p473）もあるが、連体式双闕門が宮南面に広場をもって開く空間は、本来的な唐代都城における宮城正門の外朝空間の在り方を模倣している可能性が極めて高く、桓武朝の新しい試みを反映する画期的な現象と考える。

佐竹昭が指摘（佐竹 1988）したように、藤原宮など日本宮室における中国的外朝空間の希薄性は、天皇が自らの正当性を民衆の前にした儀礼で示す必要がなかったからと思われる。中国皇帝は、宮城前面の外朝大典空間で実施される元会儀、あるいは南郊円丘で実施される祭天儀礼を通じて、万民に自らの正当性を示す必要があった一方で、日本天皇は統治の必然性を民衆を前に示す必要がなかった。そのため、平城宮中央区大極殿院において中国式の国家的儀礼空間を模倣しつつも、「儀礼的宮城正門」は天皇と臣下の境界に置かれることになった。しかし、光仁天皇から引き継いだ「新たな皇統」を国内外に示す必要性に迫られたのが、桓武朝である。長岡宮において、天皇の権威を象徴する「儀礼的宮城正門」が南下して「空間的皇城正門」と融合した点は、延暦 4 年（785 年）・6 年（787 年）に「交野柏原」で桓武が行った祭天儀礼（山中 2011 など）と連動する現象と把握することもできる。桓武天皇は、中国式連体双闕門を外朝大典空間として宮正門に導入することで、天皇一臣下・民衆の接点を集約して可視化すると同時に、日本都城には存在しなかった礼制建築の空間を新たに導入し、新しい皇統による統治の正当性を内外に示したものと考える。

続く平安宮では、内裏が完全に独立し、「閨門出御型」の儀礼が豊楽院として機能分化したこと、大極殿院・朝堂院・朝集院が「八省院」として一体化し、八省院前面の朝集院南門（応天門）に「儀礼的宮城正門」の莊嚴施設である連体式双闕門が引き継がれる。これは、長岡宮段階で「閨門出御型」の空間として機能した「儀礼的宮城正門」の性格が大きく変化しており、結果として朝集院正門の位置まで南下したものと思われる。この段階で再び「儀礼的宮城正門」と「空間的皇城正門」は分離し、朱雀門（皇城正門）と応天門（宮城正門）が中軸上で近接して存在する日本都城の最終的配置となる。

むすびにかえて—周礼・三朝制採用という考え方とその限界 以上、本論では唐代都城の三重圓構造を相互に連接する中軸正門（外郭城正門・皇城正門・宮城正門）の視点から、日本都城中枢部の空間構造の変遷を整理した。東アジアの都城研究では、日本都城の詳細な調査成果を踏まえて、中国都城を比較の対象とする分析は多いものの、中国都城の枠組みから日本都城を考える視点は、王仲殊の一連の研究（王仲殊 1983・1999・2000a・2000b・2001a・2001b・2002・2003・2004）を除けば、極めて限られている。また、考古学的分析に関して言えば、最も比較研究が進む唐長安城・平城京に関しても、平面配置の共通性・非共通性の検討が中心となっている段階である（王 1997・井上 2008 など）。そのため、本論では重圓構造を特徴とする都城の空間相互の結節点である中軸正門に着目し、漢～元までの発掘された遺構を整理した上で、高句麗・渤海・日本都城の空間構造を比較する分析方法を提示した。近年、中国の急激な経済発展によって、膨大な発掘資料が蓄積されているものの、遺構の国際的比較研究に関しては、各国の建造物の存在形態や思想的な背景の違いによって直接的な比較は難しいと考えられてきた。しかし、共通の機能を持つ遺構の分析など、特定の分析条件を設定すれば、遺構レベルでの都城の直接的・実証的な国際比較は十分に可能だと考える。

一方、日中都城の比較研究の分野では、『周礼』に基づいて藤原京の京城を理解しようとする研究（中村 1996・小澤 2003・2008）、『周制』あるいは唐の『三朝制』に基づいて前期難波宮（中尾 1995a・1995b・豊田 2001・吉田 2002）・平城宮（今井 2012b）の構造を把握しようとする研究が多く蓄積されている。しかし、

遺構の存在形態の比較などの考古学的作業ではなく、実態の見えにくい思想的な解釈から、実際の遺構を解釈する方法論には十分な注意が必要だと考える。この点に関しては、藤原京の構造と唐代における『周礼』の解釈が大きく異なる点を整理した上で、『周礼』そのものの内容を直接的に実現した都城であるとはいえない」とした外村中の指摘（外村 2009p31）や、『大唐六典』の注文は、すでに存在する太極宮・大明宮の殿舎を、三朝制に当てはめて解釈したもので、その「記述だけを根拠に安易に三朝制が隋唐の宮城に導入されたものとし、それを前提に立論することの危うさ」を説いた村元健一の指摘（村元 2014p309）にも十分に注意を払う必要がある。もちろん、思想的な背景の追及は重要な都城研究のアプローチではあるが、考古学分野に関して言えば、発掘された遺構自体の丁寧な解釈と比較研究の蓄積こそが、迂遠に見えてても、都城の本質や歴史性にアプローチする最も重要な基礎作業だと考える。

中国都城は重層的な歴史的背景に基づいて、各王朝が伝統の継承と革新を繰り返して「創造」した思想空間であり、同じ平面形・空間構造を持つ都城は1つとして存在していない。つまり、中国諸王朝が营造した都城においても、歴代王朝で継承され連続と存在してきた思想空間を、その都度、解体・再編成する作業によって多様な空間構造や平面配置が生み出されてきたのである。この点は、高句麗・渤海・新羅・日本などに展開した都城も同様で、隋唐都城を単純に模倣したわけではなく、各王朝が国家戦略に基づく主体的な選択によって、各国の統治スタイルに合致した独自の思想空間＝「世界觀（宇宙）」を、その都度、地上に現出させたのである。この点に、東アジアに展開した都城制の歴史的意義が見いだせる。その意味では、隋唐都城の展開に関して「中国の制度を完全に模倣するというようなことはありえず、各民族の特色を濃淡さまざまに織りこんでいるはず」という町田章の指摘（町田 1981）は、極めて的確な表現だと考える。

### おわりに

本論では、中国都城における空間構造の発展、および東アジアへの展開過程について、都城の本質的特徴である重層構造とその連結機能を持つ「門」に着目して分析を行った。漢～元という長い年代幅で「都城門」の構造・機能の発展を位置付けると同時に、高句麗・渤海・日本都城との比較を行うという時空間共に広い分析を行ったため、大枠での整理になってしまったが、中国都城の空間構造の発展と東アジアへの展開に関する歴史性の一端を示すことができたと考える。

本論での研究視点一都城の重層空間を現出させた「城壁」と中軸上に位置する「正門」の国際的な比較は、1967年に法制史学者の瀧川政次郎が既に示していた方法論である。都城の本質にアプローチする手段としての「羅城・羅城門の分析」の重要性を看破した瀧川の先進的な研究は、現在の都城研究でも色褪せない重要な比較視座を示したものとして高く評価できる。一方で、グローバル化が進む現代において逆説的に「各國單位で完結する内向きな研究」が増えている状況を目の当たりにする時、瀧川の痛烈な都城研究への批判が呼び起される。「唐都長安、洛陽の都城、唐国全般の制度を追及することなくして行われた、これまでの日本都城の研究は、この立場から根本的にやり直さねばならない。(中略)。私は、長安、洛陽を見ていない者、また見ようともしない者は、日本都城制を論ずる資格はないと言いたい。」（瀧川 1967p93-96）、瀧川の批判は、東アジア都城を研究する我々にとって、50年以上を経た今でも非常に重い。

### 引用文献（日文）※五十音順、MS 明朝で表記。

- 青木 敏 2010 「飛鳥・藤原地域における7世紀の門遺構」『官衙と門』奈良文化財研究所
- アーサー＝F＝ライト（奥崎裕司訳） 1966 「象徴性と機能—長安及び他の大都市に関する考察—」『歴史教育』14-12
- 浅野 光 1990 「古代天皇制国家の成立と宮都の門」『日本史研究』338
- 石井正敏 1983 「大伴古麻呂妻言について」『法政史学』35
- 石川千恵子 2010 『律令国家と古代宮都の形成』勉誠出版
- 泉 武 2018 「前期浪波宮孝徳朝説の検討」『楓原考古学研究所論集』17 八木書店
- 市大樹 2020 「門籍制と門跡制をめぐる日唐比較試論」『日本古代律令制と中国文明』山川出版社
- 福田孝司 2012 「古代山城の技術・軍事・政治」『日本考古学』34

- 井上 薫 1961 「宮城十二門の門号と乙巳の変」『日本古代の政治と宗教』吉川弘文館
- 井上和人 1998a 「平城京羅城門再考—平城京の羅城門・羅城と京南辺条里—」『条里制・古代都市研究』14
- 井上和人 1998b 「平城京羅城門の再検討」『奈良国立文化財研究所年報 1998-1』奈良国立文化財研究所
- 井上和人 2004 「唐代長安の諸門について」『法史学研究会会報』9
- 井上和人 2004 「古代都城制条里制の実証的研究」学生社
- 井上和人 2008 『日本古代都城制の研究』吉川弘文館
- 井上和人 2010 「日本古代の都城における門形制の展開」『宮衙と門』奈良文化財研究所
- 井上和人 2017 「日本列島古代山城の軍略と王宮・都城」『日本古代学』第9号 D
- 井上充夫 1958 「古代における門の一性格」『日本建築学会論文報告集』60
- 今井晃树 2011 「魏晋南北朝隋唐時代都城の軸線の変遷」『中国考古学』11
- 今井晃树 2012a 「隋唐の城門」『技術と交流の考古学』同成社
- 今井晃树 2012b 「唐・日本・渤海の外朝」『文化財論叢VI』奈良文化財研究所
- 今泉隆雄 1986 「長岡宮宮城門考」『長岡京古代文化論叢』中山修一先生古希記念事業会
- 今泉隆雄 1989 「再び平城宮の大極殿・朝堂について」『律令国家の構造』吉川弘文館
- 今泉隆雄 1993 「古代宮都の研究」吉川弘文館
- 今泉隆雄 1998 「門勝制・門籍制と木簡」『古代木簡の研究』吉川弘文館
- 上野邦一 2010 「古代宮殿における中心建物周辺の莊嚴空間」『古代学』2
- 内田昌功 2004 「魏晋南北朝の宮における東西構造」『史朋』37
- 内田昌功 2009 「北周長安宮の空間構成」『秋大史学』55
- 内田昌功 2010 「北周長安城の路門と唐大明宮含元殿」『歴史』115
- 海野 啓 2019 「門と条坊にみる平城京と建築の接続」『古代の都城と交通』竹林舎
- 王維坤 1997 『中日の古代都城と文物交流の研究』朋友書店
- 王守春 2004 「中国における歴史的都市の中心軸の構造と都市形態」『東アジアの都市形態と文明史』国際日本文化研究センター
- 応地利明 2011 「都城の系譜」京都大学学術出版会
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会 1985 「儀三武信治ビル建替え工事に伴う難波宮跡発掘調査 (NW83-6) 略報」『昭和 58 年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』
- 大阪市文化財協会 1995 『難波宮址の研究 第10—後期難波宮大極殿院地域の調査—』
- 大阪市文化財協会 2004 『難波宮址の研究 第12—宮殿周辺地域の調査—』
- 大阪市文化財協会 2005 『難波宮址の研究 第13—前期・後期朝堂院の調査—』
- 大澤正巳・小澤佳憲 2008 「大野城跡第46次調査 (北石垣地区) C区城門跡出土の鉄製扉軸受け金具の理化学的調査」『大宰府史跡発掘調査報告書V (平成18・19年度)』九州歴史資料館
- 岡田英男 1984 『日本の美術 門』至文堂
- 尾形 勇 1982 「中国の即位儀礼」『東アジアにおける日本古代史講座』第9巻 学生社
- 岡山県総社市教育委員会 2005 「古代山城 鬼ノ城 鬼城山史跡整備事業に伴う発掘調査」
- 岡山県総社市教育委員会 2006 「古代山城 鬼ノ城2 鬼城山史跡整備事業に伴う発掘調査」
- 小澤 翼 1994 「平城宮小子門の再検討」『奈良国立文化財研究所年報 1994』奈良文化財研究所
- 小澤 翼 2003 『日本古代宮都構造の研究』青木書店
- 小澤 翼 2008 「平城京左京「十条」条坊と京南辺条里」『王權と武器と信仰』同成社
- 小澤 翼 2012 「平城宮と藤原宮の「重闇門」」『文化財論叢VI』奈良文化財研究所
- 小澤 翼 2018 「古代宮都と関連遺跡の研究」吉川弘文館
- 愛宕 元 2001 「隋唐長安城の都市計画上での中軸線に関する一試論」『唐代史研究』3
- 金子修一 1994 「唐の太極殿と大明宮—即位儀礼におけるその役割について—」『山梨大学教育学部研究報告』44
- 金子修一 2001 「隋唐の国際秩序と東アジア」名著刊行会
- 金子修一 2006 『中国古代皇帝祭祀の研究』岩波書店

- 金子隆之・清水真一・清水重敦 2003 「平城宮第一次大極殿院棲閣の復原設計」『奈良文化財研究所 2003』奈良文化財研究所
- 金子裕之 2007 「長岡京会昌門の棲闇遺構とその意義」『古代都市とその形制 奈良女子大学 21世紀 COE プログラム報告集』14
- 金子裕之 2014 「古代都城と律令祭祀」柳原出版
- 狩野 久 1990 「律令国家と都市」『日本古代の国家と都城』東京大学出版会
- 龟田修一 1995 「日韓古代山城比較試論」『考古学研究』42-3
- 魏存成 2004 「渤海都城プランの発展およびその隋唐長安城との関係」『東アジアの都市形態と文明史』国際日本文化研究センター
- 岸 俊男 1976 「日本の宮都と中国の都城」『日本古代文化の探求・都城』社会思想社
- 岸 俊男 1988 「日本古代宮都の研究」岩波書店
- 北山夏希 2012 「南門の復原検討—第一次大極殿院の復原研究 6—」『奈良文化財研究所紀要』2012
- 鬼頭清明 2000 「日本における大極殿の成立」『古代木簡と都城の研究』塙書房
- 國下多美樹 2014 「長岡京遷都と後期難波宮の移建」『難波宮と都城制』吉川弘文館
- 久保田和男 2014 「宋都開封の旧城と旧城空間について」『都市文化研究』16
- 黒崎 直 2001 「近江大津宮「内裏南門」柱穴考」『近江の考古と歴史』西田弘先生米寿記念論集刊行会
- 小泉頼夫 1986 「朝鮮古代遺跡の遍歴—发掘調査 30 年の回想—」六鵬出版
- 小島 耕 1989 「郊祀制度の変遷」『東洋文化研究所紀要』108
- 古閑正浩 2020 「長岡宮における中枢施設の配置と条坊」『難波宮と古代都城』同成社
- 董藤国治 1992 「『延喜式』にのる日出日入、宮門開閉時刻の検証」『日本歴史』533
- 佐伯有清 1963 「宮城十二門号と古代天皇近侍氏族」『新撰姓氏錄の研究』吉川弘文館
- 佐伯有清 1970 「宮城十二門号についての研究」『日本古代の政治と社会』吉川弘文館
- 坂井秀弥 2010 「地方官衙と門」『官衙と門』奈良文化財研究所
- 佐川英治 2016 「中国古代都城の設計と思想—円丘祭祀の歴史的展開—」勉誠出版
- 佐川英治 2017 「都城に見る都城制の転換」『魏晉南北朝史のいま』勉誠出版
- 佐竹 昭 1988 「藤原宮と朝廷の教育儀礼」『日本歴史』478
- 佐藤武敏 1977 「唐の朝堂について」『難波宮と日本古代国家』塙書房
- 滋賀県教育委員会文化部文化財保護課・滋賀県文化財保護協会 1992 「錦織遺跡—近江大津宮関連遺跡—本文編」
- 重見 泰 2020 「日本古代都城の形成と王權」吉川弘文館
- 清水重敦・清水真一・山田 宏 2004 「平城宮第一次大極殿院南門・回廊の復原設計」『奈良文化財研究所紀要 2004』奈良文化財研究所
- 清水重敦 2010 「都城・官衙における門の建築」『官衙と門』奈良文化財研究所
- 城倉正祥 2013 「日中古代都城における正門の規模と構造」『技術と交流の考古学』同成社
- 城倉正祥ほか 2017 「中国都城・シルクロード都市遺跡の考古学的研究」早稲田大学東アジア都城・シルクロード考古学研究所
- 成周輝・東勇介 1993 「韓日古代城門磚石初探」『古文化談叢』30 (中)
- 新宮 學 2009 「近世中国における皇城の成立」妹尾達彦編『都市と環境の歴史学 第4集』中央大学文学部東洋史学研究室
- 妹尾達彦 1992 「唐長安城の儀礼空間—皇帝儀礼の舞台を中心にして—」『東洋文化』72
- 妹尾達彦 1998 「帝国の宇宙論—中華帝国の祭天儀礼—」『王權のコスモロジー』弘文堂
- 妹尾達彦 2001 「長安の都市計画」講談社
- 積山 洋 2007 「中国古代都城の軸線プランと正殿」『条里制・古代都市研究』22
- 積山 洋 2013 「古代の都城と東アジア一大極殿と難波京—」清文堂
- 積山 洋 2020 「前期難波宮研究の課題」『難波宮と大化改新』日本史研究叢刊 36 和泉書院
- 外村 中 2009 「賀公彦『周礼疏』と藤原京について」『古代学研究』181
- 高橋 工 2014 「前期・後期難波宮等の発掘成果」『難波宮と都城制』吉川弘文館
- 瀧川政次郎 1967 「羅城・羅門を中心とした我が国都城制の研究」『京都並に都城制の研究 法制史論叢 第2冊』角川書店

- 田島 公 1986 「外交と儀礼」『日本の古代7 まつりごとの展開』中央公論社
- 田中広明 2003 「豪族の家を形作るもの—門と大廈—」『地方の豪族と古代の官人』柏書房
- 田中広明 2005 「官衙の門、居宅の門」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』20
- 田中広明 2010 「居宅・館・集落と門」『官衙と門』奈良文化財研究所
- 陳力 1998 「漢唐時代の都市計画における「中軸線」について」『阪南論集 人文・自然科学編』34-1
- 角田文斯監修 1994 『平安京提要』角川書店
- 豊田裕章 2001 「前期難波宮と「周制」の三朝制について」『ヒストリア』173
- 豊田裕章 2007 「藤原京の京城と周制の王城（國）との関わりについて」『古代文化』59-2
- 直木孝次郎 1964 『日本古代の氏族と天皇』塙書房
- 直木孝次郎 1968 『日本古代兵制史の研究』吉川弘文館
- 直木孝次郎 1975 「大極殿の門」『飛鳥奈良時代の研究』塙書房
- 直木孝次郎 1987 「平城宮諸門の一考察—壬生門を中心に—」『日本書紀研究』15
- 直木孝次郎 2001 「正月元日の朱雀門と福輪」『日本歴史』632
- 中尾芳治 1995a 「前期難波宮と唐長安城の宮・皇城」『難波宮の研究』吉川弘文館
- 中尾芳治 1995b 「後期難波宮大極殿院の規模と構造について」『難波宮址の研究 第十』大阪市文化財協会
- 中尾芳治 2014 「難波宮から藤原宮へ」『難波宮と都城制』吉川弘文館
- 中島咲紀 2013 「南門の構造形式と屋根形式の検討—第一次大極殿院の復原研究 10—」『奈良文化財研究所紀要』2013
- 中島咲紀 2014 「南門の柱間装置の検討—第一次大極殿院の復原研究 13—」『奈良文化財研究所紀要』2014
- 中村太一 1996 「藤原京と「周礼」王城プラン」『日本歴史』582
- 長山雅一 1973 「前期難波宮朝堂院の二つの門をめぐって」『難波宮跡研究調査年報 1972』難波宮宮址顕彰会
- 長山雅一 1995 「前期難波宮の内裏南門」『難波宮址の研究 第 10』大阪市文化財協会
- 鍋田 勇 1996 「長岡京条坊制の再検討 II」『京都府埋蔵文化財論集』第 3 集 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 奈良県立橿原考古学研究所 1982 「明日香村飛鳥京跡—第 74 次～80 次および鳴原推定地第 17 次調査概報—」『奈良県遺跡調査概報 1980 年度 第 2 分冊』
- 奈良県立橿原考古学研究所 2008 「飛鳥京跡 III 内郭中枢の調査（1）」奈良県立橿原考古学研究所調査報告第 102 冊
- 奈良国立文化財研究所 1967 「第 39 次調査 東面南門推定地東側」『奈良国立文化財研究所年報 1967』
- 奈良国立文化財研究所 1972 「平城京羅城門跡発掘調査報告」大和郡山市教育委員会
- 奈良国立文化財研究所 1973 「昭和 47 年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報（1）—平城宮第 75・77 次発掘調査—」
- 奈良国立文化財研究所 1976a 「藤原宮の遺跡」『飛鳥・藤原宮発掘調査報告 I—小憩田宮推定地・藤原宮の調査—』
- 奈良国立文化財研究所 1976b 「藤原宮第 18 次の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報 6』
- 奈良国立文化財研究所 1978a 「藤原宮第 21 次（西殿）の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報 8』
- 奈良国立文化財研究所 1978b 「平城宮発掘調査報告 9 宮城門・大垣の調査」
- 奈良国立文化財研究所 1980 「推定第 1 次朝堂院南門の調査（第 119 次）」『昭和 54 年度 平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』
- 奈良国立文化財研究所 1981 「平城宮南面東門（壬生門）の調査第 122 次」『昭和 55 年度 平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』
- 奈良国立文化財研究所 1982a 「平城宮の調査第 133 次」『昭和 56 年度 平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』
- 奈良国立文化財研究所 1982b 「平城宮発掘調査報告 11 第一次大極殿地域の調査」
- 奈良国立文化財研究所 1987a 「推定第一次朝堂院南門東側の調査（第 176 次）」『昭和 61 年度 平城宮発掘調査概報』
- 奈良国立文化財研究所 1987b 「薬師寺発掘調査報告 奈良国立文化財研究所学報第 45 冊』
- 奈良国立文化財研究所 1991 「平城宮発掘調査報告 13 内裏の調査 2」
- 奈良国立文化財研究所 1993 「平城宮発掘調査報告 14 第二次大極殿院の調査」
- 奈良国立文化財研究所 1994a 「平城宮朱雀門の復原的研究」
- 奈良国立文化財研究所 1994b 「平城宮の調査」『1993 年度 平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』
- 奈良国立文化財研究所 1994c 「平城宮第一次大極殿院復原模型の製作」『奈良国立文化財研究所紀要』1994
- 奈良国立文化財研究所 1996 「平城宮の調査第 250・259 次調査」「平城宮の調査第 265 次調査」『1995 年度 平城宮跡発掘調査

## 部発掘調査概報』

奈良文化財研究所 2003a 「藤原宮の調査 大極殿の調査 第117次」『奈良文化財研究所紀要 2003』

奈良文化財研究所 2003b 「平城宮の調査第326次」『奈良文化財研究所紀要 2003』

奈良文化財研究所 2003c 「古代の官衙遺跡Ⅰ 遺構編」

奈良文化財研究所 2003d 「第一次大極殿院西楼の調査—第337次—」『奈良文化財研究所紀要 2003』

奈良文化財研究所 2008 「藤原宮の調査 大極殿院南門の調査 第148次」『奈良文化財研究所紀要 2008』

奈良文化財研究所 2010a 『官衙と門』報告編・資料編 第13回古代官衙・集落研究会報告書

奈良文化財研究所 2010b 「興福寺南大門の調査—第458次—」『奈良文化財研究所紀要 2010』

奈良文化財研究所 2011 『平城宮発掘調査報告 17 第一次大極殿院地区的調査2』

奈良文化財研究所 2019 「平城宮東区朝堂院の調査—第602次—」『奈良文化財研究所紀要』2019

奈良市教育委員会 1999 「史跡大安寺旧境内の調査」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成10年度』

西嶋定生 2002 『東アジア世界と冊封体制』(西嶋定生東アジア史論集 第3巻) 岩波書店

西本昌弘 2008a 「藤原宮と平城宮の宮城十二門号—県大義小宮門と小子部門—」『日本古代の王宮と儀礼』塙書房

西本昌弘 2008b 「初期平安宮にいたる宮城十二門号」『日本古代の王宮と儀礼』塙書房

日本古文化研究所 1941 「南の門跡」『日本古文化研究所報告第11 藤原宮跡傳説地高殿の調査2』

橋本義則 1984 『平安宮草創期の農業園』『日本政治社会史研究』塙書房

橋本義則 1986 『朝政・朝儀の展開』『日本の古代 第7巻 まつりごとの展開』中央公論社

橋本義則 1995 『平安宮成立史の研究』塙書房

橋本義則 2011 『古代宮都の内裏構造』吉川弘文館

林部 均 2001 『古代宮都形制過程の研究』青木書店

布野修司 2015 『大元都市—中国都城の理念と空間構造—』京都大学学術出版会

福岡県教育委員会 1991 『特別史跡 大野城跡Ⅶ—大宰府宮城門発掘調査概報一』

福岡県教育委員会 2010 『特別史跡大野城整備事業V 下』福岡県文化財調査報告書225

古市 晃 2004 『孝徳朝難波宮と仏教世界—前期難波宮内裏八角殿院を中心に—』『大阪における都市の発展と構造』山川出版社

古内絵里子 2017 「儀礼空間としての都城の確立—藤原京から平城京へ—」『古代都城の形態と支配構造』同成社

古瀬奈津子 1998a 「儀式における唐礼の継承—奈良末～平安初期の変化を中心に—」『日本古代王權と儀式』吉川弘文館

古瀬奈津子 1998b 「宮の構造と政務運営法—内裏・朝堂院分離に関する一考察—」『日本古代王權と儀式』吉川弘文館

文化庁文化財部記念物課 2010 『発掘調査のてびき—集落遺跡発掘編一』

文化庁文化財部記念物課 2013 『発掘調査のてびき—各種遺跡報告編一』

町田 章 1981 『隋唐都城論』『隋唐帝国の出現と日本 東アジア世界における日本古代史講座 第5巻』学生社

松本保宣 2006 『唐王朝の宮城と御前会議』晃洋書房

松本保宣 2019 『唐代人間の儀と廿露の変』『芳村弘道教授退職記念論集』立命館大学人文学会

宮城県多賀城跡調査研究所 1980 『多賀城跡 政府跡 図録編』

宮城県多賀城跡調査研究所 1982 『多賀城跡 政府跡 本文編』

宮田清之 2010 「西海道官衙の門」『官衙と門』奈良文化財研究所

向井一雄 1999 「石製唐居敷の集成と研究」『地域相研究』27

向井一雄 2016 『よみがえる古代山城—国際戦争と防衛ライン—』吉川弘文館

向日市埋蔵文化財センター 2001 「長岡宮跡第384次 (7ANEHJ-6地区) ~大極殿跡門、乙訓郡衙跡、山畠古墳群~発掘調査報告」  
『向日市埋蔵文化財調査報告書第52集』

向日市埋蔵文化財センター 2006 「長岡京跡第443次 (7ANFMK-21地区) ~朝堂院南面回廊・「翔鷺樓」、乙訓郡衙、山畠古墳群~発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書第72集』

向日市埋蔵文化財センター 2007a 「長岡宮台444・445次 (7ANFMK-22・23地区) ~朝堂院南面回廊・「翔鷺樓」、乙訓郡衙跡、山畠古墳群~発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書第75集』

- 向日市埋蔵文化財センター 2007b『長岡宮跡第451次』『向日市埋蔵文化財調査報告書第76集』
- 村田和弘 2000『発掘調査によって検出された四脚門の検討』『京都府埋蔵文化財情報』75
- 村田晃一 2010『古代奥羽の城壁・官衙の門と圍繞施設』『官衙と門』奈良文化財研究所
- 村元健一 2014『中国宮城の変遷と難波宮』『難波宮と都城制』吉川弘文館
- 森 公章 2003『郡家の施設と部署一郡雄任の執務形態との関係からー』『弘前大学国史研究』115
- 森 公章 2000『二条大路木簡と門の警備』『長屋王家木簡の基礎的研究』吉川弘文館
- 山川 均・佐藤亞聖 2008『平城京・下三橋遺跡の調査成果とその意義』『日本考古学』25
- 山口裕平 2003『西日本における古代山城の城門について』『古文化談義』50(上)
- 山下信一郎 2010『文献からみた古代官衙の門の機能』『官衙と門』奈良文化財研究所
- 山下信一郎 2015『日本古代の都城と宮城十二門・東面宮城門の変遷を中心にー』『日本古代のみやこを探る』勉誠出版社
- 山田邦和 2007『桓武朝における樓閣附設建築』『国立歴史民俗博物館研究報告』134
- 山田英雄 1987『宮城十二門号について』『日本古代史叢』岩波書店
- 大和郡山市教育委員会 2012『稗田・若槻遺跡 平城京南方遺跡』
- 大和郡山市教育委員会・元興寺文化財研究所 2014『平城京十条発掘調査報告書(旧称下三橋遺跡)』
- 山中 章 2011『考古学からみた日本古代宮都壇廟研究の現状と課題』『東アジア都城の比較研究』京都大学学術出版会
- 山中敏史 1986『律令国家の成立』『岩波講座日本考古学』6
- 山中敏史 1994『古代地方官衙遺跡の研究』塙書房
- 山中敏史 2003『VI-7 門』『古代の官衙遺跡ー遣構編ー』奈良文化財研究所
- 吉川 晃 2002『『重闕門』・朱雀門考』『文化財論叢III』奈良文化財研究所
- 吉川真司 2005『王宮と官人社会』『列島の古代史3 社会集団と政治組織』岩波書店
- 吉田 歆 2002『日中宮城の比較研究』吉川弘文館
- 吉田 歆 2011『漏刻と時報・諸門開閉システム』『米沢史学』27
- 李陽浩 2004『前期難波宮城南門および複廊の建築について』『難波宮址の研究 第12』大阪市文化財協会
- 李陽浩 2014『古代東アジアにおける八角形建物とその平面形態』『難波宮と都城制』吉川弘文館
- 李陽浩 2020『大化改新と宮殿建築ー新しい建築類型をめぐってー』『難波宮と大化改新』日本史研究叢刊36 和泉書院
- 渡辺晃宏 1995『平城宮東面宮城門号考ー東院南門(SB16000)の発見によせてー』『律令国家の政務と儀礼』吉川弘文館
- 渡辺晃宏 2020『日本古代国家建設の舞台 平城宮』新泉社
- 渡辺信一郎 1996『天空の玉座』柏書房
- 渡辺信一郎 2000『宮闕と園林』『考古学研究』47-2
- 渡辺信一郎 2003『中国古代の王権と天下秩序』校倉書房
- 渡辺信一郎 2009『六朝隋唐期の大極殿とその構造』『都城制研究2 宮中枢部の形成と展開一大極殿の成立をめぐってー奈良女子大学21世紀COEプログラム報告集』23

## 引用文献（中文）※ピンインのアルファベット順、Sim Sunで表記。

- 安家瑶 2005a『唐大明宮含元殿遺址的几个问题』『论唐代城市建设』陕西人民出版社
- 安家瑶 2005b『唐大明宮含元殿龙尾道形制的探讨』『新世纪的中国考古学』科学出版社
- 程义 2008『试论隋唐东西两京布局差异的成因』『考古』2008-12
- 陈涛・李相海 2008『隋唐宫殿建筑制度二论』『中国建筑史论汇刊』
- 陈建军・余冰 2019『太极殿建筑形制之探讨』『洛阳考古』2019-1
- 陈良伟 2002『隋唐两京城门基本类型及相关问题』『21世纪中国考古学与世界考古学』中国社会科学出版社
- 重庆市文物局等编著 1992『四川汉代石阙』文物出版社
- 董琦 1994『盆地溯源』『文物季刊』1994-4
- 董新林 2014『辽代城门营建规制初探』『庆祝张忠培先生八十岁论文集』科学出版社
- 董新林 2019『辽上京规制和北宋东京模式』『考古』2019-5

- 杜金鹏 2009 「周原宫殿建筑类型及相关问题探讨」『考古学报』2009-4
- 杜金鹏·钱国祥 2007 「汉魏洛阳城遗址研究」科学出版社
- 段清波 2006 「古代阙制研究—以秦始皇陵三出阙为基础—」『西部考古 第1辑 纪念西北大学考古学专业成立五十周年专刊』三秦出版社
- 杜文玉 2012a 「唐大明宫含元殿与外朝会制度」『唐史论丛』15
- 杜文玉 2012b 「唐大明宫宣政殿与唐代中朝制度研究」『乾陵文化研究』7
- 杜文玉·赵水静 2013 「唐大明宫紫宸殿与内朝会制度研究」『江汉论坛』2013-7
- 傅熹年 1973 「唐长安大明宫含元殿原状探讨」『文物』1973-7
- 傅熹年 1977 「唐长安大明宫玄武门及重玄门复原研究」『考古学报』1977-2
- 傅熹年 1993 「元大都太内宫殿的复原研究」『考古学报』1993-1
- 傅熹年 1995 「隋唐长安洛阳城规划手法的探讨」『文物』1995-3
- 傅熹年 1998 「对含元殿遗址及原状的再探讨」『文物』1998-4
- 傅熹年主编 2009 『中国古代建筑史 第二卷 三国、两晋、南北朝、隋唐、五代建筑』中国建筑工业出版社
- 龚国强 2018 「有关隋唐长安城城门的几个问题」『华夏考古』2018-6
- 郭义孚 1963 「含元殿外观复原」『考古』1963-10
- 郭义孚 1996 「邺南城朱明门复原研究」『考古』1996-1
- 贾鸿源 2017 「唐长安三朝五门布局考」『唐史论丛』25
- 韩利·李库·张雷·贾强 2004 「古代阙门及相关问题」『考古与文物』2004-5
- 韩建华 2005 「中国古代城阙的考古学观察」『中原文物』2005-1
- 韩建华 2010 「唐东都洛阳“丽景（门）夹城”考」『考古学集刊』18
- 韩建华 2016 「北宋东京宫城五风楼研究」『扬州城考古学术研讨会论文集』科学出版社
- 韩建华 2019 「东都洛阳武则天明堂初探」『中原文物』2019-6
- 韩品静·杨国庆 2004 「中国古代瓮城初探—兼论新郑故城城门内建筑遗址与南京的内瓮城—」『中国古都研究』15
- 河北省文物研究所·张家口市文物管理处·张北县元中都遗址管理处 2007 「2003年度元中都皇城南门的发掘」『文物』2007-1
- 河北省文物研究所 2012 「元中都」文物出版社
- 河北省文物研究所·张家口市文物考古研究所·崇礼区文化广电和旅游局 2019 「河北张家口市太子城金代城址」『考古』2019-7
- 黑龙江省文物考古工作队 1985a 「渤海海上京宫城第一股东西廊庑遗址发掘清理简报」『文物』1985-11
- 黑龙江省文物考古工作队 1985b 「渤海海上京宫城第2、3、4号门址发掘简报」『文物』1985-11
- 黑龙江省文物考古研究所 1987 「黑龙江克东县金代蒲峪路故城发掘」『考古』1987-2
- 黑龙江省文物考古研究所·牡丹江市文物管理站 1999 「渤海国上京龙泉府遗址 1997年考古发掘收获」『北方文物』1999-4
- 黑龙江省文物考古研究所·牡丹江市文物管理站 2000 「渤海国上京龙泉府外城正北门址发掘简报」『文物』2000-11
- 黑龙江省文物考古研究所 2009 「渤海海上京城」文物出版社
- 黑龙江省文物考古研究所 2015 「黑龙江宁安渤海海上京城宫城北门址发掘简报」『文物』2015-6
- 黑龙江省文物考古研究所 2017 「哈尔滨市阿城区金上京皇城西部建筑址 2015年发掘简报」『考古』2017-6
- 黑龙江省文物考古研究所 2019 「哈尔滨市阿城区金上京南城南垣西门址发掘简报」『考古』2019-5
- 河南省文物考古研究所 1997 「北宋皇陵」中州古籍出版社
- 河南省文物考古研究院 2019 「河南开封北宋东京城顺天门遗址 2012～2017年勘探发掘简报」『华夏考古』2019-1
- 何岁利 2019 「唐大明宫“三朝五门”布局的考古学观察」『考古』2019-5
- 贺业矩 1996 『中国古代城市规划史』中国建筑工业出版社
- 姜波 2003 「汉唐都城礼制建筑研究」文物出版社
- 焦南峰 2012 「西汉帝陵的门阙与“门阙制度”」『徐苹芳先生纪念文集』上海古籍出版社
- 吉林大学边疆考古研究中心 2017 「吉林安图县宝马城遗址 2014年发掘简报」『考古』2017-6
- 吉林省文物考古研究所·吉安市博物馆 2004a 「国内城」文物出版社
- 吉林省文物考古研究所·吉安市博物馆 2004b 「九都山城」文物出版社

- 吉林省文物考古研究所・延边朝鲜族自治州文物局・延边朝鲜族自治州博物馆・和龙市博物馆 2007『西古城』文物出版社  
 吉林省文物考古研究所・吉林大学边疆考古研究中心・珲春市文物管理所 2014『八连城』文物出版社  
 吉林省文物考古研究所・吉林大学边疆考古研究中心・延边朝鲜族自治州博物馆・和龙市文物管理所 2016『吉林和龙西古城城址 2007~2009 年发掘简报』『文物』2016-12  
 吉林省文物考古研究所・吉林大学边疆考古研究中心 2018『吉林安图县金代长白山神庙遗址』『考古』2018-7  
 辽宁省文物考古研究所 2004『五女山城』文物出版社  
 辽宁省文物考古研究所・沈阳市文物考古研究所 2012『石台子山城』文物出版社  
 梁思成 2001a『营造法式注释 梁思成全集 第7卷』中国建筑工业出版社  
 梁思成 2001b『图像中国建筑史(第2版)』三联书店  
 李春林 2001「唐长安城城门考古总述」『西安长乐门城楼修缮工程报告』文物出版社  
 李合群 2008『北宋东京皇城宣德门考』『中原文物』2008-2  
 李剑平编著 2011『中国古建筑名词图解词典』山西科学技术出版社  
 李鑫・申伟建・吕勤松・李德方 2013「隋唐东都城考古所见城门遗址的初步类型学考察」『洛阳考古』2013-2  
 李双・徐磊・高兴超・古日扎 2017「鄂尔多斯高原古代城址瓮城的类型学考察」『草原文物』2017-1  
 李遇春 2005『汉长安城城门述论』『考古与文物』2005-6  
 李玉洁 2016『先秦古都城门的装饰建筑研究—以阙与象魏为视角—』『中原文物』2016-1  
 李自智 2004『中国古代都城布局的中轴线问题』『考古与文物』2004-4  
 刘春迎 2004『北宋东京城研究』科学出版社  
 刘春迎 2017『北宋东京外城上的瓮城及其形制考略』『河南大学学报』57-5  
 刘庆柱 2000『古代都城与帝陵考古学研究』科学出版社  
 刘庆柱 2005『古代们阙遗址的考古发现与研究』『新世纪中国考古学』科学出版社  
 刘庆柱主编 2016『中国古代都城考古发现与研究』社会科学文献出版社  
 刘瑞 2011『汉长安城的朝向、轴线与南郊礼制建筑』中国社会科学出版社  
 刘思怡・杨希义 2009『唐大明宫含元殿与外朝听政』『陕西师范大学学报 哲学社会科学版』2009-1  
 刘晓东 1999『日本古代都城形制渊源考察—兼谈唐渤海国都城形制渊源—』『北方文物』1999-4  
 刘晓东・李陈奇 2006『渤海海上京城“三朝”制建制的探索』『北方文物』2006-1  
 刘振东 2018『汉长安城城门遗址考古发现与研究』『华夏考古』2018-6  
 刘振东 2010『十六国至北朝时期长安城宫城2号建筑(宫门)遗址发掘』『2009中国重要考古发现』文物出版社  
 刘致平・傅熹年 1963『麟德殿复原的初步研究』『考古』1963-7  
 罗瑾歆 2019『唐长安城太极宫承天门形制初探』『考古』2019-12  
 洛阳博物馆通讯组 1960『洛阳发现唐城厚载门』『考古』1960-5  
 洛阳博物馆 1981『隋唐洛阳含嘉城德懋门遗址的发掘』『中原文物』1981-2  
 洛阳市文物工作队 1988『隋唐东都应天门遗址发掘简报』『中原文物』1988-3  
 洛阳文物工作队 1992『洛阳发现宋代门址』『文物』1992-3  
 洛阳市文物考古研究院 2016『隋唐洛阳城天堂遗址发掘报告』科学出版社  
 陆思贤 1999『关于元上都宫城北墙中段的阙式建筑台基』『内蒙古文物考古』1999-2  
 马得志 1959『唐长安兴庆宫发掘记』『考古』1959-10  
 马得志 1961『1959~1960 唐大明宫发掘简报』『考古』1961-7  
 马得志 1982『唐长安与洛阳』『考古』1982-6  
 马得志 1987『唐长安城发掘新收获』『考古』1987-4  
 马得志 2005『唐大明宫含元殿的建筑形式及其渊源』『新世纪的中国考古学』科学出版社  
 孟凡人 2013『明朝都城』南京大学出版社  
 孟凡人 2019『宋代至清代都城形制布局研究』中国社会科学出版社  
 内蒙古师范大学・内蒙古文物考古研究所・内蒙古文物保护中心 2014『内蒙古锡林郭勒元上都城址阙式宫殿基址发掘简报』『文物』

2014-4

- 宁夏文物考古研究所・银川西夏陵区管理处 2007『西夏三号陵』科学出版社
- 牛世山 2014「《考工记·匠人营国》与周代的城市规划」『中原文物』2014-6
- 朴灿圭 2015『平壤地区高句丽都城遗迹』香港亚洲出版社
- 钱国祥 2003「由闻阙门谈汉魏洛阳城宫城形成」『考古』2003-7
- 钱国祥 2010「魏晋洛阳都城对东晋建康都城的影响」『考古学集刊』18
- 钱国祥 2016「中国古代汉唐都城形制的演进—由曹魏太极殿谈唐长安城形制的渊源—」『中原文物』2016-4
- 钱国祥 2017「北朝佛寺木塔的比较研究」『中原文物』2017-4
- 钱国祥 2018「汉魏洛阳城城门与宫院门的考察研究」『华夏考古』2018-6
- 钱国祥 2019a「北魏洛阳外郭城的空间格局复原研究—北魏洛阳城遗址复原研究之二—」『华夏考古』2019-6
- 钱国祥 2019b「北魏洛阳内城的空间格局复原研究」『华夏考古』2019-4
- 钱国祥 2020「北魏洛阳宫城的空间格局复原研究—北魏洛阳城遗址复原研究之三—」『华夏考古』2020-5
- 秦始皇帝陵博物院 2014「秦始皇帝陵园北内外城间门阙建筑勘探简报」秦始皇陵博物院
- 山东省文物考古研究所等 1982「曲阜鲁国故城」齐鲁书社
- 陕西省文物管理委员会 1958「长安城地基初步探测」『考古学报』1958-3
- 陕西省雍城考古队 1985「凤翔马家庄一号建筑群遗址发掘简报」『文物』1985-2
- 陕西省考古研究所 2004「秦都咸阳考古报告」科学出版社
- 陕西省考古研究院 2011「汉阳陵帝陵园南门遗址发掘简报」『考古与文物』2011-5
- 陕西省考古研究所昭陵博物馆 2006「2002年度唐昭陵北司马门遗址发掘简报」『考古与文物』2006-6
- 申茂盛・冯丹 2015「秦汉帝王陵门阙建筑比较研究」秦始皇陵博物院
- 石白社 2009「隋唐东都形制布局特点分析」『考古』2009-10
- 石白社 2018「隋唐东都与北宋西京门遗址的观察」『华夏考古』2018-6
- 宿白 1978「隋唐长安城和洛阳城」『考古』1978-6
- 孙周勇・邵晶 2016a「懿城渊源—以石峁遗址外城东门址为中心—」『文物』2016-2
- 孙周勇・邵晶 2016b「马面渊源—以石峁遗址外城东门址为中心—」『考古』2016-6
- 孙秉根・冯浩璋 2005「渤海海上京龙泉府城门的类型」『新世纪的中国考古学』科学出版社
- 孙丽娟・李书谦 2008「《考工记》营国制度与中原地区古代都城布局规划的演变」『中原文物』2008-6
- 汪勃 2015「扬州城的城门考古」『大众考古』2015-11
- 汪勃 2016「晚唐杨吴两宋时期扬州城城门之发掘与研究」『东亚都城和帝陵考古与契丹辽文化国际学术研讨会论文集』科学出版社
- 王灿炽 1984「谈元大都的城墙和城门」『故宫博物院院刊』1984-4
- 王飞峰 2015 安鹤宫年代考, 庆祝魏存成先生七十岁论文集, 科学出版社
- 王静 2009「城门与都市—以长安通化门为主—」『唐研究』15
- 王培新 2014a「渤海国东京故址珲春八连城城址布局复原考察」『庆祝张忠培先生八十岁论文集』科学出版社
- 王培新 2014b「渤海王城城址布局比较分析」『东北亚古代聚落与城市考古国际学术研讨会论文集』科学出版社
- 王溥 1955「唐会要·明堂制度」中华书局
- 王仁波 1973「唐懿德太子墓壁画题材的分析」『考古』1973-6
- 王三营・葛奇峰 2016「中国古代都城研究」『扬州城考古学术研讨论文集』科学出版社
- 汪盈・董新林 2018「辽上京皇城和宫城城门遗址浅析」『华夏考古』2018-6
- 王仲殊 1957「汉长安城考古工作的初步收获」『考古通讯』1957-5
- 王仲殊 1958「汉长安城考古工作收获续记—宣平城门的发掘—」『考古通讯』1958-4
- 王仲殊 1982「中国古代都城概述」『考古』1982-5
- 王仲殊 1983「关于日本古代都城制度的源流」『考古』1983-4
- 王仲殊 1999「论日本古代都城宫内大极殿龙尾道」『考古』1999-3

- 王仲殊 2000a 「关于日本第七次遣唐使的始末」『考古与文物』2000-3
- 王仲殊 2000b 「论洛阳在古代中日关系史上的重要地位」『考古』2000-7
- 王仲殊 2001a 「关于中日两国古代都城、宫殿研究中的若干基本问题」『考古』2001-9
- 王仲殊 2001b 「试论探长安城大明宫麟德殿对日本平城京、平安京宫殿设计的影响」『考古』2001-2
- 王仲殊 2002 「试论唐长安城与日本平城京及平安京何故皆以东半城（左京）为更繁荣」『考古』2002-11
- 王仲殊 2003 「中国古代宫内正殿太极殿的建置及其与东亚诸国的关系」『考古』2003-11
- 王仲殊 2004 「论唐长安城圆丘对日本交野圆丘的影响」『考古』2004-10
- 王仲殊 2010 「汉长安城城门遗址的发掘与研究」『考古学集刊』17
- 万雄飞 2020 「三燕龙城宫城南门遗址及建筑特点」『東アジア考古学論叢Ⅱ—遠西地域の東晉十六国期都城文化の研究—』奈良文化財研究所
- 魏存成 2016 「魏晋至隋唐时期中原地区都城规划布局的发展变化及其对高句丽渤海的影响」『边疆考古研究』20
- 魏坚 2008 「元上都 上・下」中国大百科全书出版社
- 吴春・韩海梅・高木亮 2012 「唐大明宫史料汇编」文物出版社
- 吴悦娜・许政 2020 「先秦至两汉时期帝王陵门阙位置关系研究」『北京建筑大学学报』36-1
- 肖爱玲・周霞 2012 「唐长安城城门管理制度研究」『陕西师范大学学报』2012-1
- 萧默 1989 「城楼」『敦煌建筑研究』文物出版社
- 徐承炎・曹中月 2015 「新疆盆地起源刍议」『塔里木大学学报』27-4
- 徐光翼 1993 「曹魏邺城的平面复原研究」『中国考古学论丛』科学出版社
- 徐光翼 2002 「东魏北齐邺南城平面布局的复原研究」『宿白先生八秩华诞纪念文集』文物出版社
- 徐龙国・徐建委 2017 「汉长安城布局的形成与《考工记·匠人营国》的写」『文物』2017-10
- 徐龙国 2015 「中国古代都城门道研究」『考古学报』2015-4
- 徐龙国 2019 「汉魏两晋南北朝都城模式及其演变」『中原文物』2019-1
- 徐小亮 2017 「隋唐时期的阙」『文化创新比较研究』2017-30
- 杨鸿勋 1987 「唐大明宫麟德殿复原研究阶段报告」『建筑考古学论文集』文物出版社
- 杨鸿勋 1989 「唐长安大明宫含元殿复原研究」『庆祝苏秉琦考古五十五年论文集』文物出版社
- 杨鸿勋 1991 「唐长安大明宫含元殿应为五凤楼形制」『文物天地』1991-5
- 杨鸿勋 1996 「唐长安城明德门复原探讨」『文物』1996-4
- 杨鸿勋 1997 「唐长安大明宫含元殿复原再论」『城市与设计学报』1
- 楊鴻勛 2013 「大明宮」科学出版社
- 杨军凯 2012 「唐大明宫“五门”考」『文博』2012-4
- 杨宽 2016 「中国古代都城制度史研究」上海人民出版社
- 杨武洁 2011 「关于汉阳陵帝陵西南门遗址的几点认识」『考古与文物』2011-5
- 岳天懿 2020 「渤海都城门与城墙研究」『北方考古』2020-5
- 俞伟超 1985 「中国古代都城规划的发展阶段性」『文物』1985-2
- 张春长 2003 「有关元中都城墙的几点思考」『文物春秋』2003-5
- 张建峰 2016 「汉长安城地区城市水利设施和水利系统的考古学研究」科学出版社
- 张铁宁 1994 「渤海海上京龙泉府宫殿建筑复原」『文物』1994-6
- 张先得 2003 「明清北京城垣和城门」河北教育出版社
- 赵海洲・张广军 2005 「汉代陵墓前的阙门及其起源探讨」『平顶山学院学报』20-6
- 赵虹光 2012 「渤海海上京城考古」科学出版社
- 赵雨乐 2004 「唐玄宗政权与夹城复道」『陕西师范大学学报（哲学社会科学版）』2004-33
- 郑邦 2017 「先秦至宋代的都城演变初探」『宁夏大学学报（人文社会科学版）』39-5
- 郑元吉吉 2009 「高句丽山城瓮城的类型」『博物馆研究』2009-3
- 中国科学院考古研究所 1959 「唐长安大明宫」科学出版社

- 中国科学院考古研究所洛阳发掘队 1961 「隋唐东都城址的勘查和发掘」『考古』1961-3
- 中国科学院考古研究所・北京市文物管理处元大都考古队 1972 「元大都的勘察和发掘」『考古』1972-1
- 中国社会科学院考古研究所西安工作队 1974 「唐代长安城明德门遗址发掘简报」『考古』1974-1
- 中国社会科学院考古研究所洛阳工作队 1978 「隋唐东都城址的勘察和发掘续记」『考古』1978-6
- 中国社会科学院考古研究所洛阳唐城队 1986 「唐东都武则天明堂遗址发掘简报」『考古』1986-3
- 中国社会科学院考古研究所西安唐城工作队 1987 「唐长安皇城含光门遗址发掘简报」『考古』1987-5
- 中国社会科学院考古研究所洛阳汉魏故城工作队 1988 「汉魏洛阳城北魏建春门遗址的发掘」『考古』1988-9
- 中国社会科学院考古研究所西安唐城工作队 1988 「陝西唐大明宫含暉门遗址发掘记」『考古』1988-11
- 中国社会科学院考古研究所洛阳唐城队 1989 「洛陽隋唐東都城 1982-1986 年考古工作紀要」『考古』1989-3
- 中国社会科学院考古研究所 1993 『汉杜陵陵园遗址』 科学出版社
- 中国社会科学院考古研究所洛阳唐城队 1994 「唐东都乾元门遗址发掘简报」『考古』1994-1
- 中国社会科学院考古研究所洛阳汉魏城队 1995 「北魏洛阳永宁寺西门遗址发掘纪要」『考古』1995-8
- 中国社会科学院考古研究所・河北省文物研究所邺城考古工作队 1996 「河北省临漳县邺南城朱明门遗址的发掘」『考古』1996-1
- 中国社会科学院考古研究所 1996a 『汉长安城未央宫』 中国大百科全书出版社
- 中国社会科学院考古研究所 1996b 『北魏洛阳永宁寺』 中国大百科全书出版社
- 中国社会科学院考古研究所 1997 『六顶山与渤海国的贵族墓地与都城遗址一』 中国大百科全书出版社
- 中国社会科学院考古研究所洛阳唐城队・洛阳市文物工作队 1997 「隋唐洛阳城永通门遗址发掘简报」『考古』1997-12
- 中国社会科学院考古研究所西安唐城工作队 1997 「唐大明宫含元殿遗址 1995-1996 年发掘报告」『考古学报』1997-3
- 中国社会科学院考古研究所西安唐城工作队 1998 「关于唐含元殿遗址发掘资料有关问题的说明」『考古』1998-2
- 中国社会科学院考古研究所・南京博物院・扬州市文物局扬州考古队 1999 「扬州宋大城西门发掘报告」『考古学报』1999-4
- 中国社会科学院考古研究所洛阳唐城队 2000 「河南洛阳隋唐城宣仁门遗址的发掘」『考古』2000-11
- 中国社会科学院考古研究所洛阳唐城工作队 2000 「洛阳唐东都圆璧城南门遗址发掘简报」『考古』2000-5
- 中国社会科学院考古研究所 2003 『西汉礼制建筑遗址』 文物出版社
- 中国社会科学院考古研究所洛阳故城队 2003 「河南洛阳汉魏故城北魏宫城阊阖门遗址」『考古』2003-7
- 中国社会科学院考古研究所・河北省文物研究所邺城考古工作队 2003 「河北临漳县邺南城遗址勘探与发掘」『考古』2003-10
- 中国社会科学院考古研究所洛阳唐城队・洛阳市文物工作队 2004 「定鼎门遗址发掘报告」『考古学报』2004-4
- 中国社会科学院考古研究所・南京博物院・扬州市文物局・江苏扬州唐城考古队 2005 「江苏扬州宋大城北门水门遗址发掘简报」『考古』2005-12
- 中国社会科学院考古研究所洛阳唐城队 2006 「河南洛阳市隋唐宣政门遗址的发句」『考古』2006-4
- 中国社会科学院考古研究所西安唐城队 2006 「西安市唐长安城大明宫丹凤门遗址的发掘」『考古』2006-7
- 中国社会科学院考古研究所西安唐城队 2007 「西安市唐大明宫含元殿遗址以南的考古新发现」『考古』2007-9
- 中国社会科学院考古研究所洛阳唐城工作队 2007 「河南洛阳市隋唐东都应天门遗址 2001-2002 年发掘简报」『考古』2007-5
- 中国社会科学院考古研究所洛阳唐城队 2007 「河南洛阳市隋唐东都重光北门遗址的发掘」『考古』2007-11
- 中国社会科学院考古研究所 2007 「唐大明宫遗址考古发现与研究」 文物出版社
- 中国社会科学院考古研究所 2008 「隋仁寿宫唐九成宫考古发掘报告」 科学出版社
- 中国社会科学院考古研究所汉长安城工作队 2008 「西安市十六国至北朝时期长安宫城遗址的钻探与试掘」『考古』2008-9
- 中国社会科学院考古研究所汉长安城工作队 2009 「西安汉长安城直城门遗址 2008 年发掘简报」『考古』2009-5
- 中国社会科学院考古研究所 2010 「汉魏洛阳古城南郊礼制建筑遗址」 文物出版社
- 中国社会科学院考古研究所・南京博物院・扬州市文物考古研究所 2010 「扬州城 1987 ~ 1998 年考古发掘报告」 文物出版社
- 中国社会科学院考古研究所・南京博物院・扬州市文物局・江苏扬州唐城考古工作队 2012 「江苏扬州市宋大城北门遗址的发掘」『考古』2012-10
- 中国社会科学院考古研究所・南京博物院・扬州市文物考古研究所・扬州唐城考古工作队 2013a 「江苏扬州城南门遗址发掘报告」『考古学集刊』19
- 中国社会科学院考古研究所・南京博物院・扬州市文物考古研究所・扬州唐城考古工作队 2013b 「扬州唐宋城东门遗址的发掘」『考古』2013-10

古学集刊 19

- 中国社会科学院考古研究所 2014『隋唐洛阳城』文物出版社
- 中国社会科学院考古研究所西安唐城工作队 2014『西安市唐长安城大明宫兴安门遗址』『考古』2014-11
- 中国社会科学院考古研究所・河北文物研究所・河北临漳县文物旅游局 2014『邺城考古发现与研究』文物出版社
- 中国社会科学院考古研究所・南京博物院・扬州市文物考古研究所 2015『扬州城址考古发掘报告 1999～2013年』科学出版社
- 社  
中国社会科学院考古研究所洛阳汉魏故城队 2015『河南洛阳市汉魏故城发现北魏宫城太极东堂遗址』『考古』2015-10
- 中国社会科学院考古研究所洛阳汉魏故城队 2016『河南洛阳市汉魏故城太极殿遗址的发掘』『考古』2016-7
- 中国社会科学院考古研究所内蒙古第二工作队・内蒙古文物考古研究所 2017『内蒙古巴林左旗辽上京宫城东门遗址发掘简报』『考古』2017-6
- 中国社会院考古研究所内蒙古考古第二工作队・内蒙古文物考古研究所 2018『辽祖陵黑龙门遗址发掘报告』『考古学报』2018-3
- 中国社会科学院考古研究所 2018『中国考古学—三国两晋南北朝卷—』中国社会科学出版社
- 中国社会科学院考古研究所洛阳唐城工作队・洛阳市文物考古研究院 2019『河南洛阳市隋唐东都宫城核心区南部 2010～2011 年发掘简报』『考古』2019-1
- 中国社会院考古研究所内蒙古第二工作队・内蒙古文物考古研究所 2019『内蒙古巴林左旗上京宫城南门遗址发掘简报』『考古』2019-5
- 周原考古队 2002『陕西扶风县云塘、齐镇西周建筑基址 1999～2000 年度发掘简报』『考古』2002-9
- 诸葛净 2016『辽金元时期北京城市研究』东南大学出版社
- 朱海仁 1998『略论曹魏邺城、北魏洛阳城、东魏北齐邺城南城平面布局的几个特点』『广州文物考古集』文物出版社

#### 図表出典一覧 ※日本語は MS明朝、中国語は SimSun で表記。

- 図1** 郭北城：中国社会科学院考古研究所 2018 p52 図1-14、北魏洛陽城：佐川 2016 p178 図4 を改変して作成。／**図2** 北魏洛陽城：钱国祥 2018 p11 図4、東魏北齊鄆城：钱国祥 2016 p42 図9 を改変して作成。／**図3** 朱明門：郭义孚 1996 p17 図12、北宋汴梁城門：傅熹年 1977 p138 図5 を改変して作成。／**図4** 大明宮：何岁利 2019 p110 図3、長安城國碑：何岁利 2019 p107 図2 を改変して作成。／**図5** 今井 2012 p948 表1、金子 2007 p64 図13、山田 2007 p172 図18 を改変して作成。／**図6** 前漢陽陵：陕西省考古研究院 2011 p5 図5、前漢長安城礼制建筑 14 号遺跡：中国社会科学院考古研究所 2003 p164 図136、西夏 3 号陵：宁夏文物考古研究所等 2007 p95 図54、北宋汴梁宣德門：孟凡人 2019 p50 図1-12、唐懿德太子墓：王仁波 1973 p383 図3-2 を改変して作成。／**図7** 明北京城：孟凡人 2019 折込図9-2、紫禁城：孟凡人 2019 折込図10-1、午門：孟凡人 2019 p626 図10-7、永定門：孟凡人 2019 p526 図9-18 を改変して作成。／**図8** 門号整理表：山下 2010 p122 表1、平城宮門号：山下 2015 p181 図1・p182 図2 を改変して作成。／**図9** 宮門概念図：浅野 1990 p25 図1、右表：浅野 1990・今泉 1998・直木 1970 の記述から作成。／**図10** 清水 2010 p117 図16・p120 図19・p120 図20 を改変して作成。／**図11** 平城京羅城門：井上 1998 p14 図7、平安京羅城門：角田 1994 p303 図52 を改変して作成。／**図12** 藤原宮・平城宮：小澤 2003 p241 第23 図・p355 第44 図、諸門の規模：小澤 2012 p694 表2・図5 を改変して作成。／**図13** 古闕 2020 p672 図2 を改変して作成。／**図14** 角田 1994 p150 図8・p153 図11・p157 図14 を改変して作成。／**図15** 平城宮東区上層朝堂院南門：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p44 図40・山中 2003 p139 図2③、多賀城政府南門：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p175 図4 を改変して作成。／**図16①** 唐洛陽城右掖門・宣仁門：石自社 2018 p29 図4、漢長安城霸門：王仲殊 2010 p124 図14、唐洛陽城尚書省正門：陈良伟 2002 p193 図8 を改変して作成。／**図16②** 唐洛陽城定鼎門：石自社 2018 p25 図2、北齊鄆城南城朱明門：中国科学院考古研究所 2018 p59 図1-17、北魏洛陽城闕門：钱国祥 2018 p12 図5、元大都崇天門：孟凡人 2019 p298 図6-9 を改変して作成。／**図17①** 隋仁寿宮謫壁北門：中国社会科学院考古研究所 2008 p9 図3、渤海海上京城第2号宫殿东掖门：黑龙江省文物考古研究所 2009 p38 図21・p39 図22、元中都：河北省文物研究所 2012 p341 図162・p343 図164・p343 図165・p348 図167・p348 図168 を改変して作成。／**図17②** 門の各部名称・水城東門出土唐居敷・平城宮東面大垣出土磯石・平城京羅城門出土磯石・法隆寺東大門の木製唐居敷：向井 1999 p7 図1・p10 図3・p11 図4・p24 図18、大野城大宰府口城門の唐居敷：福岡県教育委員会 2010 p471 第247 図、鬼城山西門：岡山県黒社市教育委員会 2005 p169 図158、平城宮 SD650 出土扉軸受金具：奈良文化財研究所 2011 p222 図92、大野城北石垣 C 区城門出土扉軸受金具：福岡県教育委員

会 2010 p471 第 247 図、高句麗石台子山城北門：辽宁省文物考古研究所等 2012 p46 図 35・p48 図 38 を改変して作成。／図 18  
 ① 前漢長安城：刘振东 2018 p4 図 1、宣平門の復原：刘振东 2018 p5 図 2、霸城門の復原：王仲殊 2010 p122 図 11、西安門の中門道：王仲殊 2010 p132 図 22、霸城門の南門道：王仲殊 2010 p124 図 14、西安門：刘庆柱主编 2016 p264 図 8-2 を改変して作成。※西安門中門道の実測図については、王仲殊 2010 掲載図面に記述との矛盾が見られたため、左右反転して表示した。／図 18 ② 宣平門：刘庆柱主编 2016 p265 図 8-3、直城門旧画面：王仲殊 2010 p141 図 28、直城門新画面：中国社会科学院考古研究所汉长安城工作队 2009 p51 図 5 を改変して作成。／図 19 ① 北魏洛陽城の外郭城：钱国祥 2019a p74 図 1、内城：钱国祥 2019b p79 図 1、宮城：钱国祥 2018 p11 図 4 を改変して作成。／図 19 ② 建春門：中国社会科学院考古研究所 2018 p36 図 1-5、西陽門：钱国祥 2018 p11 図 4、闕闥門：钱国祥 2018 p12 図 5 を改変して作成。／図 19 ③ 北魏洛陽城永寧寺：中国社会科学院考古研究所 2018 p46 図 1-8、南門：中国社会科学院考古研究所 2018 p47 図 1-9、西門：中国社会科学院考古研究所 2018 p47 図 1-10 を改変して作成。／図 20 東魏北齐鄆城の外郭城：中国社会科学院考古研究所 2018 p63 図 1-19、内城：中国社会科学院考古研究所 2018 p57 図 1-15、宮城：中国社会科学院考古研究所 2018 p61 図 1-18、朱明門：郭义孚 1996 p17 図 12 を改変して作成。／図 21 十六国北朝長安城：中国社会科学院考古研究所 2018 p77 図 1-24、東西小城：中国社会科学院考古研究所汉长安城工作队 2008 p26 図 2、樓閣台遺跡：中国社会科学院考古研究所汉长安城工作队 2008 p27 図 3 を改変して作成。／図 22 隋仁寿宮・唐九成宮：中国社会科学院考古研究所 2008 図 2、北門：中国社会科学院考古研究所 2008 p9 図 3、1 号殿址：中国社会科学院考古研究所 2008 図 4、3 号殿址：中国社会科学院考古研究所 2008 図 16 を改変して作成。／図 23 長安図碑：陕西省文物管理委员会 1958 附图 3、興慶宮全圖：馬得志 1959 p550 図 2、勤政殿主樓：馬得志 1959 p551 図 3、2～4 号遺構：馬得志 1959 p532 図 4 を改変して作成。／図 24 ① 隋唐長安城：龔国强 2018 p17 図 1、大明宮：何岁利 2019 p106 図 1、明德門：中国社会科学院考古研究所西安工作队 1974 p34 図 3、含禦門：中国社会科学院考古研究所西安唐城工作队 1988 p1000 図 2、丹鳳門：中国社会科学院考古研究所西安唐城队 2006 p42 図 4 を改変して作成。／図 24 ② 含光門：中国社会科学院考古研究所西安唐城工作队 1987 p444 図 1・p445 図 2、興安門：中国社会科学院考古研究所西安唐城工作队 2014 p46 図 2・3、銀闕門：中国社会科学院考古研究所 2007 p31 図 13 を改変して作成。／図 24 ③ 玄武門・內重門・重玄門：中国社会科学院考古研究所 2007 p30 図 11・p32 図 15・p28 図 8・p30 図 12 を改変して作成。／図 24 ④ 重玄門：中国社会科学院考古研究所 2007 p33 図 16、含元殿：中国社会科学院考古研究所 2007 p85 図 2・p66 図 2・p89 図 5 を改変して作成。／図 24 ⑤ 門の復原形は、陝西省文物管理委员会 1958 p81 図 1・羅瑾歎 2019 p79 図 6 をトレース、表は羅瑾歎 2019 p81 附表 1・2・3 を改変して作成。／図 25 ① 隋唐洛陽城：石自社 2018 p24 図 1、宮城：中国社会科学院考古研究所 2014 p375 図 5-28、定鼎門：中国社会科学院考古研究所 2014 図 2-15・2-16・2-17・2-18 を改変して作成。／図 25 ② 応天門（1990・2001）：中国社会科学院考古研究所 2014 p379 図 5-33、応天門（復原）：中国社会科学院考古研究所 2014 p400 図 5-49、応天門西区：中国社会科学院考古研究所洛阳唐城工作队等 2019 p69 図 11、応天門東区：中国社会科学院考古研究所 2014 p381 図 5-35 を改変して作成。／図 25 ③ 右掖門：中国社会科学院考古研究所 2014 p162 図 3-7、永通門：中国社会科学院考古研究所 2014 p65 図 2-35、長夏門：中国社会科学院考古研究所 2014 p60 図 2-31・2-32 を改変して作成。／図 25 ④ 德獻門：李鑫等 2013 p73 図 13、宮城西隔城東壁門：中国社会科学院考古研究所 2014 p755 図 6-51、宣仁門：中国社会科学院考古研究所 2014 p254 図 4-10、安寧門：中国社会科学院考古研究所 2014 p718 図 6-14、長業門：中国社会科学院考古研究所 2014 p412 図 5-59 を改変して作成。／図 25 ⑤ 建春門：中国社会科学院考古研究所 2014 p69 図 2-38、崇慶門：中国社会科学院考古研究所 2014 p402 図 5-50、宣政門：中国社会科学院考古研究所 2014 p407 図 5-55、丹鳳南門：中国社会科学院考古研究所 2014 p926 図 6-170、尚書省正門：陈良伟 2002 p493 図 8 を改変して作成。／図 26 ① 唐宋揚州城：中国社会科学院考古研究所等 2015 p3 図番号なし、唐揚州城：中国社会科学院考古研究所等 2010 p64 図 44、揚州城南門：中国社会科学院考古研究所等 2015 図 78 を改変して作成。／図 26 ② 揚州城東門・北門：中国社会科学院考古研究所等 2015 p169 図 105・p220 図 141 を改変して作成。／図 26 ③ 揚州城西門：中国社会科学院考古研究所等 2010 p112 図 90、宋三城园：中国社会科学院考古研究所等 2015 p5 図番号なし、8 号西門：中国社会科学院考古研究所等 2010 p85 図 64・p80 図 58・p81 図 59 を改変して作成。／図 27 北宋東京開封城・宮城：孟凡人 2019 図 1-2・1-8、黃城門の各種類：孟凡人 2019 p30 図 1-4、順天門：河南省文物考古研究院 2019 p15 図 2・p18 図 5 を改変して作成。／図 28 ① 表：汪益・董新林 2018 p39 表 1、遼上京城：董新林 2019 p6 図 2、宮城東門：中国社会科学院考古研究所内蒙古第二工作队等 2017 p9 図 10・p7 図 7 を改変して作成。／図 28 ② 宮城南門：中国社会科学院考古研究所内蒙古第二工作队等 2019 p24 国 7、黒龍門：中国社会科学院考古研究所内蒙古考古第二工作队等 2018 p381 国 6 を改変して作成。／図 29 金上京城：董新林 2019 p11 国 4、南城南壁西門：黑龙江省文物考古

研究所 2019 p47 図 3・p48 図 5 を改変して作成。／図 30 金宝馬城：吉林省文物考古研究所等 2018 p69 図 3、金太子城：河北省文物研究所等 2019 p78 図 2 を改変して作成。／図 31 元上都：魏堅 2008 図 2、闕式宮殿：内蒙古师范大学等 2014 p46 図 2、宮城南門：魏堅 2008 p278 図 10・図 1・p279 図 11 を改変して作成。／図 32① 元中都宮城・皇城：河北省文物研究所 2012 p31 図 4、宮城西南角台：河北省文物研究所 2012 p89 図 35、宮城 1 号宮殿：河北省文物研究所 2012 図 87、元大都大明殿建築群：孟凡人 2019 p300 図 6-11 を改変して作成。／図 32② 元中都宮城南門：河北省文物研究所等 2004a p10 図 5、平壤城：朴灿圭 2015 p5 図 1、国内城北壁南門：吉林省文物考古研究所等 2004a p30 国 16、七星門：朴灿圭 2015 p6 国 2、牡丹峰門：朴灿圭 2015 p7 国 3 を改変して作成。／図 34 安鹤宫：朴灿圭 2015 p23 国 15、南壁中門・南壁西門・南壁東門・北門・西門・東門：朴灿圭 2015 p28 国 23・p29 国 25・p30 国 27・p31 国 29・p32 国 30・p33 国 32、外殿第 1 号宮殿・内殿第 1 号宮殿：朴灿圭 2015 p35 国 36・p39 国 42 を改変して作成。／図 35① 外郭城・皇城・宮城：黑龙江省文物考古研究所 2009 p15 国 9、皇城南門調査区配置：孙秉根等 2005 p818 国 8 および黑龙江省文物考古研究所 2009 p529 国 379 を合成、皇城南門：黑龙江省文物考古研究所 2009 附図 380a を改変して作成。／図 35② 第 2 号宮殿・南回廊：黑龙江省文物考古研究所 2009 p27 国 13・p43 国 25、第 2 号宮殿南門：黑龙江省文物考古研究所 2009 附図 14a、東城門・西城門：黑龙江省文物考古研究所 2009 p38 国 21・p40 国 23 を改変して作成。／図 35③ 第 3 号宮殿：黑龙江省文物考古研究所 2009 p233 国 172、外郭城正南門（全体）：黑龙江省文物考古研究所 2009 附図 395a、外郭城正南門中央門・西側門：黑龙江省文物考古研究所 2009 p551 国 396・p554 国 398 を改変して作成。／図 35④ 第 5 号宮殿南門：黑龙江省文物考古研究所 2009 附図 310a、外郭城南壁東門：孙秉根等 2005 p811 国 2、外郭城北壁 11 号門：黑龙江省文物考古研究所等 1999 p46 国 7、外郭城北壁正門：黑龙江省文物考古研究所 2009 附図 414a を改変して作成。／図 35⑤ 宮城正門・平面配置：黑龙江省文物工作队 1985b p52 国 2、2・3 号門：黑龙江省文物工作队 1985b p54 国 4・p56 国 11、宮城正北門：黑龙江省文物考古研究所 2015 p6 国 2 を改変して作成。／図 36① 西古城：吉林省文物考古研究所等 2007 p15 国 10、八連城：吉林省文物考古研究所等 2014 p291 国 238、西古城外城南門・内城隔離門：吉林省文物考古研究所等 2007 p23 国 13・p23 国 23、西古城外城北門・内城南門：吉林省文物考古研究所等 2016 p5 国 3・p6 国 5 を改変して作成。／図 36② 八連城 1 号建築・内城南門・外城南門：吉林省文物考古研究所等 2014 p55 国 41・p26 国 15・p23 国 13 を改変して作成。／図 37 飛鳥京：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p1 国 1、大津宮：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p3 国 1、大津宮 SB001：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p3 国 2、飛鳥京 SB7402：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p2 国 2、飛鳥京 SB8010：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p2 国 3 を改変して作成。／図 38① 前期難波宮：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p111 国 1、後期難波宮：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p112 国 2、SB3301：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p114 国 5、SB4501：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p112 国 3 を改変して作成。／図 38② SB701：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p113 国 4・SB3922：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p117 国 12、SB001102：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p117 国 13 を改変して作成。／図 39① 藤原宮：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p4 国 1、SB500：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p5 国 2 を改変して作成。／図 39② 朝堂院南門：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p14 国 12、SB1900：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p9 国 7、SB10700：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p10 国 8 を改変して作成。／図 40① 平城宮（奈良時代前半・後半）：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p27 国 1・SB1800：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p28 国 2・SB10200：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p29 国 5 を改変して作成。／図 40② SB16000ABC：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p30 国 9・SB5000：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p31 国 10、SB9500：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p32 国 13 を改変して作成。／図 40③ 第一次大極殿院：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p34 国 15、第二次大極殿院：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p42 国 38・SB7750B：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p38 国 23、SB7801：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p35 国 16・SB7802：奈良文化財研究所 1982 国版編 PLAN11 を改変して作成。／図 40④ SB18500：奈良文化財研究所 2011 国版編 遺構実測図 23、SB9200：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p41 国 35 を改変して作成。／図 40⑤ SB11210・SB11200：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p43 国 39・SB16950・SB17000：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p44 国 40 を改変して作成。／図 40⑥ SB18400：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p46 国 43、内裏遺構圖：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p48 国 45・SB3700：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p49 国 46・SB7590：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p49 国 48、内裏東南部遺構圖：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p47 国 44 を改変して作成。／図 41 大極殿院・朝堂院：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p125 国 2・SB40900：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p127 国 9・SB38450：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p127 国 8、朝堂院南門圖：向日市埋藏文化財

センター 2006 p52 図 30 を改変して作成。／図 42 直城門：中国社会科学院考古研究所汉长城工作队 2009 p51 図 5、宣平門：刘振东 2018 p5 図 2、闇闕門：杜金鹏等 2007 p690 図 4、建春門：中国社会科学院考古研究所 2018 p36 図 1-5、朱明門：中国社会科学院考古研究所 2018 p59 図 1-17、定鼎門：中国社会科学院考古研究所 2014 図 2-15、応天門：中国社会科学院考古研究所 2014 p400 図 5-49、玄武門：杨鸿勋 2013 p58 図 2-32、含元殿：中国社会科学院考古研究所 2007 p89 図 5 を改変して作成。／図 43 闇闕門：杜金鹏等 2007 p690 図 4、櫻闕台：中国社会科学院考古研究所汉长城工作队 2008 p27 図 3、隋仁寿宮 1号宮殿：中国社会科学院考古研究所 2008 図 4、仁壽宮の復原：杨鸿勋 2013 p367 図 9-11、興慶宮：馬得志 1959 p550 図 2、含元殿：中国社会科学院考古研究所 2007 p89 図 5、丹鳳門：中国社会科学院考古研究所西安唐城队 2006 p42 図 4 を改変して作成。／図 44① 長安城玄武門：杨鸿勋 2013 p50 図 2-32、長安城明德門：中国社会科学院考古研究所西安工作队 1974 p34 図 3、長安城承天門：罗瑾歆 2019 p79 図 6、揚州城 8号西門：中国社会科学院考古研究所等 2010 p80 図 58、北宋開封城順天門：河南省文物考古研究院 2019 p15 図 2、金上京城南壁西門：黑龙江省文物考古研究所 2019 p47 図 3、元上都宮城南門：魏堅 2008 p278 図 10、明北京城永定門：孟凡人 2019 p526 図 9-18、元中都西南角台：河北省文物研究所 2012 p89 国 35、元中都宮城正門：河北省文物研究所 2012 国 160、元大都崇天門：孟凡人 2019 p298 国 6-9、明北京城午門：孟凡人 2019 p26 国 10-7 を改変して作成。／図 44② 長安城含元殿：中国社会科学院考古研究所 2007 p89 国 5、元上都闕式宮殿：内蒙古师范大学等 2014 p46 国 2、渤海海上京城皇城南門：黑龙江省文物考古研究所 2008 附図 380a、遼上京城宮城東門：中国社会科学院考古研究所内蒙古第二工作队等 2017 p9 国 10、元中都皇城正門：河北省文物研究所 2012 p448 国 213 を改変して作成。／図 45 長安城重玄門：中国社会科学院考古研究所 2007 p33 国 16、玄武門：中国社会科学院考古研究所 2007 p28 国 8、内重門：中国社会科学院考古研究所 2007 p30 国 12、含元殿：中国社会科学院考古研究所 2007 p89 国 5、丹鳳門：中国社会科学院考古研究所西安唐城队 2006 p42 国 4、承天門：罗瑾歆 2019 p79 国 6、明德門：中国社会科学院考古研究所西安工作队 1974 p34 国 3、渤海海上京城外郭城正北門：黑龙江省文物考古研究所等 2000 p5 国 2、宮城正北門：黑龙江省文物考古研究所 2015 p6 国 2、5号宮殿・南門：黑龙江省文物考古研究所 2009 p432 国 307 をトレース、3・4号宮殿：黑龙江省文物考古研究所 2009 p229 国 168 をトレース、2号宮殿・南門：黑龙江省文物考古研究所 2009 p27 国 13 をトレース、1号宮殿：黑龙江省文物工作队 1985 p52 国 2 をトレース、宮城正南門：黑龙江省文物工作队 1985 p52 国 2、皇城正門：黑龙江省文物考古研究所 2009 附図 380a、外郭城正南門：黑龙江省文物考古研究所 2009 附図 395a を改変して作成。／図 46 参考資料の唐洛陽城明堂：韓建華 2019 p116 国 3・p118 国 7、前期難波宮全図：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p111 国 1、SB875401：大阪市文化財協会 2005 p44 国 26、SB3301：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p114 国 5、SB875401：大阪市文化財協会 2005 p38 国 20、SB4501：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p112 国 3、SB701：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p113 国 4 を改変して作成。／図 47 羽城門の復原：山川ほか 2008 p96 国 16、XA・XR 調査区：大和郡山市教育委員会ほか 2014 別添国 1 を改変して作成。／図 48 前期難波宮：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p111 国 1、平城宮第一次大極殿院：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p34 国 15、平城宮内裏：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p48 国 45、長岡宮朝堂院：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p125 国 2、平安宮朝集院・豐業殿・大極殿：角田 1994 p153 国 11・p157 国 14、藤原宮：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p4 国 1、平城宮：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p27 国 1 を改変して作成。／図 49 大阪市文化財協会 1995 fig55 を改変して作成。／図 50 唐長安城太極宮：妹尾 2001 p123 国 32、藤原宮：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p4 国 1、平城宮：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p27 国 1 を改変して作成。／図 51 SB18500：奈良文化財研究所 2011 国版編 遺構実測図 23、SB7801：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p35 国 16、SB7802：奈良文化財研究所 1982 国版編 PLAN11、第一次大極殿院：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p34 国 15、SB9200：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p41 国 35、SB1800：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p28 国 2、SB700：井上 1998 p14 国 7、内裏東南部遺構図：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p47 国 44、SB11200：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p43 国 39、SB17000：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p44 国 40、SB18400：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p46 国 43、SB9500：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p32 国 13、内裏遺構図：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p48 国 45 を改変して作成。／表 1 中国都城門に関する研究史の整理を基に作成。／表 2 山中 2003 の分類を基に作成。／表 3 小澤 2012 p694 表 2・図 5、及び各都城門の報告書を基に作成。

## 結言

本書では、未発表の書き下ろし論文2本を収録し、科研報告書として刊行した。通常の投稿論文のように査読などを経ていないため、事実認証や重要資料の見落としなど細部の不備を危惧しているが、中心的研究課題である唐代都城の大きな枠組みでの比較視点とその方法論は提示できたと考える。中国都城研究は、各調査隊が実施する発掘によって、毎年、膨大な成果が蓄積される分野であり、本報告書での視点や結論も、目覚ましいスピードで進展する研究成果を踏まえて「更新」していく予定である。特に、中国における都城研究は、先史時代から明清期まで、考古学・文献史学・建築史学・歴史地理学・都市学・思想学など、あらゆる領域の研究対象となる「日進月歩」の学問分野である。これらの膨大な領域の研究史を涉獵しつつ、通時的・国際的視野での新しい分析方法を常に模索し、考古学の基礎的な分析作業を継続していきたい。最後に、現段階での研究成果として、掲載した論文の内容を簡潔にまとめて、本書の総括とする。

### 【要約】第Ⅰ部 唐碎葉城の歴史的位置—都城の空間構造と瓦の製作技法に注目して—

キルギス共和国アク・ベシム遺跡のラバト地区、すなわち唐碎葉城の空間構造と出土瓦に着目し、唐代西域都市、および中枢の唐長安城・洛陽城と比較を試みた。まず、唐碎葉城の研究史・発掘調査史を整理した上で、1960年代に撮影されたCORONA衛星画像から、唐碎葉城の平面配置を復原した。既に地表面から消失している痕跡から復原した唐碎葉城の空間構造は、交河故城・北庭故城など西域都市と設計原理上の高い共通性が認められる点を指摘した。さらに、唐碎葉城出土瓦の瓦当文様、及び板瓦の製作技法を整理し、唐長安城・洛陽城出土瓦との比較を試みた。結果、唐長安城の宮城へ供給した官窯などの技術体系ではなく、唐長安城の外郭城で広まっていた基本的な瓦の製作技術が西域都市に導入された可能性を指摘した。

### 【要約】第Ⅱ部 東アジア古代都城門の構造・機能とその展開

唐代都城における空間構造の大きな特徴、すなわち宮城・皇城・外郭城の三重圓構造を結びつける要素である門に着目した。まず、中国・日本における古代都城門の研究史を整理した上で、用語・概念を定義し、空間構造を国際的に比較する分析視角を提示した。その上で、中原都城（漢・唐・宋）、草原都城（遼・金・元）、高句麗・渤海・日本都城における発掘された門遺構の図面を提示し、その成果をまとめた。以上の基礎資料の提示を踏まえた上で、東アジア古代都城門の構造・機能とその展開に関して考察を加えた。具体的には、①連体式双闕門の発展過程と唐代都城門の諸類型、②唐代都城における闕式主殿一含元殿の成立過程、③北宋以降の正門の変遷、④唐代都城門の東アジアへの展開過程、これら4つの論点を掘り下げた。中国歷代王朝が伝統の繼承・革新を繰り返して、新しい都城空間を「創造」した点を強調すると同時に、唐代都城を模倣したとされる高句麗・渤海・新羅・日本などにおいても、各王朝が国家戦略に基づく主体的な選択によって都城を導入し、各国の統治システムに合わせて「都城」という思想空間」を再編成した点を指摘した。

### 【今後の課題】

本書では、唐代都城の空間構造に着目し、東アジア都城と西域都市、すなわち、東西の大きな枠組みで国際的な比較分析を行った。唐長安城・洛陽城など、中枢部における都城の構造が周縁地域にどのように展開したのか、その具体像の一端を示すことが出来たと考える。しかし、本書第Ⅱ部で示した「発掘遺構の国際比較」に関しては、更に多くの遺構への適用が可能な方法であり、本書で扱えなかった論点も多い。特に、唐代都城の宮城中枢部、および外郭城（里坊）については、今まで膨大な発掘成果が蓄積されており、本書第Ⅰ部で示した「衛星画像の分析」と組み合わせることで、更に精度の高い分析が可能だと考えている。次回の報告書では、唐代都城の中枢部・里坊に関して、議論を深める予定である。

## 著者略歴

城倉正祥（じょうくら・まさよし）

1978年 長野県生まれ

2007年 早稲田大学大学院 文学研究科 博士後期課程 修了／博士（文学）

2007～2011年 独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所／研究員

2011～2014年 早稲田大学 文学学術院／専任講師

2014～2019年 早稲田大学 文学学術院／准教授

2015年～ 早稲田大学 東アジア都城・シルクロード考古学研究所／所長

2019年～ 早稲田大学 文学学術院／教授

※専門は、東アジア考古学（墳墓・寺院・都城）。研究業績は researchmap で公開中。

## 出版シリーズ

早稲田大学東アジア都城・シルクロード考古学研究所

### 【調査研究報告】

第1冊『山室姫塚古墳の研究』（2016年7月）

第2冊『中国都城・シルクロード都市遺跡の考古学的研究』（2017年3月）

第3冊『殿塚・姫塚古墳の研究』（2017年3月）

第4冊『デジタル技術を用いた古墳の非破壊調査研究』（2017年10月）

第5冊『唐代都城の空間構造とその展開』（2021年9月）

### 【研究論集】

第1冊『野本将軍塚古墳と東国の前期古墳』（2018年12月）

### 【デジタル調査概報】

第1冊『栃木県小山市 摩利支天塚古墳の測量・GPR調査』（2020年8月）

第2冊『群馬県藤岡市七輿山古墳の測量・GPR調査』（2020年10月）

※調査研究報告第3冊のみ、六一書房より販売。それ以外は、早稲田大学リポジトリ・全国遺跡報告総覧に全文を PDF で公開中。

## 報告書抄録

シリーズ：早稲田大学東アジア都城・シルクロード考古学研究所 調査研究報告 第5冊

タイトル：唐代都城の空間構造とその展開

刊行年月日：2021年9月30日刊行

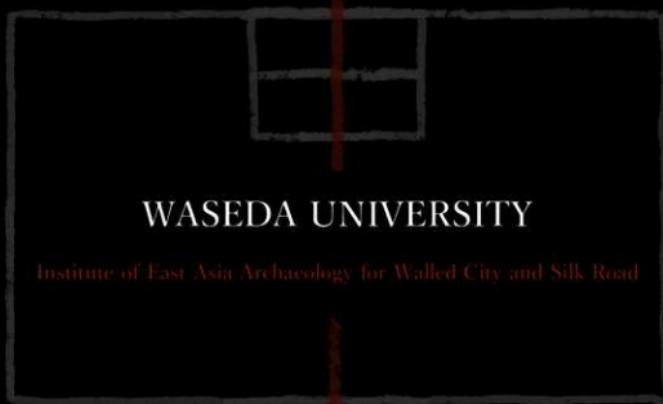
著者：城倉正祥

発行：早稲田大学東アジア都城・シルクロード考古学研究所

〒162-8644 東京都新宿区戸山1-24-1 早稲田大学文学学術院（城倉個人研究室内）

印刷：株式会社 正文社

〒260-0001 千葉県千葉市中央区都町1-10-6



# WASEDA UNIVERSITY

Institute of East Asia Archaeology for Walled City and Silk Road